

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所年報 2018年度

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15084/0000002842 |

国立国語研究所

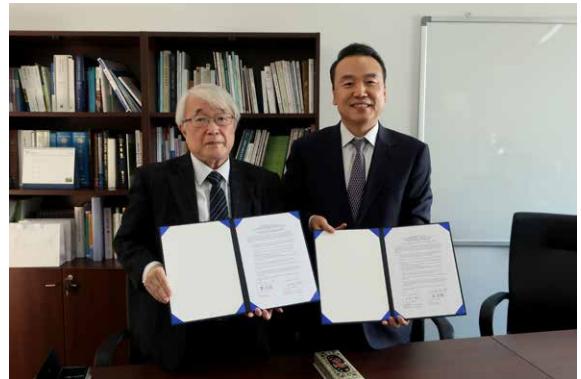
年報

2018 *NINJAL YEARBOOK*

国立国語研究所の活動 (2018 年度)



韓國日本語學會との学術交流協定
(2018 年 7 月, 韓國中央大學校)



ソウル大学人文学部との学術交流協定
(2018 年 10 月, ソウル大学)



国際シンポジウム
「古辞書研究の射程」
(2018 年 8 月 25–26 日, 国立国語研究所)



NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウム
「通時コーパスに基づく日本語文法研究」
(2018 年 9 月 8–9 日, 国立国語研究所)



国際シンポジウム
「NINJAL ICPP 2018 (5th NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology)」
(2018年10月26–28日, 国立国語研究所)



NINJAL シンポジウム
「データに基づく日本語研究」
(2018年12月15–16日, 東京証券会館)



国立国語研究所オープンハウス 2018
(2018年12月22日, 国立国語研究所)



平成30年度国立国語研究所
日本語教師セミナー(海外)
「自然会話コーパスを活用した日本語教育」
(2018年11月5日, メルボルン大学)



平成30年度国立国語研究所
日本語教師セミナー(国内)
「看護・介護に必要な日本語の研究と日本語教育」
(2019年2月9日, 国立国語研究所)



第13回 NINJAL フォーラム
「日本語の変化を探る」
(2018年11月4日, 国立国語研究所)



第28回 NINJAL チュートリアル
「日本語の音声と文法」
(2018年6月30-7月1日, 韓国中央大學校)



「平成30年度危機的な状況にある
言語・方言サミット (宮古島大会)」
(2018年11月24日, 宮古島市文化ホール)



ニホンゴ探検 2018—1日研究員になろう！
(2018年7月14日, 国立国語研究所)



平成30年度「こども霞が関見学デー」
(2018年8月1-2日, 文部科学省)



大学共同利用機関シンポジウム 2018
～最先端研究大集合～
(2018年10月14日, 名古屋市科学館)



立川市歴史民俗資料館共同企画講演会
「多摩の方言」
(2019年2月11日,
立川市女性総合センターAim)

目 次

| | |
|---------------------------------|----|
| 2018年度年報の発刊に当たって | 1 |
| I. 概要 | 3 |
| 1. 沿革とミッション | 4 |
| 2. 2018年度の活動の概略 | 4 |
| 3. 組織 | 6 |
| (1) 組織構成図 | 6 |
| (2) 運営組織 | 7 |
| ・運営会議 | 7 |
| ・外部評価委員会 | 7 |
| ・所内委員会組織 | 7 |
| (3) 構成員 | 8 |
| ・所長・研究教育職員・特任研究員 | 8 |
| ・客員教員 | 9 |
| ・名誉教授 | 10 |
| ・プロジェクトPDフェロー | 10 |
| ・外来研究員 | 10 |
| 4. 2018年度の予算および決算 | 12 |
| II. 共同研究と共同利用 | 13 |
| 1. 共同研究プロジェクト | 14 |
| 2. 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト | 30 |
| 3. 外部資金による研究 | 32 |
| 4. 2018年度公開中のコーパス・データベース | 34 |
| 5. 学術刊行物 | 39 |
| (1) 所員による著書・編書 | 39 |
| (2) 国立国語研究所論集 | 41 |
| 6. 研究成果の発信と普及 | 42 |
| (1) 国際シンポジウム | 42 |
| (2) 合同シンポジウム・研究発表会 | 54 |
| (3) プロジェクトのシンポジウム・ワークショップ・研究発表会 | 65 |
| (4) NINJALコロキウム | 79 |
| (5) NINJALサロン | 80 |
| (6) 講習会・セミナー | 81 |
| 7. センター・研究図書室の活動 | 84 |
| (1) 研究情報発信センター | 84 |
| (2) コーパス開発センター | 85 |
| (3) 研究図書室 | 85 |
| III. 国際的研究協力 | 87 |
| 1. 世界の大学・研究機関との提携 | 88 |
| 2. 国際シンポジウム・国際会議の開催 | 88 |
| 3. 日本語研究英文ハンドブック | 88 |
| 4. 海外の研究者の招聘・受入 | 89 |
| IV. 社会連携と広報 | 91 |
| 1. 消滅危機言語・方言の調査・保存・分析 | 92 |
| 2. 日本語コーパスの拡充 | 92 |

| | |
|---|-----|
| 3. 第二言語（外国語）としての日本語教育研究 | 92 |
| 4. 地方自治体との連携 | 92 |
| 5. 見学・研修・視察等 | 92 |
| 6. 学会等の後援・共催 | 92 |
| 7. 広報 | 93 |
| (1) 刊行物 | 93 |
| (2) Web 発信等 | 93 |
| (3) 一般向けイベント | 94 |
| (4) 児童・生徒向けイベント | 95 |
| V. 大学院教育と若手研究者育成 | 97 |
| 1. 連携大学院 | 98 |
| 2. 特別共同利用研究員制度 | 98 |
| 3. NINJAL チュートリアル | 98 |
| 4. 優れたポストドクターの登用 | 99 |
| VI. 教員の研究活動と成果 | 101 |
| 略歴, 所属学会, 役員・委員, 受賞歴, 参画共同研究, 研究業績（著書・編書, 論文・ブックチャプター, コーパス・データベース類, 展示など, その他の出版物・記事), 講演・口頭発表, 研究調査, 学会等の企画運営, 一般向けの講演・セミナーなど, その他の学術的・社会的活動, 大学院教育・若手研究者育成 | |
| VII. 資料 | 199 |
| 1. 運営会議 | 200 |
| 運営会議規程 | 200 |
| 2018 年度の開催状況 | 200 |
| 運営会議の下に置かれる専門委員会 | 201 |
| 2. 評価体制 | 202 |
| (1) 自己点検・評価委員会 | 202 |
| (2) 外部評価委員会 | 202 |
| (3) 基幹研究プロジェクトの評価 | 203 |
| 3. 所長賞 | 203 |
| 4. 研究教育職員の異動 | 204 |
| VIII. 外部評価報告書 | 205 |
| 平成 30 年度業務の実績に関する外部評価報告書 | 207 |
| 1. 評価結果報告書 | 211 |
| 平成 30 年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」に関する評価結果 | 213 |
| 平成 30 年度「管理業務」に関する評価結果 | 302 |
| 2. 資料 | 309 |

2018年度年報の発刊に当たって

2018年度の年報をお届けします。国立国語研究所（以下「国語研」）は1948年12月22日に設立されました。また、2009年10月1日には、独立行政法人整備合理化計画により、大学共同利用機関法人人間文化研究機構の一員として再発足しましたので2019年10月1日に人間文化研究機構移管10周年を迎えました。国語研では2019年10月1日に、この70周年、10周年を記念して、シンポジウムと式典、祝賀会が行われました。シンポジウムでは国語研の将来計画委員会委員長小木曾智信教授から、第4期中期計画を見通して、国語研の将来を展望してもらい、それに対して5名の識者の方からの意見を頂戴しました。この様子は近いうちに動画として公開される予定です。式典では各方面の代表からの祝辞に続いて、言語学会を代表して上野善道元会長、日本語学会を代表して金水敏会長からご挨拶をいただき、連携大学である一橋大学から蓼沼宏一学長、文部科学省から村田善則振興局長、立川商工会議所佐藤浩二会頭から祝辞をいただきました。続いて行われた記念講演では杉戸清樹第7代国語研究所長から国語研の研究の在り方を解説する意義深いお話をありました。祝賀会では、祝辞と乾杯に続いて、宮古、喜界の歌とオペレッタの公演がありました。国語研の危機言語の調査班とゆかりのある方たちで、宮古語池間方言、喜界方言での演奏でした。特に宮古西原地区から招いた20人のメンバーは70代から80代のメンバーからなるにも関わらず、エネルギー溢れるお芝居と歌を披露していただきました。これらは危機言語の記録・保存活動の一環で、国語研の現在の活動を代表するものと言えるでしょう。

2018年放送大学と共同で二本の番組を作りました。第一回は、あまりにも多様性に富む日本の言葉の共通語化の調査を初期の国語研が行ってきた話が中心となっています。反対に現在の日本では共通語化がすすみ、それに伴って地方の言葉や文化が画一化されてきています。地域の言葉が失われていく状況での、多様性の喪失への対応が第二回のテーマとなっています。70周年・10周年を記念する祝賀会でこれら危機方言での公演が行われたことは意義深いことであると思います。

現在、大学共同利用機関の在り方をめぐって、さまざまな改革案が議論されています。これは、2022年から始まる第4期に向けて、それぞれの機関がどのような目標を持ち、どのようにそれらを実現していくのかを測る評価基準の策定に関わるものです。国語研も大学共同利用機関として、共同研究の中核的拠点としての役目を常に意識して研究を進めていかなければならないでしょう。地域の活性化に寄与し、大学や地域をつないで、大学自体の活性化にも寄与できるような活動をしていく必要があるかと思います。同時にそれらの活動を世界中の研究機関との共同研究につなげ、日本の研究とその成果を発信して行く必要があります。

2018年の年報をご覧になると分かると思いますが、国語研の研究はそのほとんどが共同研究プロジェクトからなります。基本的にはそれらは国語研メンバーがプロジェクトリーダーを務めますが、一部は外部の研究者による公募型の研究です。2019年度からは従来から行っている新領域創出型の公募研究に加えて、国語研の設備や資料を用いて行う共同研究を新設しました。国語研が70年間にわたり収集・整理してきた未公開資料などを利用しながら研究を行っていただくものです。これは単年度で行いますので次年度も公募されます。多くの応募をお待ちしています。

2020年1月
国立国語研究所長
田 窪 行 則

I

概要

1 沿革とミッション

沿革

国立国語研究所は、国語に関する総合的研究機関として1948（昭和23）年に誕生した。幕末・明治以来、国語国字問題は国にとって重要な課題であり、様々な立場からの議論がおこなわれてきた。第二次世界大戦の敗戦とその後の占領期は大きな転機となり、戦後、我が国が新しい国家として再生するに当たって、国語に関する科学的、総合的な研究をおこなう機関の設置が強く望まれるようになった。各方面の要望を受けて「国立国語研究所設置法」が昭和23年12月20日に公布施行され、国家的な国語研究機関である国立国語研究所の設置が実現したのである。その後、明治時代から大正、昭和初期にかけての日本語の混乱（漢字の激増や、文語と口語の違いなど）を収拾し日本語の安定化に資するという当初の設置目的が薄れるとともに旧国立国語研究所は廃止され、2009（平成21）年10月1日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構の下に設置された。現在、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館に次ぐ6番目の研究機関として再発足し、日本語および関連する領域の学術研究機関として活発な活動を展開している。

ミッション

国立国語研究所は、日本語学・言語学・日本語教育の国際的研究拠点として、国内外の大学・研究機関と連携することによって大規模な共同研究を全国的・国際的に推進し、共同研究から得られた各種の成果や学術情報を研究者コミュニティと一般社会に提供することで、日本語と人間文化の新しい研究領域を開拓することを実質的なミッションとしている。そのため、大学共同利用機関への移行にあたっては、研究所の英語名称“linguistics”（言語学）という言葉を加え、National Institute for Japanese Language and Linguistics（「日本語と日本言語言語学の国立研究所」、略称NINJAL（ニンジャル））とした。言語学・日本語学とは、日本語を人間言語のひとつとして捉え、ことばの研究をとおして人間文化に関する理解と洞察を深めることを意図した学問であり、そこには、当然のことながら、「国語及び国民の言語生活、並びに外国人に対する日本語教育」（設置目的）に関する研究が含まれる。

日本語の研究を深めることは、究極的には日本という国を発展させることにつながる。私たちの財産である日本語を将来に引き継ぎ、発展させていくことが国立国語研究所の役割である。

2 2018年度の活動の概略

国立国語研究所では、国内外の諸大学・研究機関と連携して、個別の大学ではできないような研究プロジェクトを全国的・国際的規模で展開しているが、それらの土台となるのは「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」という研究所全体の研究目標である。この目標の達成に向けて2016年度に研究領域に設けられた合計6件の共同研究プロジェクトとセンターでの研究テーマのもとに、引き続き数々の共同研究プロジェクトを実施した。

日本語研究の国際化に向けては、外国人研究者を専任教員、客員教員、共同研究員として招聘するとともに、中国・北京日本学研究センター、台湾・中央研究院語言學研究所等、アジアで4機関、英国オックスフォード大学人文科学、米国ペンシルベニア大学言語学科等欧米で7機関との協定に加え、新たにティラク・マハラシュトラ大学日本語学科及びインド工科大学マドラス校人文社会科学部（いずれもインド）、韓國日本語學會及びソウル大学人文学部（いずれも韓国）、ダッカ大学現代語研究所（バングラデシュ）との学術交流協定を締結した。また、ドイツ・De Gruyter Mouton社との協定による日本語研究英文ハンドブックシリーズ（全12巻）については、順次刊行している（既刊は7巻）。

学術研究の成果は専門家の枠を超えて広く一般社会の様々な方面で利用・応用されるべきであるから、多くの成果物を電子化し、ウェブサイト上で無償提供している。専門家向けに『国語研ことばの波止場』、『国立

国語研究所論集』などの刊行物、一般向けに『NINJAL フォーラムシリーズ』などの冊子、研究資料・研究材料として『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『日本語歴史コーパス』、『アイヌ語口承文芸コーパス—音声・グロスつき—』などのコーパス群、あるいは、日本語教育者・学習者向けには『中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス』、『基本動詞ハンドブック』、『複合動詞レキシコン（国際版）』などのデータベース類と、多岐にわたる。

2019年3月には、イギリス大英図書館が世界で唯一所蔵する室町時代の重要な資料である天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』の画像データをパブリックドメインにてWeb公開し、室町時代の日本語の発音がわかる貴重資料の国際的な共同利用を可能にした。さらに対象者別に、国際シンポジウム、コロキウム、チュートリアル、フォーラム、セミナー、ニホンゴ探検など、種類の異なるイベントを多数開催した。

時を生み出す心の仕組みを探る新学術領域研究「時間生成学」に参画、言語表現から出来事の時間的順序関係を出力する人工神経回路を検討するとともに、人工神経回路を構築するうえで必要な言語資源を分析・提供した。

日常会話の動画付きコーパス「日本語日常会話コーパス」モニター版など9点を新規公開、また、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」など13点のデータベースにつき、データ数を増やして言語資源の共同利用基盤を拡充した。

IBM、NTTコミュニケーション科学基礎研究所、国立情報学研究所（情報・システム研究機構）、奈良先端科学技術大学院大学及び京都大学と連携、言語横断的な係り受け構造を設計する国際的な取組 Universal Dependencies（係り受けのデータベース）において、世界諸言語のデータのうちで2番目の規模となる日本語の係り受けデータを公開し、言語学研究・情報技術の発展に重要な国際的な仕様の策定に貢献した。

2018年12月には、創立記念事業の一環として、オープンハウスを開催した。また、地方自治体との連携による地域社会への研究成果還元の一環として、宮崎県椎葉村との協定に基づき、村と共同で『椎葉村方言語彙集』の作成のための調査を実施した。2018年度には、新たに鹿児島県和泊町・知名町と連携協定を締結し、言語復興活動を町と共同で実施することとした。

2018年11月には、日本の危機言語・方言の記録・継承を目的として、文化庁や沖縄県宮古島市等と連携し開催した第5回「危機的な状況にある言語・方言サミット（宮古島）」にアイヌ語から与那国語まで日本各地の言語保存活動関係者400名が参加した。

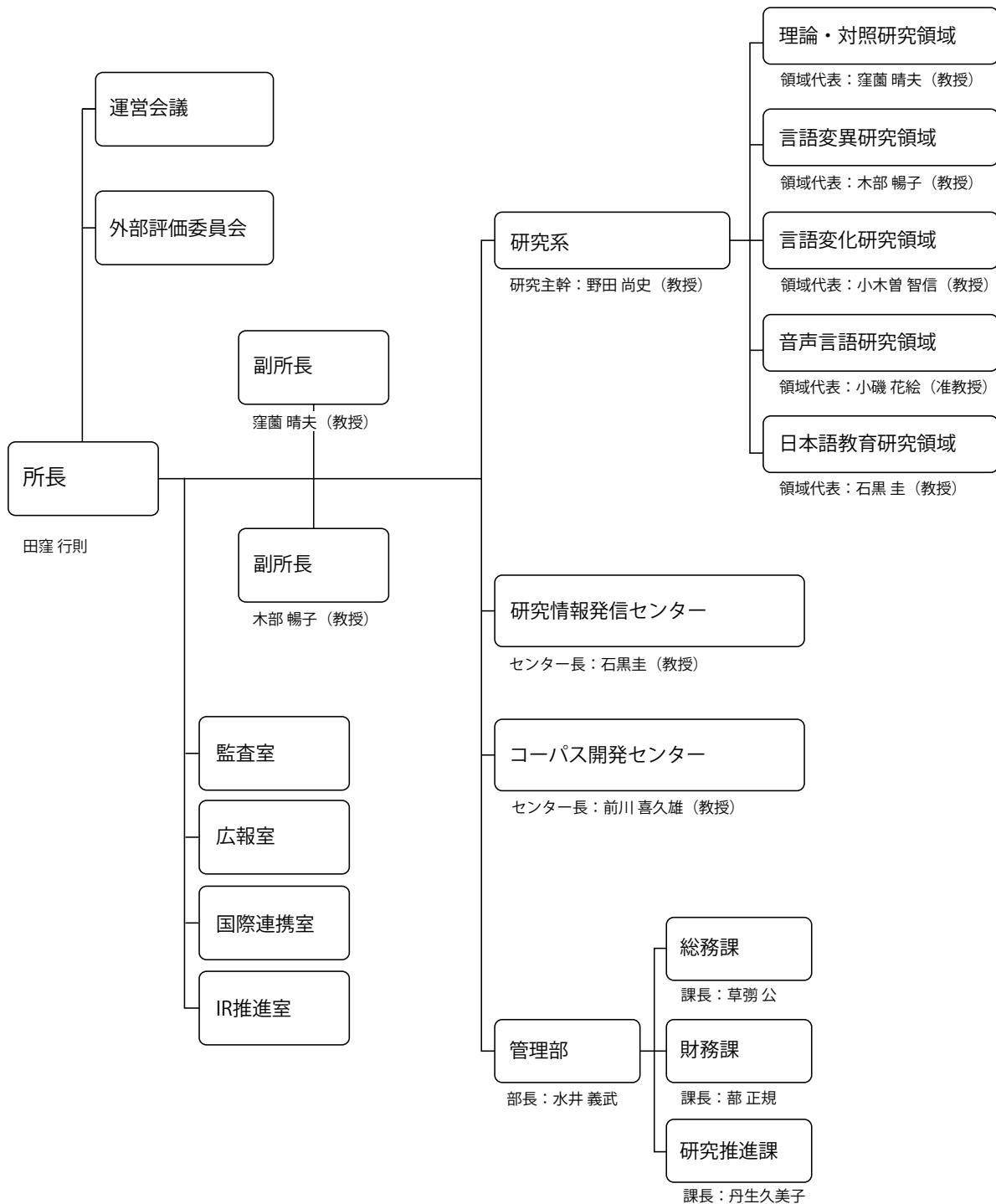
2017年度にジャワハルラール・ネルー大学と共同で開発したインターネット大学院の日本語学講座教材を活用し、日本語の需要が高い南アジア（インド、スリランカ）・東南アジア（ベトナム、ミャンマー、カンボジア）において日本語教師・研究者を対象とする日本語学講習会（合計408名参加）を実施した。

活動・成果の詳細は各項目をご覧いただきたい。

3 組織

(1) 組織構成図

2018 年度



(2) 運営組織

運営会議

(外部委員)

| | |
|-------|------------------------------|
| 伊東祐郎 | 東京外国语大学副学長 |
| 上野善道 | 東京大学名誉教授 |
| 吳人惠 | 富山大学人文学部教授 |
| 近藤泰弘 | 青山学院大学文学部教授 |
| 樋口知之 | 統計数理研究所長 / 情報・システム研究機構理事 |
| 福井直樹 | 上智大学大学院言語科学研究科教授 |
| 益岡隆志 | 関西外国语大学外国语学教授 |
| 馬塚れい子 | 理化学研究所脳科学総合研究センターシニア・チームリーダー |

(内部委員)

| | |
|-------|-------------------------------|
| 木部暢子 | 副所長 / 教授 |
| 窪園晴夫 | 副所長 / 教授 |
| 野田尚史 | 研究主幹 / 教授 |
| 石黒圭 | 研究情報発信センター長 / 教授 (2018年4月1日-) |
| 前川喜久雄 | コーパス開発センター長 / 教授 |
| 小木曾智信 | 教授 |

任期: 2017年10月1日-2019年9月30日 (2年間)

外部評価委員会

| | |
|--------|----------------------------------|
| 上山あゆみ | 九州大学大学院教授 (2018年10月1日-) |
| 沖裕子 | 信州大学人文学部教授 |
| 小野正弘 | 明治大学文学部教授 |
| 片桐恭弘 | 公立はこだて未来大学学長 |
| 門倉正美 | 横浜国立大学名誉教授 (-2018年9月30日) |
| 坂原茂 | 東京大学名誉教授 |
| 佐久間まゆみ | 早稲田大学大学院日本語教育研究科教授 (-2018年9月30日) |
| 砂川裕一 | 国際交流基金日本語国際センター所長 (2018年10月1日-) |
| 橋田浩一 | 東京大学大学院情報理工学研究科教授 |
| 森山卓郎 | 早稲田大学文学学術院教授 |

任期: 2016年10月1日-2018年9月30日 (2年間)

任期: 2018年10月1日-2020年9月30日 (2年間)

所内委員会組織

・連絡調整会議 (所長, 専任研究教育職員, 管理部長)

連絡調整会議のもとに, 各種委員会を設置

‣ 管理運営関係

- 自己点検・評価委員会
- 情報セキュリティ委員会
- 情報基盤運用委員会
- 知的財産委員会
- 情報公開・個人情報保護委員会
- ハラスメント防止委員会
- 研究倫理委員会
- 施設・防災委員会

- 研究図書室運営委員会
 - 選書部会
- 将来計画委員会
- 学術・発信関係
 - コーパス開発センター運営委員会
 - 研究情報発信センター運営委員会
 - 広報室運営委員会
 - 研究情報誌編集委員会
 - 論集編集委員会
- 共同研究プロジェクト推進会議
- 安全衛生管理委員会
- 創立記念事業実施委員会

(3) 構成員

所長

田窪行則 理論言語学, 韓国語, 琉球諸語, 言語ドキュメンテーション, 危機言語

教育研究職員・特任研究員

- 理論・対照研究領域
 - 領域代表 / 教授
 - 窟蘭晴夫 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言
 - 教授
 - Prashant Pardeshi 言語学, 言語類型論, 対照言語学
 - 松本曜 意味論, 認知言語学
- 言語変異研究領域
 - 領域代表 / 教授
 - 木部暢子 日本語学, 方言学, 音声学, 音韻論
 - 准教授
 - 朝日祥之 社会言語学, 言語学, 日本語学
 - 井上文子 方言学, 社会言語学
 - 熊谷康雄 言語学, 日本語学
 - 山田真寛 言語学, 形式意味論, 言語復興
 - 助教
 - 三井はるみ 日本語学
 - 特任助教
 - 青井隼人 言語音声学, 音韻論, 琉球語学
 - 麻生玲子 言語学, 記述言語学, 琉球諸語
 - 籠宮隆之 音声科学
 - 新永悠人 記述言語学, 琉球諸語
- 言語変化研究領域
 - 領域代表 / 教授
 - 小木曾智信 日本語学, 自然言語処理
 - 教授
 - 相澤正夫 社会言語学, 音声学, 音韻論, 語彙論, 意味論
 - 大西拓一郎 方言学, 言語地理学, 日本語学
 - 山崎誠 日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス
 - 横山詔一 認知科学, 心理統計, 日本語学

| | |
|-------------|--|
| ・准教授 | |
| 高田智和 | 日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理 |
| 新野直哉 | 言語学, 日本語学 |
| ・特任助教 | |
| 間瀬洋子 | 日本語学, 日本語史, 計量言語学, コーパス言語学 |
| ・音声言語研究領域 | |
| ・領域代表 / 准教授 | |
| 小磯花絵 | コーパス言語学, 談話分析, 認知科学 |
| ・教授 | |
| 前川喜久雄 | 音声学, 言語資源 |
| ・准教授 | |
| 柏野和佳子 | 日本語学 |
| ・准教授 | |
| 山口昌也 | 情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学 |
| ・日本語教育研究領域 | |
| ・領域代表 / 教授 | |
| 石黒圭 | 日本語学, 日本語教育学 |
| ・教授 | |
| 宇佐美まゆみ | 言語社会心理学, 談話研究, 語用論, 日本語教育学 |
| 野田尚史 | 日本語学, 日本語教育学 |
| ・准教授 | |
| 野山広 | 応用言語学, 日本語教育学, 基礎教育保障学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育, 言語政策・計画研究 |
| ・研究員 | |
| 福永由佳 | 日本語教育学, 社会言語学, 多言語使用, 言語政策研究 |
| ・コーパス開発センター | |
| ・准教授 | |
| 浅原正幸 | 自然言語処理 |
| ・特任助教 | |
| 石本祐一 | 音声工学, 音響音声学 |
| 岡照晃 | 計算言語学, 自然言語処理 |

客員教員

| | |
|--------------------|-------------|
| ・客員教授 | |
| ・理論・対照研究領域 | |
| 伊藤順子 | カリフォルニア大学教授 |
| Wesley M. Jacobsen | ハーバード大学教授 |
| 岸本秀樹 | 神戸大学教授 |
| 小泉政利 | 東北大学教授 |
| 斎藤衛 | 南山大学教授 |
| John Whitman | コーネル大学教授 |
| 宮田 Susanne | 愛知淑徳大学教授 |
| 吉本啓 | 東北大学教授 |
| ・言語変異研究領域 | |
| 狩俣繁久 | 琉球大学教授 |
| 新田哲夫 | 金沢大学教授 |
| 佐々木冠 | 立命館大学教授 |

| | |
|-------------------|--------------------|
| 渋谷勝己 | 大阪大学教授 |
| 岩崎勝一 | カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授 |
| 長田俊樹 | 総合地球環境学研究所名誉教授 |
| ▶ 言語変化研究領域 | |
| 金水敏 | 大阪大学教授 |
| 青木博史 | 九州大学准教授 |
| 岡崎友子 | 東洋大学教授 |
| 橋本行洋 | 花園大学教授 |
| Bjarke Frellesvig | オックスフォード大学教授 |
| ▶ 音声言語研究領域 | |
| 伝康晴 | 千葉大学教授 |
| 大野剛 | アルバータ大学教授 |
| 菊地英明 | 早稲田大学教授 |
| ▶ 日本語教育研究領域 | |
| 砂川有里子 | 筑波大学名誉教授 |
| 迫田久美子 | 広島大学名誉教授 |
| 糀山洋介 | 南山大学教授 |
| 今井新悟 | 早稲田大学教授 |
| • 客員准教授 | |
| ▶ 理論・対照研究領域 | |
| 秋田喜美 | 名古屋大学准教授 |
| ▶ 言語変異研究領域 | |
| 下地理則 | 九州大学准教授 |
| Anna Bugaeva | 東京理科大学准教授 |
| 五十嵐陽介 | 一橋大学准教授 |
| ▶ 音声言語研究領域 | |
| 丸山岳彦 | 専修大学准教授 |

名誉教授

| | |
|---------------|----------------|
| 角田太作 | 2012.4.1 称号授与 |
| John Whitman | 2015.10.1 称号授与 |
| 迫田久美子 | 2016.4.1 称号授与 |
| Timothy Vance | 2017.4.1 称号授与 |
| 影山太郎 | 2017.10.1 称号授与 |

プロジェクト PD フェロー (2018 年度在籍者)

| | |
|-------|-----------|
| 平田秀 | 理論・対照研究領域 |
| 井戸美里 | 理論・対照研究領域 |
| 鈴木彩香 | 理論・対照研究領域 |
| 大島一 | 言語変異研究領域 |
| 松崎安子 | 言語変化研究領域 |
| 居關友里子 | 音声言語研究領域 |
| 宮部真由美 | 日本語教育研究領域 |
| 蒙榎 | 日本語教育研究領域 |

外来研究員

林由華 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 木部暢子)

「琉球諸語および八丈語の諸方言における係り結びの類型化と機能の解明」 (2017.4–2020.3)

- 下地美日 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 木部暢子)
「方言研究と古代日本語研究の融合による日本語格配列システムの解明」 (2017.4–2019.9)
- 横山晶子 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 木部暢子)
「危機言語の継承に向けた実践的研究—琉球沖永良部語を事例に—」 (2017.4–2020.3)
- 松井真雪 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 窪薙晴夫)
「音声パタンの共時的不均衡性と通時変化の接点」 (2017.4–2020.3)
- 齊藤明美 (翰林大学校 (韓国) 教授, 受入教員: 宇佐美まゆみ)
「韓国における日本語学習者の動機とイメージ形成に影響を与えた要因の変化研究—経年調査の結果からみえるもの—」 (2017.9–2018.8)
- 王世和 (東吳大学 (台湾) 教授, 受入教員: 野田尚史)
「文脈重視の日本語教育文法の研究—テイルの用法を例に—」 (2017.9–2018.8)
- 楊紅 (重慶三峡学院 (中国) 講師, 受入教員: 石黒圭)
「形容詞の連用修飾用法の中日対照言語研究」 (2018.1–2019.1)
- 片岡喜代子 (神奈川大学教授, 受入教員: 野田尚史)
「日本語スペイン語対照理論研究—述部のあり方から探る言語間変異」 (2018.4–2019.3)
- 澤田淳 (青山学院大学准教授, 受入教員: Prashant Pardeshi)
「日本語ダイクシスの語用論的・談話文法的研究—歴史的・対照言語学的視点を含めて—」 (2018.4–2019.3)
- Armin Mester (カリフォルニア大学サンタクラルズ校 (アメリカ) 教授, 受入教員: 窪薙晴夫)
“Studies on the rhythmic structure of Japanese and its dialects” (2018.4–2019.3)
- 富岡諭 (デラウェア大学 (アメリカ) 教授, 受入教員: 窪薙晴夫)
「対比と焦点の意味論・語用論」 (2018.6–2018.7)
- Alexander Francis-Ratte (ファーマン大学 (アメリカ) 助教授, 受入教員: Prashant Pardeshi)
“Reconstruction of Proto-Korean-Japanese” (2018.7)
- 向井祐樹 (ブラジリア大学 (ブラジル) 准教授, 受入教員: 野田尚史)
「非漢字系中級日本語学習者の読解困難点の考察」 (2018.9–2018.11)
- Manfred B. Sellner (オーストリア科学アカデミー (オーストリア) 客員研究員, 受入教員: 山崎誠)
“Corpus analysis of literature in translation” (2018.10–2018.11)
- 陳朝陽 (湖北第二師範学院 (中国) 副教授, 受入教員: 宇佐美まゆみ)
「対人配慮行動の日中対照研究—「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から—」 (2018.10–2019.12)
- Kristina Hmeljak (リュブリヤナ大学 (スロベニア) 助教授, 受入教員: Prashant Pardeshi)
“Readability and typicality of pedagogically valid Japanese word usage example” (2018.11–2019.11)
- Andrej Bekeš (リュブリヤナ大学 (スロベニア) 名誉教授, 受入教員: 石黒圭)
「初級・中級のための日本語文法教育へのテクスト・談話の視点の応用」 (2018.12–2019.11)

国立国語研究所の2018年度の予算および決算を下表に示す。

(単位:千円)

| | 予算額(当初) | 決算額 |
|-----------------|-----------|-----------|
| 収入 | 1,095,066 | 1,198,253 |
| 運営費交付金 | 1,072,575 | 1,145,341 |
| 版権料 | 0 | 8,730 |
| 科学研究費補助金等間接経費収入 | 12,168 | 37,115 |
| その他雑収入 | 1,344 | 1,878 |
| 寄附金収入 | 5,215 | 2,912 |
| 受託研究等収入 | 0 | 0 |
| 受託事業等収入 | 3,764 | 2,277 |
| 支出 | 1,095,066 | 1,194,215 |
| 研究経費 | 20,715 | 20,343 |
| 共同利用経費 | 439,210 | 296,589 |
| 教育研究支援経費 | 32,670 | 34,672 |
| 人件費 | 515,147 | 739,865 |
| 一般管理費 | 83,560 | 101,013 |
| 受託研究経費 | 0 | 0 |
| 受託事業経費 | 3,764 | 1,733 |

II

共同研究と共同利用

本章では、共同研究活動として、(1) 各種の共同研究プロジェクト、(2) 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト等、および(3) 外部資金による研究をまとめるとともに、共同利用のための成果として、(4) 2018年度公開中の各種コーパス・データベース、(5) 学術刊行物、(6) 研究成果の発信・普及のための国際シンポジウム、研究系の合同発表会、プロジェクトの発表会、コロキウム、サロンなどの催し、および(7) センター・研究図書室の活動状況を掲げる。

1 共同研究プロジェクト

第3期中期計画における国立国語研究所全体の研究課題は「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」である。これを達成するため、5研究領域とコーパス開発センターでは共同研究プロジェクトを展開している。共同研究プロジェクトは、プロジェクトリーダーを中心とし、国内外の共同研究員の参画によって成り立っており、研究領域・センター間、プロジェクト間で連携しながら研究を進めている。また、この研究課題は、国立国語研究所が所属する人間文化研究機構における、機関拠点型基幹研究プロジェクトの1つとして位置付けられている。

2018年度は、「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」のプロジェクトとして基幹型(6件)、領域指定型(5件)、および新領域創出型(2件)の3タイプと、コーパス基礎研究(1件)を実施した。

なお、基幹型プロジェクトの概要については、『大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所平成30年度業務の実績に関する外部評価報告書』の各プロジェクト・センターの評価から抜粋した。詳細は、第VIII章を参照。

(1) 【基幹型】6件

基幹型プロジェクトは、国立国語研究所における研究活動の根幹となる大規模なプロジェクトで、日本語の全体像の総合的解明という学術的目標に向けて研究所が総力を結集して取り組むものである。5研究領域の専任教員のリーダーシップのもと、国内外の研究者・研究機関との協業により全国的、国際的レベルで展開している。

- ・対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法
 - ・プロジェクトリーダー：窪瀬晴夫(理論・対照研究領域・教授)
 - ・研究期間：2016.4–2022.3.

《研究目的および特色》

日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i) 世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii) 一般言語学・言語類型論の視点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii) 日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとは言えない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」視点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」視点である。

本プロジェクトは、この両視点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語(諸方言を含む)を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得(第一言語獲得、第二言語習得)はもとより、言語に関する他の学問分野(心理学、認知科学他)との接点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性(普遍性)と相違点(個別性・多様性)を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班(サブプロジェクト)を組織する。音声研究班は

「語のプロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集（英文、和文）の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図（電子媒体）の刊行を目指す。

《2018年度の主要な成果》

1. 研究

対照言語学研究を推進するために、国内外の研究者13人を共同研究員として追加し、合計133人の組織で事業を遂行した。4つの研究班ごとの公開研究発表会を計11回（国内学会でのシンポジウム・ワークショップ4回を含む）、4班合同の発表会（Prosody and Grammar Festa 3）を1回、国際シンポジウム・ワークショップを3件開催した。これら15の企画において計129件の研究発表が行われ（うち学生が筆頭発表者のもの23件）、計795名（延べ）の参加者が得られた（うち海外機関研究者30人、大学院生を含む学生153人）。

またプロジェクト全体で図書4冊、論文27編（ブックチャプター9編含む）、学術発表・講演94件（一般向け除く）を公開・刊行した（いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。このうちプロジェクトの所内メンバーは4冊の図書（研究論文集2冊、教材2冊）、論文12編を刊行し、さらに5冊の研究論文集・概説書の編集を行った。

また韓国日本語学会・韓国日語教育学会と連携してNINJALチュートリアルをソウルで開催したほか、大学との組織的な連携を深めるために、神戸大学大学院人文学研究科と学術交流協定を締結した。

2. 共同利用・共同研究

通時コーパスプロジェクトと合同でNINJALシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—文法史研究・通時的対照研究を中心に—」を開催したほか、国語研主催のNINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」においてワークショップ「多角的な視点から見た日本語のモダリティ」を企画した。

前年度に続き言語地図の作成に取り組み、29タイプの名詞修飾表現のアンケート調査に基づき現在10言語のデータを提供し、言語地図作成用のデータベースを設計・構築した。また、諸言語の移動動詞に関して1700件を超える文献の目録（英文）を作成し公開した。

この他、国際シンポジウムICPP2018を開催するにあたってアドバイザリーボードのメンバーに意見を求め、その意見をテーマと招待講演者の選定に活用した。

3. 教育

NINJALチュートリアル「日本語複合動詞の意味論」を東京・一橋講堂と京都大学で実施し、大学院生を中心に合計66人の参加を得た。また韓国日本語学会および韓国日語教育学会と連携して、NINJALチュートリアル「日本語の音声と文法」（2018年6月30日、7月1日）を韓国の中央大学校で開催し、大学院生30人を含む合計90人の参加を得た。

若手育成としてPDフェローを2人雇用し、また学振PD1人を外来研究員、海外の大学院生1人を特別共同利用研究員としてそれぞれ受け入れ、研究指導を行った。またプロジェクト全体で6人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した。

さらに大学院生6人、学振PD3人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、プロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。また研究発表会や国内／国際シンポジウム・ワークショップ等において延べ23人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を与え、若手研究者13人に対して発表旅費を支援し、加えて計1名の若手研究者に対して方言調査の旅費を援助した。

4. 社会との連携及び社会貢献

プロジェクト全体で地域社会と連携した講演を計8件、それ以外の講演を3件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。このうち所内メンバーは鹿児島県薩摩川内市と連携し、同市の離島・甑島の1ヶ所で島民向けに、また島内の4中学校で中学生を対象にそれぞれ方言に関する講演を行い、また東京都杉並区、国立市、九州グローバル人材活用促進協議会、鹿児島県女性教員管理職の会、京都市中京歯科医師会等からの依頼を受け、それぞれ日本語に関する講演を行った。

社会人の学び直しとして、ソウルの中央大学校で開催したNINJALチュートリアルにおいて、60人

の社会人（主に現地日本語教師）に対して「日本語の音声と文法」の講義を行い、また東京と京都の2ヶ所で実施したNINJAL チュートリアル「日本語複合動詞の意味論」では受講生のうち25人が社会人であった。この他に現役教師を対象とする講演をプロジェクト全体で21件（うち所内メンバーが19件）行った。

5. グローバル化

プロジェクトの所内メンバーが1冊の英文研究論文集（特集号）を刊行し、対照研究の成果を海外に向けて発信した（Haruo Kubozono (ed.) *Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean*, 国際誌 *The Linguistic Review* Vol. 36, No. 1）。また国内外において合計11件のイベント（国内3件、海外8件）を開催し、合計684人の参加を得た。このうち国内では International Workshop on Frame Semantics and FrameNet（慶應義塾大学）、International Conference on Phonetics and Phonology（国語研）、Motion Event Descriptions across Languages（国語研）の3件の国際イベントを開催し、海外ではNINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」（韓国中央大学校）と計7回の「日本語学講習会」（ベトナム、スリランカ、インド、ミャンマー、カンボジアの5ヶ国）を開催した。また人的交流として海外の研究者2人を外来研究員として、大学院生1人を特別共同利用研究員として受け入れた。

加えてプロジェクト全体では40件、国際会議で研究成果を発表した。このうち所内メンバーは国際会議 The 26th Japanese/Korean Linguistics (UCLA), The 7th International Conference on Phonology and Morphology (ソウル大学), 北京日本語研究センター公開講座, 北京大学創立120周年記念国際シンポジウムにおいてそれぞれ招待講演・基調講演を行った。

・共同研究員数：121名

・共同研究員所属機関：

北海道大学、室蘭工業大学、東北大学、筑波大学、宇都宮大学、東京大学、東京外国語大学、一橋大学、新潟大学、富山大学、金沢大学、岐阜大学、名古屋大学、愛知教育大学、三重大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、鳴門教育大学、熊本大学、宮崎大学、琉球大学、国立民族学博物館、首都大学東京、公立小松大学、愛知県立大学、大阪府立大学、島根県立大学、熊本県立大学、北星学園大学、獨協大学、麗澤大学、放送大学、神田外語大学、慶應義塾大学、国際基督教大学、上智大学、聖心女子大学、大東文化大学、東京理科大学、日本女子大学、法政大学、立教大学、早稲田大学、神奈川大学、名古屋学院大学、南山大学、京都外国語大学、同志社大学、立命館大学、関西大学、関西外国語大学、大阪保健医療大学、美作大学、安田女子大学、福岡大学、京都外国語短期大学、神戸市立工業高等専門学校、理化学研究所、防衛大学校、名古屋SKY日本語学校、ネワール言語文化研究所、カリフォルニア大学サンタクラーズ校、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、スタンフォード大学、ライス大学、ルンド大学、マサリク大学、アンカラ大学、チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学、国立東洋言語文化大学、韓国外国語大学校、徳成女子大学校

・統語・意味解析コーパスの開発と言語研究

・プロジェクトリーダー：Prashant Pardeshi（理論・対照研究領域・教授）

・研究期間：2016.4–2022.3.

《研究目的および特色》

現在世界の主要言語についてPenn Treebank方式の統語解析情報付きコーパス（ツリーバンク）が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報付き日本語構造体コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)・Keyaki Treebank/Kainoki Treebank/Kusunoki Treebank の構築に加えて、述語項構造解析のために必要となる意味役割情報を付与するコーパスの開発も試みる。さらに、このコーパスを利用して日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用推進の一環として、最終年度までに5–6万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持たない人でも簡単に利用できるインターフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも

本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、右図に示すように、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのアドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。

《2018年度の主要な成果》

1. 研究

統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、プロジェクト共同研究者 42 人（アドバイザーを含む、うち PD フェロー 1 名、大学院生 4 名）の組織でコーパス開発とコーパスに基づく言語研究を遂行した。公開研究発表会を計 2 回開催し、さらに学会におけるワークショップおよびシンポジウムをそれぞれ 1 回、企画・開催し、国内外で個別発表も行った。これらの企画において計 26 件の研究発表が行われた。

また、国外から刊行予定の① NINJAL 国際シンポジウム *Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing*, ② NINJAL 国際シンポジウムの *Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages*, ③ NINJAL 国際シンポジウム *Mimetics in Japanese and Other Languages of the World* の 3 つの研究成果のとりまとめ、編集作業を行った。さらに、日本語統語論の教育に特化した *Exploring Japanese Syntax* (仮題) の執筆 (岸本著) が終了し、この教材の練習問題を NPCMJ コーパスを利用して解くための仕組み (試作版) の構想を固めた (開発は来年度の予定)。

加えて、共同研究者の宮田 Susanne 教授の主導する CHILDES (Child Language Data Exchange System) と連携し、①日本語を第一言語として獲得する幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究、② CHILDES の仕組みを利用した NPCMJ に対する精密な形態論情報付与に関する研究を開始した。①の具体例として、大久保 (1967) のデータにアノテーションを付与し、CHILDES で NINJAL-Okubo データとして公開する準備を進めた (来年度公開予定)。

2. 共同利用・共同研究

国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードと相談しながらアノテーションの質的な拡充を行った。共同利用の推進のために、コーパスの構築の面において、NPCMJ コーパスに新たなデータ 1 万文を追加し、総データ量を 3 万文に増やし、公開した。また、コーパスの利用を推進するために NPCMJ コーパス利用講習会を国内の大学で 3 回開催した (うち 2 回は NINJAL チュートリアル)。これらの講習会に 54 名の参加者 (うち大学院生を含む学生 24 人)。さらに、日本語学習者のコミュニケーション (リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ)、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進めた。初級の文型 200 件を格納し、インターフェースとともに公開した。大久保 (1967) のデータにアノテーションを付与し、CHILDES で NINJAL-Okubo データとして公開する準備を進めた (来年度公開予定)。

3. 教育

PD フェロー 1 名、および大学院生 4 名を非常勤研究員として雇用し、アノテーション作業や共同研究における発表の機会を提供することによって若手研究者を育成した。また、研究所で雇用されている非常勤研究員の国内外での学会発表の経費を援助した。プロジェクト非常勤研究員 2 名が九州大学 (伊都キャンパス) で NPCMJ コーパスに関する集中講義 (15 コマ分) を行った。さらに、統語コーパス利用講習会を 3 回開催し、コーパス利用に関するノウハウを提供した。

4. 社会との連携及び社会貢献

NPCMJ コーパスをオンラインで公開し、研究に目的を絞らない、幅広い層の人々からの利用促進に努めた。インターフェースの開発だけでなく、オンラインドキュメンテーション、ユーザーズマニュアル

を充実させ、コーパスにより容易にアクセスができるようにした。

5. グローバル化

国際シンポジウム3件 (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing; Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages; Mimetics in Japanese and Other Language of the World) の研究成果の編集作業を進めた。国際会議において研究成果を3件発表した。また、日本語の統語論の教育に特化した *Exploring Japanese Syntax* (仮題) の執筆を完了させ、出版社に入稿した (来年度刊行予定)。加えて、NPCMJ コーパスの漢字仮名交じりデータをローマ字化した形でも公開している。また、検索インターフェースを含めたウェブサイトはすべて日本語と英語の2言語で作成されている。

・共同研究員数: 33名

・共同研究員所属機関:

弘前大学、東北大学、東京大学、お茶の水女子大学、北陸先端科学技術大学院大学、名古屋大学、三重大学、神戸大学、鳥取大学、岡山大学、国立情報学研究所、南山大学、愛知淑徳大学、同志社大学、立命館大学、関西外国語大学、コーネル大学、デラウェア大学、ペンシルベニア大学、マサチューセッツ大学、ヨーク大学

・日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成

・プロジェクトリーダー: 木部暢子 (言語変異研究領域・教授)

・研究期間: 2016.4–2022.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトは、日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として、各地の言語・方言の調査を実施し、言語資源の整備・分析を行うとともに、言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献することを目的とする。

近年、世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009年、ユネスコは世界の危機言語リストを発表したが、その中には日本で話されている8つの言語—アイヌ語、与那国語、八重山語、宮古語、沖縄語、国頭語、八丈語—が含まれている。しかし、消滅の危機に瀕しているのはそれだけではない。日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと、また、これらの言語・方言の継承活動を支援することは、言語学上の重要課題であるばかりでなく、日本社会においても重要な課題である。

以上のような状況を踏まえ、本プロジェクトでは、次のことを実施する。(1) 日本の危機言語・方言の語彙集、文法書、談話テキストの作成と言語分析、(2) 音声・映像資料 (ドキュメンテーション付き)、「日本語諸方言コーパス」等の言語資源の整備、(3) 地域と連携した講演会・セミナーの開催、(4) 若手育成のためのフィールド調査の手引き書の作成。

なお、実施にあたっては、機構の広領域型基幹プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、ネットワーク型基幹プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」、「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化」と連携する。

《2018年度の主要な成果》

1. 研究

【フィールドワーク】

日本の危機言語・方言の記録・保存・公開のために、全国約40地点における「動詞・形容詞」の調査、青森県むつ市方言の合同調査等を実施、また、椎葉村との連携協定に基づく『椎葉村方言語彙集』作成のための調査を実施した。

【研究発表会・講演会】

5回の公開研究発表会・講演会を開催した (①動詞・形容詞 (琉球諸語)、②動詞・形容詞 (本土諸方言)、③フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史、④琉球諸語継承に向けた教育活動の事例報告 (日本音声学会ワークショップ)、⑤ Sherman WILCOX 教授による講演 Sign linguistics)。

【国際シンポジウム】

8月に NINJAL International Symposium “Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia” とそれに関連するイベントを開催した。また、ハワイ大学との協定に基づく講演会、ワークショップを開催した。

【社会的意義】

アイヌ語に関する研究が新聞各紙で取り上げられた。また、手話を含む危機言語の継承活動が NHK ハートネット TV で取り上げられた。

【大学との組織的な連携】

東外大 AA 研 LingDy3 との協定によりクロスアポイントメントによる特任助教を雇用し、国際シンポジウム、弘前大学との連携授業等を実施した。

【研究成果】

研究成果として、プロジェクト全体で論文 20 件（ブックチャプターを含む）、図書・報告書 5 件、コーパス・データベース等 5 件、発表・講演 85 件、一般向け講演・セミナー 13 件として公開した（プロジェクトの企画によるもの、プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ）を公表した。

2. 共同利用・共同研究

【データベース等の構築・公開】

「危機言語 DB」のページで危機言語・方言のデータを公開した。本年度は基礎語彙のうち宮古本島（砂川、池間西原）、沖縄（伊平屋村田名）のデータを追加公開、自然談話のうち宮古島（本島）、多良間島のデータを追加公開した。また、『日本言語地図』の原データの公開を行う『日本言語地図データベース』のデータを 40 件追加して公開した。諸方言が横断的に検索できる『日本語諸方言コーパス（COJADS）』については、3 年間のデータ整備を経て、47 地点 24 時間の音声データによるモニター版を 2019 年 3 月に作成し、公開した。

【データベース等を使った研究】

上記の COJADS やデータベースを使った研究発表を 5 件行なった。また、日本言語資源の包括的検索システムの構築に向けて「通時コーパス」「日常会話コーパス」「学習者コーパス」、「コーパスアノテーション」、科研費基盤研究（A）、（B）と共同でコーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」（9 月 7 日）を開催した。

3. 教育

【大学との連携による授業】

東京外大 AA 研と協力して、弘前大学との連携授業「地域文化振興実習」を担当した。内容は、言語調査の意義、調査の方法論、事前準備、データの書き起こし方法の 4 コマである。受講生のうち 4 人が青森県むつ市方言調査に参加した。

【フィールドワーク支援】

弘前大学の学生の他、むつ市方言調査に参加する学生を全国公募し、4 人の学生・大学院生を調査に参加させた。また、若手研究者に対して語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材の作成のための調査旅費を援助した。

【発表支援】

8 月の NINJAL International Symposium の前日にポスター発表を開催し、公募による若手研究者 20 人に発表の場を提供した。また、1 月 12-13 日のワークショップ（ハワイ大マノア校）に 5 人の非常勤研究員を派遣し、国際ワークショップの経験を積ませた。

4. 社会との連携及び社会貢献

【地域社会との連携】

宮崎県椎葉村との協定に基づき、村と共同で『椎葉村方言語彙集』の作成のための調査を実施した。また、今年度、新たに沖永良部島和泊町・知名町と連携協定を結び、言語復興活動を町と共同で実施することとした。今年度は和泊町国頭村集落の親子 16 人が言語継承活動の取組を発表するワークショップ「くんじやい しまむにプロジェクト」を 2 月 10 日に国語研で開催した。

【一般向け講義・講演会等】

文化庁、宮古島市等との共催で「危機的な状況にある言語・方言サミット（宮古島）」（11月24日）を開催した。また、まつえ市民大学と共同で出雲弁に関するシンポジウム「出雲方言の探究と保存継承活動の活発化に向けて」（12月1日）を開催した。

【方言の展示】

昨年度から「展示による可視化・高度化事業」と共同でモバイル型展示ユニットの作成と展示を行っている。今年度は神奈川大学、弘前大学、羽田空港国際線ターミナル、松江市、富山大学等で展示を行なった。

【インターネットを通した発信】

ネットを通して危機言語・方言のデータや『日本語諸方言コーパス（COJADS）』、『日本言語地図データベース』のデータを公開した。

5. グローバル化

【国際シンポジウム等】

8月6-8日に国語研で、琉球・日本・北東アジア地域の危機言語を対象とするシンポジウム NINJAL International Symposium “Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia.” を東京外大AA研、科研費基盤研究（S）と共同で開催した。これに関連して、8月5日に危機言語に関するポスター発表、およびハワイ大学ヒロ校ŌHARA Yumiko 氏による“A brief introduction to the immersion classroom: A case of Hawaiian language”を、8月9-10日にブリティッシュ・コロンビア大学Mark Turin 氏によるドキュメンテーションのワークショップ“Developing Digital Tools for Language Revitalization”を開催した。

【協定に基づく講演会】

国際連携協定に基づき、8月9日に国語研で、ハワイ大学マノア校FUKUDA Shin'ichirō 氏による協定締結記念講演会を開催した。また、1月にハワイ大学マノア校で危機言語に関するワークショップ“The NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Workshop”を開催した。

【英文ウェブサイトの整備・充実等】

報告書、および危機言語・方言のデータを英訳し、ホームページで発信した。

- ・共同研究員数: 53名

- ・共同研究員所属機関:

岩手大学、東北大学、千葉大学、東京大学、東京学芸大学、一橋大学、金沢大学、島根大学、岡山大学、広島大学、徳島大学、福岡教育大学、九州大学、長崎大学、琉球大学、首都大学東京、熊本県立大学、北星学園大学、弘前学院大学、文教大学、目白大学、駒澤大学、東京理科大学、日本女子大学、立正大学、立命館大学、関西大学、広島経済大学、安田女子大学、別府大学、志學館大学、沖縄国際大学、椎葉民俗芸能博物館、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、シンガポール国立大学、オークランド大学、フランス国立科学研究所

・通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開

- ・プロジェクトリーダー: 小木曾智信（言語変化研究領域・教授）
- ・研究期間: 2016.4-2022.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトは、上代（奈良時代）から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培ってきた新しい手法を導入し、従来行えなかつた視点からの研究を展開する。

既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済みの「平安時代編」（平安仮名文学作品）、「室町時代編」（狂言）等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌

集、中世のキリスト教資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・文学作品等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」（代表者・高田智和）と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

《2018年度の主要な成果》

1. 研究

- プロジェクトで主催した NINJAL-Oxford 「通時コーパス」国際シンポジウム（9月8-9日）、「通時コーパス」シンポジウム2019（3月9日）のほか、共催を含め計4回のシンポジウムを開催した。また、通時コーパス活用班のグループ研究発表会を5回、『日本語歴史コーパス』の講習会（チュートリアル）を3回開催した。
- 研究成果を、書籍1件、論文・ブックチャプター等18件、発表・講演51件、コーパス・データベース等12件として公開した（プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ）。うち1件が学会ベストポスター賞を受賞した。

2. 共同利用・共同研究

- 『日本語歴史コーパス』「明治・大正編II教科書」を整備し、10月に公開した。また、「江戸時代編II人情本」「明治・大正編III 明治初期口語資料」「和歌集編（八代集）」を新規に、また「東洋学芸雑誌」を追加した「明治・大正編 雑誌」を3月に公開した。
- 語誌データベースの試作版を構築し、3月に公開した。
- 「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」（ONCOJ）のアップデートを行った。
- 大英図書館所蔵 天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』の画像データをWeb上で公開し「室町時代編II キリスト教資料」と連携した。

3. 教育

- PD フェローを1名、非常勤研究員を3名雇用しコーパス構築を進めるとともに、コーパスを活用した研究方法の指導を行った。また、大学院生5名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ学会参加費を補助するなど、若手研究者への支援を行った。このうち、片山久留美プロジェクト非常勤研究員らの研究発表が情報処理学会・人文科学とコンピュータシンポジウムにおいてベストポスター賞を受賞した（重出）。
- 書籍『新しい古典・言語文化の授業—コーパスを活用した実践と研究—』（朝倉書店）を刊行した（公募型プロジェクトと共同）。

4. 社会との連携及び社会貢献

- 『日本語歴史コーパス』を拡充し、コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて公開した。新規の申し込みユーザー数は3934、検索件数は約26万であった。
- 中世文語（説話・隨筆）UniDicについてAI TOKYO LAB社に商用利用を許諾した。
- 中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生・大学院学生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会（国語教育活用ワークショップ）を開催した。
- 駒澤大学の公開講座「日本語の千年—コーパスで解き明かすことばの生態—」においてプロジェクトメンバーで分担し全8回の下記の市民向け講義を行った。
- 国立国語研究所主催の第13回 NINJAL フォーラム「日本語の変化を探る」の企画・発表を行った。

5. グローバル化

- オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で ONCOJ のアップデートを行い、共催した NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウムで研究発表を行った。
- 北京日本学研究センターにおいて 11 月 20 日に NINJAL セミナー「国語研究所の言語資源」を開催し多数の参加を得た。

◦ 共同研究員数: 65 名

◦ 共同研究員所属機関:

北海道大学、岩手大学、東北大学、茨城大学、群馬大学、埼玉大学、千葉大学、東京大学、お茶の水女子大学、一橋大学、横浜国立大学、富山大学、福井大学、名古屋大学、愛知教育大学、三重大学、大阪大学、奈良先端科学技術大学院大学、福岡教育大学、九州大学、統計数理研究所、首都大学東京、京都府立大学、青山学院大学、國學院大學、駒澤大学、上智大学、昭和女子大学、白百合女子大学、成城大学、中央大学、東京女子大学、東京電機大学、東洋大学、二松學舎大學、日本女子大学、明治大学、常葉大学、中京大学、名古屋女子大学、花園大学、立命館大学、関西大学、関西学院大学、ノートルダム清心女子大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、コーネル大学、シカゴ大学、オックスフォード大学、啓明大学校

• 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究

◦ プロジェクトリーダー: 小磯花絵 (音声言語研究領域・准教授)

◦ 研究期間: 2016.4–2022.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのために、(1) 多様な日常場面の会話 200 時間を収めた大規模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班、及び、構築したコーパスを用いて、(2) 語彙・文法・音声などに着目してレジスター的多様性を研究するレジスター班、(3) 会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班、(4) 語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の 4 つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では、日常の会話行動に関する調査にもとづき、自宅・職場・店舗・屋外での家族・友人・同僚・店員との会話など、多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり、世界的に見ても新しい試みである。また、従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話してもらうのではなく、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより、日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し、文字化した上で、形態論情報や統語情報、談話情報などのアノテーションを施し、一般に公開する。これにより、話し言葉に関する高度なコーパスベースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく、日本語教育や辞書編纂、音声情報処理、ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また、後世の人々が 21 世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では、現代の日常会話に加え、講演などの独話、発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、1950 年代以降の話し言葉など、多様なデータを対象に、高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み、その経年変化の実態を、実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして、昔の話し言葉のデータや BCCWJ の小説などの会話文、国会会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは、日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって、話し言葉コーパスの共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

《2018 年度の主要な成果》

1. 研究

◦ 構築中の『日本語日常会話コーパス』を昨年度、本プロジェクトおよび領域指定型プロジェクト「創発参与」のメンバーに限定公開し、各班で整備を進めた他のコーパスと合わせて研究を推進した。そ

- の成果報告としてシンポジウム「日常会話コーパス」IV を2019年3月4日に国語研講堂で開催した。
- 『日本語日常会話コーパス』の成果を国際的に発信し国内外の研究者との連携を深めるために、言語資源に関する国際会議 LREC にて国際ワークショップ ‘Language and Body in Real Life’ を2018年5月7日に開催した。Multimodal Corpora2018 と共同開催することで日常会話のマルチモーダル分析についての議論も深めた。
 - 話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウム ‘EIL2019 & LCI-7 Joint International Symposium’ を創発参与プロジェクトと合同で2019年3月11日に国語研講堂で開催した。Keevallik 氏による招待講演も行い、相互行為における言語と身体の関係について議論を深めた。
 - 『日本語日常会話コーパス』モニター公開版を対象にデータの仕様や特徴を報告書としてとりまとめ、ホームページで公開した。
 - 以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、論文8件、報告書1冊、発表・講演62件、データベース等6件（うち3件はプロジェクト内限定）として公開した。

2. 共同利用・共同研究

- 構築中の『日本語日常会話コーパス』のうち50時間の会話を対象に、2018年12月4日にモニター公開を開始した。本コーパスは映像・音声データを含め多角的に分析できる世界でも類を見ないコーパスであり、言語学や日本語学に留まらず、日本語教育や国語教育、社会学、認知科学、情報工学、人工知能、産業界など、幅広い分野の研究者からの利用申請があった。
- 1950年代から1970年代にかけて国立国語研究所で録音された音声資料『昭和話し言葉コーパス』のうち、当時の所員による講演を中心とする17時間の独話を対象に、2018年3月29日にモニター公開を開始した。
- 『女性のことば・男性のことば—職場編一』（ひつじ書房）のデータをコーパスとして再整備し、出版社の許諾を得た上で、『現日研・職場談話コーパス』としてオンライン検索システム「中納言」にて2018年8月20日に一般公開した。
- コーパス関係のプロジェクトや科研と合同で、2018年9月7日に合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティー」を国語研で開催し、プロジェクト間の連携を深めた。
- 「通時コーパス」プロジェクトが2019年3月9日に開催した「通時コーパス」シンポジウム2019において本プロジェクトは共催として関わり、共同でテーマセッション『歴史的音源資料と日本語研究』を企画して連携を深めた。

3. 教育

- コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象に、第5回コーパス利用講習会（検索システム「ひまわり」「中納言」の2コース）を2018年9月3日に、第6回コーパス利用講習会（検索システム「ひまわり」）を2019年3月3日に開催した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのホームページで公開した。
- プロジェクトの共同研究員が、お茶の水女子大学の演習において、『日本語日常会話コーパス』プロジェクト内限定公開データを用いて日常生活の話し言葉を対象とする演習を実施した。コーパス構築班は、全文検索システムの提供やデータの活用方法のアドバイスなどの支援を行った。
- 共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日本語日常会話コーパス』を提供し、コーパスを活用した研究を支援することによって、博士論文1本（千葉大学）、修士論文2本（アルバータ大学・早稲田大学）、卒業論文3本（お茶の水女子大学）の成果に結びついた。
- 共同研究員として大学院生5名をプロジェクトに参画させ、コーパスに基づく定量的分析方法を教授するなど大学院生の研究を支援した。また大学院生を含む若手の非常勤研究員を対象に、会話データを優先的に研究利用できるようにすると同時に、データベース設計やSQL、Rを用いた統計分析など、コーパスの活用方法について実践的に学ぶ勉強会を開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献

- プロジェクトで整備・公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『名大会話コーパス』、『現日研究・職場談話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に公開し、合計で7233

件の新規利用申請があった。

◦「通時コーパス」プロジェクトと共同で、日本語の変化をテーマとする一般向けのフォーラム「日本語の変化を探る」を2018年11月4日に一橋講堂で開催した。

5. グローバル化

◦『日常会話コーパス』の成果を国際的に発信し国内外の研究者との連携を深めるために、言語資源に関する国際会議 LREC にて国際ワークショップ ‘Language and Body in Real Life’ を開催した。

◦話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウム ‘EIL2019 & LCI-7 Joint International Symposium’ を創発参与プロジェクトと合同で2019年3月11日に国語研講堂で開催した。Keevallik 氏による招待講演も行い、会話相互行為における言語と身体の関係について議論を深めた。

◦海外在住の研究者1名をプロジェクト共同研究員として加え、『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションを通して、コーパスについて評価してもらった。

◦共同研究員数: 32名

◦共同研究員所属機関:

千葉大学、お茶の水女子大学、一橋大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学、熊本大学、公立はこだて未来大学、文教大学、十文字学園女子大学、慶應義塾大学、成蹊大学、専修大学、東洋大学、日本女子大学、早稲田大学、フェリス女学院大学、愛知学院大学、同志社大学、同志社女子大学、関西学院大学、独立行政法人国際交流基金、NHK放送文化研究所、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、アルバータ大学

・日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明

◦プロジェクトリーダー: 石黒圭 (日本語教育研究領域・教授)

◦研究期間: 2016.4–2022.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。

本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとに学習者の会話能力を解明する。この研究は、自然な日常会話をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとに異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視することに特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これ

は、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

《2018年度の主要な成果》

1. 研究

- プロジェクトを推進するために、国内外の日本語教育研究者 149 名で 3 つのサブプロジェクトによる共同研究体制を組織した。また、プロジェクトの所内メンバーが 4 冊の研究論文集の編集を行い、1 冊の研究論文集を刊行した。
 - 日本語学習者の読解活動を分析した論文集『どうすれば協働学習がうまくいくか 失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』(石黒圭編、ココ出版) を刊行した (2018 年 6 月刊行)。
 - プロジェクトの共同研究員の研究成果も含め、プロジェクト全体で論文 21 件 (ブックチャプター含む)、図書 1 冊、データベース 7 件、学術発表・学術講演 72 件、一般向け講演・セミナー 12 件、講習・チュートリアル 13 件を公開・刊行した。

2. 共同利用・共同研究

- 日本語使用班は、2 件のコーパス構築を前年度から継続して行い、6 件の講習会と 4 件のシンポジウムを行った。
 - 母語話者と学習者の自然会話コーパスである『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 所内先行リリース版 (2017 年度)』にさらに整備、修正を行い、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2018 年版』333 会話 (延べ 666 人のデータ) を一般公開した。また、シンポジウムを 2 件、BTSJ の活用方法講習会を 3 回 (参加者合計 77 名、うち国外機関所属者 6 名、学生 33 名) 行った。
 - 多言語を母語とする日本語学習者コーパスである『I-JAS (International corpus of Japanese As a Second language) 多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の構築を前年度から継続して行い、2018 年 5 月 21 日に、第三次公開として 210 名分の発話データを公開した。また、2018 年 4 月 30 日にシンポジウム「日本語教育は学習者コーパスで変わる—横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴—」を開催し (参加者 138 名、うち国外機関所属者 6 名、学生 51 名)、I-JAS と B-JAS のデータを用いた講演と研究発表を行った。さらに、2018 年 12 月 22 日、「第四回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウム—第二言語習得における語彙の役割—」を開催し、シンポジウムには 110 名の参加者 (うち、国外機関所属者 5 名、学生 33 名) を得た。ワークショップ (講習会) はこの回を含め、計 3 回行った。
 - 連携協定を結んでいる北京日本語学研究センターと共同で、日本語習得過程に関するデータ収集を春と秋に行った (国内 1 回、海外 2 回)。
- 日本語理解班は、2 件のコーパス構築を前年度から継続して行った。
 - 日本語学習者の読解コーパスとして、『日本語非母語話者の読解コーパス』と『日本語学習者の文章理解過程データベース』を前年度から継続して構築した。構築のためのデータ収集を行うとともに、前者は 30 件のコーパスデータ、後者は 60 名分のコーパスデータを公開した。
- リソース開発班では、3 件の辞典・教材の作成を継続し、データの追加公開を行った。また、シンポジウム 1 件を開催、論文集 1 冊の編集を進めた。
 - オンライン日本語基本動詞ハンドブックの作成を継続し、2019 年 3 月に 15 見出しを追加する予定。また、2018 年 12 月に 17 見出しの音声コンテンツ、27 見出しにミニアニメコンテンツを追加した。
 - ウェブ版読解教材の開発を継続し、「ホテル検索サイト」シリーズ 5 レッスン、「旅行のパンフレット」シリーズ 1 レッスン、「通商白書」シリーズ 3 レッスン、「人的資源関連の研究論文」シリーズ 4 レッスンの教材合計 13 レッスンの教材を開発した。
 - ウェブ版聴解教材の開発を継続した。
- 連携協定を結んでいる北京日本学研究センター・国際交流基金日本語国際センターともさらに共同研究を進めた。上述の、北京日本語学研究センターと共同調査によるデータ収集、および合同シンポジウムの開催のみならず、下記のような進展も見られた。

- ・北京日本学研究センター・国際交流基金日本語国際センターと共に2018年7月31日に国際シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて—学習者調査から新しい辞書の構想と開発へ—」を開催した。
- ・国際交流基金日本語国際センターと協力し、論文集『コミュニケーションのための日本語聴解教材の作成』(野田尚史・中尾有岐編、ひつじ書房)の編集を進めた。

3. 教育

- PD フェローを2名雇用し、日本語教育研究に関する研究指導を行った。さらに、大学院生11名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。
- 12名の大学院生をコーパスの構築作業に参加させ、コーパスを用いた研究の指導を行った。

4. 社会との連携及び社会貢献

- 外国人にとってわかりやすい日本語という視点を取り入れたビジネス日本語のプロジェクトを、企業関係者を中心とした日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力のもと、2件の学会発表を行った。
- また、日本語教師セミナーを国内1回、国外2回の計3回開催した。国内では、「看護・介護に必要な日本語の研究と日本語教育」を国立国語研究所で行い、129名（うち国外機関所属者3名、学生12名）が参加した。国外では、「自然会話コーパスを活用した日本語教育」を2回オーストラリアで行い、計58名（うち国外機関所属者23名、学生5名）が参加した。
- その他、2018年6月9日にシンポジウム「ピア・リーディング授業の考え方」(国立国語研究所)を開催し、参加者は161名（国外機関所属者7名、学生41名）を得た。さらに、日本語教師や大学教員を主な対象とした講演を3件行った。

5. グローバル化

- 海外在住の研究者44名を共同研究員として加え、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を実施した。また、連携協定を結んでいる北京日本学研究センターとは、共同で日本語学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を行い、2件のシンポジウムを開催し（詳細は、「2. 共同利用・共同研究」参照）、オンライン日本語基本動詞ハンドブックおよび日本語文型バンクについては、海外5カ所でそれぞれデモ発表を行った。プロジェクトに関わる国際会議は合計で、学術発表・学術講演が33件、一般向け講演・セミナーが3件、講習・チュートリアルが7件であった。

◦ 共同研究員数：136名

◦ 共同研究員所属機関：

北海道大学、福島大学、宇都宮大学、埼玉大学、東京大学、東京外国語大学、東京学芸大学、お茶の水女子大学、一橋大学、東京海洋大学、金沢大学、北陸先端科学技術大学院大学、福井大学、名古屋大学、京都大学、京都教育大学、大阪大学、神戸大学、島根大学、岡山大学、広島大学、山口大学、九州大学、佐賀大学、琉球大学、国際教養大学、首都大学東京、東京福祉大学、明海大学、麗澤大学、国際基督教大学、実践女子大学、聖心女子大学、清泉女子大学、日本女子大学、法政大学、早稲田大学、学習院女子大学、東京工芸大学、岐阜聖徳学園大学、愛知学院大学、中京大学、名古屋学院大学、南山大学、名古屋外国語大学、京都産業大学、大阪産業大学、大阪女学院大学、大手前大学、関西学院大学、神戸女学院大学、武庫川女子大学、関西看護医療大学、東亜大学、長崎外国語大学、神戸市立工業高等専門学校、独立行政法人国際交流基金、株式会社富士通研究所、Japan Society、カリフォルニア大学バークレー校、カリフォルニア大学サンゼルス校、コロンビア大学、サンフランシスコ州立大学、サンフランシスコ市立大学、ハワイ大学、ミネソタ大学、ヨーク・セント・ジョン大学、ロンドン大学、グリフィス大学、メルボルン大学、アルバータ大学、バルセロナ自治大学、リュブリーナ大学、チュラーロンコーン大学、ミンネソタ大学、ブダペストビジネススクール、グルノーブルアルプス大学、パリ・ディドロ大学、ハノイ大学、明知大学校、慶應大学校、台湾元智大学、東海大学、華南農業大学、広東外語外貿大学、江南大学、重慶三峡学院、西安外国语大学、大连外国语大学、中国农业大学、中山大学、天津外国语大学、北京日本学研究センター、香港大学、華中科技大学、無錫職業技术学院

(2) 【領域指定型】 5 件

第3期中期計画において、新たな研究領域の創出に資するため、外部研究者をリーダーとする共同研究を実施している。領域指定型は、各研究領域が実施する基幹プロジェクトを充実・補完するため外部公募により採択されたプロジェクト。

・日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得

・プロジェクトリーダー：村杉恵子（南山大学・教授）

・研究期間：2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

日本語を他の多くの言語と区別する主要な統語的特徴には、多重主語文・自由語順・項省略・生産的な複合述語形成などがある。本プロジェクトは、これらの現象を対象に、その統語的性質と獲得過程を明らかにし、それにより言語理論および言語獲得理論の構築に日本語の分析から貢献することを目的とする。

現代統語理論（極小主義アプローチ：Chomsky 2013, 2015）の基本的操作・概念（併合・ラベリング・フェイズなど）により、上記の日本語の主要な統語的特徴、そしてより一般的に、言語間変異をどのように説明しうるのかという課題に取り組む。さらに、それらの特徴を幼児は「刺激の貧困」の状況下でどのように獲得するのかについて、心理実験・コーパス分析など方法を用いて考察し、言語獲得と統語の両面から日本語の類型的な特徴の分析と極小主義理論の精緻化を試みる。

・共同研究員数：19名

・共同研究員所属機関：

北海道大学、東北大学、山形大学、大阪大学、神戸大学、九州大学、玉川大学、明海大学、獨協大学、南山大学、中京大学、金城学院大学、関西学院大学、福岡大学

・議会会議録を活用した日本語のスタイル変異研究

・プロジェクトリーダー：二階堂整（福岡女学院大学・教授）

・研究期間：2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

本研究は、方言・社会言語学的研究で、「フォーマル」「カジュアル」のように単純に場面への言語的反応とされた「スタイル」という概念を、言語への意識や話題等に対する話者の心的態度や社会的立ち位置の表明などにより生じる「言語変異の社会的意味」を考慮し、話者が創り上げる言語的構造物であると仮定する。その上で、議会の委員会や本会議の状況に生じるスタイル変異を考察することで、日本語のスタイル研究に新たな発展をもたらすことができると考えている。

また海外のスタイル研究では、質的側面からの議論があるが、本研究でも、待遇表現、ポライトネス等の質的側面の研究からの考察を行い、より総合的・包括的に言語変異とスタイル構築の関連を明らかにする。

さらに、議会会議録をデータベースとして整備することで、他分野を含め、議会会議録を利用した国内外の研究での新たな相互作用が期待できると考えている。

・共同研究員数：4名

・共同研究員所属機関：

鹿児島大学、北星学園大学、神戸松蔭女子学院大学、福岡女学院大学

・古文教育に資する、コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究

・プロジェクトリーダー：河内昭浩（群馬大学・准教授）

・研究期間：2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

古文教育は今、岐路に立っている。従来の古文教育は、現代語の教育と切り離されて行われてきた。しかしこれからの古文教育では、古代から現代までの、言葉のつながりを理解させることが求められて

いる。高等学校では、上代から近現代までの言葉を網羅した「言語文化」という科目が新設されることになった。同時にわたるコーパスの設計は、こうした潮流と合致している。本研究は、新しい古文教育研究の先駆であり、今後の古文教育の基盤となるものだと確信している。

教材の開発として、コーパスを用いた古文単語集、文法集、及び自習用教材などの作成などを想定している。また学習指導法の研究として、コーパスを用いた古文教材研究の方法や、授業におけるコーパス活用方法の提示を想定している。加えてワークショップを開催し、教育関係者に本研究成果を広く公開する予定である。

・共同研究員数: 8名

・共同研究員所属機関:

群馬大学、埼玉大学、富山大学、駒澤大学、昭和女子大学、名古屋女子大学

・会話における創発的参与構造の解明と類型化

・プロジェクトリーダー: 遠藤智子 (成蹊大学・講師)

・研究期間: 2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

日常の生活の中で人々は様々な活動に参与する。場面ごとに各参与者に期待される参与の仕方は多様であり、また、参与の構造は固定的ではなく創発的なものである—やりとりの中で各人がどのような役割を担い、どのような行動をするのかは、その場で進行しているやりとりのターンの中で形作られる。参与構造は、言語だけではなく、視線・姿勢・ジェスチャー・パラ言語情報・周囲の環境等が総体的に寄与することで実現する。

本研究は、日常会話に加え、宗教儀礼・教室場面・医療活動・ミーティングやインタビュー場面等の一見特殊とも思える活動の中でのやりとりをマルチモーダルに分析することにより、参与構造の創発性を解明し、類型化する。

・共同研究員数: 14名

・共同研究員所属機関:

東京外国語大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学、国立情報学研究所、慶應義塾大学、成蹊大学、玉川大学、愛知大学、京都産業大学、摂南大学、アルバータ大学

・「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発

・プロジェクトリーダー: 小林ミナ (早稲田大学・教授)

・研究期間: 2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

日本語教育におけるこれまでのライティング教材は、既習の文型や語彙を定着させるための作文が主であり、「学習者が実際に書く／打つ状況」を踏まえたものはほとんど見られない。学習項目も、教材作成者や教師によって経験的に設定されたものであり、「何を書きたいのか」「どのような支援が必要か」といった実態を踏まえていない。また、現実のコミュニケーションにおけるライティングは、「手で書く」から「キーボードやタッチパネルで打つ」に移行しているが、それを視野に入れた教材開発は遅れている。

本研究では、「「具体的な状況設定」から出発する日本語学習のためのライティング教材の開発」を目的とする。「状況設定」「必要なスキル」「学習者が抱える困難点」に関する3つの実態調査の成果を踏まえて教材を作成する。

・共同研究員数: 27名

・共同研究員所属機関:

新潟大学、群馬大学、金沢大学、京都大学、藤女子大学、早稲田大学、上智大学、帝京大学、金沢工業大学、同志社大学、長崎外国語大学、イーストウェスト日本語学校、スバル学院、名新日本語学校、ヴェネツィア大学、タマサート大学、ナンヤン理工大学、ブラジリア大学、ルーヴェン・カトリック大学、ロイヤル・メルボルン工科大学

(3) 【新領域創出型】2件

第3期中期計画において、新たな研究領域の創出に資するため、外部研究者をリーダーとする共同研究を実施している。新領域創出型は、研究領域や基幹研究プロジェクトの枠を越えて、新たな研究の展開・創出を探るための萌芽的研究として外部公募により採択されたプロジェクト。

・語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究

・プロジェクトリーダー：酒井弘（早稲田大学・教授）

・研究期間：2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

「狭義の言語機能は語用論機構に繋がっていなければ役に立たない」という趣旨の Chomsky (2014) の言葉をひくまでもなく、人間の言語コミュニケーション能力を解明するためには、狭義の言語能力に加えて語用論能力の研究を推進することが必要不可欠である。そこで本研究プロジェクトでは、狭義の言語能力のアウトプットである論理形式から表意（明意）や推意（暗意）を導く語用論的推論のプロセスと神経基盤を、日本語と系統的・類型的に異なる言語を比較しつつ、脳機能計測を含む種々の実験手法を用いて実証的に研究する。さらに将来的には、日本語学習者にとって困難であるとされる発話意図を表す文末表現やイントネーションの学習、語用論的推論が苦手だとされる自閉症児のコミュニケーション能力の発達、さらには「社会脳」の障害であると言われる認知症患者の推論能力などに関する研究を通してこれらの問題の解決に貢献し、人類の幸福に寄与することをめざす。

・共同研究員数：9名

・共同研究員所属機関：

東北大学、目白大学、東京理科大学、早稲田大学、津田塾大学、ライデン大学、ロンドン大学

・日本語の間接発話理解：第一言語、第二言語、人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究

・プロジェクトリーダー：松井智子（東京学芸大学・教授）

・研究期間：2016.10–2019.9.

《研究目的および特色》

ポライトネスのひとつとして間接発話が多用されている。しかし、ヒトが間接発話を理解するメカニズムやその獲得プロセスには不明な点が多いのが現状である。言語学のみでなく、心理学や認知科学を含む学際的な研究領域として方法論も確立しつつある今、人工知能の研究の方法論も加えて、アイロニーや間接的表現の計算モデルの構築と検証が成功すれば、世界に先んじた研究として注目されることが期待される。そこで、本研究では文脈を用いて間接発話を解釈する能力がどのように習得されるのかについて、学習者の第一言語と第二言語、そして人工知能との比較をとおして明らかにすることをめざす。具体的には、「アイロニー」「遠回しな言い方」など2つ以上の意味解釈が可能な間接発話を題材とする。

・共同研究員数：6名

・共同研究員所属機関：

東京学芸大学、電気通信大学、愛媛大学、東京工芸大学、慶應義塾大学、岐阜聖徳学園大学

(4) 【コーパス基礎研究】1件

基幹型プロジェクト等で構築される予定の日本語史、日常会話、方言、日本語学習者に関するコーパスの高度化や効率的な構築・利用等を実現するために基礎研究を実施している。

・コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究

・プロジェクトリーダー：浅原正幸（コーパス開発センター・准教授）

・研究期間：2016.10–2022.3.

《研究目的および特色》

形態論情報つきコーパスの整備が進む中、より高次の情報を付与することが言語研究において求められている。コーパス開発センターは、統語・意味・音声の三つの班により、既存のアノテーションの拡

張手法、複数のアノテーションの統合手法、またその自動化の基礎研究を行う。統語班は、文節係り受け・述語項構造・節境界に関する研究と、統語アノテーションの国際化プロジェクトである Universal Dependencies プロジェクトに参画し、言語資源整備を進める。意味班は、『分類語彙表（増補改訂版）』を中心とした拡張として、UniDic 語彙素番号一分類語彙表番号対応表（現代・古典）や『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）、『日本語歴史コーパス』（CHJ）に対する分類語彙表番号アノテーションを行う。音声班は、『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）に対する声質情報自動付与、調音運動データベースの設計、音声・テキスト自動アライメントの精度向上とともに、形態論情報と同期した音声グラウジング環境の開発を行う。

- ・共同研究員数：23名

- ・共同研究員所属機関：

茨城大学、東京外国語大学、総合研究大学院大学、京都大学、奈良先端科学技術大学院大学、統計数理研究所、千葉工業大学、中央大学、早稲田大学、立命館大学、甲南大学、日本アイ・ビー・エム株式会社、延世大学校、内蒙古大学、オークランド大学、モナシュ大学

2 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構では、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。国立国語研究所もそれらのプロジェクト等に参画している。

（1）広領域連携型基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構を構成する6機関が協業して、国内外の大学等研究機関や地域社会と連携し、新たな人間文化研究システムを構築するとともに、異分野融合による新領域創出を目指すもの。

・日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

国語研・歴博が主導機関となって、「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」と題する連携研究を2016年度に開始した。日本列島において地域が直面しているさまざまな課題、特に地域社会の変貌や災害によって多様性が失われつつある状況が惹起する諸問題とその解決のために、人間文化研究機構の各機関が相互に連携し、地域における大学・博物館等とも協働しながら調査研究を推進している。

〈国語研ユニット〉方言の記録と継承による地域文化の再構築

- ・研究代表者：木部暢子（言語変異研究領域教授）

- ・研究期間：2016.4–2022.3.

- ・共同研究員数：13名

- ・共同研究員所属機関：

岩手大学、千葉大学、広島大学、島根大学、九州大学、長崎大学、愛知県立大学、弘前学院大学、駒澤大学、別府大学、椎葉民俗芸能博物館、オークランド大学

・地域社会の変貌により、地域の貴重な文化資源である方言が急速に衰退しつつある。国語研ユニットでは、自治体や各地の大学・研究者と連携して地域の方言の記録や方言の継承活動を行うことにより、方言を主軸とする地域文化の再構築の可能性と方言の持つ文化的意義について研究を行う。

・異分野融合による「総合書物学」の構築

歴史的典籍の「書物」としての面に着目して、従来の書誌学に異分野融合の観点を加え、「総合書物学」という研究分野の構築を目指す。国文研が主導機関となり、歴博、国語研、日文研の3機関の共同研究を基礎に、分野横断的な研究の進展を促し、新たな研究分野である「総合書物学」を構築することを目標としている。

〈国語研ユニット〉表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化

- ・研究代表者：高田智和（言語変異研究領域准教授）

・研究期間：2016.4–2022.3.

・共同研究員数：14名

・共同研究員所属機関：

千葉大学、東京大学、富山大学、京都大学、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、京都府立大学、専修大学、東京電機大学、関西学院大学、情報処理推進機構、岐阜工業高等専門学校、人文情報学研究所

・文献学と言語計量の手法により、言語単位（単語、文節、句、文など）と表記・書記単位（仮名字体、漢字字体、連綿文字列、句読点等表記記号など）と書物や版面の形状（表記・書記（文字）・書物の重層構造を精緻に記述した言語コーパスのプロトタイプを作成することを目標としている。

（2）ネットワーク型基幹研究プロジェクト

・日本関連在外資料調査研究・活用事業

欧米にある日本関連資料の中には、現地の日本文化研究者の不足や個人所蔵であることから、所在情報や資料価値の掌握がされていない貴重な資料が多数存在する。本事業はこうした文書、音声、実物資料を含む多様な資料の調査研究を進めると同時に、その成果を国内外で活用し、海外における日本研究者育成や日本文化理解を促進する。

〈国語研プロジェクト〉北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築

・研究代表者：朝日祥之（言語変異研究領域准教授）

・研究期間：2016.4–2022.3.

・共同研究員数：10名

・共同研究員所属機関：

国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、首都大学東京、桜美林大学、専修大学、名古屋外国語大学、海外移住資料館、シンガポール国立大学、ドゥイスブルグ大学

・主として近現代に北米に移住した日本人、つまり北米の日系移民に注目し、言語史・社会史・生活史を基点としながら、日系社会に関する資料についての資料調査・研究を行っている。劣化や廃棄リスクが高まっている日系人に関わる音声・映像資料について、データ救出と資料の評価を行うとともに、日系社会の歴史のうち、これまでの十分に光が当たってこなかった領域を取り扱い、移民をめぐる新たな資料論へとつなげることを目指す。

（3）研究資源高度連携事業

人間文化研究機構を構成する6研究機関及び国立国会図書館並びに京都大学地域研究統合情報センター等が開発・蓄積したデータベースの横断検索が可能な統合検索システム（nihuINT）に次のデータベースを提供している。また、国立国会図書館が運用するジャパンサーチ（試験版・2018年度公開）にも、人間文化研究機構を通じてメタデータを提供している。

- ・ことばに関する新聞記事見出しデータベース
- ・蔵書目録（図書）データベース
- ・蔵書目録（雑誌）データベース
- ・日本語研究・日本語教育文献データベース
- ・『日本言語地図』画像データベース
- ・『方言文法全国地図』画像データベース
- ・米国議会図書館本源氏物語翻字本文データベース
- ・国立国語研究所学術情報リポジトリ

(4) 博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業

機構の機関と大学等研究機関とが連携し、博物館および展示を活用して人間文化に関する最先端研究を可視化し、多分野協業や学界並びに社会との共創により研究を高度化する研究推進モデル「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化サイクル」を構築し、新領域創出を目指す。

〈国語研事業〉消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化

・代表者：木部暢子（言語変異研究領域教授）

・研究期間：2017.4–2022.3.

・地域の大学や博物館、市民と協業して当該地域の危機言語・方言の研究に取り組み、情報科学と連携して展示を制作し、その展示を各地域で巡回し、社会との共創による研究展示システムのモデル構築を行う。「言語・文化の多様性」を未来の目標に設定し、その実現に向けた「言語の展示」の企画、情報科学との連携、情報発信の仕方を検討し、実際に展示を制作・公開することを通じて研究を可視化・高度化し、新たな研究領域である「言語・文化情報学」の創出に繋げることを目標とする。

3 外部資金による研究

科学研究費助成事業（科研費）

| 研究種目 | 研究代表者 | 研究課題名 | 直接経費 交付額 (千円) |
|----------------------|-------------------|---|---------------------|
| 基盤研究 (A) | 浅原正幸 | 日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション | 7,400 |
| 基盤研究 (A) | 宇佐美まゆみ | 語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究 | 8,800 |
| 基盤研究 (A) | 小木曾智信 | 日本語歴史コーパスの多層的拡張による精密化とその活用 | 7,800 |
| 基盤研究 (A) | 木部暢子 | 日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓 | 6,300 |
| 基盤研究 (A) | 窪蘭晴夫 | 日本語諸方言のプロソディーとプロソディ一体系の類型 | 3,900 |
| 基盤研究 (A) | 迫田久美子 | 海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用 | 7,700 |
| 基盤研究 (A) | 野田尚史 | 読解コーパスの構築による日本語学習者の読解過程の実証的研究 | 6,400 |
| 基盤研究 (B) | 小磯花絵 | コーパス言語学的手法に基づく会話音声の韻律特徴の体系化 | 3,700 |
| 基盤研究 (B) | 高田智和 | 訓点資料訓読文コーパスの構築と古代日本語史研究の革新 | 5,300 |
| 基盤研究 (B) | 田窪行則 | 言語使用と非言語的認知操作における空間指示枠の相関についての実験的研究 | 3,200 |
| 基盤研究 (B) | Prashant Pardeshi | 統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に | 2,500 |
| 基盤研究 (B) | 前川喜久雄 | リアルタイム MRI および WAVE データによる調音音声学の精緻化 | 4,200 |
| 基盤研究 (B) | 松本曜 | 移動表現による言語類型：実験的統一課題による通言語的研究 | 2,500 |
| 基盤研究 (B) | 山崎誠 | 会話文への発話者情報の付与によるコーパスの拡張 | 4,000 |
| 基盤研究 (B) (特設分野研究) | 小磯花絵 | 地域社会の共在的記録に基づくコミュニケーションと記憶の活性化 | 2,200 |
| 基盤研究 (C) | 石本祐一 | 音声アシスタントとの円滑な話者交代を実現する音声言語特徴の解明 | 367 |
| 基盤研究 (C) | 石本祐一 | 自発会話コーパスを用いた「会話の間合い」に関わる音声・言語特徴の解明 | 1,700 |
| 基盤研究 (C) | 井上文子 | 地域的多様性の教材としての参加型方言データベースの構築 | 1,200 |
| 基盤研究 (C) | 鳥日哲 | アカデミック・ライティング技術の習得を目指したピア・レスポンスの実証的研究 | 1,000 |

| | | | |
|------------|---------------------|--|-------|
| 基盤研究 (C) | 大島一 | ハンガリー語の周辺方言における結合の複数に関する調査研究 | 700 |
| 基盤研究 (C) | 柏野和佳子 | 学術的文書作成のための文体差のある語の計量的分析 | 1,200 |
| 基盤研究 (C) | 加藤祥 | 文体分析を目的としたコーパスの文書情報拡張及びその利用 | 1,200 |
| 基盤研究 (C) | 近藤明日子 | 形態論情報付きコーパスを活用した近代日本語の位相の計量的研究 | 200 |
| 基盤研究 (C) | Stephen Wright Horn | 上代語コーパスへの統語・意味情報アノテーション | 800 |
| 基盤研究 (C) | 田中啓行 | ノートの筆記過程の分析に基づく日本語学習者の講義理解過程の実証的研究 | 1,100 |
| 基盤研究 (C) | 長崎郁 | 19世紀半ば～20世紀半ばロシア北東地域のユカギール語資料に関する言語学的研究 | 641 |
| 基盤研究 (C) | 新野直哉 | 近現代の新語・新用法および言語規範意識の研究 | 700 |
| 基盤研究 (C) | 西川賢哉 | 名詞句の飽和性と意味機能との相互関係についての理論的・実証的研究 | 1,200 |
| 基盤研究 (C) | 飛田良文 | 近代小説100冊における外来語の研究 | 800 |
| 基盤研究 (C) | 藤原未雪 | 日本語学習者の小説読解困難点に関する実証的研究と読解支援教材開発のための研究 | 1,000 |
| 基盤研究 (C) | 布施悠子 | 中国人日本語学習者の言語習得過程の実証的研究と教育的資源の提供 | 1,700 |
| 基盤研究 (C) | 宮寄由美 | LINEにおける待遇表現ストラテジーの計量的研究 | 500 |
| 基盤研究 (C) | 蒙韞 | 中国人日本語学習者のビジネス・コミュニケーションの困難点の解明 | 1,800 |
| 基盤研究 (C) | 山口昌也 | ビデオアノテーションを利用した協同型実習活動支援システムに関する研究 | 1,400 |
| 基盤研究 (C) | 吉田夏也 | 日本語の母音無声化における心内処理に関する基礎的研究 | 1,900 |
| 基盤研究 (C) | 渡邊美知子 | 後続要素の複雑さが言い淀みの発生に及ぼす影響についての日英語対照研究 | 210 |
| 基盤研究 (C) | 渡邊美知子 | 日本語と英語のパラレルコーパスを用いた言い淀みの対照言語学的研究 | 1,300 |
| 挑戦的萌芽研究 | 大西拓一郎 | 方言周囲論と方言区画論の統合による新しい言語地理学の創生 | 500 |
| 挑戦的萌芽研究 | 野山広 | 基礎教育保障学の構築に向けた萌芽研究 | 600 |
| 挑戦的萌芽研究 | Prashant Pardeshi | 大規模コーパスに基づく日本語機能語の基礎研究と機能語検索ツールへの応用 | 1,300 |
| 挑戦的研究 (萌芽) | 浅原正幸 | コーパスからの比喩表現収集とその分析 | 1,400 |
| 挑戦的研究 (萌芽) | 石黒圭 | クラウドソーシングを用いたビジネス文書のわかりやすさの言語学的研究 | 1,800 |
| 挑戦的研究 (萌芽) | 宇佐美まゆみ | コミュニケーション能力を高める自然会話教材の高度共有化—共同体の構築に向けて— | 1,800 |
| 挑戦的研究 (萌芽) | 窪薙晴夫 | 促音(重子音)に関する学際的・国際的共同研究のためのネットワーク形成 | 1,500 |
| 挑戦的研究 (萌芽) | 高田智和 | 漢文訓点資料の国際文書構造記述による共有化と書き下し文自動作成のための基礎研究 | 1,500 |
| 挑戦的研究 (萌芽) | 野田尚史 | 日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究 | 2,000 |
| 挑戦的研究 (萌芽) | 山崎誠 | 日本語研究用オントロジーの設計と開発 | 3,000 |
| 挑戦的研究 (萌芽) | 横山詔一 | 疫学的統計手法と人工知能学の融合活用による敬語の変化予測研究 | 1,400 |
| 若手研究 | 麻生玲子 | 日本の消滅危機言語を対象とした大量の言語資料収集・蓄積方法に関する基礎研究 | 1,000 |
| 若手研究 | 井戸美里 | 日本語とりたて詞の複合における否定呼応現象の統語と意味 | 700 |
| 若手研究 | 佐藤久美子 | 日本語諸方言におけるイントネーションの対照研究 | 600 |
| 若手研究 | 新永悠人 | 奄美大島宇検村内の隣接する多地点方言間の体系的差異の解明 | 1,100 |
| 若手研究 | 平田秀 | 紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言アクセント類型論の形成 | 500 |
| 若手研究 | 横山晶子 | 危機言語コミュニティにおける言語生態系と言語移行の関係—琉球沖永良部語を事例に— | 1,000 |

| | | | |
|-----------------------|---------------------------------------|--|-------|
| 若手研究 (B) | 白田泰如 | 会話における対人関係の実証的研究：自然会話データを用いて | 800 |
| 若手研究 (B) | 下地美日 | 日本方言の活格性に関する基礎的研究 | 700 |
| 若手研究 (B) | 林由華 | 宮古語諸方言の言語記録のための基礎的研究とデータ収集 | 800 |
| 若手研究 (B) | 村山実和子 | 派生・複合情報を付与した歴史コーパスによる語形成の歴史的研究 | 900 |
| 若手研究 (B) | 山田真寛 | 琉球諸語の記述と復興研究のためのプラットフォーム基盤構築研究 | 700 |
| 研究活動スタート支援 | 大槻知世 | 津軽方言の談話資料を用いた複数種の対格の使用動機の究明 | 1,949 |
| 研究活動スタート支援 | 中澤光平 | 淡路方言の系統の解明と西日本方言の区画の再検討 | 1,200 |
| 研究活動スタート支援 | 南雲千香子 | 明治期法律用語の成立と展開 | 1,100 |
| 研究活動スタート支援 | 間淵洋子 | 精緻な文字表記情報をもつ近代新聞コーパスの構築による表記・文体変遷の計量的研究 | 1,200 |
| 研究活動スタート支援 | 宮部真由美 | 日本語教育支援のための中学校社会科教科書の言語的困難点に関する基礎的研究 | 1,200 |
| 研究成果公開促進費 (学術図書) | 窪瀬晴夫 | 鹿児島甑島方言からみる文法の諸相 | 1,100 |
| 研究成果公開促進費 (データベース) | 井上文子 | 日本の消滅危機言語・方言データベース | 5,400 |
| 特別研究員奨励費 | 下地美日 | 方言研究と古代日本語研究の融合による日本語格配列システムの解明 | 1,100 |
| 特別研究員奨励費 | 林由華 | 琉球諸語および八丈語の諸方言における係り結びの類型化と機能の解明 | 1,100 |
| 特別研究員奨励費 | 松井真雪 | 音声パターンの共時的不均衡性と通時変化の接点 | 1,000 |
| 特別研究員奨励費 | 横山晶子 | 危機言語の継承に向けた実践的研究—琉球沖永良部語を事例に— | 1,100 |
| 特別研究員奨励費 (外国人) | Prashant Pardeshi (Hmeljak Marija) | 良質な用例を大規模なコーパスから自動的に抽出できるモデルの構築および試作版の開発 | 300 |

寄附金 (2018 年度受入金額)

- ・「宮古語池間方言と八重山語波照間方言における無声鼻音の研究」(林由華) 鹿島学術振興財団(鹿島学術振興財団 2017 年度研究助成) 1,050 千円
- ・「「何もしなければ」消滅してしまう琉球のことばを、記録、共有して、継承するために」(林由華) 電気通信普及財団(電気通信普及財団助成(研究調査関係)) 750 千円
- ・「危機言語の言語継承に向けた教材開発研究」(横山晶子) 住友生命保険相互会社(スマセイ女性研究者奨励賞) 630 千円

4

2018 年度公開中のコーパス・データベース

Web サイトにおいて、共同研究の成果としてのコーパスおよびデータベース類を公開しているが、2018 年度は、下記資料の公開（ないし公開の継続）をおこなった。

コーパス

国立国語研究所で構築したコーパス（言語を分析するための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報を付与したもの）を記す。

・現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)

現代日本語の書き言葉の多様性を把握するために構築したコーパスで、書籍、雑誌、新聞、白書、Web、法律などから無作為に抽出した約 1 億語のテキストに形態論情報、文書構造タグを付与し、オンラインおよび DVD で公開している。

・BCCWJ 全文検索サイト『少納言』

国立国語研究所で開発された Web アプリケーションで、初心者でも簡単に BCCWJ 内の文字列を検索

することができる。

- **NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)**

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ) を検索するために、国語研と Lago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システムである。

- **日本語話し言葉コーパス (CSJ)**

日本語の自発音声を大量に集めて、多くの研究用情報を付加した話し言葉研究用のデータベースであり、国立国語研究所、情報通信研究機構(旧通信総合研究所)、東京工業大学が共同開発した、質・量ともに世界最高水準の話し言葉データベースであり、音声言語情報処理、自然言語処理、日本語学、言語学、音声学、心理学、社会学、日本語教育、辞書編纂など幅広い領域で利用されている。

- **日本語歴史コーパス (CHJ)**

日本語の歴史を研究するための資料を集めたコーパスであり、将来的に上代から近代までをカバーする通時コーパスとすることを目標に開発が進められている。現在は、構築済みの部分を公開している。

- **国語研日本語ウェブコーパス**

3か月間にわたり 1 億 URL をクロールして構築した 200 億語規模の Web テキストのコーパスであり、形態素解析・係り受け解析済みテキストからなる。

- **中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス (C-JAS)**

日本語学習者 6 名の 3 年間の縦断的発話データを公開している。

- **多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)**

12 言語の母語の学習者 210 名および日本語母語話者 15 名の第一次データを公開している。発話データ(ストーリーテリング、ロールプレイ、対話、絵描写)、作文データ(ストーリーライティング、エッセイとメール文(任意))、発話の音声データを所収。完成時には、学習者 1000 名、日本語母語話者 50 名のデータを公開する予定である。

- **近代語のコーパス**

明治・大正時代の日本語を研究するために構築されたコーパスであり、『太陽コーパス』、『近代女性雑誌コーパス』、『明六雑誌コーパス』、『国民之友コーパス』を公開している。

- **コーパス検索アプリケーション『中納言』**

国立国語研究所で開発されたコーパスを検索することができる Web アプリケーションで、短単位・長単位・文字列の 3 つの方法によって、コーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索をおこなうことができる。

- **アイヌ語口承文芸コーパス—音声・グロスつき—**

木村きみさん(1900–1988、沙流川上流域のペナコリ出身)がアイヌ語で語った物語 10 編(ウエペケレ(散文説話)8 編、カムイユカラ(神譜)2 編)約 3 時間分の音声に、日本語と英語による訳とグロスや注解を付けた、初めてのアイヌ口承文芸デジタル集成である。

- **日本語学習者による、日本語・母語対照データベース**

国立国語研究所日本語教育センターが作成した「作文対訳データベース」および「発話対照データベース」を掲載しており、いずれも日本語学習者が同一の課題に基づき、日本語および自分の母語によっておこなった言語表現を対照可能な形でデータベース化したものである。

- **統語・意味解析情報付き現代日本語コーパス (NPCMJ)**

現代日本語の書き言葉と話し言葉のテクストに対し、文の統語・意味解析情報をタグ付けしたものであり、簡単にコーパス内のツリー(統語構造付き文)を検索、閲覧、ダウンロードすることができるウェブインターフェースとともに公開している。

- **名大会話コーパス**

129 会話、合計約 100 時間の日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパスである。

- **オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス**

単語情報・統語情報などの包括的なアノテーションを施した上代日本語のフルテキストコーパスであり、現在のバージョンは「万葉集」など上代の全ての和歌のテキストを収録している。

・危機言語データベース

日本の消滅危機言語・方言の音声データを紹介しており、様々な方言の基礎語彙に加え、生の方言で語られているたくさんのお話（談話資料）も公開している。

オンライン辞書

オンラインで検索できる辞書・用例集である。

・基本動詞ハンドブック

日本語学習者・日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように、基本動詞の多義的な意味の広がりを図解なども用いて分かりやすく解説したオンラインツールである。例文、コロケーションなどの執筆には、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」（約1億語）や筑波大学の「筑波ウェブコーパス」（約11億語）などの大規模日本語コーパスを積極的に活用し、他のレファレンスには見られない生きた情報を提供している。

・複合動詞レキシコン（国際版）

「押し上げる、晴れ渡る」など、日常よく使われる日本語複合動詞（2,700語以上）に意味や用法の情報を付与した、言語研究および日本語学習用のオンライン辞書である。英語・中国語・韓国語翻訳付きであり、研究教育目的での元データのダウンロードも可能である。

・トピック別 アイヌ語会話辞典

1898年に刊行された『アイヌ語会話字典』を底本とし、口語訳や音声・ビデオ・写真などのデータを付与したオンライン辞典である。

・寺村誤用例集データベース

日本語教育研究の礎を築いた故寺村秀夫氏による、諸外国からの留学生が書いた作文に見られる日本語の誤用を収集・分類したデータベースである。

・Webデータに基づく用例データベース

複合動詞、形容詞、サ変動詞の用例のデータベースである。用例は、語ごとに構築した専用のWebコーパスからおこなっている。構築に際しては、（1）語ごとに一定量以上の用例を収集できること、（2）収集用例の偏りの軽減に配慮している。

言語地図

言語の多様性・分布を地図に表現した資料である。

・使役交替言語地図

世界の言語の形態的関連のある有対動詞を収集した地理類型論的なデータベースであり、日本語を含む諸言語の有対自他動詞の類型論的な情報を、世界地図およびチャート（表）上で可視化し、有対自他動詞を類型論的な視点から分析できるウェブアプリケーションである。

・『日本言語地図』地図画像

各地の方言で、どのような語形や発音がどこに現れるかを表示した言語地図（方言地図）で、全国の方言の地理的分布を一望できる基礎資料である『日本言語地図』所載の地図の画像（全300図）を公開している。

・『方言文法全国地図』地図画像

文法事象の全国的な分布を展望できる言語地図（方言地図）で、方言研究における基本的な資料である『方言文法全国地図』所載の地図の画像（全350図）を公開している。

・言語地図データベース

日本で刊行されてきた方言地図・言語地図のデータベースである。地図集（アトラス）の書誌（著者・書名・刊行年・調査時期・調査対象地域などを含む）、地図集に収録されている各地図の内容（タイトル・内容の分類などを含む）、地図の画像（可能な限りジオタグを付与）から構成されている。

・全国方言分布調査（FPJD）・新日本言語地図（NLJ）

全国方言分布調査（2010–2015年度実施、全国554地点）のデータおよび関連情報（調査項目、準備調査結果、調査マニュアルなど）に加え、調査結果を地図化した『新日本言語地図』関係のデータを公開している。

画像・PDF

方言地図や貴重書の画像ファイル、論文の PDF ファイルなどである。

- ・日本語史研究資料 (国立国語研究所蔵)

国立国語研究所研究図書室蔵書のうち、日本語史資料として著名なものや、歴史コーパスの原材料として利用できるものを選定し、デジタル画像や翻字本文を順次公開している。

- ・米国議会図書館蔵『源氏物語』画像

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』(LC Control No.: 2008427768)のうち、桐壺・須磨・柏木の原本画像を閲覧できる。また、原本画像と翻字本文を対照表示させることも可能である。

- ・大英図書館蔵天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』画像

大英図書館提供の天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』「言葉の和らげ」「難語句解」(Shelfmark: Or.59.aa.1)の画像をパブリックドメインにて公開している。

- ・大英図書館蔵天草版『伊曾保物語』原本画像・翻字本文対照

大英図書館蔵天草版『伊曾保物語』の原本画像と翻字本文の対照表示システムを公開している。

ツール

言語資料を扱うためのプログラムや Web 上で利用するツールである。

- ・UniDic

形態論情報を付与した語彙資源であり、形態素解析器 MeCab のモデルを同梱している。

- ・形態素解析ツール Web 茶まめ

各種の UniDic を使って形態素解析を行うためのツールであり、形態素解析に必要な一連の作業を、Web 上でわかりやすいインターフェイスによっておこなうことができる。

- ・(方言研究の部屋) データとプログラム

『方言文法全国地図』全データ(1-6集)、最新版 PDF 『方言文法全国地図』(1-6集)、方言文法全国地図作成の機械化(イラストレータ用プラグイン・白地図・記号)、準備調査(調査票と地図・データ)、言語地図データベースを公開している。

- ・全文検索システム『ひまわり』

コーパス、用例集、辞書といった言語資料を全文検索するために開発されたソフトウェアであり、XML で記述された言語資料を全文検索し、検索文字列に対する前後文脈や付与情報(書誌情報など)を表示することができる。

- ・教育活動観察支援システム FishWatchr

ディスカッション練習、ロールプレイなどの教育活動では、学習者が互いの活動を観察、評価するプロセスが存在する。FishWatchr は、リアルタイムに進行する活動や、ビデオ撮影された活動に対する注釈づけを実現するとともに、注釈付け結果を用いて、グループでの振り返りを支援する。

カタログ

図書・研究資料などの書誌情報を中心とする資料である。

- ・雑誌『国語学』全文データベース

日本語学会の(旧)機関誌『国語学』全巻の全文テキストデータベースである。誌面の PDF ファイルも公開している。

- ・日本語研究・日本語教育文献データベース

日本語学、日本語教育研究に関する研究文献のデータベースであり、1950 年代から現在までに発行された関係論文・図書が検索できる。

- ・国立国語研究所蔵書目録データベース

国立国語研究所研究図書室の所蔵する図書約 15 万冊と雑誌約 5,800 タイトルに加え、貴重書や視聴覚資料、特殊文庫の目録・所蔵情報の検索ができる。

- ・ことばに関する新聞記事見出しデータベース

国立国語研究所が作成した 1949 年から 2009 年 9 月までのことばに関する新聞記事を集めた「切抜集」に所収の新聞記事の発行日・新聞名・見出し等を収録した「見出し（目録）データベース」である。

- ・国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所における学術研究・教育活動の成果及び国立国語研究所が所蔵する学術資料を電子的形式で収集・保存し、Web 上で公開している。国語研創立（1948 年）から現在に至るまでの、国語研の刊行物を検索可能なデータベースである「国立国語研究所刊行物データベース」のデータについても、本レポートへの移管をおこなっている。

- ・国立国語研究所研究資料室収蔵資料

国立国語研究所がこれまでに実施した調査研究において収集・作成した研究資料の概要及び目録類を公開している。

- ・北米における日本関連在外資料目録

ハワイ・北米の日系社会で収集された資料（音声・映像資料、写真等）を、現地の所蔵機関別に目録として提供している。

その他データ

各種言語調査データを含む種々のデータ類である。

- ・『分類語彙表 増補改訂版』研究用データ

分類語彙表とは、「語を意味によって分類・整理したシソーラス（類義語集）」である。書籍版の『分類語彙表—増補改訂版—』の元となったデータを、データベースソフトに取り込めるよう、CSV 形式に加工したものである。レコード総数は 101,070 件である。

- ・現代雑誌 200 万字言語調査語彙表

2001 年から 2004 年にかけておこなわれた「現代雑誌の語彙調査—1994 年発行 70 誌—」の調査結果の語彙表である。

- ・「学校の中の敬語」アンケート調査データ

国立国語研究所が 1989 年から 1990 年にかけて中学生・高校生を対象に実施した敬語使用と敬語意識に関するアンケート調査で得られたデータである。中学生は、東京：2,456 名、山形：339 名、高校生は、東京：2,222 名、大阪：1,004 名が回答している。

- ・岡崎敬語調査データベース

国立国語研究所が中心となって、愛知県岡崎市でおこなった敬語調査のデータベースである。岡崎敬語調査（OSH）は、1953（昭和 28）年、1972（昭和 47）年、2008（平成 20）年におこなわれ、戦後の 55 年という長いタイムスパンの実時間の変化が分かる。

- ・沖縄語辞典データ集

国立国語研究所資料集 5『沖縄語辞典』の本文篇、索引篇、地名一覧表のデータである。

- ・『日本語教育のための基本語彙調査』データ

国立国語研究所報告 78『日本語教育のための基本語彙調査』（1984）の「基本語彙五十音順表」、「意味分類体語彙表」、「分類項目一覧表」を電子化したものである。

- ・『幼児・児童の連想語彙表』データ

国立国語研究所報告 69『幼児・児童の連想語彙表』（1981）の「全連想語彙調査表」および「頭音連想語彙調査表」を電子化したものである。

- ・甑島方言アクセントデータベース

推定話者数 3,000 人の危機方言である甑島（鹿児島県薩摩川内市）の方言音声（アクセント）を教育研究に資する目的で公開している。

- ・鶴岡調査データベース

国立国語研究所が中心となって、1950, 1971, 1991, 2011 年の 4 回にわたって山形県鶴岡市でおこなった共通語化調査の回答データである。

- ・X線映画「日本語の発音」

日本語発音時の調音運動を撮影したX線映画(1965, 1967年撮影)である。

- ・寺村秀夫連体修飾論文英訳集

1970年代から1980年代にかけて日本語学・日本語教育の学術的基盤を築くのに大きく貢献した故・寺村秀夫教授(1928-1990)が残した学術論文の幾つかを英語に翻訳して提供している。

- ・日本語史研究用テキストデータ集

国立国語研究所共同研究プロジェクト等で作成したテキストデータ(TXT, XMLなど)を公開している。

- ・『方言談話資料』データ

『方言談話資料』全10巻(1978-1987年刊)の本文テキストデータと音声ファイルを公開している。

- ・『方言録音資料シリーズ』データ

『方言録音資料シリーズ』全15巻(1978-1987年刊)の本文テキストデータと音声ファイルを公開している。

- ・米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』(全54冊, LC Control No.: 2008427768)の翻字本文(電子テキスト)を公開するとともに, 全54巻を対象とした文字列検索も提供している。

- ・ヲコト点図データベース

漢文訓読の記号であるヲコト点図のデータベースであり, ヲコト点図の種類, 付与位置, 記号形状, 読みなどをキーに, ヲコト点を検索することができる。

5 学術刊行物

(1) 所員による著書・編書

- ・石黒圭, 熊田道子, 筒井千絵, Olga Pokrovska, 山田裕美子

『快速突破日語閱讀技巧15講』, 外語教学与研究出版社, 2018.4.1, ISBN: 978-7-5135-9942-9.

- ・熊谷智子, 篠崎晃一, 中西太郎, 小林隆, 岸江信介, 杉村孝夫, 松田美香, 久木田恵, 太田有紀, 琴鍾愛, 沖裕子, 甲田直美, 尾崎喜光, 三宅和子, 日高水穂, 森勇太, 井上文子

『コミュニケーションの方言学』, ひつじ書房, 2018.5.10, ISBN: 978-4-89476-897-0.

- ・藤田保幸, 山崎誠(編)

『形式語研究の現在』, 和泉書院, 2018.5.24, ISBN: 978-4-75760-876-4.

- ・木部暢子, 山本友美, 麻生玲子, 新永悠人(編)

『椎葉村方言語彙集中間報告書—仲塔・松尾編一』, 国立国語研究所(プロジェクト報告書), 2018.5.31.

- ・石黒圭, 胡方方, 志賀玲子, 田中啓行, 布施悠子, 楊秀娥

『どうすれば協働学習がうまくいか失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』, ココ出版, 2018.6.9, ISBN: 978-4-86676-005-6.

- ・石黒圭

『豊かな語彙力を育てる「言葉の感度を高める教育」へのヒント』, ココ出版, 2018.6.9, ISBN: 978-4-86676-004-9.

- ・山田真寛(監修), 中脇初枝, 葛西亜理沙(著)

『神の島のうた』, 講談社, 2018.7.10, ISBN: 978-4-06-512206-8.

- ・横山詔一, 杉戸清樹, 佐藤和之, 米田正人, 前田忠彦, 阿部貴人(編)

『社会言語科学の源流を追う』, ひつじ書房, 2018.9.18, ISBN: 978-4-89476-931-1.

- ・池内正幸, 窪薙晴夫, 小菅和也(編)

『英語学を英語授業に活かす』, 開拓社, 2018.9.25, ISBN: 978-4-7589-2259-3.

- ・石黒圭

『EZ Japan教材06 日語接續詞大全: 學會連接前後句, 增強寫作和閱讀能力! (附接續詞一覽表)』, EZ叢書館, 2018.10.3, ISBN: 978-986-248-755-6.

- ・石黒圭, 柏野和佳子
『小学生から身につけたい一生役立つ語彙力の育て方』, KADOKAWA, 2018.10.20, ISBN: 978-4-04-602170-0.
- ・Prashant Pardeshi, Meena Ashizawa, Jayashree Bhopatkar, Manasi Shirgurkar, Bakul Vaidya, and Satomi Chida (translation and eds.)
Minaa no Nihongo prathamik bhag 1: bhashantar wa vyakaran (Marathi edition of 'Minna no Nihongo, Shokyuu I: Translation & Grammatical Notes' by 3A Corporation, Tokyo), Sachi Prakashan, Pune, INDIA, 2018.12.22, ISBN: 978-81-938121-1-2.
- ・Prashant Pardeshi, Meena Ashizawa, Jayashree Bhopatkar, Manasi Shirgurkar, Bakul Vaidya, and Satomi Chida (translation and eds.)
Minaa no Nihongo prathamik bhag 2: bhashantar wa vyakaran (Marathi edition of 'Minna no Nihongo, Shokyuu II: Translation & Grammatical Notes' by 3A Corporation, Tokyo), Sachi Prakashan, Pune, INDIA, 2018.12.22, ISBN: 978-81-938121-2-9.
- ・Haruo Kubozono (ed.)
Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean (The Linguistic Review36 (1)), De Gruyter Mouton, 2019.2.28.
- ・窪蘭晴夫, 木部暢子, 高木千恵 (編)
『鹿児島県甑島方言からみる文法の諸相』, くろしお出版, 2019.2.28, ISBN: 978-4-87424-786-0.
- ・山田真寛 (監修), 横山晶子, 山本史 (著)
『シマノトペ』, 言語復興の港, 2019.3.1, ISBN: 978-4-9911126-1-4.
- ・青井隼人, 木部暢子 (編)
『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究木曽川方言調査報告書』, 国立国語研究所 (プロジェクト報告書), 2019.3.20.
- ・前川喜久雄 (監修), 岡照晃, 伝康晴, 内元清貴, 山田篤, 宇津呂武仁, 松吉俊, 土屋雅稔, 近藤泰弘, 坂野収, 多田知子, 岡田純子, 山元啓史, 荻野綱男, 矢澤真人, 丸山直子, 星野和子, 小磯花絵 (著)
『コーパスと辞書 (講座日本語コーパス 7)』, 朝倉書店, 2019.3.25, ISBN: 978-4-254-51607-4.
- ・葉山茂, 麻生玲子 (編), 小池淳一, 木部暢子, 寺村裕史, 西村慎太郎, 窪田順平, 奥村弘 (著)
『新しい地域文化研究の可能性を求めて vol. 7 地域文化をはぐくむ—日本と台湾にみる地域文化の活用術』, 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」, 2019.3.25.
- ・麻生玲子, 葉山茂 (編), 呂理政, 黄貞燕, 日高真吾, 西村慎太郎, 呂怡屏, 邱君妮, 原田走一郎, 葉山茂 (著)
『新しい地域文化研究の可能性を求めて vol. 8 市民とともに地域を学ぶ—日本と台湾にみる地域文化の活用術』, 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」, 2019.3.25.
- ・小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉
『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版コーパスの設計と特徴 (プロジェクト報告書 3)』, 国立国語研究所「日常会話コーパス」, 2019.3.26.
- ・新野直哉
『平成 28~30 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書 近現代の新語・新用法および言語規範意識の研究 課題番号 16K02751』, 2019.3.29.
- ・麻生玲子, 山本友美, 木部暢子 (編)
『椎葉村方言語彙集中間報告書—上椎葉・尾八重・鹿野遊・大河内編一』, 国立国語研究所 (プロジェクト報告書), 2019.3.31.
- ・山田真寛, 森澤ケン
『与那国の人とことば 2018』, 言語復興の港, 2019.3.31.

(2) 『国立国語研究所論集』 (NINJAL Research Papers)

国立国語研究所における研究活動の活性化と成果の発表および所内若手研究者の育成を目的として、各年度に2回（7月と1月）、オンラインと冊子体の両形態で発刊している。

第15号（2018年7月）

- ・浅原正幸, 田中弥生
「修辞ユニット分析における脱文脈化指数の妥当性の検証」, 1–15 頁, DOI: [10.15084/00001593](https://doi.org/10.15084/00001593).
- ・布施悠子, 石黒圭
「日本語学習者の作文執筆過程における自己修正理由: 上級中国人学習者, 上級韓国人学習者, 日本語母語話者の作文の比較から」, 17–42 頁, DOI: [10.15084/00001594](https://doi.org/10.15084/00001594).
- ・井戸美里
「「は」の後接から見るとりたて詞の否定呼応現象」, 43–54 頁, DOI: [10.15084/00001595](https://doi.org/10.15084/00001595).
- ・加藤祥
「テキストからの対象物認識に有用な情報提示順序—動物の説明文を用いた調査例—」, 55–74 頁, DOI: [10.15084/00001596](https://doi.org/10.15084/00001596).
- ・小磯花絵, 伝康晴
「『日本語日常会話コーパス』データ公開方針—法的・倫理的な観点からの検討を踏まえて—」, 75–89 頁, DOI: [10.15084/00001597](https://doi.org/10.15084/00001597).
- ・小西円
「日本語学習者の習熟度別に見たフィラーの分析」, 91–105 頁, DOI: [10.15084/00001598](https://doi.org/10.15084/00001598).
- ・松本理美
「日本語従属節の意味分類基準策定について—「鳥バンク」節間意味分類体系再構築の提案—」, 107–133 頁, DOI: [10.15084/00001599](https://doi.org/10.15084/00001599).
- ・野田尚史, 中北美千子
「英語アルファベットによる日本語音声表記」, 135–162 頁, DOI: [10.15084/00001600](https://doi.org/10.15084/00001600).
- ・高田智和, 福山雅深, 堤智昭, 小助川貞次
「資料画像公開・利用の国際化と高度化の取り組み—「日本語史研究資料〔国立国語研究所蔵〕」の事例—」, 163–176 頁, DOI: [10.15084/00001601](https://doi.org/10.15084/00001601).
- ・白田泰如, 川端良子, 西川賢哉, 石本祐一, 小磯花絵
「『日本語日常会話コーパス』における転記の基準と作成手法」, 177–193 頁, DOI: [10.15084/00001602](https://doi.org/10.15084/00001602).
- ・渡辺由貴
「BCCWJ 教科書データにおける複合辞の教科別使用状況—国語教育を視野に—」, 195–210 頁, DOI: [10.15084/00001603](https://doi.org/10.15084/00001603).

第16号（2018年10月）

- ・川端良子, 伝康晴
「会話における「そうしたら」と「そうすると」の出現状況—『日本語日常会話コーパス』を題材に—」, 1–18 頁, DOI: [10.15084/00001605](https://doi.org/10.15084/00001605).
- ・宮内拓也, 浅原正幸, 中川奈津子, 加藤祥
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』への情報構造アノテーションとその分析」, 19–33 頁, DOI: [10.15084/00001606](https://doi.org/10.15084/00001606).
- ・Fumiko Nazukian
“Role of yone and deshoo in the Construction of Social Actions: From an Epistemic and Affective Point of View”, 35–50 頁, DOI: [10.15084/00001607](https://doi.org/10.15084/00001607).
- ・志波彩子
「近代日本語における依存構文の発達—構文はどのように発生・発達・定着するのか—」, 51–76 頁, DOI:

10.15084/00001608.

- ・ポリー・ザトラウスキー

「相互作用によるオノマトペの使用—乳製品の試食会を例にして—」, 77–106 頁, DOI: 10.15084/00001609.

- ・高谷由貴

「近世期資料におけるト書きの史的研究：接続表現トの成立を中心に」, 107–127 頁, DOI: 10.15084/00001610.

- ・上野善道

「徳之島浅間方言のアクセント資料(7)」, 129–156 頁, DOI: 10.15084/00001611.

- ・山際彰

「時間的意味から空間的意味への意味変化の可能性—「端境」の変遷を通して—」, 157–175 頁, DOI: 10.15084/00001612.

6 研究成果の発信と普及

国立国語研究所では、研究成果を社会に発信・還元するために、各種のシンポジウムや研究会を開催している。ここでは、専門家向けのものを挙げる。

(1) 国際シンポジウム

国立国語研究所が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた研究成果のうち、時宜を得た課題を取り上げ、海外からの専門家も交えて、論旨を深めながら学術界に公表するため、国際シンポジウムの開催や国際学会の共催をおこなっている。

NINAJL 国際シンポジウム

日本と北東アジアの消滅危機言語—記述・ドキュメンテーション・復興—

[2018.8.5 (イベント), 8.6–8, 国立国語研究所]

2018年8月5日 (Poster Session and Workshop)

- Poster session 1

‣ Reiko Aso (NINJAL) and Seunghun Lee (International Christian University)

“Foot structure in Hateruma Yaeyama Ryukyuan: a preliminary study”

‣ Salvatore Carlino (Hitotsubashi University / NINJAL)

“The three-patterns accent of the dialect of Iheya, Okinawa”

‣ Kenan Celik (NINJAL)

“Retrieving the History of Endangered Languages”

‣ Yuka Hayashi (JSPS/NINJAL)

“Documenting the rich dialectal variation of Miyakoan”

‣ Shu Hirata (NINJAL)

“On the accented moraic oral obstruent in the Owase dialect (Mie Prefecture, Japan)”

‣ Elvis Huang (Southwest Jiaotong University)

“Question Particles in nDrapa”

‣ Aleksandra Jarosz (Nicolaus Copernicus University)

“Non-core vocabulary cognates in Ryukyuan and Kyushu”

‣ Chihkai Lin (Tatung University)

“Palatalization and vowel coalescence in Jejueo”

‣ Aoi Matsuoka, Hiroshi Miyaoka, and Michinori Shimoji (Kyushu University)

“I'm afraid of thunder: The Dative Stimulus Construction in Japanese dialects”

‣ Yuko Morokuma (The University of Tokyo)

“Contrastive meaning of different case markings in Ayacucho Quechua”

- Workshop 1
 - Yumiko Ōhara (University of Hawai‘i at Hilo)

“A brief introduction to the immersion classroom: A case of Hawaiian language”
- Poster session 2
 - Natsuko Nakagawa (Chiba University)

“Phonology in Noheji dialect, Nambu (Aomori) and its problems”
 - Yumiko Ohara and Trevor Slevin (UHM)

“Far away but so close to the heart: Okinawa Language Revitalization Language Movement in Hawai‘i”
 - Mika Sakai (JSPS/NINJAL)

“On the Split Intransitivity in Western Kyushu Dialects”
 - Haruka Tada (The University of Tokyo) and Seunghun Lee (International Christian University)

“PhoPhoNO project: Converging phonetics and phonology in suggesting orthographies for under-studied Tibeto-Burman languages”
 - Tianlong Tao (Tokyo University of Foreign Studies)

“Differences among the three topic markers in the Ikema dialects of Miyako Ryukyuan”
 - Tomasz Wicherkiewicz (Adam Mickiewicz University)

“Documenting and Revitalizing Endangered Languages in Poland”
 - Leo Yamada (Tokyo University of Foreign Studies)

“Zero-Subject in the ‘be done’ Construction in Irish”
 - Tomomi Yamamoto (Shiiba Museum of Folk Performing Arts)

“Collaborative dictionary project of Shiiba village and NINJAL”
 - Akiko Yokoyama (JSPS/NINJAL)

“Developing Web-Based Learning Resources while Managing Language Classes in an Endangered Language”
- Workshop 2
 - Yumiko Ōhara (University of Hawai‘i at Hilo)

“A brief introduction to the immersion classroom: A case of Hawaiian language”

2018年8月6日 (Ryūkyū, Hachijō and Japanese)

- Opening Remarks
 - Yukinori Takubo (NINJAL) and Toshihide Nakayama (TUFS)
- Keynote Talk
 - Thomas Pellard (French National Centre for Scientific Research)

“The comparative study of the Japonic languages”
- Session 1: Ryūkyū and Hachijō (Coordinators: Shigehisa Karimata (University of the Ryukyus / NINJAL) and Michinori Shimoji (Kyushu University / NINJAL))
 - Shigehisa Karimata (University of the Ryukyus / NINJAL)

“Kyushu dialects and the difference between Northern and Southern Ryukyuan languages”
 - Akihiro Kaneda and Martin Holda (Chiba University)

“Hachijō and South Ryukyuan languages and East-Northeast Japan dialects from the viewpoint of the concentric circle theory of dialect divergence”
 - Michinori Shimoji (Kyushu University / NINJAL)

“Ryukyuan languages from a typological perspective: with a special focus on marked nominative”
 - Yōsuke Igarashi (Hitotsubashi University)

“Towards an adequate description of the tonal systems of Southern Ryukyuan”

- Session 2: Revitalization in Ryūkyū (Coordinator: Masahiro Yamada (NINJAL))
 - Masahiro Yamada (NINJAL)
 - “Port Language Revitalization Project”
 - Fumi Yamamoto (Kyoto City University of Arts)
 - “Linguists, community members, and designers—Why do we collaborate for language revitalization?”
 - Akiko Yokoyama (JSPS/NINJAL)
 - “Action research in endangered language communities”
 - Yukie Matsumura (Council for the Protection of Cultural Properties, China-cho, Okinoerabu)
 - “A Role of Mother Tongue”
- Session 3: Japanese dialects (Coordinator: Kan Sakai (Ritsumeikan University / NINJAL) and Nobuko Kibe (NINJAL))
 - Kan Sakai (Ritsumeikan University / NINJAL)
 - “Case in Japanese dialects”
 - Satoshi Tsuda (Miyagi University of Education)
 - “Aspect and tense in Japanese dialects”
 - Nobuko Kibe (NINJAL)
 - “Accent systems in Japanese dialects”
- Round Table (Chair: Shōichi Iwasaki (University of California Los Angeles / NINJAL))

2018年8月7日 (Ainu and Northeast Asia)

- Welcome
 - Anna Bugaeva (Tokyo University of Science / NINJAL)
- Keynote Talk
 - Juha Janhunen (University of Helsinki)
 - “Ainu ethnogenesis”
- Session 4: The dispersal of Ainu and its contact with neighboring languages (Coordinator: Anna Bugaeva (Tokyo University of Science / NINJAL))
 - Hiroshi Nakagawa (Chiba University)
 - “Major syntactic differences between Sakhalin and Hokkaido dialects of Ainu”
 - Mika Fukazawa (Preparatory Office for National Ainu Museum)
 - “Hokkaido Ainu Dialects: Variation from the perspective of the geographical distribution of vocabulary”
 - Tomomi Sato (Hokkaido University) and Anna Bugaeva (Tokyo University of Science / NINJAL)
 - “The study of old documents of Hokkaido and Kuril Ainu: Promise and challenges”
 - Itsuji Tangiku (Hokkaido University)
 - “Language contact between Ainu and Northern languages”
- Keynote Talk
 - Ekaterina Gruzdeva (University of Helsinki)
 - “Linguistic diversity and language contact in Sakhalin Island”
- Session 5: Northeast Asia (Coordinator: Megumi Kurebito (University of Toyama))
 - Sangyub Beak (Muroran Institute of Technology)
 - “Ainu and Tungusic from the perspective of linguistic typology and areal linguistics”
 - Megumi Kurebito (University of Toyama)
 - “Divergence in the distribution of applicatives and noun incorporation in Koryak and Ainu”
 - Chikako Ono (Chiba University)
 - “Typological features of Itelmen and its neighboring languages”

- Round Table (Chair: Anna Bugaeva (Tokyo University of Science / NINJAL))
2018年8月8日 (Documentation and Revitalization (in general))
 - NINJAL-UHM Session
 - Yukinori Takubo (NINJAL) and Shin'ichiro Fukuda (University of Hawai'i at Mānoa)
 - Keynote Talk
 - William O'Grady (University of Hawai'i at Mānoa)
“The Linguistics of Language Revitalization”
 - Keynote Talk
 - Yukinori Takubo (NINJAL)
“Mutual intelligibility as a measure for linguistic distance and intergenerational transmission”
 - Keynote Talk
 - Yumiko Ōhara (University of Hawai'i at Hilo)
“Revitalization and renormalization of Hawaiian language: Challenges and possible contributions to the revitalization of other languages”
 - Session 6: Linguistic Dynamics Science 3 (LingDy3) at TUFS
 - Yanti (Atma Jaya Catholic University of Indonesia) and Asako Shinohara (TUFS)
“Efforts in Language Documentation in a Linguistically Diverse Country: Building up Collaborations of Various Stakeholders”
 - Toshihide Nakayama (TUFS)
“Problematizing language and revitalization: Why language documentation hits a wall in revitalization”
 - Keynote Talk
 - Mark Turin and Victoria Sear (University of British Columbia)
“Critical Lexicography: Exploring the Role of Dictionaries in Language Revitalization”
 - Closing Remarks
 - Nobuko Kibe (NINJAL)

NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウム 「通時コーパスに基づく日本語文法研究」

[2018.9.8-9, 国立国語研究所]

2018年9月8日

- 基調講演 1
 - ビヤーク・フレレスビッグ (オックスフォード大学 / 国立国語研究所 客員教授)
「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」
- セッション 1
 - 勝又隆 (福岡教育大学)
「上代日本語におけるソの係り結びと連体節について」
 - 鴻野知曉 (東京大学)
「疑問詞疑問文におけるカとゾの出現位置について」
 - 菅清行 (大阪大学)
「上代語の終助詞ゾの接続」

2018年9月9日

- 基調講演 2
 - 金水敏 (大阪大学 / 国立国語研究所 客員教授)
「平安・鎌倉時代における連体形の機能変化」

- セッション 2
 - フアン・シャンシャン (パヴィア大学・ベルガモ大学大学院学生)
「上代日本語の受身における項の表現」
 - 柳田優子 (筑波大学)
「格システムの変化と心理・使役交替」
- セッション 3
 - 後藤睦 (大阪大学大学院学生 / 日本学術振興会特別研究員)
「中世期における「ガ・ノの上接語の制限の崩壊」再考」
 - 服部紀子 (国立国語研究所)
「係結びにおける無助詞の研究史—本居宣長の「徒」と鶴峯戊申の「省格」を比較して—」
- セッション 4
 - 竹村明日香 (お茶の水女子大学)
「ノダ文となる疑問詞疑問文—『日本語歴史コーパス』の例から—」
 - スティーブン・ライト・ホーン (国立国語研究所)
「上代語の疑問詞と数量化について」
 - 北崎勇帆 (東京大学大学院学生 / 日本学術振興会特別研究員)
「命令文から条件文へ: 日本語史における二文連置」

国際シンポジウム

コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて—学習者調査から新しい辞書の構想と開発へ—
[2018.7.31, 国際交流基金 日本語国際センター ホール]

- 講演 1
 - 野田尚史 (国立国語研究所 教授)
「コミュニケーションのための日本語学習辞書の構想」
- 講演 2
 - 庵功雄 (一橋大学 教授)
「「産出のための文法」の勘所—「は」と「が」の使い分けを例に—」
- 研究報告 (1)
 - 岩崎拓也 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)
「日本語学習者がわからない日本語と求められる学習者用の辞書とは」
 - 鈴木智美 (東京外国語大学 教授)
「日本語学習者はどのような学習ツールを使っているのか—留学生を対象にしたアンケート調査の結果から見えるもの—」
 - 砂川有里子 (国立国語研究所 客員教授)
「学習者の日本語に学ぶ辞書の落とし穴」
- 研究報告 (2)
 - 王星 (青島理工大学 副教授)
「中国語母語話者の日本語辞書使用実態—大学生・教師・留学生の比較—」
 - 鄧超群 (湖南大学 講師)
「「てある」構文の誤用から見る教育文法辞書の課題」
 - 曹大峰 (北京日本学研究センター 教授 / 一橋大学 客員研究員)
「日本語教育文法辞典構築のための基礎研究—学習者の実態とニーズを重んじる構想と設計—」
- 全体ディスカッション

古辞書研究の射程 [2018.8.25–26, 国立国語研究所]

2018年8月25日

- 開催挨拶
 - 小木曾智信 (国立国語研究所)
- セッション1: 古辞書研究の展望1 (司会: 池田証壽 (北海道大学))
 - 池田証壽 (北海道大学)
 - 「古辞書研究の未来—開催の趣旨説明を兼ねて」
 - 河野貴美子 (早稲田大学)
 - 「日本古代の仏典注釈書を通してみる中国古辞書の利用とその意義」
 - 大槻信 (京都大学)
 - 「観智院本類聚名義抄小考」
- セッション2: 古辞書研究の展望2 (司会: 鈴木慎吾 (大阪大学))
 - 王貴元 (中国人民大学)
 - 「日本藏汉文古字书的整理与研究 (日本所藏漢文古字书の整理と研究)」
 - 王平 (上海交通大学)
 - 「基于数据库的东亚古辞书编纂术语系统研究 (データベースに基づく東アジア古辞書編纂術語システムに関する研究)」
 - 呂浩 (上海交通大学)
 - 「《大廣益会玉篇》考论 (『大廣益会玉篇』考論)」
- セッション3: 日本語語誌データベースと古辞書 (司会: 高田智和 (国立国語研究所))
 - 山崎誠 (国立国語研究所)
 - 「語誌ポータルの構築について」
 - 藤本灯 (京都府立大学)
 - 「国語辞書系古辞書データベースの展開—一字類抄における音訓表記の検討を中心として—」
 - 萩原義雄 (駒沢大学)
 - 「観智院本『類聚名義抄』における冠字「海—」の熟語を基軸に古辞書資料を読み解く」

2018年8月26日

- セッション4: デジタル化資料の利活用 (司会: 永崎研宣 (人文情報学研究所))
 - 王一凡 (東京大学 / 人文情報学研究所)
 - 「古辞書に含まれる字種のデジタル利用環境の整備」
 - 李乃琦 (東京大学 / 日本学術振興会 PD)
 - 「一切経音義全文データベースの構築と展望」
 - 申雄哲 (崇実大学)
 - 「図書寮本『類聚名義抄』の構造化テキストの設計と実践」
 - 岡田一祐 (国文学研究資料館)
 - 「古辞書項目のネットワーク分析」
- セッション5: 漢字字体史研究と漢字文献原本調査の課題 (司会: 小助川貞次 (富山大学))
 - 李媛 (京都大学 / 日本学術振興会外国人特別研究員)
 - 「古辞書における文字訂正の問題—篆隸万象名義の原本調査から」
 - 賈智 (中山大学)
 - 「敦煌文书的文字学价值 (敦煌文書の文字学価値)」
 - 斎木正直 (北海道大学)
 - 「初唐の漢字字体の比較検討」
 - 小助川貞次 (富山大学)
 - 「漢字文化圏における正史類の古写本について」

- 石塚晴通 (北海道大学)
「古辞書研究とコディコロジー」
- ・閉会挨拶
‣ 池田証壽 (北海道大学)

NINJAL ICPP 2018 (5th NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology)

[2018.10.25 (Pre-ICPP Colloquium), 10.26–28, 国立国語研究所]

2018年10月25日

- ・Pre-ICPP Colloquium
 - Kei Furukawa and Yuki Hirose (The University of Tokyo)
“A new type of structural downtrend in Tokyo Japanese”

2018年10月26日

- ・Session 1 (Chair: Kiyoko Yoneyama (Daito Bunka University))
 - Aditi Lahiri (University of Oxford)
[Keynote] “Gemинates across time”
 - Toshio Matsuura (Hokusei Gakuen University)
“Phonology of voiced geminates in Amakusa Japanese”
- ・Session 2 (Poster Session I)
 - Xiaolin Li (The Chinese University of Hong Kong), Albert Lee (The University of Tokyo), and Peggy Pik Ki Mok (The Chinese University of Hong Kong)
“The production of Japanese geminate /ss/ by Cantonese speakers”
 - Leonardo Ferreira da Silva Boiko (Ruhr-University Bochum)
“The historical relevance of isolated Gairin dialects: An inquiry via compound accent”
 - Maëlys Salingre (The University of Tokyo)
“An Optimality Theory analysis of lexical accent as dynamic tones in several Japanese dialects”
 - Wang Ping (Nankai University)
“Distribution pattern of duration of different sentence types in Standard Mandarin”
 - Mimi Tian (University of Mainz)
“An Integrational Linguistics analysis of phrase-level tones: the case of “Induced Creaky Tone” in Burmese”
 - Chawadon Ketkaew (Chiang Mai University)
“A comparison between musical and speech rhythm: A case study of Standard Thai and Southern Thai”
 - Mark Campana (Kobe City University of Foreign Studies)
“Timing and meter in stance-final utterances”
 - Markus A. Pöchtrager (University of Vienna)
“Geminates are triplets”
 - Salvatore Carlino (Hitotsubashi University / NINJAL)
“Sentence-final interrogative intonation in the dialect of Iheya, Okinawa”
 - Michinao F. Matsui (Osaka Health Science University)
“On the phonological information of the sokuon in Kushikino Japanese”
 - Elisabeth de Boer (Ruhr-University Bochum)
“Accent loss in verbs forms in phrase final position: A common origin in Tokyo and some Kyoto type dialects?”
- ・Session 3 (Chair: Henning Reetz (Goethe University Frankfurt))
 - Eri Iwagami (Sophia University), Takayuki Arai (Sophia University), and Keiichi Tajima (Hosei University)
“How elderly listeners perceive Japanese geminate/non-geminate words with devoiced vowels”

- Yukari Hirata (Colgate University) and Hiroaki Kato (NICT)
“Acoustic and perceptual evaluation of Japanese geminates produced by L2 learners”

2018年10月27日

- Session 4 (Chair: Hyun Kyung Hwang (Riken Center for Brain Science))
‣ Rachid Ridouane (CNRS / Sorbonne Nouvelle)
[Keynote] “Gemination in normal and whistled speech”
‣ Keiichi Tajima (Hosei University), Mafuyu Kitahara (Sophia University), and Kiyoko Yoneyama (Daito Bunka University)
“The effect of lexical competition on phonetic realization of the singleton-geminate stop length contrast in Japanese”
- Session 5 (Poster Session II)
‣ Chika Fujiyuki (Kobe University) and Reiko Akahane-Yamada (Kobe University / ATR)
“Effects of a phonological awareness training on English word reading among Japanese EFL learners”
‣ Takuya Kimura (Seisen University) and Takayuki Arai (Sophia University)
“How do Japanese students of Spanish perceive lexical stress in rising intonation?”
‣ Kumiko Sato (NINJAL)
“Intonational patterns of [WH . . . C[+wh]] structures: Dialectal variation in Japanese”
‣ Jeremy Perkins (University of Aizu), Seunghun J. Lee (International Christian University / University of Venda), Julián Villegas (University of Aizu), and Kosei Otsuka (Osaka University)
“Using psychoacoustic roughness to measure creakiness in Burmese”
‣ Markus Rude (Nagoya University)
“Syllabic typing: Writing text by simultaneously striking multiple keys”
‣ Viktoryia Halavach (Sophia University), Sanae Matsui (Sophia University), and Mafuyu Kitahara (Sophia University)
“Durational properties of consonants in rhythmically different languages: tPVI and rPVI of Russian, Spanish, and Japanese”
‣ Parul Upadhyay (Jawaharlal Nehru University)
“Geminate consonants in Malwi”
‣ Mayuki Matsui (NINJAL/JSPS)
“One falling and two rising in the land of the rising sun: Overt and covert lexical pitch contrast in Tokyo Japanese preschooler speech”
‣ Xiaolin Xu (The University of Tokyo)
“Acquisition of English interrogative intonation by Japanese Speakers—in view of emotional intonation—”
‣ Mariko Sugahara (Doshisha University)
“Lexical stress assignment in English trisyllabic verbs ending with -ate and -ute by Japanese and Seoul Korean speakers”
‣ Maida Percival (University of Toronto)
“An ultrasound and electroglottograph study of voicing in gemination in Eastern Oromo”
‣ Hisao Tokizaki (Sapporo University)
“Is Korean stress word-level or phrase-level?”
‣ Hiroaki Nagatomi (Kobe University) and Shin’ichi Tanaka (Kobe University)
“Word formation and accentuation of English suffixes in Japanese”
- Session 6 (Chair: Mariko Sugahara (Doshisha University))
‣ Junko Ito and Armin Mester (UC Santa Cruz & NINJAL)
“Tonal alignment and preaccentuation”

- Yu Tanaka (Doshisha University)
“A probabilistic model of Japanese accent”
- Bob Ladd (University of Edinburgh)
[Keynote] “Reconsidering stress (and prosodic typology)”

2018年10月28日

- Session 7 (Chair: Shigeki Kaji (Kyoto Sangyo University))
 - Laura J. Downing (University of Gothenburg)
[Keynote] “Disentangling tone, intonation and register in selected Bantu tone languages”
 - Jaehyun Son (Duksung Women’s University)
“Pitch accent systems in Korean”
- Session 8 (Chair: Timothy Vance (Komatsu University))
 - Haruo Kubozono (NINJAL)
“Vocative and question intonation in southern Japanese”
 - Carlos Gussenhoven (Radboud University Nijmegen)
[Keynote] “Lexical tones crowd out intonation in Limburgish and Chinese”

Motion Event Descriptions across Languages (MEDAL) [2019.1.26–27, 国立国語研究所]

2019年1月26日

- Session 1 (Moderator: Kazuhiro Kawachi (National Defense Academy of Japan))
 - Introduction: Yo Matsumoto (NINJAL)
 - German: Ryosuke Takahashi (Sophia University)
“Motion event descriptions in German: morpho-syntactic realization of deictic notions”
 - Russian: Anna Bordilovskaya (Rikkyo University) and Yo Matsumoto (NINJAL)
“Motion event descriptions in Russian”
 - General discussion
 - Path: Yo Matsumoto (NINJAL)
“Path coding across languages”
- Session 2 (Moderator: Miho Mano (Naruto University of Education))
 - Invited Lecture: Benjamin Fagard (CNRS, ENS & Université Paris 3 Sorbonne nouvelle)
“Motion event description across languages: Areal effects and discourse traditions”
 - French: Takahiro Morita (Kyoto University)
“Motion event descriptions in French—A typical verb-framed language”
 - Spanish: Iraide Ibarretxe-Antuñano (Universidad de Zaragoza)
“The interaction of motion semantic (sub)components in Spanish”
 - Italian: Yuko Yoshinari (Gifu University)
“Italian Motion Expressions: Focusing on the Competition of Path and Manner Components in Self-Motion Events”
 - General discussion
- Session 3 (Posters)
 - Japanese: Hiroaki Koga (Keio University)
“Motion event descriptions in Japanese”
 - Khorchin Mongolian: Badema (University of Inner Mongolia) and Yo Matsumoto (NINJAL)
“Motion event descriptions in Khorchin Mongolian”
 - Mandarin Chinese: Miyuki Kojima (Kansai University)
“Motion event descriptions in Chinese”

- French Basque : Masayuki Ishizuka (The University of Tokyo)
“Motion event descriptions in Basque (Navarro-Labourdin dialect)”
- Interactional Nature of Deixis : Haiyan Xia (Kanagawa University) and Yo Matsumoto (NINJAL)
“Interactional nature of deictic verbs in Mandarin Chinese and Japanese”
- Session 4 (Moderator : Hiroaki Koga (Keio University))
 - Manner : Takahiro Morita (Kyoto University)
“Expression of manner of motion and constructional variation across languages”
 - Sidaama : Kazuhiro Kawachi (National Defense Academy of Japan)
“Motion event descriptions Sidaama, Types of paths expressed by different kinds of forms”
 - Mombasa Swahili : Monica Kahumburu (Catholic University of Eastern Africa) and Yo Matsumoto (NINJAL)
“Motion event descriptions in Mombasa Swahili”
 - Discussion

2019年1月27日

- Session 5 (Moderator : Kiyoko Takahashi (Kanda University of International Studies))
 - Deixis : Hiroaki Koga (Keio University)
“Deixis in the linguistic encoding of motion events : A cross-linguistic comparison”
 - Hungarian : Kiyoko Eguchi (University of Miyazaki)
“Motion event description in Hungarian”
 - Kathmandu Newar : Ikuko Matsuse (Center for Newar Studies)
“Motion event descriptions in Kathmandu Newar : Verification of the data through an experimental approach”
 - Kupsapiny : Kazuhiro Kawachi (National Defense Academy of Japan)
“Motion event descriptions in Kupsapiny : Factors in the use of deictic verbs and verb suffixes”
 - Discussion
- Session 6 (Moderator : Yo Matsumoto (NINJAL))
 - Invited Lecture : Jürgen Bohnemeyer (State University of New York)
“The macro-event property in the motion domain and beyond : New perspectives”
 - Causation : Miho Mano (Naruto University of Education) and Yo Matsumoto (NINJAL)
“Typological variety of caused motion event descriptions”
- Session 7 (Moderator : Takahiro Morita (Kyoto University))
 - Tagalog : Naonori Nagaya (Tokyo University of Foreign Studies)
“Motion event descriptions in Tagalog”
 - Ilocano : Kyosuke Yamamoto (Kyoto University)
“Motion event descriptions in Ilocano”
 - Thai : Kiyoko Takahashi (Kanda University of International Studies)
“Motion event descriptions in Thai”
 - Discussion
- Session 8 (Moderator : Yo Matsumoto (NINJAL))
 - Vision : Yo Matsumoto (NINJAL)
“Path in Visual motion across languages”
 - General Discussion

**EIL2019 & LCI-7 Joint International Symposium : Embodied Interaction and Linguistics 2019
Language, Cognition, and Interaction 7** [2019.3.11, 国立国語研究所]

- Presentation 1
 - Kaori Hata (Osaka University)
“How to instruct the way of seeing and understanding the phenomenon: A case study using multimodal

and narrative analyses”

- Invited Talk 1
 - Leelo Keevallik (Linköping University)
“How syntax emerges in embodied interaction”
- Invited Talk 2
 - Hiromichi Hosoma (University of Shiga Prefecture)
“Interactive coordination of vocalization and movement in “rock-paper-scissors” game to synchronize action”
- Presentation 2
 - Seiji Nashio (Hiroshima University)
“Instructive bodily demonstrations situated in Karate lessons”
- General Discussion

国際ワークショップ・講演会

国際ワークショップ「フレーム意味論とフレームネット」 [2018.5.8, 慶應義塾大学 三田キャンパス]

- Collin Baker (International Computer Science Institute, USA)
“Frame Semantics across Languages and Multilingual FrameNet”
- Tiago Torrent (Federal University of Juiz de Fora, Brazil)
“The Building Blocks of FrameNet Brasil: frames, constructions and relations”
- 小原京子 (慶應義塾大学)
“Linking Japanese FrameNet with Kyoto University Case Frames”
- 全体討論

ハワイ大学マノア校 協定締結記念講演会「ハワイ大学マノア校での実験を通した統語研究活動：概観と実例」 [2018.8.9, 国立国語研究所]

- Shin'ichiro Fukuda (University of Hawai'i at Mānoa)
“Experimental syntactic research at University of Hawai'i at Mānoa: an overview and case studies”

The NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Workshop: Grammatical Descriptions of Endangered and Understudied Languages and Dialects in East Asia and Beyond [2019.1.11 (Pre-workshop special talk), 12–13, ハワイ大学マノア校]

2019年1月11日 (Pre-workshop special talk)

- EALL Talk Series
 - Yukinori Takubo (NINJAL) and Masahiro Yamada (NINJAL)
“Why epistemic modals cannot be questioned: Cases in Korean and Japanese”

2019年1月12日

- Opening remarks
 - Laura Lyons (Interim Dean, College of Languages, Linguistics, and Literature)
 - Masato Ishida (Director, Center for Okinawan Studies)
 - Kamil Ud Deen (Chair, Department of Linguistics)
- Invited Student presentation #1
 - Celik Kenan Thibault (NINJAL)
“Unactive Case Marking in Miyako, Southern Ryukyuan”

- Invited Student presentation #2
 - Salvatore Carlino (NINJAL / Hitotsubashi University)
“Verbs and adjectives in Iheya Okinawan”
- Invited talk #1
 - Li Julie Jiang (University of Hawai‘i at Mānoa)
“Nominal arguments and definiteness in Nuosu Yi”
- Invited talk #2
 - Han-byul Chung (University of Hawai‘i at Mānoa)
“The Case Marking Strategy of Embedded Subject in Manchu”
- Poster Presentations
 - Salvatore Carlino (NINJAL / Hitotsubashi University)
“The phonological system of Iheya Okinawan”
 - Katie Drager, Kamuela Yim, and Bethany Kaleialohapau‘ole Chun Comstock (University of Hawai‘i at Mānoa)
“Variation among the quotative verbs of Hawaiian”
 - Shu-Yu Huang (University of Hawai‘i at Mānoa)
“Novel use of the verb ‘yong’ in Taiwan Mandarin”
 - Yao Huang (University of Hawai‘i at Mānoa)
“A-not-A question in Shaoxing dialect”
 - Kohei Nakazawa (NINJAL)
“Phonological and morphological changes in Yonaguni Ryukyuan”
 - Elsie Marie Or (University of the Philippines-Diliman) and Ivan Bondoc (University of Hawai‘i at Mānoa)
“A field report on Iraya Mangyan: Preliminary findings on language vitality and morpho-syntax”
 - Tomoyo Otsuki (NINJAL)
“Corpus of Japanese dialects to be released”
 - Andrew Pick (University of Hawai‘i at Mānoa)
“Reference tracking in Barem”
 - Tianlong Tao (Tokyo University of Foreign Studies)
“The phonological variations in Miyako Ryukyuan—Focusing on Hisamatsu Dialect”
 - Yuko Urabe (Kyushu University)
“An Initial Report of Pronouns in Yaeyaman”
 - Masahiro Yamada (NINJAL)
“Dunan (Yonaguni-Ryukyuan) Honorifics”
- Invited talk #3
 - William O’Grady (University of Hawai‘i at Mānoa)
“Understanding Unintelligibility in East Asia”

2019年1月13日

- Part I: Study Group of Ryukyuan Languages Session
 - Opening remarks: Rihito Shirata (Shigakukan University)
 - SGRL talk: Shigehisa Karimata (University of the Ryukyus)
“Thinking about population movements from Kyushu into the Ryukyus from the point of view of language—a reflection on the time of movement on the basis of words and grammar”
 - SGRL presentation #1: Hayato Aoi (NINJAL / Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa)
“Acoustic traits of glottalized consonants in the Ie dialect of the Okinawa Ryukyuan”
 - SGRL presentation #2: Natsuko Nakagawa (Chiba University / JSPS)
“Factors affecting case marking in Shiraho dialect, Yaeyama Ryukyuan”

- SGRL presentation #3: Mika Sakai (NINJAL/JSPS)
“On the Split-Intransitivity in Kumamoto Dialect”
- Closing remarks: Rihito Shirata (Shigakukan University)
- Part II: NINJAL Session
 - Opening remarks: Yukinori Takubo (NINJAL)
 - NINJAL talk: Nobuko Kibe (NINJAL)
“Intonational variations at the end of interrogative sentences in Japanese dialects”
 - NINJAL presentation #1: Yuto Niinaga (NINJAL)
“Publishing a model to manage multidialectal research of fieldwork in Amami (Northern Ryukyuan)”
 - NINJAL presentation #2: Hajime Oshima (NINJAL)
“Plurality of “RA” in Osaka Japanese”
 - NINJAL presentation #3: Tomoyo Otsuki (NINJAL)
“Intonational patterns at the end of interrogative sentences of Tsugaru-Aomori Japanese”
 - NINJAL presentation #4: Kohei Nakazawa (NINJAL)
“Mismatches between phonological words and grammatical words in conjugation of verbs in Awaji Japanese”
 - Closing remarks: Yukinori Takubo (NINJAL)

(2) 合同シンポジウム・研究発表会

複数のプロジェクトが共同でおこなうシンポジウムや研究発表会。

シンポジウム「文字情報データベースの保存と継承」[2018.7.21, 京都大学 人文科学研究所本館]

- 第1部: 研究集会「文字情報データベースの保存と継承」
 - 趣旨説明: 守岡知彦 (京都大学)
 - 報告1: 高田智和 (国立国語研究所)
「『石塚漢字字体資料』と『漢字字体規範史データベース』」
 - 報告2: 守岡知彦 (京都大学)
「漢字字体規範史データセットの構築・共有計画について」
 - 報告3: 永崎研宣 (人文情報学研究所)
「文字情報データベースにおけるIIIF活用の可能性と課題」
 - 報告4: 安岡孝一 (京都大学)
「文字列検索可能な画像データベース」
 - 基調講演: 石塚晴通 (北海道大学名誉教授)
「漢字の書体と字体—承前—」
 - 総合討論
- 第2部: 漢字字体規範史データセット保存会設立総会

言語資源活用ワークショップ[2018.9.4-5, 国立国語研究所]

2018年9月4日

- オープニング
- 口頭発表A
 - 宮内拓也 (東京外国語大学/日本学術振興会), Prokhorova Maria (東京外国語大学)
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のロシア語翻訳データの構築」
 - 菊池そのみ (筑波大学)
「中古語における形容詞テ形をめぐって—形容詞の意味分類との関わりから—」
 - 王棟 (東京外国語大学)
「日本語文における連用修飾語成分に見られるパラレルについての一考察—「赤く変わる」と「赤に

「変わる」とは同じか—」

・森秀明(東北大学)

「連体助詞の「ノ」と文体の関係」

• ポスター発表 A

・居關友里子(国立国語研究所), 門田圭祐(早稲田大学), 伝康晴(千葉大学/国立国語研究所)

「「日本語日常会話コーパス」への談話行為アノテーションの試み: タグ選択が困難な事例に焦点を当てて」

・高橋圭子(フリーランス), 東泉裕子(フリーランス), 佐藤万里(フリーランス)

「「『了解』は使わないように」「了解です！」」

・金賢眞(大阪大学)

「NWJCにおける敬語使用とレジスターとの関係」

・今村桜子(横浜国立大学)

「学校お便り文書の高頻出語彙の縦断的研究—4年生から6年生までの名詞・サ変名詞・動詞の分析」

・田中弥生(東京大学/国立国語研究所)

「児童・生徒作文の日本語修辞ユニット分析と教員評価の検討」

・鈴木あすみ(東北大学)

「日本語における慣用句の逸脱使用がもつ言語機能—形容詞の反義語への置き換えを手がかりに—」

・田邊絢(茨城大学), 古宮嘉那子(茨城大学), 浅原正幸(国立国語研究所), 佐々木稔(茨城大学), 新納浩幸(茨城大学)

「日本語歴史コーパスの現代語辞書における未知語義判定システム」

・坂本美保(株式会社ワークスアプリケーションズ), 川原典子(株式会社ワークスアプリケーションズ), 久本空海(株式会社ワークスアプリケーションズ), 高岡一馬(株式会社ワークスアプリケーションズ), 内田佳孝(株式会社ワークスアプリケーションズ)

「形態素解析器『Sudachi』のための大規模辞書開発」

・于暁陽(九州大学), 中島祥好(九州大学), 張一新(九州大学), 上田和夫(九州大学), 岸田拓也(九州大学)
「英語における前置詞句についての音響分析」

・劉時珍(専門学校)

「副詞の程度性の下位分類の試み—「あまり・そんなに・それほど・たいして」を例に—」

・西川賢哉(国立国語研究所)

「『日本語日常会話コーパス』構築における Praat の利用」

・長嶋祐二(工学院大学), 原大介(豊田工業大学), 堀内靖雄(千葉大学), 酒向慎司(名古屋工業大学), 渡辺桂子(工学院大学), 菊澤律子(東京大学), 加藤直人(NHK放送技術研究所), 市川熹(千葉大学/工学院大学)
「多様な研究分野に利用可能な超高精細・高精度手話言語データベースの開発」

・張一新(九州大学), 中島祥好(九州大学), 于暁陽(九州大学), 上田和夫(九州大学), 岸田拓也(九州大学)
「英語における頭子音連結の多変量解析」

• ポスター発表 B

・大村舞(国立国語研究所), 浅原正幸(国立国語研究所)

「UD Japanese-BCCWJ の構築と分析」

・宮崎由美(国立国語研究所)

「LINE データベースの設計と属性付与の現状について」

・宮城信(富山大学), 江口遼至(金沢高等学校)

「『日本語歴史コーパス(CHJ)』の教育利用の実践報告」

・新納浩幸(茨城大学), 鈴木類(茨城大学), 古宮嘉那子(茨城大学)

「双方向 LSTM による分類語彙表番号を語義とした all-words WSD」

・高橋雄太(明治大学/日本学術振興会)

「『キングコーパス』の構築と活用」

・近藤明日子(東京大学/国立国語研究所)

「『明六雑誌』『東洋学芸雑誌』の特徴語から見る明治前期書き言葉の語彙特性」

- Seo Mincheol (立命館大学)
 - 「「飲み倒す」とはどういう意味なのか—Google 検索を利用した日本語の低頻度複合動詞の分析—」
- 菊池英明 (早稲田大学), 市川熹 (千葉大学), 岡本明 (筑波技術大学), 長嶋祐二 (工学院大学), 藤本浩志 (早稲田大学), 引田秋生 (元山梨県立山梨盲学校)
 - 「先天性全盲ろう児の音声言語訓練長期記録の分析状況及び保存活動」
- 馬場俊臣 (北海道教育大学)
 - 「『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』を利用した語の文体差研究の可能性」
- 松下晶子 (専修大学), 丸山岳彦 (専修大学/国立国語研究所)
 - 「脚本テキストに基づくコーパス文体論の可能性—テレビドラマ脚本に注目して—」
- 村山実和子 (国立国語研究所)
 - 「『UniDic』を活用した語構造情報付与の試み—『日本語歴史コーパス』に出現する語を対象に—」
- 加藤恵梨 (大手前大学), 山下紗苗 (明石工業高等専門学校), 上泰 (明石工業高等専門学校)
 - 「Twitterで使われる「深い」の意味—「強い」「すごい」と比較して—」
- 浅原正幸 (国立国語研究所), 南部智史 (モナシュ大学), 佐野真一郎 (慶應義塾大学)
 - 「日本語の二重目的語構文の基本語順について」
- 口頭発表 B
 - 菊地礼 (中央大学)
 - 「比喩指標としての「感じる」—文法形式と比喩の関係—」
 - 岡田優也 (関西学院大学)
 - 「日本語 wikipedia を用いた慣用句の構成性の数値化」
 - 陳祥 (筑波大学)
 - 「「XX (と)」、「XX な」、「XX しい」、の構造・文法機能—疊語による生産性について—」

2018年9月5日

- 口頭発表 C
 - 加藤直人 (NHK 放送技術研究所), 内田翼 (NHK 放送技術研究所), 東真希子 (NHK 放送技術研究所), 梅田修一 (NHK 放送技術研究所)
 - 「ニュースを対象にした手話マルチメディアコーパスの構築」
 - 前川喜久雄 (国立国語研究所)
 - 「ベイズモデルによる方言音声共通語化過程の分析」
- 招待講演
 - 吉川正人 (慶應義塾大学)
 - 「言「考」不一致の言語学: コーパスはどこまで意識に迫れるか」
- ポスター発表 C
 - 山口昌也 (国立国語研究所)
 - 「日常会話コーパス」活用環境の構築」
 - 春木良且 (フェリス女学院大学), 田中弥生 (東京大学)
 - 「「よい子」って誰? —政策ニュース映画のナレーション表現に関する研究の一環として—」
 - 服部匡 (同志社女子大学)
 - 「敬語接頭辞異形「お～」「ご～」両者の用例のある語について」
 - 劉志偉 (埼玉大学)
 - 「撥音 (の解析) は機械 (UniDic) にとっても簡単ではなかったんだ! —BCCWJを中心にして—」
 - 加藤祥 (国立国語研究所), 櫻井芽衣子 (日本工業大学), 森山奈々美 (津田塾大学), 浅原正幸 (国立国語研究所)
 - 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』書籍サンプルに対する NDC 記号拡張アノテーションと NDC 形式区分を用いた「隨筆」の文体分析」
 - 今田水穂 (文部科学省)
 - 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する名詞述語文アノテーション」

- ・ 岩崎拓也 (国立国語研究所 / 一橋大学), 井上雄太 (一橋大学)
 - 「クラウドソーシング発注文書におけるレジビリティの量的分析」
- ・ 山崎誠 (国立国語研究所)
 - 「話し言葉における代名詞「あれ」の用法の分布」
- ・ 宮城信 (富山大学), 浅原正幸 (国立国語研究所), 今田水穂 (文部科学省)
 - 「現職教員による児童・生徒作文の評価基準の分析」
- ・ 喜多田敏嵩 (東京外国語大学)
 - 「スペイン語における前置詞句の数・定性—7 前置詞のクラスタリング—」
- ・ 天谷晴香 (国立国語研究所)
 - 「マルチアクティビティに伴う発話の分類: 遂行発話と雑談」
- ・ 間淵洋子 (国立国語研究所)
 - 「コーパスに基づく字順転倒漢語の網羅的把握の試み」
- ・ 内山清子 (湘南工科大学), 岡照晃 (国立国語研究所), 東条佳奈 (目白大学), 小野正子 (西南女学院大学), 山崎誠 (国立国語研究所), 相良かおる (西南女学院大学)
 - 「実践医療用語の語構成要素抽出の試み」
- ・ ポスター発表 D
 - ・ 佐々木藍子 (国立国語研究所 / 東京学芸大学), 砂川有里子 (筑波大学名誉教授), 浅原正幸 (国立国語研究所)
 - 「日本語の非流ちょう性—とぎれと延伸の数量調査から—」
 - ・ 小磯花絵 (国立国語研究所), 天谷晴香 (国立国語研究所), 居關友里子 (国立国語研究所), 白田泰如 (国立国語研究所), 柏野和佳子 (国立国語研究所), 川端良子 (国立国語研究所), 田中弥生 (国立国語研究所), 西川賢哉 (国立国語研究所), 伝康晴 (千葉大学 / 国立国語研究所)
 - 「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の概要」
 - ・ 太田博三 (放送大学)
 - 「日本語学習者属性別の言語行為の対話自動生成への適用に関する一考察」
 - ・ 柏野和佳子 (国立国語研究所), 大村舞 (国立国語研究所), 西川賢哉 (国立国語研究所), 小磯花絵 (国立国語研究所)
 - 「『現日研・職場談話コーパス』中納言版公開データの作成」
 - ・ 首藤公昭 (福岡大学名誉教授), 田辺利文 (福岡大学), 高橋雅仁 (久留米工業大学)
 - 「日本語オノマトペ共起表現レキシコン JMVEL_onomatopoeic」
 - ・ 今田水穂 (文部科学省)
 - 「語彙多様性指標の可視化と単回帰分析による TTR の補正」
 - ・ 本多由美子 (一橋大学)
 - 「二字漢語を構成する漢字の造語力の変化—『現代雑誌九十種の用語用字』データと『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の比較を通して—」
 - ・ 石本祐一 (国立国語研究所)
 - 「方言音声に対するテキスト自動アライメントの試み」
 - ・ 佐々木稔 (茨城大学), 古宮嘉那子 (茨城大学), 新納浩幸 (茨城大学)
 - 「単語の分散表現を用いた領域における出現単語の特徴分析」
 - ・ 西内沙恵 (国立国語研究所)
 - 「形容詞感動文における曖昧性回避の条件」
 - ・ 清水まさ子 (国際交流基金日本語国際センター), 木田真理 (国際交流基金日本語国際センター)
 - 「ノンネイティブ日本語教師はコーパスでどのように日本語を調べるか—コーパスを用いた課題の分析から—」
 - ・ 渡辺美知子 (国立国語研究所), 是松優作 (東京大学)
 - 「『日本語話し言葉コーパス (CSJ)』模擬講演における節頭フィラーの特徴」
 - ・ 岡照晃 (国立国語研究所)
 - 「『国語研日本語ウェブコーパス』からの新規語彙素獲得の試み」

- ・口頭発表 D
 - ・佐藤大和 (東京外国語大学)
 - 「アクセント音調の諸相とその動態形式」
 - ・首藤公昭 (福岡大学名誉教授), 田辺利文 (福岡大学), 高橋雅仁 (久留米工業大学)
 - 「日本語複単語表現レキシコン JMWEEL の概要—動詞性表現を中心に—」
- ・クロージング

コーパスとしてのウェブテキスト活用シンポジウム [2018.9.6, 国立国語研究所]

- ・趣旨説明: 岡照晃 (国立国語研究所)
- ・セッション 1: 日本語研究に大規模ウェブテキストデータを扱うためには?
 - ・荻野綱男 (日本大学)
 - 「【初級編】ウェブの検索結果を利用する」
 - ・岡照晃 (国立国語研究所)
 - 「中の人人が国語研日本語ウェブコーパス (NWJC) “さわって” みた—【中級編】ウェブコーパスを“さわって” みる—」
 - ・林部祐太 (Megagon Labs)
 - 「ウェブコーパスの表と裏」
- ・セッション 2: 企業は大規模ウェブテキストデータをどのように活用しているか?
 - ・三澤賢祐 (Insight Tech)
 - 「利便性のあるコーパス構築へのテキストマイニング取り組み—ビジネス分析に役立つ解析手法開発—」
 - ・山田育矢 (Studio Ousia)
 - 「Wikipedia を使った進んだ自然言語処」
- ・セッション 3: 登壇者への QA タイム・クロージング

平成 30 年度コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」 [2018.9.7, 国立国語研究所]

- ・開会の挨拶: 木部暢子
- ・午前の部 (司会: 小磯花絵)
 - ・研究発表 1: 前川喜久雄
 - 「韻律とモダリティ」
 - ・研究発表 2: 小木曾智信
 - 「通時コーパスに見るモダリティ形式の変遷」
 - ・研究発表 3: 迫田久美子, 佐々木藍子, 須賀和香子, 細井陽子
 - 「学習者コーパスに見る日本語学習者のモダリティの発達」
- ・デモンストレーション
- ・午後の部 (司会: 小木曾智信)
 - ・研究発表 4: 小磯花絵
 - 「日常会話コーパスに見るモダリティの多様性」
 - ・研究発表 5: 浅原正幸
 - 「モダリティアノテーションとその統計分析」
 - ・研究発表 6: 木部暢子
 - 「方言コーパスに見るモダリティ形式のバリエーション」
- ・ディスカッション&まとめ (司会: 前川喜久雄)
- ・閉会の挨拶: 迫田久美子

NINJAL シンポジウム 「データに基づく日本語研究」 [2018.12.15–16, 東京証券会館]

2018年12月15日

- ・開会挨拶: 田窪行則
- ・基調講演
 - Rafael Núñez (University of California, San Diego)
“Some Reflections on the Scientific Study of Spatial Construals”
- ・プロジェクト発表
 - 松本曜 (理論・対照研究領域)
「対照言語学的観点から見た動詞の意味構造」
 - プラシャント・パルデシ (理論・対照研究領域), 窪田悠介 (筑波大学)
「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究プロジェクト: 現状と今後の展望」
 - 山田真寛 (言語変異研究領域)
「危機言語・方言の保全と復興のために—データ整備と公開の価値—」
 - 小木曾智信 (言語変異研究領域)
「日本語史研究史上における「通時コーパス」の価値」
 - 小磯花絵 (音声言語研究領域)
「『日本語日常会話コーパス』が話し言葉研究に果たす役割」
 - 石黒圭 (日本語教育研究領域)
「日本語学習者の言語運用の不思議—学習者コーパスから見えてくるもの—」

2018年12月16日

- ・ワークショップ1「コーパスとモダリティ」
 - 小木曾智信 (言語変異研究領域)
「通時コーパスに見るモダリティ形式の変遷」
 - 木部暢子 (言語変異研究領域)
「方言コーパスに見るモダリティ形式のバリエーション」
 - 小磯花絵 (音声言語研究領域)
「日常会話コーパスに見るモダリティの多様性」
 - 追田久美子 (広島大学/国立国語研究所客員教授), 佐々木藍子 (日本語教育研究領域), 須賀和香子 (日本語教育研究領域), 細井陽子 (日本語教育研究領域)
「学習者コーパスを活用したモダリティ研究の可能性」
 - 浅原正幸 (コーパス開発センター)
「モダリティアノテーションとその統計分析」
 - ディスカッション
- ・ポスター発表
 - 小木曾智信 (言語変異研究領域)
「『日本語歴史コーパス』の構築状況」
 - 宇佐美まゆみ (日本語教育研究領域), 小川都 (日本語教育研究領域), 張洋子 (日本語教育研究領域)
「『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の特徴と活用法」
 - 浅原正幸 (コーパス開発センター), 大村舞 (コーパス開発センター)
「Universal Dependencies for Japanese」
 - 浅原正幸 (コーパス開発センター), 山崎誠 (言語変異研究領域), 近藤明日子 (コーパス開発センター), 加藤祥 (コーパス開発センター), 新納浩幸 (茨城大学)
「分類語彙表を中心とした言語資源整備」
 - 岡照晃 (コーパス開発センター)
「UniDic—短単位辞書データベースと形態素解析用辞書—」
 - 石本祐一 (コーパス開発センター), 西川賢哉 (コーパス開発センター), 前川喜久雄 (音声言語研究領域),

秋田祐哉 (京都大学)

「コーパス構築における音声処理アプリケーションの活用」

・高田智和 (言語変化研究領域), 石本祐一 (コーパス開発センター)

「研究資料室所蔵音源・映像資料と試視聴システム」

・間淵洋子 (人間文化研究機構), 高田智和 (言語変化研究領域)

「版本コーパスにおける表記情報アノテーション: 人情本を例として」

・山崎誠 (言語変化研究領域), 相澤正夫 (言語変化研究領域), 大西拓一郎 (言語変化研究領域), 柏野和佳子 (音声言語研究領域), 高田智和 (言語変化研究領域), 新野直哉 (言語変化研究領域)

「語誌ポータルの構築」

・小磯花絵 (音声言語研究領域), 柏野和佳子 (音声言語研究領域)

「『日本語日常会話コーパス』の特徴」

・中村太戯留 (慶應義塾大学), 松井智子 (東京学芸大学), 内海彰 (電気通信大学)

「皮肉表現における発話内容と韻律情報の不調和処理の検討」

・ワークショップ2「多角的な視点から見た日本語のモダリティ」

・窪塙晴夫 (理論・対照研究領域)

「モダリティとイントネーション」

・益岡隆志 (関西外国語大学)

「名詞修飾表現から見たモダリティ」

・野田尚史 (日本語教育研究領域)

「とりたて表現から見たモダリティ」

・原由理枝 (早稲田大学)

「脳科学から見たモダリティ」

・ディスカッション

・閉会挨拶

創立70周年記念シンポジウム「経年調査の新たな挑戦—日本語の将来を占うために」[2018.12.22, 国立国語研究所]

・朝日祥之 (国立国語研究所)

「経年調査のこれまでとこれから」

・松田謙次郎 (神戸松蔭女子学院大学)

「岡崎敬語調査データベースの派生的活用—「足りない～足らない」の変異を探る」

・尾崎喜光 (ノートルダム清心女子大学)

「個人の中で発音は変化するか? —札幌市での経年調査をもとにしたコーホート分析から推測する」

・前川喜久雄 (国立国語研究所)

「公開された鶴岡調査データの分析」

・久屋愛実 (松山大学)

「日本語語彙のカタカナ語化に関する実時間研究」

・横山詔一 (国立国語研究所)

「「病院の言葉」経年研究に向けた予備調査」

・高田智和 (国立国語研究所)

「「略字・俗字」の使用意識を探る」

・全体討論

第四回学習者コーパス・ワークショップ & シンポジウム—第二言語習得における語彙の役割—

[2018.12.22–23, 東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター]

2018年12月22日(シンポジウム)

- 招待講演

- 南雅彦(サンフランシスコ州立大学)

- 「日本語学習者の「語り」から見えてくる習熟度: 語彙・時制・視点」

- 口頭発表

- 小口悠紀子(首都大学東京)

- 「日本語学習者の物語発話に現れる評価表現」

- サリー・チャン(広島大学)

- 「L1とL2日本語習得の格助詞「の」の発達過程の比較と考察」

- 佐々木藍子(東京学芸大学/国立国語研究所)

- 「日本語学習者における接続助詞「から」の発達過程の汎用性検証」

- パネルディスカッション「第二言語習得における語彙の役割」

- 司会: 迫田久美子(国立国語研究所)

- パネリスト:

- 松下達彦(東京大学)

- 「日本語語彙習得に関わる普遍性と個別性」

- 山内博之(実践女子大学)

- 「第二言語習得における語彙と文法の連続性」

- 石川慎一郎(神戸大学)

- 「L2語彙力の発達をどう見取るか? どう数えるか?」

- ディスカッション

2018年12月23日(I-JAS ワークショップ)

- 初心者コース(担当: 細井陽子, 須賀和香子)

- 既習者コース(担当: 佐々木藍子)

シンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」[2018.12.22–23, 国立国語研究所]

2018年12月22日

- 開会の挨拶: 木部暢子(国立国語研究所)

- 坂井美日(国立国語研究所/日本学術振興会)

- 「文献調査とフィールド調査による準体研究の展開」

- 衣畠智秀(福岡大学)

- 「琉球諸語と古代日本語からみる祖語の指示体系試論」

- ウェイン・ローレンス(オークランド大学)

- 「方言研究から歴史変化を、歴史変化から方言解明へ」

- ディスカッション

- ディスカッサント: ジョン・ホイットマン(コーネル大学)

2018年12月23日

- 狩俣繁久(琉球大学)

- 「琉球語の動詞活用形の歴史的変化」

- 金田章宏(千葉大学)

- 「八丈語の動詞形態論 古層の保持と変化」

- 佐々木冠(立命館大学)

- 「本土諸方言の動詞形態論の歴史的変化: ラ行五段化を中心に」

- ディスカッション
 - ディスカッサント：屋名池誠（慶應義塾大学）
- 狩俣繁久（琉球大学）
 - 「琉球語研究における系統樹研究の可能性」
- 五十嵐陽介（一橋大学）
 - 「分岐学的手法に基づいた日本語・琉球語諸方言の系統分類の試み」
- トマ・ペラール（フランス国立科学研究センター）
 - 「日琉諸語の系統分類と分岐について」
- ディスカッション
- 閉会の挨拶：木部暢子（国立国語研究所）

NINJAL シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—文法史研究・通時的対照研究を中心に—」

[2019.1.13, 国立国語研究所]

- 趣旨説明：野田尚史（国立国語研究所）
- 小田勝（国学院大学）
 - 「格表示の現古比較—現代語から見て違和感のある格表示を中心に—」
- 藤本真理子（尾道市立大学）
 - 「古典語・現代語の文脈指示と文体」
- 小柳智一（聖心女子大学）
 - 「機能語の資材—古代と近代の対照—」
- 大木一夫（東北大学）
 - 「現代・中世・古代日本語の動詞活用」
- 吉田永弘（国学院大学）
 - 「古典語と現代語の可能表現—「らる」と「られる」—」
- 森勇太（関西大学）
 - 「日本語授受表現の歴史的変化・再考」
- 青木博史（九州大学）
 - 「「動詞連用形+動詞」から「動詞連用形+テ+動詞」へ—「補助動詞」の歴史・再考—」
- 閉会の辞：小木曾智信（国立国語研究所）

第3回 国語教育活用ワークショップ [2019.2.2, 埼玉大学]

- ・通時コーパス概要説明
- ・「中納言」講習
- ・国語教育への応用について（演習）

シンポジウム「日常会話コーパス」IV [2019.3.4, 国立国語研究所]

- ・開会挨拶
- ・口頭発表 1
 - 小磯花絵（国立国語研究所）
 - 「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版—話し言葉研究の展開—」
- ・口頭発表 2
 - 遠藤智子（成蹊大学）
 - 「参与構造の類型について：日常会話コーパスを用いたボトムアップのアプローチ」
- ・口頭発表 3
 - 田中祐輔（東洋大学）
 - 「日本語教育からみた『日本語日常会話コーパス』と『昭和話し言葉コーパス』—オラリティにまつわる言語資源の活用—」

• ポスター発表 セッション A

‣ 服部匡

「終助詞ワの音調について—『日本語日常会話コーパス』と『昭和話し言葉コーパス』の比較」

‣ 杉浦秀行

「物語りの受け手間の視線と身体の調整：語り手への相互行為的配慮」

‣ 山崎誠

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版における終助詞—話者と会話の属性に着目して—」

‣ 清水まさ子

「日常会話と疑似会話における「って」の使用比較—引用・伝聞用法を中心に—」

‣ 安井永子

「家族の会話における大人と子どものやり取り—子どもによる大人の会話への介入—」

‣ 丸山岳彦

「『昭和話し言葉コーパス』の構築(3)：その進捗状況と問題点」

‣ 山口昌也

「『日本語日常会話コーパス』活用環境を用いた検索と閲覧」

‣ 秦かおり

「「普通にすること」というメタ・フレーム—データ収集場面における親子の会話を解読する」

‣ 川端良子

「会話における条件表現「たら」「と」の選択要因について」

‣ 河野礼実

「『日本語日常会話コーパス』の家族間会話における呼称の使用実態—対称代名詞を中心に—」

‣ 増田将伸, 横森大輔

「言葉の読み上げによる参与構造の創発—授業内グループワークの事例から—」

• ポスター発表 セッション B

‣ 佐野真一郎

「ピッチレンジと言語外的要因—昭和話し言葉コーパス・日本語話し言葉コーパスを用いて—」

‣ 柏野和佳子

「日常会話の自称詞と小説会話の自称詞」

‣ 横森大輔

「日英語の反応発話における韻律バリエーションと参与地位：「ほんとう／Really」を例に」

‣ 宮崎由美

「流動する属性と関係性：『M-ZAK LINE データベース』からの報告」

‣ 野口美美

「相手との関係性にみる否定応答詞の出現傾向」

‣ 坂井田瑠衣

「身体動作による参与構造の組織」

‣ 黒崎智美, 早野薫

「日本語における「オッケーオッケー」の相互行為的機能」

‣ 伝康晴, 居關友里子

「日常場面における間接アドレス発話」

‣ 石本祐一, 小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』から見える日常会話音声の韻律的特徴」

‣ 天谷晴香, 田中弥生

「マルチアクティビティに伴う発話の分類：修辞ユニット分析の手法を用いて」

‣ 居關友里子, 門田圭祐, 伝康晴

「談話行為情報から見る会話データの性質」

- ・『日本語日常会話コーパス』モニター公開版のデモンストレーション
- ・口頭発表 4
 - ▶ 入江さやか, 金明哲 (同志社大学)
「コーパスを用いた仮定形における音韻融合使用と印象評定に関する研究」
- ・口頭発表 5
 - ▶ 鈴木亮子 (慶應義塾大学)
「反応表現のさまざまな姿」
- ・総合討論

「通時コーパス」シンポジウム 2019 [2019.3.9, 国立国語研究所]

- ・口頭発表
 - ▶ 小木曾智信 (国立国語研究所)
「『日本語歴史コーパス』ver.2019.3 通時コーパス構築進捗報告」
 - ▶ 鴻野知暁 (東京大学)
「古代語の「形容詞+モ」に関わる構文とその機能」
 - ▶ 勝又隆 (福岡教育大学)
「中古散文における「連体形+ゾ」文と連体ナリ文の用法上の差異について」
 - ▶ 山崎誠 (国立国語研究所), 桂祐成 (東京電機大学)
「語誌データベースの構築と設計上の問題点」
- ・ポスター発表
 - ▶ 池田來未 (お茶の水女子大学)
「複合動詞「～ヌク」の歴史的変遷—〈完遂〉用法獲得の過程に着目して—」
 - ▶ 大西拓一郎 (国立国語研究所)
「つなげる, くらべる方言分布図—方言地図データベースの活用—」
 - ▶ 小椋秀樹 (立命館大学)
「近代における字音接頭辞「非・不・未・無」—『日本語歴史コーパス 明治・大正編I 雜誌』を資料として—」
 - ▶ 近藤明日子 (国立国語研究所 / 明治大学)
「『日本語歴史コーパス 明治・大正編 III 明治初期口語資料』の構築」
 - ▶ 呉寧真 (国立国語研究所 / 國學院大學), 池田幸恵 (中央大学), 須永哲矢 (昭和女子大学)
「『日本語歴史コーパス 上代編 II 宣命』の構築と公開」
 - ▶ 須永哲矢, 橋本莉奈, 金澤稀愛, 江成麻子, 榎谷あやか, 榎本早紀, 藤井千里, 村田柚衣, 富田美晴, 中村日向子 (昭和女子大学)
「通時コーパスを利用したプロジェクト学習の実践例—敬語・古典常識の抽出と教材作成—」
 - ▶ 高田智和, 片山久留美 (国立国語研究所), 桂祐成 (東京電機大学), 大塚靖代, ヘイミッシュ・トッド (大英図書館)
「天草版平家物語・伊曾保物語・金句集の原本画像公開」
 - ▶ 高橋雄太 (国立国語研究所 / 明治大学), 服部紀子 (国立国語研究所)
「近代小説のコーパス化とその課題」
 - ▶ 南雲千香子 (国立国語研究所), 近藤明日子 (国立国語研究所 / 明治大学)
「『東洋学芸雑誌』コーパスの構築 II—『日本語歴史コーパス 明治・大正編I 雜誌』での公開—」
 - ▶ 黄秀智 (明治大学)
「1945年以降の韓国新聞コーパス作成—日韓外来語史の対照研究のために—」
 - ▶ 松崎安子 (国立国語研究所)
「『日本語歴史コーパス 和歌集編 八代集』の公開に向けて」
 - ▶ 間淵洋子, 高田智和 (国立国語研究所)
「TEIによる近世版本の構造化」

- ・村山実和子 (国立国語研究所)
 - 「『日本語歴史コーパス 江戸時代編 II 人情本』の公開に向けて」
- ・山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 間淵洋子 (国立国語研究所), 桂祐成 (東京電機大学)
 - 「語誌データベースの試験公開」
- ・劉冠偉, 池田証壽 (北海道大学)
 - 「日本語歴史コーパス (CHJ) と平安時代漢字字書総合データベース (HDIC) との連携—観智院本類聚名義抄を例に—」
- ・テーマセッション『歴史的音源資料と日本語研究』
 - ・発表 (1) 金澤裕之 (目白大学)
 - 「録音資料のコーパス化とその困難点」
 - ・発表 (2) 相澤正夫 (国立国語研究所)
 - 「SP 盤演説レコードがひらく音声変異研究の可能性」
 - ・発表 (3) 清水康行 (日本女子大学)
 - 「日本語史研究資料としての在欧録音資料群」
- ・全体討論

(3) プロジェクトのシンポジウム・ワークショップ・研究発表会

プロジェクト等の主催で、公開研究発表会や学術シンポジウム等を、日本各地を会場として開催している。

シンポジウム「日本語教育は学習者コーパスで変わる—横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴—」

[2018.4.30, 国立国語研究所]

- ・趣旨説明: 野山広 (国立国語研究所)
- ・第1部: I-JAS・B-JAS の紹介
 - ・基調講演: 迫田久美子 (広島大学 / 国立国語研究所)
 - 「中国語母語の日本語学習者の発話に見る語用論的転移」
 - ・野山広 (国立国語研究所)
 - 「B-JAS の特徴」
- ・第2部: B-JAS を用いた研究の観点
 - ・張林 (北京師範大学)
 - 「中国人学習者における尾高型アクセントの語の習得」
 - ・費曉東 (北京外国语大学北京日本学研究センター)
 - 「語彙習得過程における誤用の変容」
 - ・石黒圭 (国立国語研究所), 布施悠子 (国立国語研究所)
 - 「中国人日本語学習者のフィラー習得過程の実態」
- ・全体ディスカッション
 - ・司会: 野山広
 - ・登壇者: 石黒圭, 張林, 費曉東, 布施悠子
 - ・コメンテーター: 迫田久美子
- ・閉会の辞: 石黒圭 (国立国語研究所)

「議会会議録を活用した日本語のスタイル変異研究」研究発表会 [2018.5.19, 明治大学]

- ・講演
 - ・鈴木仁也 (文化庁)
 - 「国会質問と国会答弁における言葉の現れ方」

- ・研究発表

- ・高野照司 (北星学園大学)

- 「ことばのスタイル：海外での近年の展開と議会会議録への応用」

- ・朝日祥之 (国立国語研究所)

- 「ことばのスタイル：日本におけるスタイル研究」

KLS ワークショップ 「日英語の移動表現における経路表示の多様性と第二言語習得」 [2018.6.9, 甲南大学]

- ・眞野美穂 (鳴門教育大学)

- 「経路表示の多様性と英語での表出方法」

- ・吉成祐子 (岐阜大学)

- 「日本語移動表現における経路表示の多様性」

- ・眞野美穂 (鳴門教育大学)

- 「日本語母語英語学習者の経路表出の特徴」

- ・江口清子 (宮崎大学)

- 「英語母語日本語学習者の経路表出の特徴」

- ・コメント：松本曜 (国立国語研究所)

シンポジウム 「ピア・リーディングの授業の組み立て方—教師の準備からフィードバックまで—」

[2018.6.9, 国立国語研究所]

- ・趣旨説明：石黒圭 (国立国語研究所)

- ・講演

- ・石黒圭 (国立国語研究所)

- 「ピア・リーディング授業の考え方」

- ・発表

- ・田中啓行 (国立国語研究所)

- 「文章の選び方と課題の設け方」

- ・胡方方 (国立国語研究所)

- 「話し合いの進め方と支え方」

- ・布施悠子 (国立国語研究所)

- 「コメントの返し方と評価の立て方」

- ・全体ディスカッション

- ・司会：西谷まり (一橋大学)

- ・登壇者：石黒圭, 田中啓行, 胡方方, 布施 悠子

- ・招待講演

- ・館岡洋子 (早稲田大学)

- 「ピア・リーディングとは何か」

- ・閉会の言葉：石黒圭 (国立国語研究所)

「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」研究発表会 [2018.6.9, 明治大学]

- ・研究発表

- ・北崎勇帆 (東京大学), 渡辺由貴 (名古屋女子大学), 村山実和子 (国立国語研究所)

- 「『虎寛本』狂言台本のコーパス化試論」

- ・小島聰子 (岩手大学)

- 「大正期地方出身作家の「標準語」」

- ・服部隆 (上智大学)

- 「欧文直訳体資料の諸形式—オランダ語学書の「訓読法」を中心に—」

- ・服部紀子 (国立国語研究所)
「明治期文章史における国定教科書」
- ・横山詔一 (国立国語研究所)
「言語変化・変異に関する S 字カーブ理論」

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 [2018.6.9, 国立国語研究所]

- ・発表 1
 - ・三村竜之 (室蘭工業大学) / Tatsuyuki Mimura (Muroran Institute of Technology)
「デンマーク語イントネーションに関する初期調査報告」 / “Preliminary report on Danish intonation”
- ・発表 2
 - ・川原繁人 (慶應義塾大学) / Shigeto Kawahara (Keio University), 李勝勲 (国際基督教大学) / Seunghun Lee (International Christian University), 桃生朋子 (目白大学) / Tomoko Monou (Mejiro University)
「チベットビルマ諸語の声調について」 / “Tonal aspects of some Tibeto-Burmese languages”
- ・発表 3
 - ・北原真冬 (上智大学) / Mafuyu Kitahara (Sophia University), 田嶋圭一 (法政大学) / Keiichi Tajima (Hosei University), 米山聖子 (大東文化学) / Kiyoko Yoneyama (Daitobunka University)
「日本語の有声性の対立に関する語彙的競合の影響について」 / “The influence of lexical competition on voicing contrast in Japanese”

第 1 回 Universal Dependencies 公開研究会 [2018.6.16, 京都テルサ]

- ・口頭発表
 - ・浅原正幸 (国立国語研究所)
「趣旨説明」
 - ・浅原正幸 (国立国語研究所)
「Universal Dependencies の概要」
- ・招待講演
 - ・中俣尚己 (京都教育大学)
「日本語の並列構造を巡る諸問題」
- ・招待講演
 - ・有田節子 (立命館大学)
「日本語の副詞節における時制辞の機能」
- ・口頭発表
 - ・田中貴秋 (NTT CS 研)
「UD Japanese-KTC: 京大コーパス句構造版からの Universal Dependencies 化」
 - ・金山博 (日本 IBM)
「日本語 UD v2: 公開の経緯と反省点」
 - ・大村舞 (国立国語研究所)
「UD Japanese-BCCWJ: 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の Universal Dependencies」
 - ・浅原正幸, 大村舞 (国立国語研究所)
「UD Japanese-Modern: 『日本語歴史コーパス』明治・大正編の Universal Dependencies」
- ・クロージング

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会 [2018.6.17, 国立国語研究所]

- ・研究発表
 - ・セリック・ケナン (国立国語研究所)
「宮古語の動詞と形容詞一方言の分布と歴史的な変遷—」

- 山田真寛 (国立国語研究所)
「与那国語の動詞・形容詞の活用パラダイムと調査・習得の方法」
- 麻生玲子 (国立国語研究所)
「南琉球八重山波照間方言の動詞形態論」
- 新永悠人 (国立国語研究所)
「統合的・膠着的な語の記述方法—奄美大島湯湾方言の動詞を例に—」
- 白田理人 (志學館大学)
「喜界島方言の動詞・形容詞について」
- 総括にかえて
 - 平子達也 (駒澤大学)
- ディスカッション

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」研究発表会 [2018.6.22, 岡山大学]

- プラシャント・パルデシ (国立国語研究所)
「今年度のNPCMJ プロジェクトの活動について」
- スティーブン・ライト・ホーン (国立国語研究所)
“Tools and practices for annotating discourse”
- 岸山健 (東京大学)
「構造的距離から見る否定極性項目間の類似度: NPCMJ を指標にした検証」
- ディスカッション (テーマ:「データスキーマの改良」)
竹内孔一 (岡山大学), 宮田スザンヌ (愛知淑徳大学), アラステア・バトラー (弘前大学), プラシャント・パルデシ (国立国語研究所) 他

第3回会話・談話研究シンポジウム「AIと言語研究(1) —ポライトネスとAI—」 [2018.6.23, 国立国語研究所]

- 開会挨拶: 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
- 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
「ポライトネス理論とAI」
- 重光由加 (東京工芸大学)
「話し相手としてのAI—日本語を話すAIとのコミュニケーションに何を求めるか」
- 片上大輔 (東京工芸大学)
「AIにおけるポライトネス理論の設計について」
- 宮本友樹 (東京工芸大学)
「ポライトネス理論に基づいた Human-Agent Interaction の構築」
- パネリスト間, フロアとの討論, 質疑応答
コーディネーター: 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
- 全体の総括
- 閉会挨拶

シンポジウム「自然会話分析と言語社会心理学」 [2018.7.14, 東京外国語大学]

- 第一部 講演
- 開会の辞: 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
- 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
「言語社会心理学研究会立ち上げについて (趣旨説明)」
- 基調講演: 岡本真一郎 (愛知学院大学)
「言語への社会心理学的アプローチ」
- 講演: 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
「自然会話コーパスへの言語社会心理学的アプローチ」

・第二部 第8回 BTSJ 活用方法講習会

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 [2018.7.21, 名古屋大学 東京オフィス]

- 上田広美 (東京外国語大学)
「クメール語の名詞修飾表現」
- 北野浩章 (愛知教育大学)
「カパンパンガン語の名詞修飾」
- 長屋尚典 (東京外国語大学)
「タガログ語の名詞修飾とリンカー」

「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」研究発表会 [2018.8.21, 国立国語研究所]

- ・通時コーパス活用班合同研究発表会 (中古・中世グループ, 近世・近代グループ)
 - 山際彰 (関西大学大学院)
「時を表す語彙におけるチカゴロの位置」
 - 南雲千賀子 (国立国語研究所)
「コーパスから見る『東洋学芸雑誌』の特徴」
 - 松崎安子 (国立国語研究所)
「中古・中世における住居語ヤドとイエとの位相差」
 - 高山善行 (福井大学)
「中古における副詞「いと」の多用をめぐって」

「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」研究発表会 第4回ワークショップ

[2018.8.25-26, 国立国語研究所]

2018年8月25日

- 瀧田健介 (明海大学)
“Argument Structure Alternations under N'-Deletion”
- 林晋太郎 (南山大学)
“Notes on the Syntax of Nonsententials in Japanese”
- 和泉悠 (南山大学)
“Slurs and Antihonorifics in Japanese”
- Sei-Rang Oh (Gyeongsang National University)
“A Compositional Semantic Analysis of Distributivity Constructions”
- Dongwoo Park (Sogang University)
“Korean Light Verb Stranding VP Ellipsis and Labeling Theory”
- 野村昌司 (中京大学)
“External Pair-Merge of Heads: Evidence from Japanese”

2018年8月26日

- 坂本祐太 (中京大学)
“Elidable Wh-phrases in Japanese: Its Theoretical Implications for Wh-in-situ” (a joint work with Hiroaki Saito)
- Yong Suk Yoo (Korea Naval Academy)
“Diagnostics for Classifier Constructions”
- Bum-Sik Park (Dongguk University)
“On the Island (In)sensitivity in Right Dislocation in Korean and its Implications”
- 高野祐二 (金城学院大学)
“Double Sideward Movement”

『現日研・職場談話コーパス』公開記念シンポジウム：談話資料の構築における1990年代の先駆的な試みから現在の新たな試みへ [2018.9.3, 国立国語研究所]

・開会挨拶

- 柏野和佳子 (国立国語研究所)
「『現日研・職場談話コーパス』中納言版について」
- 大村舞 (国立国語研究所)
「『現日研・職場談話コーパス』中納言版の語彙表・語数表の作成と公開」
- 遠藤織枝 (元文教大学)
「現日研談話資料職場編の成立」
- 本田明子 (立命館アジア太平洋大学)
「職場編・研究成果報告—自然談話の分析から見えたこと」
- 谷部弘子 (東京学芸大学)
「職場編・研究成果報告—日本語教育への応用」

・質疑・議論

・パネル討論：今後の研究の可能性について

- 高橋美奈子 (琉球大学 / 現代日本語研究会代表)
「職場編後の現代日本語研究会の研究展開」
- 小林美恵子 (早稲田大学)
「職場編作成側から見る『中納言版』」
- 山崎誠 (国立国語研究所)
「職場編資料と名大会話コーパスとの比較」
- 小磯花絵 (国立国語研究所)
「『日本語日常会話コーパス』における職場会話」

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会 方言コーパス研究発表会「日本語諸方言コーパスデータを使った方言の分析」 [2018.9.6, 国立国語研究所]

- 趣旨説明：木部暢子 (国立国語研究所)
- 基調講演：沢木幹栄 (信州大学名誉教授)
「奄美方言コーパスの作り方」
- 山本空 (関西大学)
「二人称代名詞の談話機能の地域間比較」
- 田附敏尚 (神戸松蔭女子学院大学)
「諸方言コーパスを使った方言の分析 (1)」
- 木部暢子 (国立国語研究所)
「日本語諸方言コーパスを使った方言の分析 疑問文のイントネーション」
- ディスカッション

日本音声学会ワークショップ「琉球諸語継承に向けた教育活動の事例報告」 [2018.9.16, 沖縄国際大学]

- ・企画、司会者：青井隼人 (国立国語研究所 / 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
- ・発表者：
 - 當山奈那 (琉球大学)
「琉球諸語における教材作成と展開：記述研究との関連から」
 - 横山晶子 (国立国語研究所 / 日本学術振興会)
「危機言語の継承に向けたアクション・リサーチ」
 - 小川晋史 (熊本県立大学)
「方言の表記法とフォント開発」

- ・指定討論者：山田真寛（国立国語研究所）

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 [2018.9.17, 国立国語研究所]

- ・テーマ：琉球語のアクセント
 - ・五十嵐陽介（一橋大学）/ Yosuke Igarashi (Hitotsubashi University)
「3拍名詞第4類における本土日本語と琉球語間の1対2のアクセント型の対応について」/ “On the one-to-two accentual correspondence in Class 3.4 between Japanese and Ryukyuan”
 - ・松森晶子（日本女子大学）/ Akiko Matsumori (Japan Women's University)
「沖縄本島北部の三型アクセント体系の諸相—通時的な視点から—」/ “Aspects of the three-pattern accentual systems in the northern part of the Main Island of Okinawa: from the diachronic point of view”
 - ・新田哲夫（金沢大学）/ Tetsuo Nitta (Kanazawa University)
「南琉球多良間方言のアクセント低核」/ “On the Low-Kernel of the Accent in the Tarama Dialect of Southern Ryukyuan”

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 [2018.9.22, 名駅セミナーオフィス]

- ・文法研究班「動詞の意味構造」研究発表会
 - ・Nathan Hamlitsch (三重大学)
“The x-taimu Construction in Japanese: From Construction Morphology and Frame Semantics Perspectives”
 - ・野中大輔（国立国語研究所）
「フレーム意味論から見た英語の場所格交替」

「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」研究発表会 [2018.9.29, 国立国語研究所]

- ・趣旨説明：野田尚史（国立国語研究所）
- ・中島晶子（パリ・ディドロ大学）
 - 「非漢字系初級日本語学習者の読解困難点」
- ・向井裕樹（ブラジリア大学）
 - 「非漢字系中級日本語学習者の読解困難点」
- ・田川麻央（明海大学）
 - 「漢字系中級日本語学習者の読解の工夫」
- ・村岡貴子（大阪大学）
 - 「論文執筆を目的とした日本語学習者の読解」

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 [2018.11.10, 神戸大学]

- ・平成30年度第2回共同研究発表会
 - ・桐生和幸（美作大学）
「メチエ語の名詞修飾表現—形式と意味と名詞化との関係」
 - ・倉部慶太（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）
「ジンポー語における名詞化と名詞修飾節」
 - ・白井聰子（日本学術振興会/筑波大学）
「ダパ語の名詞修飾表現」
 - ・松瀬育子（ネワール言語文化研究所）
「カトマンズ・ネワール語の名詞修飾」

日本言語学会ワークショップ「移動経路の種類とそのコード化：通言語的ビデオ実験による移動表現の類型論再考」 [2018.11.18, 京都大学]

- ・松本曜
「課題と仮説」

- ▶ 守田貴弘
「フランス語移動表現における経路表示と類型論」
- ▶ 河内一博
「クプサビニイ語とシダーマ語における通言語的傾向と類型タイプの現れ」
- ▶ 長屋尚典
「タガログ語移動表現の経路表示」
- ▶ 高橋清子
「タイ語移動表現の経路表示」

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 音声研究班 「語のプロソディーと文のプロソディー」平成 30 年度 第 3 回研究発表会 [2018.11.18, 京都大学]

- ・日本言語学会ワークショップ 「日本語の呼びかけイントネーション」 / “Vocative intonation in Japanese”
- ・企画者・司会者：窟瀬晴夫 / Organizer/Chair: Haruo Kubozono
- ・溝口愛 (国立国語研究所 / ニューヨーク市立大学) / Ai Mizoguchi (NINJAL / City University of New York)
「東京方言の呼びかけイントネーション」 / “Vocative intonation in Tokyo Japanese”
- ・窟瀬晴夫 (国立国語研究所) / Haruo Kubozono (NINJAL)
「鹿児島方言と甑島方言の呼びかけイントネーション」 / “Vocative intonation in Kagoshima and Koshikijima Japanese”
- ・平田秀 (国立国語研究所) / Shu Hirata (NINJAL)
「小林方言の呼びかけイントネーション」 / “Vocative intonation in Kobayashi Japanese”

「大規模日常コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」研究発表会 経年変化班 公開研究会

[2018.11.24, 国立国語研究所]

- ▶ 司会：丸山岳彦 (国立国語研究所 / 専修大学)
- ▶ 開会あいさつ
- ▶ 遠藤織枝 (元文教大学)
「戦後、ことばの性差はどう変わったか」
- ▶ 濱崎好治 (NPO 法人 戦後映像芸術アーカイブ 副代表)
「ニュース映画の歴史と研究」

日本英語学会第 36 回大会特別公開シンポジウム 「ツリーバンク開発と言語理論」 [2018.11.25, 横浜国立大学]

- ▶ 司会：吉本啓 (東北大学)
- ▶ コメンテーター：福島一彦 (関西外国語大学)
- ▶ 趣旨説明：プラシャント・パルデシ (国立国語研究所)
- ▶ 吉本啓 (東北大学)
「言語研究と統語・意味解析情報付きコーパス」
- ▶ 鈴木彩香 (国立国語研究所), 窪田悠介 (筑波大学), プラシャント・パルデシ (国立国語研究所)
「構文検索ツール NPCMJ Explorer」
- ▶ Alastair Butler (弘前大学)
“A Unified Interface for Exploring English and Japanese”
- ▶ Stephen Horn (国立国語研究所), Alastair Butler (弘前大学)
“English/Japanese Contrastive Study Based on Normalization, a Step in the Semantic Processing”

「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」研究発表会 第 5 回ワークショップ [2018.12.1-2, 東北大学]

2018 年 12 月 1 日

- ▶ 奥聰 (北海道大学)
“Light Verb and Verbal Compounds”

- 藤井友比呂 (横浜国立大学)
“Grammar Competition and Parametric Ambiguity”
- Wei-wen Roger Liao (台湾中央研究院)
“When Even Meets Only: A Dissection of EVEN in Chinese”
- 坂本祐太 (中京大学)
“Some Notes on Stranded Particles in Japanese” (joint work with Hiroaki Saito)
- 岸本秀樹 (神戸大学)
“On ECM subjects in Japanese”
- 村杉恵子 (南山大学)
“What Can Child Japanese Tell Us about Syntactic Theory and Vice Versa?”

2018年12月2日

- 高橋真彦 (山形大学)
“Raising to Object and Clausal Arguments”
- 和泉悠 (南山大学)
“Predicativism and Anaphoric Uses of Proper Names”
- 宮本陽一 (大阪大学)
“On Nominal-internal Distributive Interpretation in Japanese Fragment Answers”
- Wei-Tien Dylan Tsai (国立清華大学)
“Two Implicit Applicative Constructions in Chinese and the Syntax of Silent Light Verbs”

「議会会議録を活用した日本語のスタイル変異研究」研究発表会 [2018.12.9, 小樽商科大学札幌サテライト]

- 二階堂整 (福岡女学院大学)
「福岡県議会議員発言の世代差」
- 乙武北斗 (福岡大学)
「都道府県議会会議録検索システムの近況と自動意見抽出手法の検討」

「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」研究発表会 [2018.12.23, 明治大学 中野キャンパス]

- 近世・近代グループ研究発表会
 - 高橋雄太 (明治大学 / 日本学術振興会)
「近代における和語の用字法の変化—表記が増加する語を中心に—」
 - 銭谷真人 (日本学術振興会)
「近世に見られる「あて字」の近代への伝播について」
 - 田中牧郎 (明治大学)
「外来語と翻訳語—明治時代の西洋語受容—」

「北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」研究発表会 [2019.1.12, 国立国語研究所]

- 朝日祥之 (国立国語研究所)
「在外音源資料の収集状況と言語分析に向けた整備について」

「語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究」研究発表会 [2019.1.12–13, 国立国語研究所]

2019年1月12日

- 開催の挨拶: 酒井弘 (早稲田大学)
- 上垣涉 (ライデン大学)
“Semantic explanations of the selectional restrictions of clause-embedding predicates”
- 菅原彩加 (三重大学)
“Where can Focus be located?—An experimental study of ambiguous sentences with ‘only’”

- ・小泉政利 (東北大学)
“The processing of information structure and syntactic structure: Behavioral and ERP studies”
- ・全体ディスカッション
指定討論者: 小野創 (津田塾大学), 須藤靖直 (ロンドン大学)

2019年1月13日

- ・原由理枝 (早稲田大学)
「コーパスと事象関連電位計測からみた証拠性とモダリティの意味的差異」
- ・時本真吾 (目白大学)
「文理解における視点取得と時間処理の関わり」
- ・全体ディスカッション
指定討論者: 酒井弘 (早稲田大学)

「北米における日本関連在外資料調査研究・活用―言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」研究発表会 [2019.1.26, 国立国語研究所]

- ・中生勝美 (桜美林大学)
「アメリカ・ミシガン大学の日本研究と原子力平和利用の関連」
- ・朝日祥之 (国立国語研究所)
「アメリカ War Department の作成した語学教材」
- ・谷口陽子 (専修大学)
「ミシガン大学岡山分室の写真情報」
- ・泉水英計 (神奈川大学)
「戦時中の民政ハンドブック」
- ・総合コメント: 加藤哲郎 (一橋大学)

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」研究発表会 [2019.1.27, 東北大学]

- ・Iku Nagasaki and Alastair Butler
“Changing the morphological base of the NPCMJ”
- ・周振
「統語・意味情報付きコーパスの開発に関する研究: 中国語名詞句の解析について」
- ・三好伸芳
「名詞句と述語の共起関係から見たコーパス研究」
- ・全体討論

「「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発」研究発表会 [2019.2.3, 早稲田大学]

- ・パネルセッション1 「留学生の就職活動に必要な日本語スキルとは」
 - ・趣旨説明: 副田恵理子 (藤女子大学)
 - ・森吉弘 (帝京大学)
「日本式就活の特異性と現状」
 - ・宮崎聰子 (長崎外国語大学)
「キャリア支援課との協働による日本語授業の実践」
 - ・日野純子 (帝京大学)
「留学生の就活メールとその印象評定」
 - ・賈佳琳 (JLL 日本)
「留学生としての就活の問題点を振り返る」
 - ・ディスカッション

- ポスター発表 (前半)
 - 吉松眞弓 (早稲田大学)

「LINE で具体的な相手の状況を知る—伝えたいことを適切に伝える「セカンドトーク」を事例に—」
 - 彦苗 (早稲田大学), 山村美紀子 (早稲田大学)

「状況から出発する「書く・打つコミュニケーション」」
 - 平松友紀 (早稲田大学)

「外的場面の変化に対する主体の場面認識とコミュニケーション行為の一考察—日本語のビジネスメールの事例から—」
 - 斎藤智美 (早稲田大学)

「SNS が創発することばの学び～情況の Authenticity とリソース性について～」
 - 加藤林太郎 (国際医療福祉大学), 山元一晃 (国際医療福祉大学), 浅川翔子 (国際医療福祉大学)

「電子カルテから情報を収集し課題を完成させるライティング教材」
 - 藤田百子 (早稲田大学), 富永祐子 (早稲田大学)

「日本語学習者は、いつどのような状況で漢字を「書く／打つ」のか」
 - 橋本愛子 (早稲田大学)

「「状況から出発する日本語教育」実践者の思考及び視点の変化」
 - 小林ミナ (早稲田大学)

「「状況から出発する」教育実践は教師に何を求めるか」
- ポスター発表 (後半)
 - 木野緑 (早稲田大学)

「定式化により発話ターンをどう組織化するか～話題転換の手続き～」
 - 宮内健太郎 (早稲田大学), 向井大樹 (早稲田大学)

「「状況」から出発する教育実践において言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション双方を取り込む重要性」
 - 小川結莉 (早稲田大学)

「語彙・文法が聞き取れることが真の優れた聴解力か? —聴解プロセスにおけるストラテジー運用分析から—」
 - 山岸愛美 (東京国際大学), 秋田美帆 (東京国際大学)

「学習者による多読のための読み物作成の意義—初級後半クラスでの実践から」
 - 白井友恵 (早稲田大学), 高槻美陽 (イーストウエスト日本語学校)

「学習者は何を助けにして語彙を理解するか—「辞書」作りの実践から—」
 - 加藤恵梨 (大手前大学)

「ビジネス文書における「さて」と「早速ですが」の使われ方について」
 - 小林ミナ (早稲田大学)

「「状況から出発する」教育実践が文法研究にもたらすもの」
- パネルセッション 2 『『打つ』言語行動における SNS の使用実態と教材化の可能性』
 - 趣旨説明: 富永祐子 (早稲田大学)
 - 岡田祥平 (新潟大学)

「Twitter への投稿の実態—教材化の可能性と必要性を考えるために—」
 - 松田真希子 (金沢大学)

「Facebook ポストのメディア特性と日本語—産出支援に向けて—」
 - 副田恵理子 (藤女子大学), 太田悠紀子 (上智大学)

「LINE コミュニケーション能力の変化—留学生の縦断的調査から—」
 - 中井好男 (同志社大学)

「ニコニコ動画のゲーム実況への参加過程における日本語学習者の言語行動」
 - ディスカッション

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」第3回合同研究発表会 Prosody & Grammar Festa 3

[2019.2.16-17, 国立国語研究所]

2019年2月16日

- ・シンポジウム：日本語と言語類型論
 - ・五十嵐陽介（一橋大学）
「日本語のイントネーションと言語類型論」
 - ・秋田喜美（名古屋大学）
「日本語のオノマトペと言語類型論」
 - ・野田尚史（国立国語研究所）
「日本語の主題・焦点と言語類型論」
 - ・プラシャント・パルデシ（国立国語研究所）
「名詞修飾表現の言語地図作成に向けて」
 - ・小原京子（慶應義塾大学）
「日英語対照とフレーム・構文分析」
 - ・瀧田健介（明海大学）、斎藤衛（南山大学）、村杉恵子（南山大学）
「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」

2019年2月17日

- ・研究成果発表
 - ・佐藤久美子（国立国語研究所）
「不定語のアクセントと不定語を含む文のイントネーション—東京・福岡・鹿児島・長崎の対照—」
 - ・久保智之（九州大学）
「アルタイ諸語のイントネーション研究に向けて」
 - ・井戸美里（国立国語研究所）
「日本語のとりたて表現と否定呼応」
 - ・筒井友弥（京都外国語大学）
「ドイツ語のとりたて表現」
 - ・白井聰子（日本学術振興会/筑波大学）
「ダバ語の名詞句標識と名詞修飾」
 - ・倉部慶太（東京外国語大学）
「ジンポー語の名詞修飾表現」
 - ・陳奕廷（三重大学）
「状態変化を表す日中複合動詞—フレーム・コンストラクション的アプローチ—」
 - ・長屋尚典（東京外国語大学）、天野友亜、榎本恵実、大久保圭夏、鈴木唯、高橋梓、高橋舜、田中克典、谷川みづき、福原百那、山田あかり
「経路の種類と経路表示—東京外国語大学における通言語的実験の成果—」
 - ・酒井弘（早稲田大学）、上垣渉（ライデン大学）、須藤靖直（University College London）
「補文のタイプと主動詞—意味計算の神経基盤を探る—」

「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」研究発表会 [2019.2.22, 東洋大学]

- ・通時コーパス活用班合同研究発表会（語彙・意味グループ、文体・資料性グループ）
 - ・上村健太郎（国立国語研究所）
「新語・流行語の経年調査法についての検討」
 - ・池田幸恵（中央大学）
「平安期宣命の漢語語彙」

甑島方言研究会 [2019.2.28, 関西大学]

- ・窪蘭晴夫 (国立国語研究所)
「甑島方言のプロソディー」
- ・久保蘭愛 (愛知県立大学)
「甑島方言の形容詞」
- ・酒井雅史 (大阪大学)
「甑島方言の敬語」
- ・平塚雄亮 (中央大学)
「甑島方言のいまとこれから」
- ・全体討議

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 平成 30 年度 第 4 回 プロジェクト研究発表会 (第 14 回音韻論フェスタ・プロソディーセッション) [2019.3.4-5, 明海大学]

2019 年 3 月 4 日

- Prosody Session I
 - ・Chuyu Huyang (The University of Tokyo)
“A Reconsideration of the Faithfulness to the ‘Head’ in Tokyo Japanese Compounds”
 - ・Kunio Nishiyama (Doshisha University)
“Rendaku and Accent in Japanese Deverbal Compounds Revisited”
 - ・Mariko Sugahara (Ibaraki University)
“The Prominence Levels of Full Vowels in English: A Questionnaire Study”
- Invited talk
 - ・Draga Zec (Cornell University)
“Tone and Stress Interactions in the Pitch Accent System of Serbo-Croatian”

2019 年 3 月 5 日

- Prosody Session II
 - ・松原理佐 (東京大学), 古川慧 (東京大学)
「黙読におけるアクセントパターンによる統語的曖昧性解決への影響」
 - ・西原哲雄 (宮城教育大学)
「名詞句移動における焦点の役割から」
- Prosody Session III
 - ・白田理人 (志學館大学)
「喜界島小野津方言の呼称名詞のプロソディー」
 - ・那須昭夫 (筑波大学)
「形容詞語幹の音調指定解釈」
 - ・三村竜之 (室蘭工業大学)
「ノルウェー語南東部方言における音調のアクセント論的解釈」

「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」研究発表会 [2019.3.8, 国立国語研究所]

- 通時コーパス活用班研究発表会 (中古・中世グループ)
 - ・片山久留美 (国立国語研究所)
「コーパスから見る大蔵虎明本狂言集の表記」
 - ・小林正行 (群馬大学)
「動詞の活用体系の変遷の観察」
 - ・川口敦子 (三重大学)
「キリスト教資料における会話文の引用形式から」

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会 [2019.3.10, 国立国語研究所]

- ・平成30年度第2回研究発表会「動詞・形容詞(本土諸方言)」
 - ▶ 開会の挨拶
 - ▶ 研究発表: 大槻知世(国立国語研究所)
「津軽方言の動詞・形容詞」
 - ▶ 研究発表: 中澤光平(国立国語研究所)
「淡路方言の活用とアクセント単位」
 - ▶ 研究発表: 高城隆一(東京大学)
「鹿児島県肝付町内之浦方言の動詞について」
 - ▶ 研究発表: 久保薗愛(愛知県立大学)
「甑島里方言のニ格形容詞」
 - ▶ 研究発表: 高嶋由布子(日本学術振興会/東京学芸大学)
「日本手話の動詞・形容詞—何をどう記述するか—」
 - ▶ 総括にかえて: 平子達也(駒沢大学)
 - ▶ ディスカッション

「NINJAL 特別講義 レナード・タルミー教授(ニューヨーク州立大学)「標的設定のシステム: 直示と照応の統合」

[2019.3.22-23, 国立国語研究所]

2019年3月22日: "Gestures as cues to a target"

2019年3月23日: "The targeting system of language"

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会 [2019.3.27, 国立国語研究所]

- ・Paul Kerswill氏をコメンテーターに迎えてのスタイル研究発表会
 - ▶ 二階堂整(福岡女学院大学)
「セミフォーマル研究の提案」
 - ▶ 朝日祥之(国立国語研究所)
"Stylistic changes in the local assembly speeches in Nagoya: a case of Takeshi Kawamura"
 - ▶ 高野照司(北星学園大学)
"A Geo-pragmatic Study of Japanese Disagreement in the Minutes of Local Assemblies: Sapporo vs. Osaka"

「日本語の間接発話理解: 第一言語, 第二言語, 人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究」研究発表会 [2019.3.30, 国立国語研究所]

- ・宇佐美まゆみ(国立国語研究所)
「間接発話理解のプロセスの解明がなぜ重要なのか—本公募研究の趣旨に代えて—」
- ・松井智子(東京学芸大学)
「間接発話理解と言語発達との関係について」
- ・三浦優生(愛媛大学)
「児童における極性質問に対する間接応答の理解」
- ・中村太戯留(慶應義塾大学)
「文脈ないし韻律との不調和を有する発話における皮肉理解」
- ・重光由加(東京工芸大学), 大塚容子(岐阜聖徳学園大学)
「日本語学習者の間接発話の習得—質問紙調査報告」
- ・内海彰(電気通信大学)
「人工知能による皮肉理解」
- ・高嶋由布子(東京学芸大学)
「手話と間接発話について」
- ▶ ディスカッション

(4) NINJAL コロキウム

日本語・言語学・の本後教育の様々な分野における最先端の研究をテーマとした国内外の優れた研究者による講演会。研究者・大学院学生のみならず、一般にも公開。原則として月1回、国立国語研究所で開催している。2018年度は下記15件を開催した。

第91回 (2018年4月3日)

- ・島田純理 (明治学院大学講師)
「累積量化の論理と語用論」

第92回 (2018年5月22日)

- ・金水敏 (国立国語研究所言語変化研究領域客員教員 / 大阪大学教授)
「“主題”について」

第93回 (2018年5月29日)

- ・Vasily V. Shchepkin (ロシア、ロシア科学アカデミー東洋古典籍研究所 Senior Researcher)
「ロシア・サンクトペテルブルクにある日本語方言資料」

第94回 (2018年7月3日)

- ・定藤規弘 (生理学研究所教授)
「ヒト高次脳機能へのイメージングによるアプローチ：人文科学と生理学の連携に向けて」

第95回 (2018年8月28日)

- ・佐藤慎司 (アメリカ、プリンストン大学 Senior Lecturer, 日本語プログラムディレクター)
「多言語多文化に開かれたことばの教育」

第96回 (2018年9月18日)

- ・Magdalena Kaufmann (アメリカ、コネチカット大学准教授)
“Topics in Conditional Conjunctions”

第97回 (2018年9月25日)

- ・山越康裕 (東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授)
「少数民族コミュニティへのアウトリーチを目的としたスマホアプリ LingDyTalk の開発とその背景」

第98回 (2018年10月9日)

- ・山田誠二 (国立情報学研究所教授)
「人工知能 AI の現在と今後」

第99回 (2018年10月30日)

- ・平田由香里 (アメリカ、コルゲート大学教授)
「聴覚・視覚・身体感覚を使った外国語音声訓練の効果」

第100回 (2018年12月11日)

- ・Jong-Bok Kim (韓国、キョンヒ大学校教授, キョンヒ大学校言語情報学研究所所長)
“Response Particles to Polar Questions: Parametric Differences Across Languages”

第101回 (2018年12月18日)

- ・Kathryn Jones (イギリス, IAITH, Managing Director)
“The Development and Direction of Language Revitalization—A Focus on Wales and Its European Context”

第102回 (2019年1月22日)

- ・林和弘 (科学技術・学術政策研究所科学技術予測センター上席研究官)
「オープンサイエンスにより変容する科学研究と学術コミュニケーション」

第103回(2019年2月5日)

・岡野かおり(オーストラリア, ラトローブ大学教授)

「長期的エスノグラフィーにみることばの経年変化とライフコース—神戸女性のパネル調査1989–2019」

第104回(2019年3月19日)

・長田俊樹(国立国語研究所言語変異研究領域客員教員/総合地球環境学研究所名誉教授)

「なぜ日本語系統論は流行らなくなったのか」

第105回(2019年3月26日)

・トムソン木下千尋(オーストラリア, ニューサウスウェールズ大学教授)

「多文化多言語のオーストラリアで日本語を教えるということ」

(5) NINJAL サロン

国立国語研究所の研究者(共同研究員を含む)を中心として、おのとの研究内容を照会することによって、情報交換をおこなう場である。外部からの兆候も歓迎している。2018年度は、第170回から第180回まで、11回開催した。

第170回(2018年4月17日)

・高田智和(言語変化研究領域/研究情報発信センター准教授), 石本祐一(コーパス開発センター特任助教)

「研究資料室所蔵音源・映像データベース」

第171回(2018年5月15日)

・平田秀(理論・対照研究領域プロジェクトPDフェロー)

「熊野灘沿岸地域諸方言アクセントの多様性と普遍性」

第172回(2018年6月5日)

・鈴木彩香(理論・対照研究領域プロジェクトPDフェロー)

「日本語トキ節の時制解釈—ル形とタ形の非対称性を中心に—」

第173回(2018年6月12日)

・片岡喜代子(外来研究員/神奈川大学教授)

「声なきことばの意味と解釈—日本語とスペイン語の否定関連表現から」

第174回(2018年7月24日)

・前川喜久雄(音声言語研究領域教授/コーパス開発センター長)

「自発音声における長い先読みを示唆する五つの証拠」

第175回(2018年7月31日)

・澤田淳(音外来研究員/青山学院大学准教授)

「「ていく／てくる」のアスペクト用法における時制制約と時間認識について」

第176回(2018年10月16日)

・平田秀(理論・対照研究領域プロジェクトPDフェロー)

「小林方言の呼びかけイントネーション」

第177回(2018年11月6日)

・溝口愛(理論・対照研究領域プロジェクト非常勤研究員)

「東京方言の呼びかけイントネーション」

第178回(2018年11月13日)

・大島一(言語変異研究領域プロジェクトPDフェロー)

「大阪泉州方言における「ら」の複数性」

第 179 回 (2018 年 11 月 27 日)

- ・松崎安子 (言語変化研究領域プロジェクト PD フェロー)
「古典文芸における住まい」

第 180 回 (2019 年 3 月 12 日)

- ・澤田淳 (外来研究員 / 青山学院大学准教授)
「日本語の直示授与動詞「やる／くれる」の歴史」

(6) 講習会・セミナー

2018 年 6 月 21 日

- ・統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル (岡山大学)
 - ・吉本啓
「コーパス構築の理念、コーパスの収録テキストの概要」
 - ・長崎郁
「ウェップ・インターフェースの概要、文字列検索」
 - ・スティーブン・ライト・ホーン
「データのスキーマ、ツリー検索の言語 Tgrep-lite」
 - ・鈴木彩香
「ローカル環境ツールの活用法、Tregex と Tsurgeon」

2018 年 7 月 4 日

- ・国語研講習会「Scalar Implicature」(国立国語研究所)
 - ・富岡論 (アメリカ, デラウェア大学教授)
「基本概念, Neo-Gricean」
「Embedded Implicature: Grammatical Approach to Implicature」
「Embedded Implicature: Globalists Battle Back」
「Commentary on the debate」

2018 年 8 月 11-12 日

- ・国立国語研究所 日本語学講習会 (ベトナム国家大学ハノイ校日越大学 (ベトナム))
 - ・Prashant Pardeshi
「世界の言語と日本語」
 - ・今井新悟
「コ, ソ, ア, ド: 指示詞 (Demonstratives) のなぞ」
 - ・Prashant Pardeshi
「A が座って, B を書いて, C に B を送った: タコ型の日本語とムカデ型のベトナム語」
 - ・今井新悟
「なぐった, なぐられた, なぐらせた: ヴォイス (Voice) 表現の体系」

2018 年 8 月 14-15 日

- ・国立国語研究所 日本語学講習会 (ベトナム国家大学 HCM 人文社会科学大学 (ベトナム))
 - ・Prashant Pardeshi
「世界の言語と日本語」
 - ・今井新悟
「コ, ソ, ア, ド: 指示詞 (Demonstratives) のなぞ」
 - ・Prashant Pardeshi
「A が座って, B を書いて, C に B を送った: タコ型の日本語とムカデ型のベトナム語」
 - ・今井新悟
「なぐった, なぐられた, なぐらせた: ヴォイス (Voice) 表現の体系」

2018年9月3日

- ・第5回コーパス利用講習会(国立国語研究所)
 - コース1:全文検索システム「ひまわり」講習会
講師:山口昌也(音声言語研究領域)
 - コース2:オンライン検索システム「中納言」講習会
講師:柏野和佳子(音声言語研究領域),山崎誠(言語変化研究領域)
 - コース3:Praat講習会
講師:西川賢哉(コーパス開発センター)

2018年9月9日

- ・国立国語研究所日本語学講習会(ケラニア大学(スリランカ))
 - Prashant Pardeshi
「外から見た日本語:日本語とシンハラ語を比べてみよう」
 - 岸本秀樹
「とりたての話:人を誘うときに「お茶でも飲みませんか」と言えても「お茶さえ飲みませんか」と言えないのはなぜ?」
 - Prashant Pardeshi
「Aが座って、Bを書いて、CにBを送った:動詞の分類について」
 - 岸本秀樹
「言葉の使い方:「明日いらっしゃいますか」とたずねられて「はい、いらっしゃいます」と答えられないのはなぜ?」

2018年9月11日

- ・国立国語研究所日本語学講習会(ペラデニア大学(スリランカ))
 - Prashant Pardeshi
“Online Resources to Explore Japanese Vocabulary”
 - 岸本秀樹
“The Meaning and Usage of Adverbial Particles in Japanese”

2018年11月1日

- ・平成30年度国立国語研究所日本語教師セミナー(海外)「自然会話コーパスを活用した日本語教育」(国際交流基金シドニー日本文化センター(オーストラリア))
 - 趣旨説明
 - 宇佐美まゆみ(国立国語研究所)
「BTSJ日本語自然会話コーパスとNCRB(Natural Conversation Resource Bank)」
 - 大橋純(メルボルン大学)
「自然会話活用の理論と実践」

2018年11月5日

- ・平成30年度国立国語研究所日本語教師セミナー(海外)「自然会話コーパスを活用した日本語教育」(メルボルン大学(オーストラリア))
 - 開会の辞, 趣旨説明
 - 宇佐美まゆみ(国立国語研究所)
「BTSJ日本語自然会話コーパスとは?」
 - 宇佐美まゆみ(国立国語研究所)
「NCRB(Natural Conversation Resource Bank)とは?」
 - 大橋純(メルボルン大学)
「自然会話活用の理論と実践」
 - 質疑応答

・総括

2018年12月8日

- ・第9回, 第10回 BTSJ 活用方法講習会 (国立国語研究所)
 - ・開会の辞, 宇佐美まゆみ (国立国語研究所)
 - ・講演: 母育新 (西安外国语大学)
「海外における DP 理論の受容と反響について—中国を中心に—」
 - ・第9回 BTSJ 活用方法講習会 (初心者向け)
 - ・第10回 BTSJ 活用方法講習会 (既習者向け)

2018年12月22-23日

- ・国立国語研究所 日本語学講習会 (Maharatta Chamber of Commerce, Industries and Agriculture (Pune, インド))
 - ・Registration, Digital Oil-lighting ceremony
 - ・Prashant Pardeshi (国立国語研究所教授)
「日本語は特殊な言語, 普通の言語?: マラーティー語や世界の言語から見た日本語」
 - ・今井新悟 (国立国語研究所客員教員 / 早稲田大学教授)
「コ, ソ, ア, ド: 指示詞 (Demonstratives) のなぞ」
 - ・野田尚史 (国立国語研究所教授)
「日本語の文はどのような成分でできているか?: 文の基本的な構造」
 - ・砂川有里子 (国立国語研究所客員教員 / 筑波大学名誉教授)
「雨が降りそう, 降るそう, 降るらしい, 降るかもしれない…モダリティ表現の体系」
 - ・野田尚史 (国立国語研究所教授)
「「は」と「が」と「も」はどう違うか?: 主題・とりたて」
 - ・Prashant Pardeshi (国立国語研究所教授)
「A が座って, B を書いて, C に B を送った: 動詞の分類について」
 - ・今井新悟 (国立国語研究所客員教員 / 早稲田大学教授)
「なぐった, なぐられた, なぐらせた: ヴォイス (voice) 表現の体系」
 - ・砂川有里子 (国立国語研究所客員教員 / 筑波大学名誉教授)
「複雑な動詞, 複雑な文: やりもらい動詞「てあげる, てもらう, ていただく」…および複文「～のだ…, ～のに…」」

2019年2月9日

- ・平成30年度 国立国語研究所日本語教師セミナー (国内) 「看護・介護に必要な日本語の研究と日本語教育」 (国立国語研究所)
 - ・趣旨説明: 野田尚史 (国立国語研究所)
 - ・野田尚史 (国立国語研究所)
「看護・介護に必要な多様な日本語能力—特化型の日本語教育を目指して—」
 - ・神村初美 (東京福祉大学)
「医療福祉人材のための日本語教育—介護のオノマトペとタメ語を中心に—」
 - ・岩田一成 (聖心女子大学)
「看護師国家試験の語彙と文法—日本語能力試験との違い—」
 - ・登里民子 (国際交流基金アジアセンター)
「介護福祉士候補者に対する聴解教育—介護現場での申し送りを例として—」
 - ・ディスカッション

2019年2月23日

- ・国立国語研究所 日本語学講習会 (セドナホテルヤンゴン (ミャンマー))
 - Prashant Pardeshi
「日本語は特殊な言語、普通の言語？ 世界の言語から見た日本語」
 - 今井新悟
「コ、ソ、ア、ド：指示詞 (Demonstratives) のなぞ」
 - Prashant Pardeshi
「A が座って、B を書いて、C に B を送った：動詞の分類について」
 - 今井新悟
「なぐった、なぐられた、なぐらせた：ヴォイス (voice) 表現の体系」

2019年3月3日

- ・第6回コーパス利用講習会 (国立国語研究所)
 - 全文検索システム「ひまわり」講習会
講師：山口昌也、柏野和佳子 (音声言語研究領域)，補助：小磯花絵、柏野和佳子 (音声言語研究領域)

2019年3月16-17日

- ・国立国語研究所 日本語学講習会 (王立プノンペン大学 (カンボジア))
 - プラシャント・パルデシ
「世界の言語と日本語」
 - 桐生和幸
「食べる、食べた、食べている、食べていた：日本語テンスとアスペクトについて」
 - プラシャント・パルデシ
「A が座って、B を書いて、C に B を送った：動詞の分類について」
 - 桐生和幸
「書いた、書かれた、書かせた：日本語のヴォイスについて」

7

センター・研究図書室の活動

(1) 研究情報発信センター

情報発信に関わる研究開発や、研究資料の収集・管理をおこなっている。各プロジェクトやコーパス開発センターと連携し、ウェブページや研究資料室を通して研究情報の公開を推進している。

- ・所蔵資料の配信システムや公開コンテンツについて研究発表を7件おこない、所蔵データベースの解説を専門書籍に掲載した。また、所蔵する音声・映像資料をめぐり、所内の複数のプロジェクトと連携し、共同利用体制を強化した。
- ・所管するデータベース類について、コンテンツの再配置をおこない、合理化に寄与した。
- ・「日本語研究・日本語教育文献データベース」への新規データの追加、研究資料室収蔵の音源・映像のデジタル化及びデータベース化、「研究資料室収蔵資料データベース」の充実を、当初の予定を上回るペースで積極的に推進した。
- ・「国立国語研究所学術情報リポジトリ」について、国語研刊行物のデータ整備・登録を進め、オープンアクセス方針並びに実施要領を全所的な合意の下、作成した。
- ・国立国会図書館の「ジャパンサーチ」試験版において、国語研所蔵のデータベースを公開した。さらに、情報・システム機構に対し、研究資料室が所蔵・公開する社会調査データセットの情報を提供し、その利活用を一層図れる環境を整えた。
- ・センターの研究発信業務強化のため、プロジェクト非常勤研究員2名を雇用し、その育成に務めた。
- ・『国立国語研究所論集』を2回、オンラインと冊子体の両形態で発行するとともに、円滑な発行を維持で

きるよう、編集体制の見直しをおこなった。

- ・ネットワーク・サーバ運用保守業務及びサポートデスク業務、並びに仮想基盤の保守切れに伴う仮想基盤機器のリプレイス及び仮想サーバの移行を適切に実施した。

(2) コーパス開発センター

研究系と連携して言語資源の開発整備及び基礎研究を進め、言語資源に関する共同利用の利便性を高めることを目的としている。具体的には、言語コーパスに加え、形態素解析用電子化辞書、コーパス検索ツールなどの研究開発を進めている。

- ・所内の専任職員・研究員でジャーナル論文 5+1 件、国語研論集 3 件、国際会議発表 15 件。
- ・言語資源活用ワークショップ 2018 を開催。「少納言」「中納言」「梵天」などの検索系の維持管理を実施。
- ・UniDic (形態素)・Universal Dependencies (係り受け)・分類語彙表 (意味)に関する研究を共同研究者と推進。
- ・「中納言」講義用アカウントの枠組を構築。
- ・「Praat」「中納言」「梵天」講習会を実施。所内若手研究者向けにオフィスアワーを設定。
- ・言語資源活用ワークショップ 2018 に学生を対象とした優秀発表賞を設定。
- ・茨城大学の修士学生 1 名をインターンシップとして受け入れ。
- ・ワークスアリケーションズ徳島人工知能 NLP 研究所と共同研究を開始。
- ・日本語語彙の分散表現データのモデルを公開。
- ・中京大学において開催された国語科の教員免許習への協力。
- ・Academia Sinica との共同研究を推進。LREC-2018 にて Special Session を実施。CoNLL-2018 Shared Task に係り受けのデータを提供。
- ・所内のコーパス開発プロジェクトの支援を実施。

(3) 研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書館で、日本語研究および日本語に関する研究文献・言語資料を中心に、日本語教育、言語学など、関連分野の文献・資料を収集・所蔵している。

カードキーによる入退室の管理及び照明の人感センサーを整備し、所内教職員は夜間・休日も利用可能である。また、閲覧室に新着コーナーを設け、新着雑誌・図書を利用しやすい環境に整えている。

- ・開室日時：月曜日～金曜日 9 時 30 分～17 時（土曜日・日曜日・祝休日・年末年始・毎月最終金曜日は休室）
- ・主なコレクション：
 - ・東条操文庫（方言）
 - ・大田栄太郎文庫（方言）
 - ・保科孝一文庫（言語問題）
 - ・見坊豪紀文庫（辞書）
 - ・カナモジカイ文庫（文字・表記）
 - ・藤村靖文庫（音声科学）
 - ・林大文庫（国語学）
 - ・輿水実文庫（国語教育）
 - ・中村通夫文庫（国語学）
- ・「国立国語研究所蔵書目録データベース」をウェブ検索できる。
- ・図書館間相互協力サービス（NACSIS-ILL）により、所属機関の図書館を通して複写物の取り寄せや図書の貸出を受けることができる。

・所蔵資料数（2019年4月1日現在）

| | 図 書 | 雑 誌 |
|-----|-----------|---------|
| 日本語 | 124,029 冊 | 5,381 種 |
| 外国語 | 32,240 冊 | 525 種 |
| 計 | 156,269 冊 | 5,906 種 |

※ 視聴覚資料など 7,502 点を含む。

III

國際的研究協力

国立国語研究所全体の研究テーマである「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」をグローバルな観点から推進するため、国際的な研究連携体制の多様化を図っている。

1 世界の大学・研究機関との提携

世界各地の大学や研究機関等と、共同研究の促進や研究者の交流等を目的とした学術交流協定を締結している。協定先は、海外で日本語や日本語教育を研究している機関に加え、言語学や情報科学の研究機関にも及び、これらの協定により、日本語研究から世界の言語研究へ、世界の言語研究から日本語研究へ、という両方向の交流を強化し、世界規模で研究を促進することをめざしている。

協定締結先 (2019年3月31日時点)

- ・中央研究院(台湾)：2014.3-
- ・北京外国语大学北京日本学研究センター(中国)：2014.6-
- ・オックスフォード大学人文科学部(イギリス)：2015.7-
- ・ペンシルベニア大学言語学科(アメリカ)：2016.7-
- ・ヨーク大学言語学科(イギリス)：2016.7-
- ・ブランドイス大学情報科学科(アメリカ)：2016.12-
- ・コロラド大学ボルダー校言語学科(アメリカ)：2017.1-
- ・ネール大学言語学科(インド)：2017.7-
- ・ミシガン大学日本研究センター(アメリカ)：2017.8-
- ・東吳大学日本語文學系(台湾)：2018.1-
- ・ハワイ大学マノア校(アメリカ)：2018.2-
- ・ティラク・マハラシュトラ大学日本語学科(インド)：2018.5-
- ・インド工科大学マドラス校人文社会科学部(インド)：2018.6-
- ・韓国日語教育学会(韓国)：2018.7-
- ・韓國日本語學會(韓国)：2018.7-
- ・ダッカ大学現代語研究所(バングラデシュ)：2018.9-
- ・ソウル大学人文学部(韓国)：2018.10-

2 国際シンポジウム・国際会議の開催

世界における日本語・日本語教育研究の発展のため、国際シンポジウムを毎年数回開催すると同時に、海外に拠点を持つ国際学会を国語研に招致している(2018年度開催のものは42ページに掲載)。

3 日本語研究英文ハンドブック

言語学関係の出版社として傑出した出版活動で世界をリードする De Gruyter Mouton(ドゥ・グロイター・ムートン社: ベルリン/ボストン)からの申し出により、国立国語研究所の優れた研究成果を英文で出版する包括的な協定を2012年7月に締結した。5 この協定に基づき、2014年から、日本語および日本言語学の研究に関する包括的な日本語研究英文ハンドブック、Handbooks of Japanese Language and Linguisticsシリーズ(全12巻予定)を順次刊行している。

このシリーズは、それぞれの領域におけるこれまでの重要な研究成果を俯瞰し、現在における最先端の研究状況をまとめるとともに、今後の研究方向にも示唆を与えるもので、国語研関係者(専任教員および客員教員、諸大学の共同研究員)だけでなく、各領域における国内外の第一線の研究者が執筆を担当し、国語研

が中心となって編集をおこなう大規模な国際的プロジェクトである。これにより大学共同利用機関としての国語研の知名度を世界的に高めるだけでなく、日本語研究の成果ならびに動向を世界に広く問うことによって言語学の発展に資するとともに、日本語研究自体の進展にも寄与することとなる。

編集主幹

柴谷方良（ライス大学教授）Masayoshi Shibatani (Professor, Rice University)

影山太郎（国立国語研究所前所長・名誉教授）Taro Kageyama (Former Director-General and Professor Emeritus, NINJAL)

シリーズの構成（全巻英文、各巻600-700ページ）

Vol. 1: *Handbook of Japanese Historical Linguistics*

Edited by Bjarke Frellesvig, Satoshi Kinsui, and John Whitman

Vol. 2: *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology* (既刊, ISBN: 978-1-61451-198-4)

Edited by Haruo Kubozono

Vol. 3: *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation* (既刊, ISBN: 978-1-61451-209-7)

Edited by Taro Kageyama and Hideki Kishimoto

Vol. 4: *Handbook of Japanese Syntax* (既刊, ISBN: 978-1-61451-661-3)

Edited by Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, and Hisashi Noda

Vol. 5: *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*

Edited by Wesley Jacobsen and Yukinori Takubo

Vol. 6: *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (既刊, ISBN: 978-1-61451-407-7)

Edited by Prashant Pardeshi and Taro Kageyama

Vol. 7: *Handbook of Japanese Dialects*

Edited by Nobuko Kibe and Tetsuo Nitta

Vol. 8: *Handbook of Japanese Sociolinguistics*

Edited by Fumio Inoue, Mayumi Usami, and Yoshiyuki Asahi

Vol. 9: *Handbook of Japanese Psycholinguistics* (既刊, ISBN: 978-1-61451-121-2)

Edited by Mineharu Nakayama

Vol. 10: *Handbook of Japanese Applied Linguistics* (既刊, ISBN: 978-1-61451-183-0)

Edited by Masahiko Minami

Vol. 11: *Handbook of the Ryukyuan Languages* (既刊, ISBN: 978-1-61451-115-1)

Edited by Nobuko Kibe and Tetsuo Nitta

Vol. 12: *Handbook of the Ainu Languages*

Edited by Anna Bugaeva

4 海外の研究者の招聘・受入

海外の研究者を専任や客員教員として招聘すると同時に、研究プロジェクトに共同研究員として多数の参画を得ている。また、海外の研究者や大学院生が国語研に滞在して研究をおこなう、外来研究員（2018年度海外機関からの受入11名）や特別共同利用研究員（2018年度海外機関からの受入3名）として受け入れている。

IV

社会連携と広報

1 消滅危機言語・方言の調査・保存・分析

2009年にユネスコが発表した世界各地の消滅危機言語（話者が非常に少なくなってきた言語）には、日本国内の8つの言語（方言）が含まれている。国立国語研究所ではこれらの諸方言を集中的に記録し、言語学的に分析するプロジェクトを進めている。これによって、世界の危機言語研究に貢献すると同時に、方言を使用している地域社会とその文化の活性化に寄与することを目的としている。

2 日本語コーパスの拡充

ある言語の全貌を正確に把握するためには、その言語を大量に収集し、分析する必要がある。書き言葉や話し言葉の資料を、大量かつ体系的に収集し、それを詳細に検索できるようにしたものを、「コーパス」といい、国語研では日本語コーパスの整備を進め、現代の標準的な日本語に加え、方言や歴史的な日本語、学習者の日本語等、様々なコーパスを構築・公開し、日本語研究だけではなく、情報処理産業や教育界等、多方面に提供している。

3 第二言語（外国語）としての日本語教育研究

近年、日本で生活している外国人や留学生の増加とともに日本語学習に対するニーズが拡大・多様化している中で、国語研では、日本語を母語としない人の学習・習得について基礎的な研究を行おこない、国内外の日本語教育を学術的に支援している。

4 地方自治体との連携

立川市歴史民俗資料館との相互協力に関する合意書による活動

- ・子ども向け一般公開イベント「ニホンゴ探検」において、歴史民俗資料館職員による所蔵品の展示及び説明をおこなった（2018.7.14）。
- ・立川市女性総合センター・アイムにおいて、三井はるみ（言語変異研究領域・助教）による共同企画講演会「多摩の方言」を開催した（2019.2.11）。

5 見学・研修・視察等

団体見学：1件（東村山第二中学第1学年）

研修対応：1件（文部科学省関係機関職員研修生実地研修）

視察対応：1件（文部科学省学術機関課機構調整・共同利用係長）

6 学会等の後援・共催

- ・平成30年度日本語教育能力検定試験（2018.10.28）
主催者：公益財団法人日本国際教育支援協会
- ・平成30年度危機的な状況にある言語・方言サミット（宮古島大会）（2018.11.24）
主催者：文化庁、沖縄県、宮古島市、宮古島市教育委員会、国立国語研究所、琉球大学、北海道大学アイヌ・先住民研究センター

開催地：マティダ市民劇場（宮古島市文化ホール）

- ・東海日本語ネットワーク日本語ボランティアシンポジウム 2018「増え続ける外国人～どうする？わたしたちの日本語教室～」（2018.12.1）

主催者：東海日本語ネットワーク、公益財団法人名古屋国際センター

開催地：名古屋国際センター別棟ホール

- ・第 17 回全養協公開講座（2019.2.16）

主催者：一般社団法人全国日本語教師養成協議会

開催地：中央大学駿河台記念館 370 教室

- ・第 10 回産業日本語研究会・シンポジウム（2019.2.21）

主催者：高度言語情報融合フォーラム（ALAGIN）、一般財団法人日本特許情報機構

開催地：東京・丸ビルホール

7 広報

（1）刊行物

『国語研 ことばの波止場』（NINJAL Research Digest）

国立国語研究所の研究活動及び研究成果に関する情報を研究者コミュニティだけでなく、大学生から一般市民の方までが読んで楽しめる研究情報誌。2018 年度は第 4 号、第 5 号を発行した。

- ・Vol. 4 (2018.9)

・特集：言語資源の整備と研究成果発信（コーパス開発センター・研究情報発信センター）、コラム、研究者紹介、著書紹介

- ・Vol. 5 (2019.3)

・特集：言語変異と言語変化（「日本各地の地域言語を保存し、言語の多様性を維持する」・「ここまでできた！『日本語歴史コーパス』とその活用」）、コラム、研究者紹介、著書紹介

『国立国語研究所要覧 2018/2019』

国立国語研究所の特色や研究系・センターの活動、共同研究プロジェクト等の紹介冊子。

『国立国語研究所リーフレット』

『国立国語研究所英文リーフレット』

（2）Web 発信等

国立国語研究所ウェブサイト（<https://www.ninjal.ac.jp/>）

各種催し物、データベース等、国立国語研究所の最新情報からこれまでに蓄積された研究成果まで、幅広いコンテンツを紹介している。

国立国語研究所ポータルサイト『ことば研究館』（<https://kotobaken.jp/>）

ことばに関する一問一答式の記事『ことばの疑問』や、各種催し物、メディア掲載情報など、一般の方を対象に、ことば・日本語に関する様々なコンテンツをわかりやすく紹介している。

国立国語研究所公式 Twitter『こくごけん（公式）』（<https://twitter.com/kokugoken>）

各種催し物、各種データベース、公式サイトの更新情報など、最新の情報を紹介している。

メールマガジン『国語研からの御案内』

シンポジウム、コロキウム等のイベント、データベース紹介、職員公募など国語研からお知らせしたい事項について登録者に発信している。原則として月 2 回発行。

「国語研ムービー」

国立国語研究所の研究を分かりやすく紹介した動画を制作し、Web 配信（Youtube）やイベント時の上映をおこなっている。2018 年度は以下の動画を制作・公開した。

- ・ことばのミニ講義
 - ・「日本にはいくつ言語があるか？」
 - ・「「コップ、 それともカップ？」 単語の意味について考える」
- ・「むじか☆すとりあ」の音楽付きお話会
- ・講習会「日本語複合動詞の意味論」(NINJAL チュートリアル)
 - ・「日本語複合動詞の意味論：「コンストラクションとフレーム」」
 - ・「コンストラクション形態論と複合動詞」
 - ・「フレーム意味論」
- ・NINJAL フォーラム
 - ・講演「方言はどこまで通じるか？」
 - ・講演「方言の生まれるところ」
 - ・講演「ポップカルチャーと役割語」
 - ・講演「ことばとキャラ」
 - ・講演「日本語学習者のお国柄」
 - ・講演「ていねいさは世界共通か？」
 - ・パネルディスカッション「どうなる？これからの日本語」

(3) 一般向けイベント

NINJAL フォーラム

国立国語研究所が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた成果を学術界だけでなく、広く一般の方々に知っていただくとともに、社会との連携を積極的に推進して社会貢献に資するという観点からフォーラムを開催している。

第13回「日本語の変化を探る」 [2018年11月4日(一橋大学一橋講堂)]

- ・講演
 - ・小木曾智信(国立国語研究所)
「日本語歴史コーパスと上代語」
 - ・近藤泰弘(青山学院大学)
「平安時代語の話し手の言語感覚」
 - ・小木曾智信(国立国語研究所)
「コーパスで見る現代語の確立過程—江戸・明治・大正—」
 - ・丸山岳彦(専修大学)
「録音資料から知る、20世紀の日本語の変化観」
 - ・滝島雅子(NHK放送文化研究所)
「ことばの調査に見る現代日本語の変化」
- ・パネルディスカッション
 - ・ディスカッサント：塩田雄大(NHK放送文化研究所)、近藤泰弘、小木曾智信、丸山岳彦、滝島雅子

オープンハウス 2018

所員がどのような研究をしているのかを専門外の方や学部・大学院の学生にわかりやすく伝えることを目的として、開催するイベント。国立国語研究所の創立70周年および、人間文化研究機構移管10周年の記念事業の一環として実施した。[2018年12月22日(国立国語研究所)]

プログラム

- ・ポスター発表(全教員・特任研究員が研究活動を紹介)
- ・研究図書室見学ツアー(先着20名)

その他

- ・大学共同利用機関シンポジウム2018(出展) [2018年10月14日(名古屋市科学館)]
- ・「ことば」展示(「立川体験スタンプラリー」対象イベント) [2018年10月27日(国立国語研究所)]

(4) 児童・生徒向けイベント

NINJAL 職業発見プログラム

中学生や高校生向けに、言語学や日本語あるいは日本語教育を研究することを通じて、学問のたのしさや素晴らしさを知ってもらうためのプログラム。

- 2018年度受入校

- 宮城県仙台第一高等学校 (2018.7.5–6)
- 兵庫県立兵庫高等学校 (2018.8.1)
- 宮城県宮城野高等学校 (2018.8.3)
- 大妻中学校 (2018.11.21)
- 南アルプスこどもの村中学校 (2018.12.12)
- 立川市立立川第二中学校 (2019.3.5)
- 明星学園中学校 (2018.7.25)
- 富山県立富山高等学校 (2018.8.2)
- 新潟県立長岡高等学校 (2018.10.12)
- 群馬県立太田高等学校 (2018.12.12)
- 北海道教育大学附属函館中学校 (2019.2.20)

NINJAL ジュニアプログラム

主に小学生を対象に、子どもたちの身近にある題材を取り上げ、楽しみながら普段使っている日本語について考えられるような、ワークショップや出前授業などを実施した。

- 「語彙力がつく！辞書の活用」 [2018年5月1–2日 (府中市立府中第二中学校)]

対象: 中学校1年生6クラス、講師: 柏野和佳子 (音声言語研究領域准教授)

- 「めざせ！辞書引きの達人」 [2018年6月30日 (立川市立立川第三小学校)]

対象: 小学校3年生3クラス、講師: 柏野和佳子 (音声言語研究領域准教授)

- 「つくってあそんで辞書カルタ ことば博士になろう」 [2018年8月1日 (江戸川区子ども未来館)]

対象: 小学校3–6年生、講師: 柏野和佳子 (音声言語研究領域准教授)

ニホンゴ探検 2018 —1日研究員になろう—

児童・生徒・一般を対象に研究所を公開し、「日本語」「ことば」の魅力と不思議に触れられるプログラムが人気のイベント。 [2018年7月14日 (国立国語研究所)]

プログラム

- ことばのミニ講義

- 松本曜 (理論・対照研究領域教授)

「「コップ、それともカップ？」単語の意味について考える」

- 田窪行則 (国立国語研究所長)

「日本にはいくつ言語があるか」

- 全国ことばの旅

- 辞書引きコーナー

- にほんごスタンプラリークイズ

- れきみんワークショップ

- 音楽朗読劇

その他

- 平成30年度子ども霞が関見学デー (出展) [2018年8月1–2日 (文部科学省)]

V

大学院教育と若手研究者育成

1 連携大学院

一橋大学大学院言語社会研究科・東京外国语大学大学院総合国際学研究科

2005年度から、一橋大学との連携大学院プログラムを実施している。この連携大学院（日本語教育学位取得プログラム）は、日本語教育学、日本語学、日本文化に関する専門的な知識を備えた研究者や日本語教育者を育成することを目指している。また、2016年度から東京外国语大学大学院総合国際学研究科との連携大学院を開始した。これらの連携大学院において、国立国語研究所は日本語学やコーパス言語学等の分野を担当している。

2 特別共同利用研究員制度

国立国語研究所では、国内外の大学の要請に応じて、日本語研究・日本語教育研究などの分野を専攻する大学院生を特別共同利用研究員として受け入れている。国立国語研究所の設備、文献等の利用や、国立国語研究所の研究者から研究指導を受けることができる制度である。

- ・2018年度受入：3名
 - ・パヴィア大学（イタリア）
 - ・北京外国语大学北京日本学研究センター（中国）
 - ・ユトレヒト大学（オランダ）

3 NINJAL チュートリアル

日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を、第一線の教授陣によって、大学院生を中心とした若手研究者等に教授する講習会で、若手研究者の育成・サポートを目的としている。大学共同利用機関である国立国語研究所の特色を活かしたテーマを積極的に取り上げ、年数回、各地で実施している。2018年度は韓国での開催を含む第28-32回を実施した。

受講対象：原則として、大学院学生レベル

- ・大学院学生（修士課程または博士課程に在籍する者）
 - ・修士課程または博士課程を修了後、原則として6年未満の者
 - ・当該諸分野を専門とした職務に従事している者
 - ・大学院進学を目指す学部学生等
- ・第28回 [2018年6月30日-7月1日（中央大学校（韓国））]
「日本語の音声と文法」
講師：野田尚史（日本語教育研究領域教授）、窪薙晴夫（理論・対照研究領域教授）
- ・第29回 [2018年8月9日（一橋大学一橋講堂）]
「日本語複合動詞の意味論」
講師：松本曜（理論・対照研究領域教授）
- ・第30回 [2018年9月18日（京都大学吉田キャンパス）]
「日本語複合動詞の意味論」
講師：松本曜（理論・対照研究領域教授）
- ・第31回 [2018年10月15日（福岡市・リファレンス駅東ビル）]
「統語・意味解析コーパス（NPCMJ）チュートリアル」
講師：プラシャント・パルデシ（理論・対照研究領域教授）、吉本啓（理論・対照研究領域客員教授/東北大学教授）

・第32回 [2019年1月26日(東北大学川内北キャンパス)]

「統語・意味解析コーパス(NPCMJ)チュートリアル」

講師: プラシャント・パルデシ(理論・対照研究領域教授), 吉本啓(理論・対照研究領域客員教授/東北大学教授)

4 優れたポストドクターの登用

若手のポストドクターが、各種共同研究プロジェクトの運営を補助するとともにプロジェクトに関連する研究を自らおこなうことで、研究者としての自立性を向上させ、若手研究者のキャリアパスになる制度としてプロジェクト研究員(プロジェクトPDフェロー)制度を設け、公募により積極的に採用している(2018年度在籍者は10ページを参照)。

VI

教員の研究活動と成果

田窪 行則 (たくば ゆきのり) 国立国語研究所 所長

【学位】 博士（文学）（京都大学, 2006）

【学歴】 京都大学文学部言語学専攻卒業（1975），同修士課程修了（1977）

【職歴】 大韓民国東国大学校慶州分校日語日文科 招聘専任講師（国際交流基金教員拡充プログラムによる）（1980），神戸大学教養部 専任講師（日本語日本事情担当）（1982），同 助教授（1984），九州大学文学部 助教授（言語学講座）（1991），同 教授（1996），九州大学大学院人文科学研究院 教授（大学院重点化に伴う措置）（2000），京都大学大学院文学研究科 教授（2000），京都大学 名誉教授（2016），人間文化研究機構国立国語研究所 所長（2017）

【専門領域】 理論言語学，韓国語，琉球諸語，言語ドキュメンテーション，危機言語

【所属学会】 日本言語学会，日本語学会，日本語文法学会，日本音声学会，東アジア日本学会（韓国），アメリカ言語学会

【学会等の役員・委員】 言語学会 会長，言語学会 評議員，日本国際教育支援協会 理事，東アジア日本学会 委員，日本語学会 評議員，言語資源協会 理事

【受賞歴】

1991：認知科学会論文賞（談話管理理論からみた日本語の指示詞）

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」：メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学からみた日本語の音声と文法」：アドバイザリーボードメンバー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究（B）「言語使用と非言語的認知操作における空間指示枠の相関についての実験的研究」，17H02333：研究代表者
- ・科研費基盤研究（C）「条件文と位相空間の相関—条件文が非単調推論になるメカニズムの解明」，17K02699：研究分担者
- ・科研費基盤研究（B）「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」，17H02332：研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

田窪行則

「トコロの多義性を通じて見た言語，認知，論理」（会長就任講演），『言語研究』，154号，1-27頁，2018.9.25，DOI：10.11435/gengo.154.0_1.

田窪行則

「言語学」，日本語学会（編）『日本語学大辞典』，東京堂出版，304-306頁，2018.10.11.

【講演・口頭発表】

Yukinori Takubo

“How many languages are there in Japan?”, 招待講演，11th edition of the Language Resources and Evaluation Conference，宮崎，2018.5.10.

田窪行則

「従属節における係りの深さと受けの広さの相関について」，招待（パネル），第43回関西言語学会，甲南大学，2018.6.19.

Yukinori Takubo

“Mutual Intelligibility as a measure of linguistic distance and intergenerational transmission”，招待講

演, Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization, 国立国語研究所, 2018.8.8.

田窪行則

「宮古池間方言の形態音韻論」, 招待講演, 日本音声学会, 沖縄国際大学, 2018.9.16.

Yukinori Takubo and Masahiro Yamada

“Modal questions in Korean and Japanese”, 招待講演, Colloquium talk at Center for Linguistic Research, College of Humanities, Seoul National University (ソウル・韓国), 2018.10.24.

Masahiro Yamada, Yukinori Takubo, Shoichi Iwasaki, Celik Kenan, Soichiro Harada, Nobuko Kibe, Tyler Lau, Natsuko Nakagawa, Yuto Niinaga, Tomoko Otsuki, Manami Sato, Rihito Shirata, Gijs van der Lubbe, and Akiko Yokoyama

“Experimental Study of Inter-Language and Inter-Generational Intelligibility: Methodology and Case Studies of Ryukyuan Languages”, The 26th Japanese/Korean Linguistics Conference, University of California Los Angeles (UCLA) (ロサンゼルス・米国), 2018.11.30.

Yukinori Takubo

“Modals in Japanese”, 招待講演, Colloquium at Seoul Linguistics Forum, ソウル・韓国, 2018.12.7.

Yukinori Takubo

“Epistemic questions in Korean and Japanese”, 招待講演, Seoul Linguistics Forum—Modality in Discourse, College of Humanities, Seoul National University (ソウル・韓国), 2018.12.8.

Yukinori Takubo and Masahiro Yamada

“Why epistemic modals cannot be questioned: cases in Korean and Japanese”, 招待講演, Linguistic Colloquium at EALL, EALL, UHM (ホノルル・米国), 2019.1.11.

【研究調査】

- ・空間指示枠に関するジェスチャー実験(東京(国立国語研究所)), 2018.11.6, 11.13, 11.16.
- ・空間指示枠に関する言語的実験, 非言語的実験, ジェスチャー実験(高知市内), 2018.12.21.
- ・池間方言調査(沖縄県宮古島市西原地区), 2018.12.22-26, 2019.3.14-18.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・Semantics and Pragmatics Workshop in Tachikawa(主催: 科研費基盤研究 (C) Conditionals and topology; the origins of non-monotonicity), 国立国語研究所, 2018.9.20-21.

【一般向けの講演・セミナーなど】

田窪行則

「日本にはいくつ言語があるか」, ニホンゴ探検 ことばのミニ講義, 国立国語研究所, 2018.7.14.

田窪行則

「ことばを生きる言葉を残す」, 基調講演, 危機的な状況にある言語・方言サミット(宮古島大会), 宮古島(マティダ劇場), 2018.11.24.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材記事: 「日本語の多種多様な姿を言語資源として体系化する」, 文部科学教育通信, 2018.5.28.
- ・平成30年度日本語学会秋季大会 会長就任特別企画 会長対談 田窪行則氏を迎えて, 岐阜大学, 2018.10.13.
- ・南海日日新聞による取材, 2019.1.26.

窟園 晴夫 (くぼぞの はるお) 研究系 (理論・対照研究領域) 教授, 領域代表, 副所長

【学位】 Ph.D. (言語学) (エジンバラ大学, 1988)

【学歴】 大阪外国语大学外国语学部卒業 (1979), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期修了 (1981), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期中退 (1982), 英国・エジンバラ大学大学院博士課程修了 (1986)

【職歴】 南山大学外国语学部 助手 (1982), 同 講師 (1984), 同 助教授 (1990), 大阪外国语大学外国语学部 助教授 (1992), カリフォルニア大学サンタクルズ校 客員研究員 (フルブライト若手研究員) (1994-1995), マックスプランク心理言語学研究所 客員研究員 (1995), 神戸大学文学部 助教授 (1996), 同 教授 (2002), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授, 研究系長 (2010-2016), 同 研究系 (理論・対照研究領域) 教授, 領域代表, 副所長, 國際連携室長, IR 推進室長 (2016-), 東京大学客員教授 (2017-2018)

【専門領域】 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言

【所属学会】 日本言語学会, 日本音声学会, 日本音韻論学会, 日本語学会, 関西言語学会, 日本音響学会, Association for Laboratory Phonology

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 顧問・評議員, 日本音声学会 理事・評議員, 日本学術会議 連携会員, 理化学研究所脳科学研究センター 客員研究員, 東京言語研究所 運営委員長, Oxford Studies in Phonology and Phonetics Series (OUP) Advisory Editor, International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS) Permanent Council Member, Association for Laboratory Phonology Editorial Board Member

【受賞歴】

- 2018: 2017年度早稲田大学ティーチングアワード総長賞
- 2017: 国立国語研究所第15回特別所長賞
- 2015: 国立国語研究所第10回所長賞
- 2013: 国立国語研究所第6回所長賞
- 2010: 国立国語研究所第1回所長賞
- 1997: 第25回金田一京助博士記念賞 (金田一賞)
- 1995: 市河三喜賞
- 1988: 名古屋大学英文学会 IVY Award
- 1985: イギリス政府 Overseas Research Student Award

【2018年度に参画した共同研究】

- 基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法」: リーダー
- 基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- 新領域創出型共同研究プロジェクト「語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究」: コーディネーター
- 領域指定型共同研究プロジェクト「日本語から生成文法理論へ: 統語理論と言語獲得」: コーディネーター

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- 科研費基盤研究 (A)「日本語諸方言のプロソディーとプロソディ一体系の類型」, 26244022: 研究代表者
- 科研費挑戦的研究 (萌芽)「促音 (重子音) に関する学際的・国際的共同研究のためのネットワーク形成」, 17K18502: 研究代表者
- 科研費基盤研究 (S)「乳児音声発達の起源に迫る: アジアの言語から見た発達メカニズムの解明」, 16H06319: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

- 池内正幸, 窪園晴夫, 小菅和也 (編)
『英語学を英語授業に活かす』, 開拓社, 2018.9.25.

窪蘭晴夫, 木部暢子, 高木千恵 (編)

『鹿児島県甑島方言からみる文法の諸相』, くろしお出版, 2019.2.28.

Haruo Kubozono (ed.)

Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean (The Linguistic Review 36 (1)),
De Gruyter Mouton, 2019.2.

《論文・ブックチャプター》

Haruo Kubozono

“Prosodic evidence for syllable structure in Japanese”, *Proceedings of the 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics (MIT Working Papers in Linguistics)*, 88, pp. 35–50, 2018.4.

Haruo Kubozono

“Pitch accent”, Yoko Hasegawa (ed.) *The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics*, pp. 154–180, Cambridge University Press, 2018.5, DOI: [10.1017/9781316884461](https://doi.org/10.1017/9781316884461).

窪蘭晴夫

「英語と日本語のアクセント」, 池内正幸, 窪蘭晴夫, 小菅和也 (編) 『英語学を英語授業に活かす』, 開拓社, 250–267 頁, 2018.9.25.

Haruo Kubozono

“Loanword accent of Kyungsang Korean: A moraic analysis”, Kunio Nishiyama, Hideki Kishimoto, and Edith Aldridge (eds.) *Topics in Theoretical Asian Linguistics. Studies in Honor of John B. Whitman*, John Benjamins, pp. 303–329, 2018.12, DOI: [10.1075/la.250.15kub](https://doi.org/10.1075/la.250.15kub).

Haruo Kubozono

“Mora sensitivity in Kagoshima Japanese: Evidence from no contraction”, Ryan Bennett, *et al.*, (eds.) *Hana-bana: A Festschrift for Junko Ito and Armin Mester*, University of California, Santa Cruz, 2018.12.

Haruo Kubozono

“Focus prosody in Kagoshima Japanese”, R. Goedemans, J. Heinz, and H. van der Hulst (eds.) *The Study of Word Stress and Accent: Theories, Methods and Data*, Cambridge University Press, pp. 323–345, 2018.12, DOI: [10.1017/9781316683101.011](https://doi.org/10.1017/9781316683101.011).

Haruo Kubozono

“Secondary high tones in Koshikijima Japanese”, *The Linguistic Review*, 36 (1), pp. 25–50, 2019.2, DOI: [10.1515/tlr-2018-2006](https://doi.org/10.1515/tlr-2018-2006).

Junko Ito, Haruo Kubozono, Armin Mester, and Shin-ichi Tanaka

“Kattobase: The linguistic structure of Japanese baseball chants”, *Proceedings of Annual Meeting of Phonology (AMP) 2018*, 2019.2.

【講演・口頭発表】

神谷祥之介, 竹安大, 窪蘭晴夫

「日本語母語話者による英語の語末曖昧母音の知覚—アメリカ英語とイギリス英語の比較」, 日本音韻論学会春期大会, 大東文化大学, 2018.6.22.

Haruo Kubozono

“Evidence against superheavy syllables in Japanese: Quantity sensitivity in Tokyo and Kagoshima Japanese”, 基調講演, 7th International Conference on Phonology and Morphology, ソウル大学 (ソウル・韓国), 2018.6.30.

Haruo Kubozono

“Vocative and question intonation in southern Japanese”, 5th International Conference on Phonetics and Phonology, 国立国語研究所, 2018.10.28.

窟蘭晴夫

「鹿児島方言と甑島方言の呼びかけイントネーション」, 日本言語学会 157 回大会ワークショップ, 京都大学, 2018.11.28.

Haruo Kubozono

“Default word prosody and its effects on morphology”, 基調講演, 26th Japanese/Korean Linguistics Conference, カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (ロサンゼルス・米国), 2018.11.29.

Jungyun Seo, Sahyang Kim, Haruo Kubozono, and Taehong Cho

“Effects of mora, lexical pitch accent, and focus on Japanese preboundary lengthening”, 26th Japanese/Korean Linguistics Conference, カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (ロサンゼルス・米国), 2018.11.29.

Haruo Kubozono

“Vocative and question intonation in Japanese”, 招待講演, UCSC Phonology Colloquium, カリフォルニア大学サンタクルーズ校 (サンタクルーズ・米国), 2018.12.3.

窟蘭晴夫

「モダリティとイントネーション」, NINJAL シンポジウム, 東京証券会館, 2018.12.16.

窟蘭晴夫, 平田秀, 溝口愛

「日本語方言の呼びかけイントネーション」, 国語研オープンハウス, 国立国語研究所, 2018.12.22.

窟蘭晴夫

「甑島方言のプロソディー」, 镰島方言研究会, 関西大学, 2019.2.28.

窟蘭晴夫

「日本語研究の国際化—国立国語研究所の取り組み」, 日本学術会議「人文学の国際化と日本語分科会」, 東京大学, 2019.3.9.

窟蘭晴夫

「オノマトペの謎」, 基調講演, 東北大学言語学講演会, 東北大学, 2019.3.11.

【研究調査】

- ・小林方言のプロソディー調査 (宮崎県小林市), 2018.6.
- ・鹿児島方言のプロソディー調査 (鹿児島県薩摩川内市), 2018.8.
- ・甑島方言のプロソディー調査 (鹿児島県薩摩川内市上甑島), 2018.9.
- ・甑島方言のプロソディー調査 (鹿児島県薩摩川内市下甑島), 2018.12.
- ・鹿児島方言のプロソディー調査 (鹿児島県薩摩川内市), 2019.3.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・第 28 回 NINJAL チュートリアル (主催: 国立国語研究所), 韓国中央大学校, 2018.6.30–7.1.
- ・講習会 Scalar Implicature (主催: 対照言語学プロジェクト), 国立国語研究所, 2018.7.4.
- ・Pre-ICPP colloquium (主催: 対照言語学プロジェクト音声研究班), 国立国語研究所, 2018.10.25.
- ・5th International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2018) (主催: 対照言語学プロジェクト音声研究班), 国立国語研究所, 2018.10.26–28.
- ・日本言語学会ワークショップ「日本語の呼びかけイントネーション」(主催: 対照言語学プロジェクト音声研究班), 京都大学, 2018.11.18.
- ・Prosody and Grammar Festa 3 (主催: 対照言語学プロジェクト), 国立国語研究所, 2019.2.16–17.
- ・甑島方言研究会 (主催: 対照言語学プロジェクト音声研究班), 関西大学, 2019.2.28.
- ・第 14 回音韻論フェスタ (主催: 対照言語学プロジェクト音声研究班), 明海大学, 2019.3.4–5.

【一般向けの講演・セミナーなど】

窟蘭晴夫

「「学者」という仕事—ことばの世界、知の世界」, 川内高校創立記念講演会, 鹿児島県立川内高等学校, 2018.4.16.

窟蘭晴夫

「オノマトペの謎」, 名古屋 YWCA 講演会, 名古屋 YWCA, 2018.4.21.

窪蘭晴夫

「日本語のオノマトペ」, 京都市中京歯科医師会学術講演会, 京都市中京歯科医師会, 2018.5.19.

窪蘭晴夫

「「オノマトペ」って何だ?」, すぎなみ大人塾, セシオン杉並, 2018.7.13.

窪蘭晴夫

「方言とコミュニケーション」, 鹿児島県女性管理職研修会, リブマックス鹿児島, 2018.8.11.

窪蘭晴夫

「方言とツーリズム」, 薩摩川内市甑島ツーリズム講演会, 里町コミュニケーションセンター, 2018.9.7.

窪蘭晴夫

「甑島方言の大切さ」, 方言講演会, 薩摩川内市立里中学校, 2018.9.8.

窪蘭晴夫

「甑島方言の大切さ」, 方言講演会, 薩摩川内市立上甑中学校, 2018.9.8.

窪蘭晴夫

「通じない日本語一世代差・地域差からみる言葉の不思議」, 国立市図書室の集い, 国立市公民館, 2018.9.28.

窪蘭晴夫

「日本語の多様性」, 大学共同利用機関シンポジウム 2018, 名古屋市科学館, 2018.10.14.

窪蘭晴夫

「甑島方言の大切さ」, 方言講演会, 薩摩川内市立海陽中学校, 2018.12.10.

窪蘭晴夫

「甑島方言の大切さ」, 方言講演会, 薩摩川内市立海星中学校, 2018.12.10.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材記事: 「ことばと人の関係」, FM 薩摩川内あおマガ, 2018.6.
- ・取材記事: 「形容詞+「です」薄れる違和感」, 朝日新聞「ことばの広場」, 2018.10.3.
- ・取材記事: 「甑島方言のいま」, FM 薩摩川内あおマガ, 2018.12.
- ・取材記事: 「気持ちがいいと感じる音」, ウェブマガジン ZING!, 2019.3.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

窪蘭晴夫

「日本語の音声」, 第 28 回 NINJAL チュートリアル, 韓国中央大学校, 2018.7.1.

窪蘭晴夫

「日本語母方言から始める英語教育」, 教師のためのことばワークショップ, 東京言語研究所, 2018.8.18.

窪蘭晴夫

「日本語とオノマトペ」, 早稲田大学日本語教育公開講座, 早稲田大学, 2018.9.29.

窪蘭晴夫

「日本語の構造と音声教育」, 早稲田大学日本語教育公開講座, 早稲田大学, 2018.10.6.

《大学院非常勤講師(集中講義)》

- ・東京大学大学院 (2018.7)
- ・早稲田大学大学院 (2018.7)
- ・南山大学大学院 (2018.8)
- ・神戸市外国語大学大学院 (2018.12)

《若手研究者の受入》

- ・国立国語研究所 PD フェロー: 1 名
- ・日本学術振興会 PD: 1 名
- ・特別共同利用研究員: 1 名 (オランダ・ユトレヒト大学大学院生)

Prashant Vijay Pardeshi (プラシャント ウィジャイ パルデシ)

研究系（理論・対照研究領域）教授

【学位】博士（学術）（神戸大学, 2000）

【学歴】ジャワハルラル・ネル大学文学日本語専攻修士課程修了（1993），神戸大学大学院文化学研究科修了（2000）

【職歴】神戸大学文学部 講師（2005），同 人文学研究科 講師（2007），人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授（2009），同 教授（2011），同 研究系長（2014–2016），同 研究系（理論・対照研究領域）教授，研究情報発信センター長（2016–2018.3）

【専門領域】言語学，言語類型論，対照言語学

【所属学会】日本言語学会，日本語文法学会，関西言語学会

【受賞歴】

2018: 国立国語研究所第 16 回特別所長賞

2016: 国立国語研究所第 12 回特別所長賞

2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞

2007: 第 1 回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』優秀賞（パルデシ・プラシャント，桐生和幸，石田英明，小磯千尋（編）（2007）『日本語—マラーティー語基本動詞用法事典』（428 ページ），財団法人博報児童教育振興会 2005 年度第 1 回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』の研究助成支援による「日・マラーティー語の対照研究・日本語教育用基本動詞用法事典の作成」プロジェクト報告書）

2000: The Chatterjee-Ramanujan Prize for outstanding student contribution to *The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000*, Sage Publications, New Delhi, Thousand Oaks, and London, Paper title: “The Passive and Related Constructions in Marathi”.

【2018 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」：リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」：サブリーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」：サブリーダー

【2018 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究（B）「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」, 15H03210: 研究代表者
- ・科研費基盤研究（C）「マルチメディアが外国語学習者のイメージ・スキーマ形成に及ぼす影響とメカニズム」, 15K01076: 研究分担者
- ・科研費基盤研究（A）「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」, 18H03575: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

Prashant Pardeshi, Meena Ashizawa, Jayashree Bhopatkar, Manasi Shirgurkar, Bakul Vaidya, and Satomi Chida (translation and eds.)

Minaa no Nihongo prathamik bhag 1: bhashantar wa vyakaran (Marathi edition of 'Minna no Nihongo, Shokyuu I: Translation & Grammatical Notes' by 3A Corporation, Tokyo), Sachi Prakashan, Pune, INDIA, 2018.12.22.

Prashant Pardeshi, Meena Ashizawa, Jayashree Bhopatkar, Manasi Shirgurkar, Bakul Vaidya, and Satomi Chida (translation and eds.)

Minaa no Nihongo prathamik bhag 2: bhashantar wa vyakaran (Marathi edition of 'Minna no Nihongo, Shokyuu II: Translation & Grammatical Notes' by 3A Corporation, Tokyo), Sachi Prakashan, Pune, INDIA, 2018.12.22.

《論文・ブックチャプター》

Kishimoto Hideki, Peter Hook, and Prashant Pardeshi

“Displaced modification, Picture noun constructions in Marathi and Japanese”, Kunio Nishiyama, Hideki Kishimoto, and Edith Aldridge (eds.) *Topics in Theoretical Asian Linguistics. Studies in honor of John B. Whitman*, John Benjamins, pp. 45–71, 2018.4.

《コーパス・データベース類》

プラシャント・パルデシ, 岡野伸哉, 窪田悠介, 鈴木彩香, 長崎郁

「NPCMJ Explorer」, <http://nPCMj.ninjal.ac.jp/explorer/>, 2018.12.22.

日本語文型バンク開発メンバー

「日本語文型バンク」(データの補充), <http://bunkeibank.ninjal.ac.jp/>, 2019.2.

基本動詞ハンドブック班共同研究員

「基本動詞ハンドブック」(15万語見出しを追加), <http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>, 2019.3.3.

NPCMj 開発チーム

「NPCMJ コーパス」(1万文を追加), <http://nPCMj.ninjal.ac.jp/>, 2019.3.

【講演・口頭発表】

プラシャント・パルデシ

「今年度のNPCMJ プロジェクトの活動について」, 「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」2018年度第1回研究発表会, 岡山大学, 2018.6.22.

プラシャント・パルデシ, 窪田悠介

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究プロジェクト: 現状と今後の展望」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館, 2018.12.15.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル (主催: 国立国語研究所), 岡山大学, 2018.6.21.
- ・「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」2018年度第1回研究発表会 (主催: 国立国語研究所), 岡山大学, 2018.6.22.
- ・「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: 名詞修飾班 2018年度第1回研究発表会 (主催: 国立国語研究所), 名古屋大学東京オフィス, 2018.7.21.
- ・国立国語研究所 日本語学講習会 (主催: 国立国語研究所), ベトナム国家大学ハノイ校, 日越大学(ベトナム), 2018.8.11–12.
- ・国立国語研究所 日本語学講習会 (主催: 国立国語研究所), ベトナム国家大学HCM, 人文社会科学大学(ベトナム), 2018.8.14–15.
- ・国立国語研究所 日本語学講習会 (主催: 国立国語研究所, 共催: ケラニア大学日本学研究センター), ケラニア大学(スリランカ), 2018.9.9.
- ・国立国語研究所 日本語学講習会 (主催: 国立国語研究所, 共催: ペラデニア大学錫日研究センター), ペラデニア大学(スリランカ), 2018.9.11.
- ・第31回統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル (主催: 国立国語研究所), リファレンス駅東ビル(福岡市), 2018.10.15.
- ・「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」名詞修飾班 2018年度第2回研究発表会 (主催: 国立国語研究所), 神戸大学, 2018.11.10.
- ・第36回日本英語学会特別公開シンポジウム「ツリーバンク開発と言語理論」(主催: 国立国語研究所), 横浜国立大学, 2018.11.25.
- ・国立国語研究所日本語学講習会(主催: 国立国語研究所, 共催: TMV大学, 印日協会プネー, プネー大学日本語学科), Maharatta Chamber of Commerce, Industries and Agriculture(インド), 2018.12.22–23.
- ・第32回統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル(主催: 国立国語研究所, 共催: 東北大学), 東北大学, 2019.1.26.

- ・「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」2018年度第2回研究発表会(主催:国立国語研究所), 東北大学, 2019.1.27.
- ・国立国語研究所日本語学講習会(主催:国立国語研究所), セドナホテルヤンゴン(ミャンマー), 2019.2.23.
- ・国立国語研究所 日本語学講習会(主催:国立国語研究所, 共催:王立プノンペン大学外国語学部日本語学科), 王立プノンペン大学(カンボジア), 2019.3.16-17.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

プラシャント・パルデシ

「NPCMJ コーパスの理念と概要」, 統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル, 岡山大学, 2018.6.21.

プラシャント・パルデシ

「世界の言語と日本語」, 国立国語研究所 日本語学講習会, ベトナム国家大学ハノイ校, 日越大学(ベトナム), 2018.8.11.

プラシャント・パルデシ

「Aが座って, Bを書いて, CにBを送った: タコ型の日本語とムカデ型のベトナム語」, 国立国語研究所 日本語学講習会, ベトナム国家大学ハノイ校, 日越大学(ベトナム), 2018.8.12.

プラシャント・パルデシ

「世界の言語と日本語」, 国立国語研究所 日本語学講習会, ベトナム国家大学HCM, 人文社会科学大学(ベトナム), 2018.8.14.

プラシャント・パルデシ

「Aが座って, Bを書いて, CにBを送った: タコ型の日本語とムカデ型のベトナム語」, 国立国語研究所 日本語学講習会, ベトナム国家大学HCM, 人文社会科学大学(ベトナム), 2018.8.15.

プラシャント・パルデシ

「外から見た日本語, 日本語とシンハラ語を比べてみよう」, 国立国語研究所 日本語学講習会, ケラニア大学(スリランカ), 2018.9.9.

プラシャント・パルデシ

「Aが座って, Bを書いて, CにBを送った: 動詞の分類について」, 国立国語研究所 日本語学講習会, ケラニア大学(スリランカ), 2018.9.9.

Prashant Pardeshi

“Online Resources to Explore Japanese Vocabulary”, 国立国語研究所 日本語学講習会, ペラデニア大学(スリランカ), 2018.9.11.

プラシャント・パルデシ

「NPCMJ コーパスの理念と概要」, 第31回統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル, リファレンス駅東ビル(福岡市), 2018.10.15.

プラシャント・パルデシ

「日本語は特殊な言語, 普通の言語?: マラーティー語や世界の言語から見た日本語」, 国立国語研究所 日本語学講習会, Maharatta Chamber of Commerce, Industries and Agriculture(インド), 2018.12.22.

プラシャント・パルデシ

「Aが座って, Bを書いて, CにBを送った: 動詞の分類について」, 国立国語研究所 日本語学講習会, Maharatta Chamber of Commerce, Industries and Agriculture(インド), 2018.12.23.

Prashant Pardeshi

“Online Resources to Explore Japanese Vocabulary”, ABK-AOTS, The Japan Foundation, Chennai Office, India(インド), 2018.12.25.

プラシャント・パルデシ

「NPCMJ コーパスの理念と概要」, 第32回統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル, 東北

大学, 2019.1.26.

プラシャント・パルデシ

「日本語は特殊な言語, 普通の言語?: 世界の言語から見た日本語」, 国立国語研究所 日本語学講習会, セドナホテルヤンゴン (ミャンマー), 2019.2.23.

プラシャント・パルデシ

「世界の文字から見た日本語の文字」, Thin Myanmar Language Center, Yangon (ミャンマー), 2019.2.24.

プラシャント・パルデシ

「日本語学習に役立つウェブ教材—「基本動詞ハンドブック」と「日本語文型バンク」—」, 東吳大學日本語文學系 (台湾), 2019.3.5.

プラシャント・パルデシ, 今村泰也

「日本語学習に役立つウェブ教材—「基本動詞ハンドブック」と「日本語文型バンク」—」, 王立プノンペン大学外国語学部日本語学科 (カンボジア), 2019.3.15.

プラシャント・パルデシ

「世界の言語と日本語」, 国立国語研究所 日本語学講習会, 王立プノンペン大学 (カンボジア), 2019.3.16.

プラシャント・パルデシ

「A が座って, B を書いて, C に B を送った: 動詞の分類について」, 国立国語研究所 日本語学講習会, 王立プノンペン大学 (カンボジア), 2019.3.17.

Prashant Pardeshi

“Viewing Japanese KANJI from the scripts of the world”, Faculty of Philosophy, University of Sarajevo (ボスニア・ヘルツェゴビナ), 2019.3.22–23.

Prashant Pardeshi

“Is Japanese a special language?: Japanese as viewed from the languages of the world”, Japanese Language, Literature and Culture, Faculty of Philology, University of Belgrade (セルビア), 2019.3.25.

Prashant Pardeshi

“Online resources to explore Japanese vocabulary”, Japanese Language, Literature and Culture, Faculty of Philology, University of Belgrade (セルビア), 2019.3.26.

松本 曜 (まつもと よう) 研究系 (理論・対照研究領域) 教授

【学位】 Ph.D. (言語学) (米国スタンフォード大学, 1992)

【学歴】 上智大学外国語学部英語学科卒業 (1983), 上智大学外国語学研究科博士課程前期課程修了 (1985),
スタンフォード大学言語学科博士課程修了 (1992)

【職歴】 東京基督教大学神学部 専任講師 (1992), 明治学院大学文学部 専任講師 (1995), 明治学院大学文学
部 助教授 (1996), 明治学院大学文学部 教授 (2002), 神戸大学文学部 教授 (2004), 神戸大学人文学研
究科 教授 (2007), 人間文化研究機構国立国語研究所 研究系 (理論・対照研究領域) 教授 (2017)

【専門領域】 意味論, 認知言語学

【所属学会】 日本言語学会, 日本英語学会, 日本認知言語学会, 関西言語学会, アメリカ言語学会, 国際認知
言語学会

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 評議員, 関西言語学会 運営委員, 国際認知言語学会 理事, 日本英語学
会 評議員

【2018 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法」: サブリーダー

【2018 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 科研費基盤研究 (B)「移動表現による言語類型: 実験的統一課題による通言語的研究」, 15H03206: 研
究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

松本曜

「意味論と語用論は近づいたか」, 『語用論研究』, 20 卷, 104–109 頁, 2019.3.20.

【講演・口頭発表】

Miho Mano, Yuko Yoshinari, and Yo Matsumoto

“Representation of Sequential Path of Motion in L2: L1 Influence, Simplification, and Entrenched
Patterns,” EuroSLA 28, WWU (Munster) 2018.9.6.

松本曜

「課題と仮説」, 日本言語学会第 157 回大会ワークショップ「移動経路の種類とそのコード化: 通言語
的ビデオ実験による移動表現の類型論再考」, 京都大学, 2018.11.18.

Badema and Yo Matsumoto

“Khorchin Mongolian,” Motion Event Descriptions across Languages (MEDAL), 国立国語研究所,
2019.1.26.

Yo Matsumoto

“Path: Path coding across languages,” Motion Event Descriptions across Languages (MEDAL), 国
立国語研究所, 2019.1.26.

Yo Matsumoto and Xia Haiyan

“The interactional nature of deictic verbs in Japanese and Chinese,” Motion Event Descriptions
across Languages (MEDAL), 国立国語研究所, 2019.1.26.

Yo Matsumoto

“Vision: Path in Visual motion across languages,” Motion Event Descriptions across Languages
(MEDAL), 国立国語研究所, 2019.1.27.

Miho Mano and Yo Matsumoto

“Causation: Typological variety of caused motion event descriptions,” Motion Event Descriptions
across Languages (MEDAL), 国立国語研究所, 2019.1.27.

Miho Mano and Yo Matsumoto

“Typological variety of caused motion event descriptions,” Motion Event Descriptions across Languages (MEDAL), 国立国語研究所, 2019.1.27.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・日本言語学会ワークショップ「移動経路の種類とそのコード化: 通言語的ビデオ実験による移動表現の類型論再考」(主催: 国立国語研究所理論対照研究領域), 京都大学, 2018.11.18.
- ・Motion Event Descriptions across Languages (主催: 国立国語研究所理論対照研究領域), 国立国語研究所, 2019.1.26–27.
- ・NINJAL Special Lecture: The Targeting System of Language (主催: 国立国語研究所理論対照研究領域), 国立国語研究所, 2019.3.22–23.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・第 15 回国際認知言語学会開催実行委員長
- ・新日本聖書刊行会翻訳編集委員会日本語主任

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

松本曜

「日本語複合動詞の意味論」, 第 29 回 NINJAL チュートリアル, 一橋講堂, 2018.8.9.

松本曜

「日本語複合動詞の意味論」, 第 30 回 NINJAL チュートリアル, 京都大学, 2018.9.18.

木部暢子 (きべ のぶこ) 研究系 (言語変異研究領域) 教授, 領域代表, 副所長

【学位】博士 (文学) (九州大学, 1998)

【学歴】九州大学文学部文学科卒業 (1978), 九州大学大学院文学研究科修士課程修了 (1980)

【職歴】純真女子短期大学 助手 (1980), 同 講師 (1981), 福岡女学院短期大学 講師 (1985), 鹿児島大学法文学部 助教授 (1988), 同 教授 (1999), 同 副学部長 (2004), 同 学部長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授, 副所長 (2010), 同 研究系長 (2010–2016), 同 研究系 (言語変異研究領域) 教授, 領域代表 (2016)

【専門領域】日本語学, 方言学, 音声学, 音韻論

【所属学会】日本語学会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本方言研究会, 西日本国語国文学会

【学会等の役員・委員】日本学術会議 会員, 日本語学会 評議員, 日本音声学会 理事, 文化庁国語課 平成30年度危機的な状況にある言語: 方言に関する研究協議会委員, 国文学研究資料館 古典籍共同研究事業センター 運営委員会委員

【受賞歴】

2013: 国立国語研究所第8回所長賞

1990: 新村出財団 研究助成

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: メンバー
- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」国語研ユニット「方言の記録と継承による地域文化の再構築」: 研究代表者
- ・「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」国語研ユニット「消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化」: 研究代表者
- ・機関間連携・異分野連携研究プロジェクト「日本列島における人間・文化の起源とその発展に関する総合的研究」: 研究分担者

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究 (A)「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933: 研究代表者
- ・科研費基盤研究 (S)「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」, 17H06115: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (A)「日本語諸方言のプロソディーとプロソディ一体系の類型」, 26244022: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (B)「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」, 17H02332: 研究分担者
- ・科研費新学術領域研究 (研究領域提案型)「日本語と関連言語の比較解析によるヤポネシア人の歴史の解明」総括班, 18H05505: 研究分担者
- ・科研費新学術領域研究 (研究領域提案型)「日本語と関連言語の比較解析によるヤポネシア人の歴史の解明」言語班, 18H05510: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

木部暢子, 山本友美, 麻生玲子, 新永悠人 (編)

『椎葉村方言語彙集中間報告書—仲塔・松尾編一』, 国立国語研究所 (プロジェクト報告書), 2018.5.

窪薙晴夫, 木部暢子, 高木千恵 (編)

『鹿児島県甑島方言からみる文法の諸相』, くろしお出版, 2019.2.28.

青井隼人, 木部暢子 (編)

『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 木曽川方言調査報告書』, 国立国語研究所 (プロジェクト報告書), 2019.3.20.

麻生玲子, 山本友美, 木部暢子 (編)

『椎葉村方言語彙集中間報告書—上椎葉・尾八重・鹿野遊・大河内編一』, 国立国語研究所 (プロジェクト報告書), 2019.3.

《論文・ブックチャプター》

木部暢子

「アクセント」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 7–11 頁, 東京堂出版, 2018.10.10.

木部暢子

「危機言語」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 204–206 頁, 東京堂出版, 2018.10.10.

木部暢子

「消えゆく言語・方言を守るには」, 『國學院雑誌』, 119 卷 12 号, 47–56 頁, 2018.11.15.

Nobuko Kibe, Hajime Oshima, and Masahiro Yamada

“Plural Forms in Yoron-Ryukyuan and Address Nouns in Ryukyuan Languages”, *Japanese/Korean Linguistics*, 25, pp. 1–11, 2018.12.1, DOI: 10.15084/00002237.

木部暢子

「疑問文の文末音調による系統内類型論の試み—イントネーション研究のために—」, 『国語と国文学』, 96 卷 1 号, 3–13 頁, 2019.1.1.

木部暢子

「日本語方言の多様性—アクセントの地域差—」, 『東京外国語大学 国際日本学研究 報告』, 5 卷, 1–9 頁, 2019.2.28, DOI: 10.15026/92928.

木部暢子

「日本の危機言語・方言—奄美・沖縄の親族名称・親族呼称—」, 『東京外国語大学 国際日本学研究 報告』, 5 卷, 10–19 頁, 2019.2.28, DOI: 10.15026/92929.

木部暢子

「対格標示形式の地域差—無助詞形をめぐって—」, 『東京外国語大学 国際日本学研究 報告』, 5 卷, 20–32 頁, 2019.2.28, DOI: 10.15026/92930.

木部暢子

「奄美・沖縄の言語研究から—奄美方言のエビデンシャリティ—」, 『東京外国語大学 国際日本学研究 報告』, 5 卷, 33–46 頁, 2019.2.28, DOI: 10.15026/92931.

木部暢子

「木曽川方言の疑問文の文末音調」, 青井隼人, 木部暢子 (編) 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 木曽川方言調査報告書』, 国立国語研究所, 2019.3.20.

木部暢子

「方言のある暮らし—言葉は文化の源—」, 葉山茂, 麻生玲子 (編) 『地域文化をはぐくむ』, 22–35 頁, 人間文化研究機構広領域連携型基幹プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」, 2019.3.25.

《コーパス・データベース類》

セリック・ケナン, カルリノ・サルバトーレ, 木部暢子

「宮古本島 (砂川, 池間西原), 沖縄 (伊平屋村田名) の基礎語彙」, <http://kikigengo.ninjal.ac.jp/>, 2018.12.1.

セリック・ケナン, 木部暢子

「宮古島 (本島), 多良間島の自然談話」, <http://kikigengo.ninjal.ac.jp/>, 2018.12.1.

木部暢子, 佐藤久美子, 大槻知世, 中澤光平, 上村健太郎

「日本語諸方言コーパス」, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>, 2019.3.31.

《展示など》

- ・「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 神奈川大学, 国立歴史民俗博物館と共同開催, 2018.5.7–25.

- ・「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 弘前大学, 2018.5.28–6.15.
- ・「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 羽田空港国際線ターミナル, 国立歴史民俗博物館と共同開催, 2018.8.24–9.14.
- ・「方言の世界」展示, 大学共同利用機関シンポジウム 2018, 名古屋市科学館, 2018.10.14.
- ・松江市市民活動フェスタ「日本海のことばと文化」, 「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 島根県松江市, まつえ市民大学サポーターの会と共同開催, 2018.9.25.
- ・鹿児島大学・人間文化研究機構協定締結記念シンポジウム「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 鹿児島大学, 2018.9.29.
- ・国語研オープンハウス「日本海のことばと文化」, 「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 国立国語研究所, 2018.12.22.
- ・「日本海のことばと文化」, 「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 富山大学図書館, 2019.2.12–19.
- ・「方言の世界」, 「日本海のことばと文化」展示, 国立歴史民俗博物館, 2019.3.14–2019.4.

《その他の出版物・記事》

木部暢子, 山田真寛

「「いま何もしなければ」なくなってしまう日本各地の地域言語を保存し、言語の多様性を維持する」, 『国語研 ことばの波止場』, Vol. 5, 2019.3.

【講演・口頭発表】

Nobuko Kibe, Tomoyo Otsuki, and Kumiko Sato

“Intonational Variations at the End of Interrogative Sentences in Japanese Dialects: From the “Corpus of Japanese Dialects””, Special Session, LREC-2018, 宮崎シーガイア, 2018.5.9.

木部暢子

「危機言語の記録・保存・復興」, 招待講演, 沖縄言語研究センター 40 周年記念シンポジウム, 沖縄国際大学, 2018.7.7.

Nobuko Kibe

“Accent systems in Japanese dialects”, NINJAL International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization, 国立国語研究所, 2018.8.6.

木部暢子

「奄美における言語復興の取組み」, 招待講演, 文化庁国語課「危機的な状況にある言語・方言に関する研究協議会」, 文部科学省, 2018.8.28.

木部暢子

「疑問文のイントネーション」, 方言コーパス研究発表会「日本語諸方言コーパスデータを使った方言の分析」, 国立国語研究所, 2018.9.6.

木部暢子

「方言コーパスに見るモダリティ形式のバリエーション」, コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ—」, 国立国語研究所, 2018.9.7.

Takayuki Kagomiya, Yuto Niinaga, and Nobuko Kibe

“Developing a Block Puzzle Game for Studying Ryukyuan Language Phonetic System”, ポスター発表, Eighth Conference of Japanese Association for Digital Humanities (JADH2018), Hitotsubashi-Hall, Tokyo, 2018.9.10.

木部暢子

「日本語と琉球語の成立をさぐる—アクセントの比較対照から—」, 招待講演, 第 72 回日本人類学会, 三島市文化会館, 2018.10.21.

木部暢子

「方言コーパスに見るモダリティ形式のバリエーション」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日

本語研究」, 東京証券会館, 2018.12.16.

Nobuko Kibe

“Intonational Variations at the End of Interrogative Sentences in Japanese Dialects”, The NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Workshop: Grammatical Descriptions of Endangered and Understudied Languages and Dialects in East Asia and Beyond, University of Hawai‘i at Mānoa (ホノルル・米国), 2019.1.13.

木部暢子

「日本語の系統内類型論の試み」, 新学術領域・ヤポネシアゲノム・言語班 2018 年度第 2 回研究集会, 与那国町観光協会会議室, 2019.2.21–25.

Kenan Celik, and Nobuko Kibe

“Raising language diversity awareness in Japan through web-based open access application”, The 6th International Conference on Language Documentation & Conservation, University of Hawai‘i at Mānoa (ホノルル・米国), 2019.3.1.

【研究調査】

- ・宮崎県椎葉村（松尾, 尾手納, 向山日当）方言調査, 2018.5.
- ・鹿児島県大島郡与論島方言調査, 2018.7, 2018.8, 2018.10, 2019.3.
- ・青森県むつ市方言調査（弘前大学と共同実施）, 2018.8.
- ・宮崎県椎葉村（鹿野遊当）方言調査, 2018.9.
- ・鹿児島県大島郡和泊町 沖永良部方言調査, 2019.1.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成平成 30 年度第 1 回研究発表会「動詞・形容詞（琉球諸語）」（主催：危機言語・方言プロジェクト），国立国語研究所, 2018.6.17.
- ・Poster Session（国際シンポジウムプレイベント）（主催：危機言語・方言プロジェクト），国立国語研究所, 2018.8.5.
- ・Workshop “A brief introduction to the immersion classroom: A case of Hawaiian language”（国際シンポジウムプレイベント）（主催：危機言語・方言プロジェクト），国立国語研究所, 2018.8.5.
- ・The NINJAL International Symposium “Approaches to Endangered Languages in Japan and North-east Asia: Description, Documentation and Revitalization”（主催：危機言語・方言プロジェクト，共催：東京外国語大学 AA 研・科研 S），国立国語研究所, 2018.8.6–8.
- ・A talk event commemorative of the academic cooperation between University of Hawai‘i at Mānoa and NINJAL: “Experimental syntactic research at University of Hawai‘i at Mānoa: an overview and case studies”（主催：危機言語・方言プロジェクト），国立国語研究所, 2018.8.9.
- ・方言コーパス研究発表会「日本語諸方言コーパスデータを使った方言の分析」（主催：危機言語・方言プロジェクト），国立国語研究所, 2018.9.6.
- ・平成 30 年度コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」（主催：危機言語・方言，通時コーパス，日常会話コーパス，学習者コーパス，共催：科研 A, 科研 B），国立国語研究所, 2018.9.7.
- ・危機的な状況にある言語・方言サミット（宮古島）（主催：文化庁，共催：危機言語・方言プロジェクト，沖縄県，宮古島市，宮古島市教育委員会，琉球大学，北海道大学アイヌ・先住民研究センター），マティダ市民劇場（沖縄県宮古島市），2018.11.24.
- ・出雲弁シンポジウム「出雲方言の探究と保存継承活動の活発化に向けて」（主催：危機言語・方言プロジェクト，共催：まつえ市民大学センターの会），松江市市民活動センター, 2018.12.1.
- ・Sign linguistics for documentation: From theory to fieldwork（主催：危機言語・方言プロジェクト），国立国語研究所, 2018.12.10.
- ・Workshop “The NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Workshop: Grammatical Descriptions of Endangered and Understudied Languages and Dialects in East Asia and Beyond”（主催：危機言語・方言プロジェクト），国立国語研究所, 2019.1.13.

プロジェクト, 共催: ハワイ大学マノア校, 琉球諸語研), University of Hawai‘i at Mānoa (ホノルル・米国), 2019.1.12-13.

- ・国立国語研究所共同研究プロジェクト公開研究発表会「動詞・形容詞詞 (本土諸方言)」(主催: 危機言語・方言プロジェクト), 国立国語研究所, 2019.3.10.

【一般向けの講演・セミナーなど】

木部暢子

「危機的な状況にある言語・方言の現状報告 (八丈・奄美・琉球)」, 危機的な状況にある言語・方言サミット (宮古島), マティダ市民劇場 (宮古島市文化ホール), 2018.11.24.

木部暢子

「方言の保存継承活動の現状と課題」, 出雲弁シンポジウム「出雲方言の探究と保存継承活動の活発化に向けて」, 松江市市民活動センター, 2018.12.1.

木部暢子

「世界から方言が消えたなら? 一知られざる「弱小言語」の魅力」, 大手町アカデミア, 読売新聞ビル3階「新聞教室」, 2019.2.7.

木部暢子

「あなたも方言を展示してみよう」, 国立国語研究所 消滅の危機にあることばと方言レクチャー, 富山大学図書館, 2019.2.14.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ムートン社 HANDBOOKS OF JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS Series, *Handbook of Japanese Dialects* の編集
- ・三省堂『明解方言学辞典』編集委員
- ・取材記事: 「故郷の言葉を守りたい～日本の“消滅危機言語”～」, NHK ハートネットTV, 2018.10.17.
- ・取材記事: 「地域守るため保存, 継承」, 宮古毎日新聞, 2018.11.25.
- ・取材記事: 「消滅危機言語一堂に」, 宮古新報, 2018.11.25.
- ・取材記事: 「方言の多様性 継承へ」, 沖縄タイムス, 2018.11.25.
- ・取材記事: 「島の言葉 鍵は若者」, 琉球新報, 2018.11.25.
- ・取材記事: 「消滅危機の言葉を守れ 宮古島で方言サミット」, 琉球朝日放送プラスワン, 2018.11.25.
- ・取材記事: 「方言の面白さ伝える巡回展示」, 朝日新聞 富山, 2019.2.14.
- ・取材記事: 「日本の方言地図 富大にお目見え」, 毎日新聞 富山, 2019.2.14.
- ・取材記事: 「ばんそうこうを何と言う? 国立国語研「方言ミュージアム」巡回展」, 富山新聞, 2019.2.14.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

木部暢子

「調査の事前準備について, 東北方言の音韻・音声の特徴とその書き起こし方法について」, 地域文化振興実習, 弘前大学人文学部, 2018.6.4.

木部暢子

「ことばは文化の源一方言の記録と継承による地域文化の再構築ー」, 島嶼政策特論, 鹿児島大学人文社会科学研究科 博士後期課程 地域政策科学専攻, 2018.11.4.

木部暢子

「地域文化の可能性」, 島嶼政策特論, 鹿児島大学人文社会科学研究科 博士後期課程 地域政策科学専攻, 2019.1.24.

《博士論文審査委員》

- ・東京大学大学院: 論文博士申請論文審査委員 (副査), 2018.6.
- ・國學院大学大学院: 論文博士申請論文審査委員 (副査), 2018.12.

《若手研究者の受入》

- ・日本学術振興会特別研究員: 3名

朝日 祥之 (あさひ よしゆき) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】博士（文学）（大阪大学, 2004）

【学歴】関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業（1997）, エセックス大学大学院言語・言語学研究科社会言語学専攻修士課程修了（1998）, 大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士課程後期課程修了（2004）

【職歴】独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第二領域 研究員（2004）, 同 研究開発部門言語生活グループ 研究員（2006）, 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009）, 同 研究系（言語変異研究領域）准教授（2016）

【専門領域】社会言語学, 言語学, 日本語学

【所属学会】International Congress for Dialectologists and Geolinguists, METHODS, Foundation for Endangered Languages, 関西言語学会, 日本言語政策学会, 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会, マイグレーション研究会

【学会等の役員・委員】変異理論研究会 世話人, NWA-AP Steering committee member, Asia-Pacific Language Variation Editorial board member, International Journal of the Sociology of Language Editorial board member, 北海道方言研究会 副会長

【受賞歴】

2013: 国立国語研究所第6回所長賞

2010: 第9回徳川宗賢優秀賞（社会言語科学会）

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」: 研究代表者
- ・所長裁量経費プロジェクト「人文情報学の研究法を活用した日系移民の言語生活史の記述と公開」: リーダー

【研究業績】

《コーパス・データベース類》

朝日祥之, 宮崎早季, 高山善裕

「日系移民関連関係資料（録音資料）一覧」, 国立国会図書館リサーチナビ, 2018.8.9.

朝日祥之, 宮崎早季, 高山善裕

「移民資料館アワー」, 国立国会図書館リサーチナビ, 2019.3.3.

《その他の出版物・記事》

朝日祥之

「北米の日本関連在外資料目録の整備とデジタル人文学的活用」, 『きざし』, 2019.3.

【講演・口頭発表】

朝日祥之

「人の移動の社会言語学: 日本語をめぐる事象を中心として」, 招待講演, Linguistics & NINJAL ユニット研究会, 東京外国語大学, 2018.5.11.

朝日祥之

「ことばのスタイル: 日本におけるスタイル研究」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「議会会議録を活用したスタイル変異研究」研究発表会, 明治大学, 2018.5.18.

Yoshiyuki Asahi

“Contact between Japanese and Palauan: Sociolinguistic fieldwork interfacing with language acquisition and language policy research”, Sociolinguistics Symposium 22, University of Auckland (オーカランド・ニュージーランド), 2018.6.27.

Yoshiyuki Asahi

“A quantitative study of the Vowel Loss in Hawai‘i and American Japanese”, Sociolinguistics Symposium 22, University of Auckland (オークランド・ニュージーランド), 2018.6.28.

Yoshiyuki Asahi

“Comparative account of High Vowel Loss in diaspora Japanese: Evidence from Hawai‘i and US”, International Congress for Dialectologist and Geolinguist, Institute of the Lithuanian Language (ヴィリニュス・リトアニア), 2018.7.24.

Yoshiyuki Asahi, Eveline Wandl-Vogt, and Jose Luis Preza Dia.

“Collaborative approaches to implement science as a service in an open innovation in science framework Japanese diaspora studies on the example of Thomas Taro”, Japanese Association of Digital Humanities, 一橋講堂, 2018.9.10.

Yoshiyuki Asahi

“20-years language change in Hokkaido dialects: Evidence from real-time study in Sapporo, Furano, and Kushiro”, Urban Language Seminar 16, 大分大学, 2018.9.11.

朝日祥之

「多様化の進む地域社会における日本語を見つめる研究」, 招待講演, 東京外国語大学連続講演会 2018 「国際日本学がめざすもの: その多面性と可能性」, 東京外国語大学, 2018.10.18.

朝日祥之

「日系社会における言語生活の可視化: 国内外の資料から」, 第3回東アジア日本研究者協議会国際学術大会, 京都リサーチパーク, 2018.10.28.

朝日祥之

「日本関連在外資料の現場から: 日本語読本の書き込みについて」, NINJALシンポジウム, 東京証券会館, 2018.12.15.

朝日祥之

「経年調査の新たな挑戦: 日本語の将来を占うために」, NINJAL70周年記念オープンハウス 2018シンポジウム, 国立国語研究所, 2018.12.22.

朝日祥之

「海外への人の移動史の精緻化を目指して—在外資料がもたらすもの—」, 国際都市平戸と異文化へのあこがれ, 平戸オランダ商館, 2019.2.8.

朝日祥之, 高山善裕, 宮崎早季

「国立国会図書館所蔵日系移民関係録音資料の整備と公開—ハワイ日本語ラジオ放送「移民資料館アワー」を題材に—」,マイグレーション研究会, 阪南大学, 2019.3.2.

Yoshiyuki Asahi

“The Impacts of the Japanese Empire on multilingualism and multiculturalism in Sakhalin”, 招待講演, The Studies of the Empire of Japan and Its Legacies New Directions and New Perspectives ~ A new research initiative for the advancement of Asia-Pacific Studies, University of Hawai‘i at Mānoa (ホノルル・米国), 2019.3.12.

Yoshiyuki Asahi

“Access the resources to deepen understanding of the languages in Sakhalin”, 招待講演, Workshop on The Studies of the Empire of Japan and Its Legacies New Directions and New Perspectives ~ A new research initiative for the advancement of Asia-Pacific Studies, University of Hawai‘i at Mānoa (ホノルル・米国), 2019.3.13.

Yoshiyuki Asahi

“Stylistic changes in the local assembly speeches in Nagoya: a case of Takeshi Kawamura”, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「議会会議録を活用したスタイル変異研究」研究発表会, 国立国語研

究所, 2019.3.26.

【研究調査】

- ・ハワイ大学マノア校所蔵資料の調査 (アメリカ合衆国ハワイ州ホノルル市), 2018.5.
- ・日系移民に関する調査 (沖縄県公文書館 (沖縄県南風原町)), 2018.6, 2019.2.
- ・陸軍日本語学校に関する調査 (アメリカ合衆国ミシガン州アナーバー), 2018.8.
- ・日系移民に関する調査 (アメリカ合衆国ハワイ州ホノルル市, コナ市), 2018.9, 2018.11, 2019.3.
- ・天理大学参考館所蔵の資料調査 (奈良県天理市), 2018.9.
- ・デジタル人文学的調査 (オーストリア科学アカデミー (ウィーン・オーストリア)), 2018.11.
- ・日系移民に関する調査 (UCC珈琲博物館 (兵庫県神戸市)), 2019.1.
- ・日系移民に関する調査 (日本ハワイ移民資料館 (山口県周防大島町)), 2019.2.

【一般向けの講演・セミナーなど】

朝日祥之

「戦時中のアメリカにおける日本語教育」, 特別講演会, 東京外国語大学, 2018.9.28.

朝日祥之

「戦前期から戦中期のアメリカにおける日本語教育とその後」, 特別講演会, 大阪大学, 2018.10.30

朝日祥之

「比嘉太郎資料について」, 比嘉太郎勉強会, 北中城村島袋公民館, 2019.2.7.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・制作協力: NHK BS プレミアム「新日本風土記 ハワイ (1)」, 2018.4.6.

【大学院教育・若手研究者育成】

《連携大学院》

- ・東京外国語大学大学院国際日本研究院 准教授

井上 文子 (いのうえ ふみこ) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】 修士 (文学) (大阪大学, 1992)

【学歴】 高知女子大学文学部国文学科卒業 (1984), 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程日本学専攻修了 (1992), 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程日本学専攻中退 (1994)

【職歴】 大阪大学文学部 助手 (1994), 国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員 (1995), 同 主任研究官 (1997), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員 (2001), 同 情報資料部門資料整備グループ グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 方言学, 社会言語学

【所属学会】 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会, 日本語文法学会

【学会等の役員・委員】 日本方言研究会 総務委員会 世話人外委員

【受賞歴】

1993: 第 11 回新村出記念財団 研究助成

【2018 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー

【2018 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 科研費研究成果公開促進費 (データベース) 「日本の危機言語・方言データベース」, 18HP8004: 作成 代表者
- ・ 科研費基盤研究 (C) 「地域的多様性の教材としての参加型方言データベースの構築」, 17K02801: 研究代表者
- ・ 科研費基盤研究 (A) 「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

熊谷智子, 篠崎晃一, 中西太郎, 小林隆, 岸江信介, 杉村孝夫, 松田美香, 久木田恵, 太田有紀, 琴鍾愛, 沖裕子, 甲田直美, 尾崎喜光, 三宅和子, 日高水穂, 森勇太, 井上文子

『コミュニケーションの方言学』, ひつじ書房, 2018.5.10.

《コーパス・データベース類》

井上文子

「方言ロールプレイ会話データベース」(更新), <http://hougen-db.sakuraweb.com/>.

【研究調査】

- ・ 会話収録 (大東文化大学), 2018.6.29.
- ・ 会話収録 (関西大学), 2018.9.25.
- ・ 会話収録 (フェリス女学院大学), 2018.11.9.
- ・ 会話収録 (徳島県), 2018.11.24, 12.8, 2019.1.22, 2.14.
- ・ 会話収録 (広島県), 2019.1.12.

熊谷 康雄 (くまがい やすお) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】修士 (文学) (埼玉大学, 1984)

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科社会システムコース卒業 (1976), 埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程言語文化論専攻修了 (1984)

【職歴】国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員 (1988), 同 情報資料研究部第二研究室 研究員 (1989), 同 主任研究官 (1993), 同 室長 (1998), 同 情報資料部門 部門長 (2001), 人間文化研究機構 国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】言語学, 日本語学

【所属学会】日本語学会, 日本言語学会, 計量国語学会, 社会言語科学会, 日本行動計量学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 電子情報通信学会, American Dialect Society, International Society for Dialectology and Geolinguistics

【2018年度に参画した共同研究】

- 基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: サブリーダー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- 科研費基盤研究 (A) 「日本諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

熊谷康雄

「柴田武」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 481–482 頁, 東京堂出版, 2018.10.10.

《コーパス・データベース類》

熊谷康雄

「『日本言語地図』データベース」(追加 40 項目), <https://www.lajdb.org/>, 2019.3.31.

【講演・口頭発表】

Yasuo Kumagai

“A quantitative observation of dialect diffusion based on population distributions and road networks”, 9th Congress of the International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG 2018), The Institute of the Lithuanian Language and Vilnius University in Lithuania (ヴィリニュス・リトニア), 2018.7.27.

山田 真寛 (やまだ まさひろ) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】 Ph.D. (言語学) (デラウェア大学, 2010)

【学歴】 国際基督教大学教養学部語学科卒業 (2005), 米国デラウェア大学大学院言語学・認知科学研究科博士課程修了 (2010)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (PD) / 京都大学 (2010), 広島大学教育学研究科言語と認知の脳科学プロジェクトセンター ポスドク研究員 (2013), 京都大学学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット 特定助教 (2014), 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員 (2016), 人間文化研究機構国立国語研究所 IR 推進室 特任助教 (2016), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2018)

【専門領域】 言語学, 形式意味論, 言語復興

【受賞歴】

2014: 京都大学学際研究着想コンテスト奨励賞

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費若手研究 (B) 「琉球諸語の記述と復興研究のためのプラットフォーム基盤構築研究」, 16K16824: 研究代表者
- ・科研費基盤研究 (B) 「言語使用と非言語的認知検査における空間指示枠の相関についての実験的研究」, 17H02333: 研究分担者
- ・トヨタ財団 研究助成プログラム「多文化・他言語社会としての日本の理解—消滅危機言語の相互理解性と世代間継承度のための客観的尺度の創出」: 研究代表者
- ・DNP 文化振興財団 グラフィック文化に関する学術研究「絵とともに語ることばの未来 多言語表記民話絵本のブックデザイン」: 共同研究者
- ・電気通信普及財団 研究調査助成「「何もしなければ」消滅してしまう琉球のことばを、記録、共有して、継承するために」: 共同研究者
- ・トヨタ財団 社会コミュニケーションプログラム「琉球諸語統一的表記法フォント開発と電子的な利用の普及」: 共同研究者

【研究業績】

《著書・編書》

山田真寛 (監修)

中脇初枝, 葛西亜理沙 (著) 『神の島のうた』, 講談社, 2018.7.10.

山田真寛 (監修)

横山晶子, 山本史 (著) 『シマノトペ』, 言語復興の港, 2019.3.1.

山田真寛, 森澤ケン

『与那国の人とことば 2018』, 言語復興の港, 2019.3.

《論文・ブックチャプター》

Nobuko Kibe, Hajime Oshima, and Masahiro Yamada

“Plural Forms in Yoron-Ryukyuan and Address Nouns in Ryukyuan Languages”, *Japanese/Korean Linguistics*, 25, pp. 1–11, 2018.12.1, DOI: 10.15084/00002237.

《展示など》

- ・“Port Language Revitalization” Exhibition, Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation, and Revitalization, 国立国語研究所, 2018.8.5–10.
- ・「言語復興の港」展示, 日本音声学会, 沖縄国際大学, 2018.9.16.
- ・「言語復興の港」展示, 平成 30 年度危機的な状況にある言語・方言サミット (宮古島大会), マティダ市

民劇場（沖縄県宮古島市）, 2018.11.24.

- ・「言語復興の港」展示, 国立国語研究所オープンハウス 2018, 国立国語研究所, 2018.12.22.
- ・「言語復興の港」展示, ワークショップ「くんじやい しまむにプロジェクト」, 国立国語研究所, 2019.2.10.

《その他の出版物・記事》

木部暢子, 山田真寛

「「いま何もしなければ」なくなってしまう日本各地の地域言語を保存し、言語の多様性を維持する」, 『国語研 ことばの波止場』, Vol. 5, 2019.3.

【講演・口頭発表】

山田真寛

「与那国語の動詞・形容詞の活用パラダイムと調査・習得の方法」, 招待講演, 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会, 国立国語研究所, 2018.6.17.

Masahiro Yamada

“Port Language Revitalization Project”, 招待講演, Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation, and Revitalization, 国立国語研究所, 2018.8.6.

山田真寛

「消滅危機言語再活性化のための研究プラットフォーム：言語復興の港」, 招待（パネル）, 日本音声学会, 沖縄国際大学, 2018.9.16.

山田真寛

「沖永良部語上平川方言（ひょーむに）の辞書制作」, 招待講演, 科研費「日本語諸方言の記録・保存に向けた甑島里方言のテキスト・辞書の作成（代表者：平塚雄亮）」および「消滅の危機に瀕した八重山語諸方言の音声・例文付き辞書作成（代表者：原田走一郎）」合同会議, 国立国語研究所, 2018.10.26.

Masahiro Yamada, Yukinori Takubo, Shoichi Iwasaki, Celik Kenan, Soichiro Harada, Nobuko Kibe, Tyler Lau, Natsuko Nakagawa, Yuto Niinaga, Tomoko Otsuki, Manami Sato, Rihito Shirata, Gijs van der Lubbe, and Akiko Yokoyama

“Experimental Study of Inter-Language and Inter-Generational Intelligibility: Methodology and Case Studies of Ryukyuan Languages”, The 26th Japanese/Korean Linguistics Conference, University of California Los Angeles (UCLA) (ロサンゼルス・米国), 2018.11.30.

山田真寛

「危機言語・方言の保全と復興のために：データ整備と公開の価値」, 招待講演, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館, 2018.12.15.

Masahiro Yamada

“Dunan (Yonaguni-Ryukyuan) Honorifics”, 招待講演, The NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Workshop: Grammatical Descriptions of Endangered and Understudied Languages and Dialects in East Asia and Beyond, University of Hawai‘i at Mānoa (ホノルル・米国), 2019.1.12.

Masahiro Yamada

“Endangered Languages in Japan: Documentation and Revitalization”, 招待講演, Digital Revolution for Under-resourced Languages in Asia, 奈良先端科学技術大学院大学, 2019.2.19.

Shinji Ogawa, Masahiro Yamada, and Yuka Hayashi

“Preparing Infrastructure for Writing and Typing with non-Latin Symbols: A Case of Ryukyuan Languages”, The 6th International Conference on Language Documentation and Conservation, University of Hawai‘i at Mānoa (ホノルル・米国), 2019.3.1.

【研究調査】

- ・沖永良部語フィールドワーク（鹿児島県大島郡知名町, 和泊町）, 2018.6.20-28, 8.14-23, 9.8-11, 2019.1.24-2.3, 2.20-25.
- ・むつ市方言合同調査（青森県むつ市）, 2018.8.29-9.1.

- ・与那国語フィールドワーク（沖縄県八重山郡与那国町），2018.11.15–22, 2019.3.12–18.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation, and Revitalization（主催：危機言語プロジェクト，共催：東京外国语大学，琉球大学），2018.8.5–8.
- ・Developing Digital Tools for Language Revitalization: Demystifying Coding, Apps and Web Platforms（主催：危機言語プロジェクト），国立国語研究所，2018.8.9–10.
- ・ワークショップ「くんじやい しまむにプロジェクト」（主催：言語復興の港，共催：国立国語研究所，和泊町立国頭小学校），国立国語研究所，2019.2.10.

【一般向けの講演・セミナーなど】

山田真寛

「子どもたちが大人になったときにも、しまのことばが聞こえる世界を残すために」，東京沖州会，品川区総合区民会館，2018.5.27.

横山晶子，山田真寛

「消滅危機言語を消滅させないためにできること」，下平川校区ひーぬむん国頭交流会，国頭研修館（鹿児島県大島郡和泊町），2018.8.16.

山田真寛

「「ゆしきや しまむに プロジェクト」の背景と経緯」，ひーぬむん発表会，上平川公民館（鹿児島県大島郡知名町），2018.9.8.

山田真寛

「琉球のことばの話：消滅危機言語の記録と継承」，知道楽，統計数理研究所，2018.12.19.

山田真寛

「危機的状況にある言語・方言」，第22回島唄・島ムニ大会，あしひの郷（鹿児島県大島郡知名町），2019.2.24.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・「全国ことばの旅」，ニホンゴ探検，国立国語研究所，2018.7.14.
- ・「しま書体」書体見本帳（「琉球諸語のための統一的表記法」フォントの書体見本帳），両面A1折り，2018.8.
- ・取材番組：ハートネットTV「故郷の言葉を守りたい～日本の“消滅危機言語”～」，NHK Eテレ，<https://www.nhk.or.jp/heart-net/program/heart-net/811/>，2018.10.17.
- ・取材番組：Q プラスリポート 消滅危機言語，琉球朝日放送，<https://www.qab.co.jp/news/20181128108971.html>，2018.11.28.
- ・取材記事：「方言継承へ連携・協力協定 和泊町と国立国語研究所「沖永良部をモデルケースに」」，奄美新聞，2019.1.26.
- ・取材記事：「沖永良部方言、次世代へ 国語研と和泊町、継承で協定28日知名町も」，南海日日新聞，2019.1.26.
- ・みしのたくかにと，『シマノトペ』『ディラブディ』読み聞かせ，散歩道～冬編～，おやつ工房さかみち（国分寺市），2019.2.11.
- ・取材記事：「地域の言葉と魅力を紹介3家族が「えらぶむに」披露 東京でワークショップ」，南海日日新聞，2019.2.14.
- ・取材記事：「劇や歌で方言の魅力伝える 次世代に継承で講演も 知名町島唄・島ムニ大会」，南海日日新聞，2019.2.28.
- ・編集協力：『明解方言学辞典』，三省堂.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山田真寛

「琉球与那国語と消滅危機言語の復興のこと」，言語と社会（学部授業），国際基督教大学，2018.6.12.

山田真寛

「与那国語の動詞・形容詞の活用パラダイム：動詞を使えるようになるために」，よなぐにほ一げんクラブ，与那国町複合型公共施設，2018.11.18.

山田真寛

「二日で学ぶ与那国語」，東洋文庫アカデミア，東洋文庫，2019.2.17-18.

三井 はるみ (みつい はるみ) 研究系 (言語変異研究領域) 助教

【学位】修士 (文学) (東北大学, 1986)

【学歴】東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程単位修得満期退学 (1989)

【職歴】昭和女子大学 講師 (1989), 国立国語研究所 主任研究官 (1997), 人間文化研究機構国立国語研究所 助教 (2009)

【専門領域】日本語学

【所属学会】日本語学会, 日本方言研究会, 社会言語科学会, 日本音声学会, 日本語文法学会

【学会等の役員・委員】日本方言研究会 世話人, 日本音声学会 会計監査

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究 (A) 「日本語の時空間変異対照研究のための『全国方言文法辞典』の作成と方法論の構築」, 26244024: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (A) 「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (B) 「共通語の基盤としての東京語の動態に関する多人数経年調査」, 18H00673: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (C) 「地域的多様性の教材としての参加型方言データベースの構築」, 17K02801: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

三井はるみ

「気づかれにくい方言」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 209–211 頁, 東京堂出版, 2018.10.10.

三井はるみ

「ゆれ」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 974–976 頁, 東京堂出版, 2018.10.10.

三井はるみ

「条件表現の全国分布に見られる経年変化—予測的条件文の場合—」, 『国語研究』, 82 号, 40–59 頁, 2019.2.

《コーパス・データベース類》

三井はるみ, 鎌水兼貴

「首都圏大学生言語調査資料図集 (2018年度版)」, http://pj.ninjal.ac.jp/shutoken/1_map2018.html, 2019.3.13.

《その他の出版物・記事》

三井はるみ

「東京のほお～言!!: ちーちー」, 朝日新聞, 2018.4.7.

三井はるみ

「東京のほお～言!!: しがつ (●○○)」, 朝日新聞, 2018.4.14.

三井はるみ

「東京のほお～言!!: ねつい」, 朝日新聞, 2018.5.12.

三井はるみ

「東京のほお～言!!: そうすんと」, 朝日新聞, 2018.5.19.

三井はるみ

「東京のほお～言!!: 飲まして」, 朝日新聞, 2018.6.9.

三井はるみ

「東京のほお～言!!：ののさん」，朝日新聞，2018.7.7.

三井はるみ

「東京のほお～言!!：きせつ」，朝日新聞，2018.8.4.

三井はるみ

「東京のほお～言!!：たまむし」，朝日新聞，2018.8.4.

三井はるみ

「東京のほお～言!!：…ちゃーいけねー」，朝日新聞，2018.8.11.

三井はるみ

「東京のほお～言!!：おしまいちゃんちゃん」，朝日新聞，2018.8.25.

【研究調査】

- 方言調査（東京都立川市），2018.9.11, 11.20.

【一般向けの講演・セミナーなど】

三井はるみ

「多摩の方言」，立川市歴史民俗資料館・国立国語研究所共同企画講演会，立川市女性総合センター・ア
イム，2019.2.11.

三井はるみ

「あきる野と西多摩の方言—特徴と調査のすすめ—」，あきる野市市民カレッジ公開講座，あきる野市
中央公民館，2019.2.23.

青井 隼人 (あおい はやと) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教

【学位】 博士 (学術) (東京外国語大学, 2016)

【学歴】 東京外国語大学外国語学部日本課程卒業 (2009), 東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士前期課程修了 (2011), 東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程単位取得満期退学 (2014)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (DC) (2011–2014), 日本学術振興会特別研究員 (PD) (2014–2017), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 特任研究員 (2017), 人間文化研究機構国立国語研究所言語変異研究領域 特任助教 (2017)

【専門領域】 言語音声学, 音韻論, 琉球語学

【所属学会】 日本言語学会, 日本音声学会, 日本音韻論学会, 方言研究会

【受賞歴】

2018: 国立国語研究所第 17 回所長賞 (若手研究者奨励賞)

2018: 沖縄言語研究センター 2018 年度仲宗根政善記念研究奨励賞

2014: 日本言語学会 2014 年度論文賞 (『宮古多良間方言における『中舌母音』の音声的解釈』)

2012: 日本音声学会第 26 回全国大会優秀発表賞 (『宮古多良間方言の三型アクセント体系』)

2012: 日本言語学会第 144 回大会 (2012 年度春季) 大会発表賞 (『宮古における『中舌母音』の音韻解釈』)

【2018 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー

【2018 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 科研費研究活動スタート支援「声門化子音の音響特性の記述と音韻論的解釈: 北琉球沖縄語伊江方言の事例研究」, 17H06666: 研究代表者

【講演・口頭発表】

青井隼人

「フィールド言語学における音声学教育」, 日本音声学会第 337 回研究例会, 甲南大学, 2018.6.16.

青井隼人

「南琉球宮古多良間方言のアクセント規則」, 日本音韻論学会 2018 年度春期研究発表会, 大東文化大学, 2018.6.22.

青井隼人

「宮古語音声学音韻論の論点: 舌端母音の発展と衰退」, 沖縄言語研究センター 2018 年度総会, 沖縄国際大学, 2018.7.7.

青井隼人, AA 研 LingDy3 プロジェクト

「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築を目指して: LingDy3 プロジェクト活動紹介」, 日本言語学会夏期講座 2018, 東京外国語大学, 2018.8.20.

青井隼人

「北琉球沖縄語伊江方言の破裂音」, 日本言語学会第 157 回大会, 京都大学, 2018.11.17.

Hayato Aoi

“Acoustic traits of a glottalized consonants in the Ie dialect of Okinawa Ryukyuan”, The 2nd NINJAL-UHM-SGRL linguistics workshop, University of Hawai’i at Mānoa (ホノルル・米国), 2019.1.13.

【研究調査】

- ・ むつ市方言に関する調査 (青森県むつ市), 2018.8.29–9.1.
- ・ 北琉球沖縄語伊江方言に関する調査 (沖縄県国頭郡伊江村), 2018.9.8–14.
- ・ 南琉球宮古語多良間方言に関する調査 (沖縄県宮古郡多良間村), 2018.11.26–30.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・ NINJAL 国際シンポジウム 「日本と北東アジアの消滅危機言語: 記述・ドキュメンテーション・復興」

(共催: 国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 科研費基盤研究 (S) 「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」), 国立国語研究所, 2018.8.5–8.

- ・琉球諸語継承に向けた教育活動の事例報告, 沖縄国際大学, 2018.9.16.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

青井隼人

「言語（音声）学的調査の方法論」, 連携講座「地域文化振興実習」, 弘前大学, 2018.5.28.

青井隼人

「科学をみせる: 科学コミュニケーションの理念と技」, 言語学ワークショップ: テクニカルワークショップ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2019.3.15.

麻生 玲子 (あそう れいこ) 研究系(言語変異研究領域) 特任助教

【学位】修士(文学)(東京大学大学院, 2010)

【学歴】東京外国语大学外国语学部東アジア課程モンゴル語専攻卒業(2004), 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了(2010), 東京外国语大学大学院国際学研究科博士後期課程 単位取得退学(2017)

【職歴】日本学術振興会特別研究員(DC1)(2010–2013), 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員(特任助教)・国立国語研究所研究系(言語変異研究領域)特任助教(2017)

【専門領域】言語学, 記述言語学, 琉球諸語

【所属学会】日本言語学会

【受賞歴】

2019: 第16回ドゥナンスンカニ大会・作詞の部 最優秀賞

2018: 国立国語研究所第16回所長賞

2017: 日本言語学会論文賞

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」国語研ユニット「方言の記録と継承による地域文化の再構築」: 共同研究員, 椎葉村方言辞書作成プロジェクトマネージャー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費若手研究「日本の消滅危機言語を対象とした大量の言語資料収集・蓄積方法に関する基礎研究」, 18K12390: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

麻生玲子, 山本友美, 木部暢子

『椎葉村方言語彙集中間報告書—上椎葉・尾八重・鹿野遊・大河内編—』, 国立国語研究所(プロジェクト報告書), 2018.5.

木部暢子, 山本友美, 麻生玲子

『椎葉村方言語彙集中間報告書—仲塔・松尾編—』, 国立国語研究所(プロジェクト報告書), 2019.3.

麻生玲子, 葉山茂(編)

呂理政, 黄貞燕, 日高真吾, 西村慎太郎, 呂怡屏, 邱君妮, 原田走一郎, 葉山茂(著)『新しい地域文化研究の可能性を求めて vol. 8 市民とともに地域を学ぶ—日本と台湾にみる地域文化の活用術』, 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」, 2019.3.25.

葉山茂, 麻生玲子(編)

小池淳一, 木部暢子, 寺村裕史, 西村慎太郎, 崩田順平, 奥村弘(著)『新しい地域文化研究の可能性を求めて vol. 7 地域文化をはぐくむ—日本と台湾にみる地域文化の活用術』, 人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」, 2019.3.25.

《その他の出版物・記事》

麻生玲子

「フィールド調査を通した地域研究、地域振興を目指して—連携授業における講義と実践」, 『きざし』, 2019.3.

【講演・口頭発表】

麻生玲子

「南琉球八重山波照間方言の動詞形態論」, 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会, 国立国語研究所, 2018.6.17.

Reiko Aso and Seunghun Lee

“Foot structure in Hateruma Yaeyama Ryukyuan: a preliminary study”, NINJAL International symposium, poster session, 国立国語研究所, 2018.8.5.

Seunghun Lee and Reiko Aso

“Building a heavy syllable with strong aspiration in Hateruma Yaeyama”, 16th Old World Conference on Phonology, University of Verona (ヴェローナ・イタリア), 2019.1.18.

【研究調査】

- 方言辞書作成のための語彙調査 (宮崎県東臼杵郡椎葉村), 2018.5.
- 語彙調査 (沖縄県八重山郡竹富町波照間), 2019.3.

籠宮 隆之 (かごみや たかゆき) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教

【学位】博士（学術）（神戸大学, 2008）

【学歴】東京都立大学人文学部卒業（1995），東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1999），神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程修了（2008）

【職歴】国立国語研究所 非常勤職員（1999），国立国語研究所 特別奨励研究員（2002），独立行政法人産業技術総合研究所 特別研究員（2008），人間文化研究機構国立国語研究所研究情報資料センター 特任助教（2013），千葉大学フロンティア医工学センター 特任助教（2016），人間文化研究機構国立国語研究所言語変異研究領域 特任助教（2017）

【専門領域】音声科学

【所属学会】日本音声学会, 日本音響学会, 社会言語科学会, International Speech Communication Association, 聴覚医学会

【学会等の役員・委員】日本音声学会 評議員, 日本音声学会 庶務委員, 日本音声学会 音声学普及委員, 日本音声学会 100周年記念事業委員, 社会言語科学会 編集委員

【2018年度に参画した共同研究】

- ・「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」国語研ユニット「消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化」：共同研究員
- ・コーパス基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」：メンバー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究（C）「音響的クラスタリングによる骨伝導音の明瞭性改善に関する研究」, 15K00245: 研究分担者
- ・科研費基盤研究（B）「軟骨伝導の基盤技術の確立と伝音性難聴の補聴機器の開発」, 17H02079: 研究分担者
- ・科研費基盤研究（B）「リアルタイム MRI および WAVE データによる調音音声学の精緻化」, 17H02339: 研究分担者
- ・科研費基盤研究（C）「発達障害における音声プロソディの解析的研究」, 18K00552: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Takayuki Kagomiya, Yuto Niinaga, and Nobuko Kibe

“Developing a Block Puzzle Game for Studying Ryukyuan Language Phonetic System”, *Proceedings of the 8th Conference of Japanese Association for Digital Humanities*, pp. 112–114, 2018.9.

《総説・解説など》

籠宮 隆之

「どこでも出前博物館「モバイルミュージアム」を活用した連携展示の試み」, 『きざし』, 3号, 6頁, 2019.3.

《コーパス・データベース類》

前川喜久雄, 篠宮 隆之

「MRI 動画クイズ」, 2018.12.22.

《展示など》

- ・「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 神奈川大学, 国立歴史民俗博物館と共同開催, 2018.5.7–25.
- ・「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 弘前大学, 2018.5.28–6.15.
- ・「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 羽田空港国際線ターミナル, 国立歴史民俗博物館と共同開催, 2018.8.24–9.14.
- ・松江市市民活動フェスタ「日本海のことばと文化」, 「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 島根県松江市, まつえ市民大学センターの会と共同開催, 2018.9.25.
- ・鹿児島大学・人間文化研究機構協定締結記念シンポジウム「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 鹿児島大学, 2018.9.29.

- ・「方言の世界」展示, 大学共同利用機関シンポジウム 2018, 名古屋市科学館, 2018.10.14.
- ・国語研オープンハウス「日本海のことばと文化」, 「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 国立国語研究所, 2018.12.22.
- ・「日本海のことばと文化」, 「方言の世界」, 「沖縄のことばと文化」展示, 富山大学図書館, 2019.2.12-19.
- ・「方言の世界」, 「日本海のことばと文化」展示, 国立歴史民俗博物館, 2019.3.14-2019.4.

【講演・口頭発表】

佐藤友貴, 小渕千絵, 籠宮隆之, 城間将江, 大金さや香, 加我君孝

「人工内耳装用児における話者の男女識別」, 第 63 回日本聴覚医学会総会・学術講演会, 神戸国際会議場, 2018.10.19.

小渕千絵, 佐藤友貴, 籠宮隆之, 大金さや香, 菅波沙耶, 廣田栄子, 城間将江, 加我君孝

「聴覚障害児の発話における韻律特徴」, 第 63 回日本聴覚医学会総会・学術講演会, 神戸国際会議場, 2018.10.19.

須藤路子, 籠宮隆之

「中学校英語科教員と教職課程学生の弱母音生成と英語習熟度との関係」, 日本音響学会 2019 年春季研究発表会, 電気通信大学, 2019.3.5.

能田由紀子, 北村達也, 籠宮隆之, 竹本浩典, 前川喜久雄

「磁気センサシステムをもちいた計測による座位・仰臥位・腹臥位における舌運動の差異の検討」, 日本音響学会 2019 年春季研究発表会, 電気通信大学, 2019.3.5.

【研究調査】

- ・聴覚補助器による非言語・パラ言語情報伝達に関する聴取実験 (国立国語研究所), 2018.4-2019.3.
- ・リアルタイム調音運動計測 (国立国語研究所), 2018.4-2019.3.
- ・人工内耳装用者による非言語・パラ言語情報伝達に関する聴取実験 (国際医療福祉大学), 2018.5.
- ・モバイル展示の評価のための視線計測 (神奈川大学, 弘前大学, 鹿児島大学), 2018.5-9.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・日本音声学会第 337 回例会シンポジウム「音声の考え方を考える: フィールド言語学, 言語教育, 言語聴覚士養成での取り組みと課題」(主催: 日本音声学会), 甲南大学, 2018.6.16.
- ・日本特殊教育学会第 56 回大会シンポジウム「聴覚障害児者の聴覚特性に応じた支援について考える」(主催: 日本特殊教育学会), 大阪国際会議場, 2018.8.23.

【一般向けの講演・セミナーなど】

籠宮隆之

「聴覚補助器による非言語・パラ言語情報の伝達性能を評価する尺度の構築」, 国立国語研究所オープンハウス 2018, 国立国語研究所, 2018.12.22.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国学院大学講習会講師, 国学院大学, 2018.5.8, 5.24.
- ・名古屋外国語大学講習会講師, 名古屋外国語大学, 2018.6.21.
- ・県立広島大学講習会講師, 県立広島大学, 2019.1.8.
- ・取材記事: 「方言の面白さ伝える巡回展」, 朝日新聞富山版, 2019.2.14.
- ・取材記事: 「『ばんそうこう』を何と言う?」, 毎日新聞富山版, 2019.2.14.
- ・取材記事: 「日本各地で消滅の危機にある方言をパネルで紹介する「方言モバイルミュージアム」が富山大五福キャンパスの中央図書館で開かれている」, 北日本新聞, 2019.2.15.
- ・『社会言語科学』編集委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師 (集中講義)》

- ・名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科

新永 悠人 (にいなが ゆうと) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教

【学位】博士 (文学) (東京大学, 2014)

【学歴】東京大学文学部言語文化学科言語学専修課程卒業 (2006), 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻修士課程修了 (2008), 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻博士課程修了 (2014)

【職歴】日本学術振興会特別研究員 DC2 (2010), 日本学術振興会特別研究員 PD (2012), 成城大学文芸学部非常勤講師 (2015–2018), 大東文化大学国際交流センター非常勤講師 (2015–2016), 東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所非常勤講師 (2016), 神田外語大学非常勤講師 (2017), 人間文化研究機構国立国語研究所広報室特任助教 (2017), 同研究系 (言語変異研究領域) 特任助教 (2017)

【専門領域】記述言語学, 琉球諸語

【所属学会】日本言語学会, 日本方言研究会, 琉球諸語記述研究会

【学会等の役員・委員】琉球諸語記述研究会 運営委員

【受賞歴】

2015: 第26回沖縄言語研究センター仲宗根政善記念研究奨励金

【2018年度に参画した共同研究】

- ・「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」国語研ユニット「消滅危機言語・方言の展示を通した最先端研究の可視化・高度化」: 共同研究員

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費若手研究「奄美大島宇検村内の隣接する多地点方言間の体系的差異の解明」, 18K12394: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

新永悠人

「沖縄県久高島方言の文法関係と情報構造の関係」, 竹内史郎, 下地理則 (編) 『日本語の格標示と分裂自動詞性』, くろしお出版, 103–128 頁, 2019.3.28.

《その他の出版物・記事》

新永悠人

「研究者紹介 013」, 『国語研ことばの波止場』, Vol.5, 2019.3.29.

【講演・口頭発表】

新永悠人

「琉球語学の現在、そして未来」, 基調講演, 沖縄文化協会 70周年記念シンポジウム, 琉球大学, 2018.6.30.

Yuto Niinaga

“An introduction to a grammar of Amami, a Northern Ryukyuan language, from a typological perspective”, EALL Talk Series, University of Hawai’i at Mānoa (ホノルル・米国), 2018.9.21.

【研究調査】

- ・語彙に関する方言調査 (宮崎県椎葉村), 2018.5.21–25, 6.25–28.
- ・語彙に関する方言調査 (鹿児島県大島郡宇検村), 2018.7.30–8.1.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・The NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Workshop: Grammatical Descriptions of Endangered and Understudied Languages and Dialects in East Asian and Beyond (主催: 国立国語研究所, 共催: ハワイ大学, 琉球諸語記述研究会), University of Hawai’i (ハワイ・米国), 2019.1.12–13.

【一般向けの講演・セミナーなど】

新永悠人

“An introduction to a grammar of Amami, a Northern Ryukyuan language, from a typological perspective”, がじまる会 新年会, YMCA Nu’uanu branch (ホノルル・米国), 2019.1.14.

新永悠人

「自分の研究の面白さはどこまで届くのか？～非専門家に「面白さ」を伝える理由と実践例～」, 東京外国語大学 AA 研テクニカルワークショップ, 東京外国語大学 AA 研, 2019.3.15.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ハワイ大学マノア校にて ‘Ryukyuan Study Group’ (博士課程の学生 4 名, 退官教員 1 名に対して自分が執筆した奄美方言の文法書を解説する勉強会) を主宰, 2018.10.03–2019.02.06 (計 16 回).

小木曾 智信 (おぎそ としのぶ) 研究系 (言語変化研究領域) 教授, 領域代表

【学位】博士 (工学) (奈良先端科学技術大学院大学, 2014)

【学歴】東京大学文学部第3類 (語学文学) 卒業 (1995), 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程日本文化研究専攻修了 (1997), 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学 (2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了 (2014)

【歴歴】明海大学外国語学部 講師 (2001), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授, 領域代表 (2016), 同 教授, 領域代表 (2017), 東京外国语大学大学院国際日本学研究院 准教授 (クロスアポイントメント) (2016), 同 教授 (クロスアポイントメント) (2017)

【専門領域】日本語学, 自然言語処理

【所属学会】日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 日本語文法学会, 近代語学会, 東京大学国語国文学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 評議員, 日本語学会 編集委員

【受賞歴】

2018: 情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2018」ベストポスター賞

2011: 国立国語研究所第2回所長賞

2011: 情報処理学会山下記念研究賞

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: リーダー
- ・領域指定型共同研究プロジェクト「古文教育に資する, コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究」: メンバー・コーディネーター
- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」国語研ユニット「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: 共同研究員
- ・Oxford Corpus of Old Japanese Project: 共同研究員
- ・人文学オープンデータ共同利用センター n2i プロジェクト: 共同研究員

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究 (A)「日本語歴史コーパスの多層的拡張による精密化とその活用」, 15H01883: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

河内昭浩, 池上尚, 小木曾智信, 小林正行, 杉山俊一郎, 鈴木泰, 須永哲矢, 服部紀子, 宮城信, 渡辺由貴, 甲斐伊織, 下田俊彦

『新しい古典・言語文化の授業 コーパスを活用した実践と研究』, 朝倉書店, 2019.1.10.

《論文・ブックチャプター》

小木曾智信

「マークアップ」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 2018.10.10.

小木曾智信

「検索」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 2018.10.10.

小木曾智信

「「通時コーパス」とその利用法」, 河内昭浩 (編) 『新しい古典・言語文化の授業 コーパスを活用した実践と研究』, 朝倉書店, 18-31 頁, 2019.1.10.

《総説・解説など》

小木曾智信

「日本語歴史コーパスの構築—ここまでできた! 『日本語歴史コーパスとその活用』, 『ことばの波止場』, 5 卷, 6-7 頁, 2019.3.

小木曾智信

「NINJAL-Oxford「通時コーパス」国際シンポジウム—ここまでできた！『日本語歴史コーパスとその活用』」, 『ことばの波止場』, 5巻, 8頁, 2019.3.

《コーパス・データベース類》

Bjarke Frellesvig, Stephen Wright Horn ほか

「Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese ver.2018.9」(アップデート), <http://oncoj.ninjal.ac.jp/>, 2018.9.21.

服部紀子, 間淵洋子, 近藤明日子ほか

「『日本語歴史コーパス』明治・大正編II教科書Ver.1.0」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#kyokasho, 2018.10.15.

高田智和, 小木曾智信ほか

「大英図書館所蔵天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』画像」, https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/, 2019.3.1.

河内昭浩, 小木曾智信

「ことねり(『日本語歴史コーパス』簡易検索ツール)」, 関係者限定公開, 2019.3.9.

村山実和子, 藤本灯, 銭谷真人ほか

「『日本語歴史コーパス』江戸時代編II人情本Ver.0.8」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html#ninjo, 2019.3.26.

松崎安子, 近藤明日子ほか

「『日本語歴史コーパス』和歌集編Ver.0.8」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/wakashu.html, 2019.3.26.

近藤明日子, 市村太郎ほか

「『日本語歴史コーパス』明治・大正編III明治初期口語資料Ver.0.8」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#shokikogo, 2019.3.26.

近藤明日子, 間淵洋子, 服部紀子, 南雲千香子ほか

「『日本語歴史コーパス』明治・大正編I雑誌Ver.1.2」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#zasshi, 2019.3.26.

村山実和子, 市村太郎ほか

「『日本語歴史コーパス』江戸時代編I洒落本Ver.1.0」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html#share, 2019.3.26.

【講演・口頭発表】

村山実和子, 市村太郎, 小木曾智信

「『日本語歴史コーパス 江戸時代編I洒落本』の公開」, 日本語学会2018年度春季大会, 明治大学駿河台キャンパス, 2018.5.20.

片山久留美, 渡辺由貴, 小木曾智信

「『日本語歴史コーパス 室町時代編IIキリストン資料』の公開」, 日本語学会2018年度春季大会, 明治大学駿河台キャンパス, 2018.5.20.

小木曾智信

「日本語史研究基盤としての『日本語歴史コーパス』」, 国際シンポジウム「デジタル時代の人文学のための学術基盤を考える」, 一橋講堂, 2018.7.6.

小木曾智信

「通時コーパスに見るモダリティ形式の変遷」, コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」, 国立国語研究所, 2018.9.7.

小木曾智信

“‘Corpus of Historical Japanese’ ver. 2018.9”, 第29回日本資料専門家欧州協会年次大会, ヴィー

タウタス・マグヌス大学（カウナス市・リトアニア），2018.9.15.

服部紀子，間淵洋子，近藤明日子，小木曾智信

「国定教科書のコーパス構築と公開」，日本語学会2018年度秋季大会，岐阜大学，2018.10.14.

スティーブン・ライト・ホーン，鴻野知曉，アラステア・バトラー，小木曾智信，ビヤーケ・フレレスビッグ

「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」の公開，日本語学会2018年度秋季大会，岐阜大学，2018.10.14.

小木曾智信

「古典日本語テキストの形態素解析」，招待講演，東西学術研究所・関西大学アジアオープンリサーチセンター合同シンポジウム「日中自然言語処理に関する」，関西大学，2018.11.10.

片山久留美，小木曾智信，中村壮範

「キリスト教資料のローマ字原文対応と文テキストの作成」，人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2018」，東京大学地震研究所，2018.12.1.

小木曾智信

「日本語史研究史上における「通時コーパス」の価値」，NINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」，東京証券会館，2018.12.15.

小木曾智信

「通時コーパスによるモダリティ形式の変遷」，NINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」，東京証券会館，2018.12.16.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』の構築状況」，NINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」，東京証券会館，2018.12.16.

小木曾智信

「人情本コーパスの形態論情報」，総合書物学シンポジウム「書物を耕す—総合書物学の挑戦—」，奈良女子大学，2019.2.17.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』ver.2019.3 通時コーパス構築進捗報告」，「通時コーパス」シンポジウム2019，国立国語研究所，2019.3.9.

高田智和，片山久留美，小木曾智信，桂祐成，大塚靖代，ヘイミッシュ・トッド

「天草版平家物語・伊曾保物語・金句集の原本画像公開」，「通時コーパス」シンポジウム2019，国立国語研究所，2019.3.9.

【研究調査】

- ・大正期ハワイ日本語教科書調査（ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館），2018.5.22–26.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・『日本語歴史コーパス』活用ワークショップ（主催：国立国語研究所「通時コーパス」プロジェクト），国立国語研究所，2018.8.22–23.
- ・国際シンポジウム「古辞書研究の射程」（主催：日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「平安時代漢字字書総合データベースによる研究基盤の確立」，共催：国立国語研究所「通時コーパス」プロジェクト，人間文化研究機構「総合書物学」プロジェクト），国立国語研究所，2018.8.25–26.
- ・コーパス合同シンポジウム「コーパスによる日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」（主催：言語変異研究領域，言語変化研究領域，音声言語研究領域，日本語教育研究領域，コーパス開発センター），国立国語研究所，2018.9.7.
- ・NINJAL-Oxford「通時コーパス」国際シンポジウム（主催：国立国語研究所，共催：オックスフォード大学），国立国語研究所，2018.9.8–9.
- ・NINJALシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—文法史研究・通時的対照研究を中心に—」（主催：国立国語研究所「対照言語学」プロジェクト，共催：国立国語研究所「通時コーパス」プロジェ

クト), 国立国語研究所, 2019.1.13.

- ・「通時コーパス」シンポジウム 2019 (主催: 国立国語研究所「通時コーパス」プロジェクト), 国立国語研究所, 2019.3.9.

【一般向けの講演・セミナーなど】

小木曾智信

「日本語の千年—コーパスで解き明かすことばの生態—: コーパス」, 駒澤大学平成 30 年度秋季公開講座 講座 II, 駒澤大学深沢キャンパス 120 周年アカデミーホール, 2018.10.20.

小木曾智信

「日本語の千年—コーパスで解き明かすことばの生態—: 上代・中古」, 駒澤大学平成 30 年度秋季公開講座 講座 II, 駒澤大学深沢キャンパス 120 周年アカデミーホール, 2018.10.27.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』と上代日本語」, 第 13 回 NINJAL フォーラム「日本語の変化を探る」, 一橋講堂, 2018.11.4.

小木曾智信

「コーパスで見る現代語の確立過程—江戸・明治・大正—」, 第 13 回 NINJAL フォーラム「日本語の変化を探る」, 一橋講堂, 2018.11.4.

小木曾智信

「コーパスを使った日本語の歴史の研究」, 国立国語研究所オープンハウス 2018, 国立国語研究所, 2018.12.22.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』とキリストン資料: ヨーロッパに渡ったキリストン資料が解き明かす中世日本語—天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』画像 Web 公開」, 人間文化研究機構・国立国語研究所メディア懇談会, 人間文化研究機構本部, 2019.3.17.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

小木曾智信, 村山実和子

「『日本語歴史コーパス』『中納言』の使い方」, 『日本語歴史コーパス』『中納言』講習会, 九州大学, 2018.4.24.

小木曾智信, 松崎安子, 南雲千香子, 片山久留美, 村山実和子

「『日本語歴史コーパス』活用ワークショップ」, 『日本語歴史コーパス』活用ワークショップ, 国立国語研究所, 2018.8.22.

小木曾智信

「日本語歴史コーパス (CHJ)」, NINJAL セミナー「国立国語研究所の言語資源」, 北京外国语大学 北京日本学研究センター (北京・中国), 2018.11.20.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』の概要」, 第 3 回 国語教育活用ワークショップ, 埼玉大学, 2019.2.2.

小木曾智信

「コーパスを活用した言語研究について」, 言語研究のためのデジタル研究ワークショップ (ひつじ書房), 国立国語研究所, 2019.2.25.

《若手研究者の受入》

- ・特別共同利用研究員: 1 名 (パヴィア大学大学院学生)

相澤 正夫 (あいざわ まさお) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

【学位】修士 (言語学) (東京大学, 1980)

【学歴】東京大学文学部第3類 (語学文学) 言語学専修課程卒業 (1977), 東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程修了 (1980), 東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程第1種博士課程単位取得退学 (1984)

【歴歴】国立国語研究所日本語教育センター第一研究室 研究員 (1984), 同主任研究官 (1990), 同室長 (1991), 同言語体系研究部 部長 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 部門長 (2001), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授 (2009), 同副所長 (2009-2013), 同研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】社会言語学, 音声学, 音韻論, 語彙論, 意味論

【所属学会】日本語学会, 日本言語学会, 社会言語科学会, 日本音声学会

【学会等の役員・委員】NHK放送文化研究所『放送研究と調査』レビュー委員

【受賞歴】

2016: 国立国語研究所第12回所長賞

2014: 国立国語研究所第8回所長賞

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究 (B) 「昭和話し言葉コーパス」の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究, 16H03426: 研究分担者
- ・科研費挑戦的研究 (萌芽) 「日本語研究用オントロジーの設計と開発」, 17K18505: 連携研究者
- ・統計数理研究所公募型共同利用一般研究2「調査方法の異なる大規模言語意識調査データの比較分析」, 30-共研-2026: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

相澤正夫

「音韻」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 89-91頁, 2018.10.10.

相澤正夫

「固有語」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 435-436頁, 2018.10.10.

相澤正夫

「借用語」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 487-488頁, 2018.10.10.

《その他の出版物・記事》

相澤正夫

「新刊・寸感」, 『日本語学』, 37卷5号, 2018.5.1.

相澤正夫

「新刊・寸感」, 『日本語学』, 37卷12号, 2018.11.1.

【講演・口頭発表】

山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉

「語誌ポータルの構築」, NINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館, 2018.12.16.

相澤正夫

「外来語ウォッチング一定着度を追跡するー」, 国立国語研究所オープンハウス, 国立国語研究所, 2018.12.22.

山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 間淵洋子, 桂祐成

「語誌データベースの試験公開」, 「通時コーパス」シンポジウム 2019, 国立国語研究所, 2019.3.9.

相澤正夫

「SP 盤演説レコードがひらく音声変異研究の可能性」, 招待 (パネル), 「通時コーパス」シンポジウム 2019, 国立国語研究所, 2019.3.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・新宿日本語学校日本語教師養成科 (求職者支援訓練校) の「言語」科目「音声・音韻体系」(計 8 回) の講師, 2018.9.6–10.25.
- ・取材協力 (実名でのコメント) : 「有働さんの「置屋の女将」発言に賛否」(ニュース Q3), 朝日新聞, 2018.10.6 (朝刊, 東京本社).
- ・NHK 放送文化研究所『放送研究と調査』掲載論文 1 件のレビュー (2018 年 12 月号)
- ・『例解新国語辞典』(三省堂) の編集委員

大西 拓一郎 (おおにしたくいちらう) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

【学位】修士 (文学) (東北大学, 1987)

【学歴】東北大学文学部卒業 (1985), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1987), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻単位取得退学 (1989)

【職歴】東北大学文学部 助手 (1991), 国立国語研究所言語変化研究部第一研究室 研究員 (1993), 同 主任研究官 (1996), 同 室長 (1999), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授 (2009), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】方言学, 言語地理学, 日本語学

【所属学会】日本方言研究会, 日本語学会, International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG), 変異理論研究会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本語文法学会, 中日理論言語学研究会, 九州方言研究会, 日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】日本方言研究会 世話人, 日本語学会 評議員, SIDG committee of accountants

【受賞歴】

2016: 国立国語研究所第 13 回所長賞

【2018 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2018 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費挑戦的萌芽研究「方言周囲論と方言区画論の統合による新しい言語地理学の創生」, 16K13232: 研究代表者
- ・科研費基盤研究 (B) 「語史再構における言語地理学的解釈の再検討—類型的定式化の試み—」, 16H03415: 研究分担者
- ・科研費挑戦的研究 (萌芽) 「日本語研究オントロジーの設計と開発」, 17K18505: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (B) 「『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査による音声言語地図の作成と言語変容の研究」, 17H02340: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

大西拓一郎

「交易とことばの伝播—とうもろこしの不思議を探る—」, 『日本語学』, 37 卷 9 号, 36–45 頁, 2018.8.10.

大西拓一郎

「方言語彙の分布の変動」, 小林隆 (編) 『方言の語彙—日本語を彩る地域語の世界— (シリーズ日本語の語彙 9)』, 朝倉書店, 116–131 頁, 2018.10.10.

大西拓一郎

「GIS (地理情報システム)」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 451 頁, 2018.10.10.

大西拓一郎

「方言調査法」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 888–890 頁, 2018.10.10.

《コーパス・データベース類》

大西拓一郎, 外山善朗

「国立国語研究所 言語地図データベース」, http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/1adp/1adb_index.html, 2019.2.7 (最終更新).

【講演・口頭発表】

Takuichiro Onishi

“On the relationship of the degrees of correspondence of dialects and distances”, SIDG Congress 9, International Society for Dialectology and Geolinguistics, Vilnius University (ヴィリニュス・リト

ニア), 2018.7.25.

Takuichiro Onishi

“Japanese dialectal words for imported produce that include proper nouns: morokoshi (“China”), nanban (“southern countries”), and other place or person names”, Komatsu Round-Table Conference on Geo-linguistics, 公立小松大学, 2018.9.8.

大西拓一郎

「方言から考える動詞否定辞中止形」, 日本語文法学会第19回大会シンポジウム, 立命館大学, 2018.12.16.

大西拓一郎

「つなげる、くらべる方言地図—方言地図データベースの活用—」, 招待 (パネル), 「通時コーパス」シンポジウム 2019, 国立国語研究所, 2019.3.9.

【研究調査】

- 茅野市方言に関する方言調査 (長野県茅野市), 2019.1.21–3.18.

【一般向けの講演・セミナーなど】

大西拓一郎

「『新日本言語地図』からみた北陸・富山県方言」, 富山大学人文学部日本語学・言語学共同企画「富山のことばを知ろう」第4回, 富山大学人文学部, 2018.10.27.

大西拓一郎

「『新日本言語地図』から見える紀南方言域」, 田辺祭を活かした地域活性化事業シンポジウム日本社会の変容と伝統文化—田辺方言に注目して—, 和歌山県田辺市中部公民館, 2019.1.26.

大西拓一郎

「強い作物のゆるい方言変化物語—モロコシ (玉蜀黍)、ゴシヨーイモ (馬鈴薯) など—」, LAB. TALK SESSION 16, 宮城県石巻市 IRORI, 2019.2.2.

【その他の学術的・社会的活動】

- 2016年9月10日に出版した『ことばの地理学—方言はなぜそこにあるのか』に対する書評: 小川俊輔 (執筆), 『社会言語科学』, 21巻1号, 2018.9.
- インタビュー記事: 「GISで方言分布の変化を可視化する」, 『GIS NEXT』, 66号, 2019.1.
- 日本語学会常任査読委員
- 日本方言研究会編集委員

山崎 誠 (やまざき まこと) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

【学位】博士（学術）（東京学芸大学, 2015）

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科卒業（1980），筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科言語学専攻第5学年中退（1984），東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科修了（2015）

【職歴】国立国語研究所言語計量研究部 研究員（1984），同 言語体系研究部第一研究室 研究員（1988），同 主任研究官（1993），同 室長（1995），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 第一領域 主任研究員（2001），同 第一領域長（2003），同 グループ長（2006），人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009），同 教授（2015），同 研究系（言語変化研究領域）教授（2016）

【専門領域】日本語学，計量日本語学，計量語彙論，コーパス，シソーラス

【所属学会】日本語学会，計量国語学会，言語処理学会，語彙研究会，日本語教育学会，社会言語科学会，情報知識学会，日本語文法学会，日本行動計量学会，情報処理学会，表現学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会 理事，言語処理学会 代議員

【受賞歴】

2007：言語処理学会第12回年次大会優秀発表賞

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」：班長（語誌データベース班）
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」：班長（レジスター班）
- ・コーパス基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」：メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」：メンバー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究（B）「会話文への発話者情報の付与によるコーパスの拡張」，15H03212：研究代表者
- ・科研費挑戦的研究（萌芽）「日本語研究用オントロジーの設計と開発」，17K18505：研究代表者
- ・科研費基盤研究（A）「日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション」，17H00917：研究分担者
- ・科研費基盤研究（A）「語用論的分析のための日本語1000人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」，18H03581：研究分担者
- ・科研費基盤研究（B）「昭和話し言葉コーパス」の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究」，16H03426：研究分担者
- ・科研費基盤研究（B）「語形成および意味的情報を付加した実践医療用語辞書の構築」，18H03499：研究分担者
- ・科研費基盤研究（C）「データサイエンスに基づいた日本文体変化分析とその構造のモデリング」，18K00627：研究分担者
- ・科研費挑戦的研究（萌芽）「コミュニケーション能力を高める自然会話教材の高度共有化—共同体の構築に向けて—」，18K18685：研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

藤田保幸, 山崎誠

『形式語研究の現在』, 和泉書院, 2018.5.24.

《論文・ブックチャプター》

Makoto Yamazaki, Yumi Miyazaki, and Wakako Kashino

“Annotation and Quantitative Analysis of Speaker Information in Novel Conversation Sentences in Japanese”, *Proceedings of the 11th edition of the Language Resources and Evaluation Conference*

(LREC2018), pp. 1078–1091, 2018.5.7.

山崎誠

「語彙調査」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 356–358 頁, 2018.10.10.

山崎誠

「コーパス」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 377–378 頁, 2018.10.10.

山崎誠

「シソーラス」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 469–470 頁, 2018.10.10.

山崎誠

「分類語彙表」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 836 頁, 2018.10.10.

山崎誠

「日本語史研究に関する二次的情報の集約—語誌データベースの構築—」, 『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』, 141–146 頁, 2018.11.24.

東条佳奈, 相良かおる, 小野正子, 山崎誠

「実践医療用語における語構成要素の意味分類試案—「先天性」を例に—」, 『現代日本語研究』, 11 卷, 40–58 頁, 2019.3.31, DOI: 10.18910/73339.

《コーパス・データベース類》

相澤正夫, 伊藤真梨子, 岩澤克, 柏野和佳子, 桂祐成, 高田智和, 外山善朗, 新野直哉, 藤本灯, 間淵洋子, 山崎誠, 山田翔太

「語誌データベース」(関係者限定公開, 試験公開), <https://goshidb.ninjal.ac.jp/goshidb/>, 2019.3.9.

【講演・口頭発表】

Mayumi Usami and Makoto Yamazaki

“Quantitative Characteristics of the BTSJ Japanese Natural Conversation Corpus (BTSJ-Corpus) ver. 2018: focussing on the differences of the use of polite forms according to sub-groups”, 11th International Quantitative Linguistics Conference (QUALICO 2018), University of Wrocław (ヴロツワフ・ポーランド), 2018.7.6.

Makoto Yamazaki

“Distribution and Characteristics of Co-occurrence words across different texts in Japanese”, 11th International Quantitative Linguistics Conference (QUALICO 2018), University of Wrocław (ヴロツワフ・ポーランド), 2018.7.7.

宇佐美まゆみ, 山崎誠

「自然会話の分析がなぜ平和のための対話教育につながるのか? —自然会話コーパスの分析から言えること—」, 2018 年日本語教育国際研究大会, Università Ca' Foscari Venezia (ヴェネツィア・イタリア), 2018.8.3.

山崎誠

「語誌ポータルの構築について」, 国際シンポジウム「古辞書研究の射程」, 国立国語研究所, 2018.8.25.

山崎誠

「職場編資料と名大会話コーパスとの比較」, 『現日研・職場談話コーパス』公開記念シンポジウム, 国立国語研究所, 2018.9.5.

山崎誠

「話し言葉における代名詞「あれ」の用法の分布」, 言語資源活用ワークショップ 2018, 国立国語研究所, 2018.9.5.

宇佐美まゆみ, 山崎誠

「『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2018 年版』の紹介と『BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット』を用いた分析法」, 計量国語学会第 62 回大会, 京都教育大学, 2018.9.29.

東条佳奈, 内山清子, 岡照晃, 小野正子, 相良かおる, 山崎誠

「実践医療用語に現れる語構成要素の辞書構築にむけて」, 計量国語学会第 62 回大会, 京都教育大学, 2018.9.29.

山崎誠, 宮嵜由美, 柏野和佳子

「BCCWJ 小説会話文への発話者情報の付与と計量的分析」, 計量国語学会第 62 回大会, 京都教育大学, 2018.9.29.

加藤祥, 浅原正幸, 山崎誠

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の新聞・書籍・雑誌データに対する分類語彙表番号付与」, 日本語学会 2018 年度秋季大会, 岐阜大学, 2018.10.14.

宇佐美まゆみ, 山崎誠

「『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版』における一人称・二人称代名詞の使用実態」, 日本語学会 2018 年度秋季大会, 岐阜大学, 2018.10.14.

相良かおる, 小野正子, 山崎誠

「UTF 版実践医療用語辞書 ComeJisyo1.0 の作成」, 第 38 回医療情報学連合大会 (第 19 回医療情報学会学術大会), 福岡サンパレス, 2018.11.24.

Sachi Kato, Masayuki Asahara, and Makoto Yamazaki

“Annotation of ‘Word List by Semantic Principles’ Labels for the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese”, The 32nd Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (PACLIC 32), 香港理工大学 (香港), 2018.12.3.

山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉

「語誌ポータルの構築」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館, 2018.12.16.

山崎誠

「話し言葉における「あれ」の用法—母語話者と学習者のコーパスによる比較—」, 公開シンポジウム「コーパスを使った類義表現・多義語の研究」, 日本女子大学, 2018.12.22.

山崎誠

「語誌ポータルの構築」, 国立国語研究所オープンハウス 2018, 国立国語研究所, 2018.12.22.

山崎誠

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版における終助詞—話者と会話の属性に着目して—」, シンポジウム「日常会話コーパス」IV, 国立国語研究所, 2019.3.4.

山崎誠, 桂祐成

「語誌データベースの構築と設計上の問題点」, 「通時コーパス」シンポジウム 2019, 国立国語研究所, 2019.3.9.

山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 間淵洋子, 桂祐成

「語誌データベースの試験公開」, 「通時コーパス」シンポジウム 2019, 国立国語研究所, 2019.3.9.

荻原亜彩美, 森山奈々美, 浅原正幸, 加藤祥, 山崎誠

「『分類語彙表』に対する反対語情報付与」, 言語処理学会 25 回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.15.

山崎誠, 大村舞

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の語彙」, 言語処理学会 25 回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.15.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・『三省堂国語辞典』編集委員
- ・日本語文法学会学会誌委員会委員
- ・日本語教育学会審査・運営協力員
- ・科学研究費委員会専門委員
- ・語彙・辞書研究会運営委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山崎誠

「コーパスを利用した研究」, 2018 年日本語教育国際研究大会, Università Ca' Foscari Venezia (ヴェネツィア・イタリア), 2018.8.4.

柏野和佳子, 山崎誠

「オンライン検索システム「中納言」講習会」, 第 5 回コーパス利用講習会, 国立国語研究所, 2018.9.3.

山崎誠

「分類語彙表」, NINJAL セミナー・国立国語研究所の言語資源, 北京日本学研究センター (北京・中国), 2018.11.20.

山崎誠

「語彙から見るテキストの計量的分析」, 第 58 回名古屋大学大学院人文学研究科日本語教育学分野公開講演会, 名古屋大学, 2019.2.2.

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授

《若手研究者の受入》

- ・特別共同利用研究員: 1 名 (北京日本学研究センター)

横山 詔一 (よこやま しょういち) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

【学位】博士 (心理学) (筑波大学, 1991)

【学歴】横浜国立大学教育学部卒業 (1981), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科修士号取得 (1983), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科退学 (1985)

【職歴】上越教育大学学校教育学部 助手 (1985), 国立国語研究所情報資料研究部・電子計算機システム開発研究室 研究員 (1991), 同 情報資料研究部 主任研究官 (1995), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門 領域長 (2001), 同 研究開発部門 グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授 (2009), 同 研究情報資料センター長 (2009–2013), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】認知科学, 心理統計, 日本語学

【所属学会】日本心理学会, 社会言語科学会, 計量国語学会, 日本語学会, 日本教育工学会, 行動計量学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会 理事, 社会言語科学会 監事, 日本語学会 会計監査

【受賞歴】

2010: 社会言語科学会第9回徳川宗賢賞 (優秀賞)

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

1997: 日本教育工学会第11回日本教育工学会論文賞

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費挑戦的研究 (萌芽) 「疫学的統計手法と人工知能学の融合活用による敬語の変化予測研究」, 17K18501: 研究代表者
- ・科研費基盤研究 (B) 「海外日本語教育指導者との協働による学術論文執筆支援プログラムの開発とその評価」, 17H01994: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

横山詔一, 杉戸清樹, 佐藤和之, 米田正人, 前田忠彦, 阿部貴人 (編)

『社会言語科学の源流を追う』(シリーズ社会言語科学2: 社会言語科学会刊行), ひつじ書房, 2018.9.18.

《論文・ブックチャプター》

横山詔一, 中村隆, 阿部貴人, 前田忠彦, 米田正人

「個人の言語変化をつかむ」, 横山詔一, 杉戸清樹, 佐藤和之, 米田正人, 前田忠彦, 阿部貴人 (編) 『社会言語科学の源流を追う』(シリーズ社会言語科学2: 社会言語科学会刊行), ひつじ書房, 115–128頁, 2018.9.18.

横山詔一

「言語の経年変化をロジスティック曲線で予測する」, 横山詔一, 杉戸清樹, 佐藤和之, 米田正人, 前田忠彦, 阿部貴人 (編) 『社会言語科学の源流を追う』(シリーズ社会言語科学2: 社会言語科学会刊行), ひつじ書房, 179–193頁, 2018.9.18.

横山詔一, 朝日祥之

「身内敬語意識の55年間の変化に関する数量モデル: 岡崎調査データにもとづく検討」, 『計量国語学』, 31巻7号, 497–506頁, 2018.12.

《その他の出版物・記事》

横山詔一

「新刊・寸感」, 月刊『日本語学』, 2018.6.1.

横山詔一

「新刊・寸感」, 月刊『日本語学』, 2018.12.1.

横山詔一

「研究者紹介」, 『国語研ことばの波止場』, 2019.3.29.

【講演・口頭発表】

高田智和, 鎌水兼貴, 横山詔一, 前川喜久雄

「鶴岡調査データの再構成」, 日本語学会 2018 年度春季大会, 明治大学, 2018.5.20.

横山詔一

「言語変化・変異の S 字カーブ理論」, 国立国語研究所「通時コーパス」プロジェクト近世・近代グループ, 文体・資料性グループ合同研究発表会, 明治大学, 2018.6.9.

横山詔一

「病院の言葉」経年研究に向けた予備調査, 国立国語研究所創立 70 周年記念シンポジウム「経年調査の新たな挑戦—日本語の将来を占うために」, 国立国語研究所, 2018.12.22.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- 国立国語研究所創立 70 周年記念シンポジウム「経年調査の新たな挑戦—日本語の将来を占うために」
(主催: 国立国語研究所創立 70 周年記念シンポジウム実行グループ), 国立国語研究所, 2018.12.22.

【一般向けの講演・セミナーなど】

横山詔一

「漢字の心理学」, 第 21 回漢検生涯学習ネットワーク会員向け研修会, フクラシア東京ステーション, 2018.4.15.

横山詔一

「気持ちをあらわす言葉」, 職業発見プログラム, 国立国語研究所, 2018.10.12.

横山詔一

「社会人のリーディング・マインド」, 青山学院大学教育人間科学部 創立 10 周年記念シンポジウム「リーディングのこれから」, 青山学院大学, 2019.3.16.

【その他の学術的・社会的活動】

- 筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語・日本事情遠隔教育拠点事業 運営委員
- 博報財団「児童教育実践についての研究助成」審査委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師》

- 一橋大学大学院言語社会研究科

高田 智和 (たかだともかず) 研究系(言語変化研究領域) 准教授

【学位】博士(文学)(北海道大学, 2004)

【学歴】北海道大学文学部卒業(1999), 北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了(2001), 北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程修了(2004)

【職歴】独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員(2005), 同 言語資源グループ 研究員(2006), 同 言語生活グループ 研究員(2007), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授(2009), 同 研究系(言語変化研究領域) 准教授(2016)

【専門領域】日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理

【所属学会】日本語学会, 訓点語学会, 計量国語学会, 情報処理学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 事務局長, 計量国語学会 理事, 訓点語学会 委員, 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会 運営委員, 情報処理学会情報規格調査会 SC2 専門委員会 委員

【受賞歴】

2016: 2016年度日本語学会春季大会発表賞

2013: 北海道大学文学部同窓会榆文賞

2010: 情報処理学会情報規格調査会標準化貢献賞

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

2007: 日本規格協会標準化貢献賞

【2018年度に参画した共同研究】

- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」国語研ユニット「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: 研究代表者
- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー
- ・ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査・研究活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」: 共同研究員

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究(B)「訓点資料訓読文コーパスの構築と古代日本語史研究の革新」, 18H00674: 研究代表者
- ・科研費挑戦的研究(萌芽)「漢文訓点資料の国際文書構造記述による共有化と書き下し文自動生成のための基礎研究」, 17K18506: 研究代表者
- ・科研費基盤研究(S)「木簡等の研究資源オープンデータ化を通じた参加誘発型研究スキーム確立による知の展開」, 18H05221: 研究分担者
- ・科研費基盤研究(A)「統合史資料画像データの生成と駆動方式の確立による人文科学研究基盤の創出」, 18H03576: 研究分担者
- ・科研費基盤研究(C)「字体記述の精密化手法の確立による歴史的漢字字体情報アーカイブズ構築」, 18K00611: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

高田智和, 福山雅深, 堤智昭, 小助川貞次

「資料画像公開・利用の国際化と高度化の取り組み—「日本語史研究資料〔国立国語研究所蔵〕」の事例—」, 『国立国語研究所論集』, 15号, 163–176頁, 2018.7.31, DOI: 10.15084/00001601.

高田智和

「合字」, 日本語学会(編)『日本語学大辞典』, 366頁, 東京堂出版, 2018.10.10.

高田智和

「国語施策百年史」, 日本語学会(編)『日本語学大辞典』, 391頁, 東京堂出版, 2018.10.10.

高田智和

「字画」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 459–460 頁, 東京堂出版, 2018.10.10.

高田智和

「省文」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 566 頁, 東京堂出版, 2018.10.10.

高田智和

「表外漢字字体表」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 772–773 頁, 東京堂出版, 2018.10.10.

《コーパス・データベース類》

石塚晴通, 高田智和, 守岡知彦

「漢字字体規範史データセット」, <http://hng-data.org/>, 2018.7.21.

高田智和, 堤智昭, 田島孝治, 小助川貞次

「ヲコト点図データベース」, <https://cid.ninjal.ac.jp/wokototendb>, 2018.12.27.

高田智和, 石本祐一, 生永匠

「国立国語研究所研究資料室所蔵音声・映像データベース」, 所内限定公開, 2019.1.13.

高田智和

「大英図書館蔵天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』画像」, https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/, 2019.3.1.

《その他の出版物・記事》

高田智和

「新刊・寸感」, 『日本語学』, 37 卷 10 号, 2018.9.10.

高田智和

「研究情報発信センター」, 『国語研ことばの波止場』, Vol.4, 2018.9.30.

高田智和

「漢字字体規範史データセット」, 『印刷雑誌』, 2019 年 1 月号, 2019.1.15.

小木曾智信, 高田智和

「ここまできた! 『日本語歴史コーパス』とその活用～通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開～」, 『国語研ことばの波止場』, Vol.5, 2019.3.29.

【講演・口頭発表】

高田智和, 関川雅彦

「国立国語研究所研究資料室における資料整備の実践と課題—音源資料の取り扱いを中心に—」, 日本アーカイブズ学会 2018 年度大会, 東洋大学, 2018.4.22.

高田智和, 田島孝治, 堤智昭

「加点情報の再構成」, 第 117 回人文科学とコンピュータ研究会, 東京電機大学, 2018.5.12.

高田智和, 鎌水兼貴, 横山詔一, 前川喜久雄

「鶴岡調査データの再構成」, 日本語学会 2018 年度春季大会, 明治大学, 2018.5.19.

高田智和

「石塚漢字字体資料」と『漢字字体規範史データベース』, 招待講演, シンポジウム「文字情報データベースの保存と継承」, 京都大学人文科学研究所, 2018.7.21.

Yuichi Ishimoto, Takumi Ikinaga, and Tomokazu Takada

“Construction of NINJAL media resources collection for searching and previewing sound and video data”, The Eighth Conference of Japanese Association for Digital Humanities (JADH2018) “Leveraging Open data”, 一橋講堂, 2018.9.10.

堤智昭, 高田智和, 田島孝治, 小助川貞次

「訓点資料電子化の取り組み—ヲコト点データベースの試作を例に—」, 日本語学会 2018 年度秋季大会, 岐阜大学, 2018.10.14.

八木下孝雄, 早田美智子, 高田智和

「『国語年鑑』図書データ及び韓国学会誌データ追加による「日本語研究・日本語教育文献データベース」の拡張」, 日本語学会 2018 年度秋季大会, 岐阜大学, 2018.10.14.

高田智和, 石本祐一

「研究資料室所蔵音源・映像資料と試視聴システム」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館, 2018.12.15.

高田智和

「「略字・俗字」の使用意識を探る」, 招待講演, 創立 70 周年記念シンポジウム「経年調査の新たな挑戦—日本語の将来を占うために」, 国立国語研究所, 2018.12.22.

高田智和, 鎌水兼貴

「言語生活調査の回答データセット」, 第 24 回公開シンポジウム人文科学とデータベース, 静岡大学, 2019.3.2.

高田智和, 片山久留美, 桂祐成, 大塚靖代, ヘイミッシュ・トッド

「天草版平家物語・伊曾保物語・金句集の原本画像公開」, 「通時コーパス」シンポジウム 2019, 国立国語研究所, 2019.3.9.

間淵洋子, 高田智和

「TEI による近世版本の構造化」, 「通時コーパス」シンポジウム 2019, 国立国語研究所, 2019.3.9.

山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 間淵洋子, 桂祐成

「語誌データベースの試験公開」, 「通時コーパス」シンポジウム 2019, 国立国語研究所, 2019.3.9.

【研究調査】

- ・訓点資料調査 (西大寺), 2019.2.1.
- ・キリシタン資料調査 (大英図書館), 2019.2.4-5.
- ・ハワイ日本語教科書調査 (ハワイ大学マノア校図書館), 2019.3.5-8.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・シンポジウム「文字情報データベースの保存と継承」(主催: 科研費基盤研究 (C) 字体記述の精密化手法の確立による歴史的漢字字体情報アーカイブズ構築, 表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化), 京都大学人文科学研究所, 2018.7.21.
- ・国際シンポジウム「古辞書研究の射程」(主催: 科研費基盤研究 (B) 平安時代漢字字書総合データベースによる研究基盤の確立, 通時コーパスの構築と日本語史の新展開, 共催: 表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化), 国立国語研究所, 2018.8.25-26.
- ・NINJAL セミナー「国立国語研究所の言語資源」(主催: 通時コーパスの構築と日本語史の新展開, 表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化), 北京外国语大学北京日本学研究センター (北京・中国), 2018.11.20.
- ・創立 70 周年記念シンポジウム「経年調査の新たな挑戦—日本語の将来を占うために」, 国立国語研究所, 2018.12.22.
- ・総合書物学シンポジウム「書物を耕す—総合書物学の挑戦—」(主催: 異分野融合による「総合書物学」の構築), 奈良女子大学, 2019.2.17.

【一般向けの講演・セミナーなど】

高田智和

「変体仮名」, 駒澤大学平成 30 年度秋季公開講座「日本語の千年—コーパスで解き明かすことばの生態—」, 駒澤大学, 2018.10.6.

高田智和

「訓点資料」, 駒澤大学平成 30 年度秋季公開講座「日本語の千年—コーパスで解き明かすことばの生態—」, 駒澤大学, 2018.11.24.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材記事:「漢字と私」, 『学習漢字メイト』, Vol.15, 2019.3.4.
- ・人文科学とコンピュータシンポジウム (じんもんこん 2018): プログラム委員長

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

高田智和

「日本語研究のデジタル画像コンテンツ」, NINJAL セミナー「国立国語研究所の言語資源」, 北京外国语大学北京日本学研究センター (北京・中国), 2018.11.20.

《大学院非常勤講師》

- ・政策研究大学院大学

新野 直哉 (にいの なおや) 研究系 (言語変化研究領域) 准教授

【学位】 博士 (文学) (東北大学, 2010)

【学歴】 東北大学文学部文学科卒業 (1984), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1986), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退 (1988)

【歴歴】 宮崎大学教育学部 助手 (1988), 同 講師 (1989), 同 助教授 (1992), 国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官 (1996), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員 (2001), 同 文獻情報グループ 主任研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 助教 (2009), 同 准教授 (2011), 同 研究系 (言語変化研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 言語学, 日本語学

【所属学会】 日本近代語研究会, 表現学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】 日本近代語研究会 運営委員, 日本語学会 大会企画運営委員

【受賞歴】

2011: 国立国語研究所第 2 回所長賞

【2018 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2018 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 科研費基盤研究 (C) 「近現代の新語・新用法及び言語規範意識の研究」, 16K02751: 研究代表者
- ・ 科研費挑戦的萌芽研究 「日本語研究用オントロジーの設計と開発」, 17K18505: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

新野直哉

『平成 28~30 年度 科学研究費補助金 基盤研究 (C) 研究成果報告書 近現代の新語・新用法および言語規範意識の研究 課題番号 16K02751』, 2019.3.29.

《論文・ブックチャプター》

新野直哉

「古語」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 411–412 頁, 2018.10.10.

新野直哉

「新語」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 543–544 頁, 2018.10.10.

新野直哉

「廃語」, 日本語学会 (編) 『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 739 頁, 2018.10.10.

新野直哉

「“名前負け”の「誤用」について」, 『人文』, 17 号, 93–114 頁, 2019.3.13.

新野直哉

「大正 2 年『読売新聞』の日本語関係記事について—「新聞記事データベース」活用の一例として」, 『国語語彙史の研究』, 38 号, 151–166 頁, 2019.3.31.

【講演・口頭発表】

梅林博人, 島田泰子, 鳴海伸一, 新野直哉, 橋本行洋

「「代用字表記語」の受容と語義変化—「食餌 (事) 療法」を例として」, 日本語学会 2018 年度春季大会, 明治大学, 2018.5.20.

山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 間淵洋子, 桂祐成

「語誌データベースの試験公開」, 「通時コーパス」シンポジウム 2019, 国立国語研究所, 2019.3.9.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・日本語学会 2018 年度秋季大会 公開シンポジウム (主催: 日本語学会), 岐阜大学, 2018.10.14.

【一般向けの講演・セミナーなど】

新野直哉

NINJAL 職業発見プログラム (明星学園中学) 講師, 国立国語研究所, 2018.7.25.

新野直哉

NINJAL 職業発見プログラム (宮城野高校) 講師, 国立国語研究所, 2018.8.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材協力: 「グッド！ モーニング」, テレビ朝日, 2018.4.1–2019.3.31.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

新野直哉

「言語記事データベースについて」, 国立国語研究所オープンハウス 2018, 国立国語研究所, 2018.12.22.

《大学院非常勤講師》

- ・目白大学大学院

間淵 洋子 (まぶち ようこ) 研究系 (言語変化研究領域) 特任助教

【学位】博士 (国際日本学) (明治大学, 2018)

【学歴】東京学芸大学教育学部中等教育教員養成課程国語科卒業 (1995), 東京都立大学大学院人文科学研究科日本語・日本文学専攻修士課程修了 (1997), 東京都立大学大学院人文科学研究科日本語・日本文学専攻博士課程単位取得退学 (2005), 明治大学大学院国際日本学研究科国際日本学専攻博士後期課程修了 (2018)

【職歴】国立国語研究所研究開発部門第二領域 非常勤研究員 (2000–2005), 東京学芸大学教育学部 講師 (2002–2003), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 非常勤研究員 (2005–2011), 人間文化研究機構国立国語研究所コーパス開発センター 非常勤研究員 (2013–2016), 日本学術振興会特別研究員 DC2 (2016–2018), 人間文化研究機構国立国語研究所研究系 (言語変化研究領域) 特任助教 (2018)

【専門領域】日本語学, 日本語史, 計量言語学, コーパス言語学

【所属学会】日本語学会, 計量国語学会, 社会言語科学会, 言語処理学会, 日本デジタル・ヒューマニティーズ学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 事務局委員

【受賞歴】

- 2017: 国立国語研究所コーパス開発センター 優秀発表賞 (「近代漢語の品詞性に見る多様性の画一化—形容詞用法を中心に—」)
- 2016: 第 12 回国立国語研究所所長賞 (若手研究者奨励賞)
- 2015: 情報処理学会 人文科学とコンピュータ研究会 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2015」ベストポスター賞 (「異なる文体の混在するテキストに対する複数辞書切り替えによる解析手法の提案」, 受賞者: 間淵洋子, 小木曾智信)
- 2006: 言語処理学会 第 12 回年次大会 優秀賞 (「代表性を有する現代日本語書き言葉コーパスの設計」, 受賞者: 山崎誠, 前川喜久雄, 田中牧郎, 小椋秀樹, 柏野和佳子, 小磯花絵, 間淵洋子, 丸山岳彦, 山口昌也, 秋元祐哉, 稲益佐知子, 吉田谷幸宏)

【2018 年度に参画した共同研究】

- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」国語研ユニット「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: 共同研究員
- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2018 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費研究活動スタート支援「精緻な文字表記情報を加えた近代新聞コーパスの構築による表記・文体変遷の計量的研究」, 18H05613: 研究代表者

【研究業績】

《コーパス・データベース類》

服部紀子, 間淵洋子, 近藤明日子ほか

「『日本語歴史コーパス』明治・大正編 II 教科書 Ver.1.0」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#kyokasho, 2018.10.15.

近藤明日子, 間淵洋子, 服部紀子, 南雲千香子ほか

「『日本語歴史コーパス』明治・大正編 I 雜誌 Ver.1.2」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#zasshi, 2019.3.26.

《その他の出版物・記事》

間淵洋子

「近代語から現代語へ: 多様性許容の時代から画一性追求の時代へ」, 『日本語学』, 37 卷 13 号, 2018.12.10.

間淵洋子

「《卷頭言》原典回帰: パラ言語を補完する人文情報学」, 『人文情報学月報』, 89 号前編, 2018.12.30.

間淵洋子

「調査研究の現場から 江戸時代の恋愛小説から日本語の姿を発見する：「総合書物学」国語研ユニットの取り組み」, 『きざし』(人間文化研究機構基幹研究プロジェクトニュースレター) Vol.3, 2019.3.

【講演・口頭発表】

Yoko Mabuchi

“Construction of the “Corpus of Historical Japanese” (CHJ) ”, TIE2018 East Asian/Japanese SIG meeting, 一橋講堂, 2018.9.11.

Yu Okubo, Yoko Mabuchi, and Kiyonori Nagasaki

“Implementing TEI to Japanese Modern Texts”, TEI2018, 一橋講堂, 2018.9.13.

服部紀子, 間淵洋子, 近藤明日子, 小木曽智信

「国定教科書のコーパス構築と公開」, 日本語学会 2018 年度秋季大会, 岐阜大学, 2018.10.14.

間淵洋子

「文字情報と図版情報を有する近世版本コーパスの構築とその応用」, 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2018」, 東京大学地震研究所, 2018.12.1.

間淵洋子, 高田智和

「版本コーパスにおける表記情報アノテーション：人情本を例として」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館, 2018.12.16.

間淵洋子

「精緻な表記情報を付与した近世版本コーパスの構築とその展開」国立国語研究所オープンハウス 2018, 国立国語研究所, 2018.12.22.

間淵洋子

「文字情報と表記情報を備えた版本コーパスの構築：人情本コーパスを例に」(パネル：人情本コーパスを用いた日本語学の精緻化), 総合書物学シンポジウム「書物を耕す—総合書物学の挑戦—」, 奈良女子大学, 2019.2.17.

間淵洋子, 高田智和

「TEI による近世版本の構造化」, 「通時コーパス」シンポジウム, 国立国語研究所, 2019.3.9.

【一般向けの講演・セミナーなど】

間淵洋子

「「標準語」って何だ？」, すぎなみ大人塾 2018 コトバ・ラボ, セシオン杉並, 2018.8.24.

間淵洋子

「日本語の千年—コーパスで解き明かすことばの生態—：近代」, 駒澤大学 平成 30 年度 秋季公開講座 講座 II, 駒澤大学深沢キャンパス 120 周年アカデミーホール, 2018.11.17.

間淵洋子

「日本語の歴史を知る」, 国立国語研究所 職業発見プログラム, 国立国語研究所, 2018.12.12.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材協力：「世界から『ヴ』が消える」, NHK 政治マガジン, <https://www.nhk.or.jp/politics/articles/feature/15156.html>, 2019.3.13.
- ・取材協力：「ニュース：「熊本ヴォルターズ」は「熊本ボルターズ」に改名しなければならないのか問題について」, KUMAMOTO VOLTERS (熊本ヴォルターズ) (Web サイト), <https://www.volters.jp/news/detail?id=12608>, 2019.3.14.
- ・杉並区立東田中学校 学校運営協議会委員, 2017.10.1-.

小磯 花絵 (こいそ はなえ) 研究系 (音声言語研究領域) 准教授, 領域代表

【学位】博士 (理学) (奈良先端科学技術大学院大学, 1998)

【学歴】千葉大学文学部卒業 (1994), 千葉大学大学院文学研究科修士過程修了 (1996), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究所博士後期課程修了 (1998)

【職歴】ATR 知能映像通信研究所研修研究員 (1996), 国立国語研究所言語行動研究部 研究員 (1998), 同 主任研究員 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (音声言語研究領域) 准教授, 領域代表 (2016)

【専門領域】コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

【所属学会】社会言語科学会, 日本認知科学会, 人工知能学会, 言語処理学会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本語教育学会

【学会等の役員・委員】社会言語科学会 監事, 言語処理学会大会賞選考審査員, 言語処理学会 代議員, 日本言語学会大会委員

【受賞歴】

2002: 情報処理学会山下記念研究賞

1996: 人工知能学会大会論文賞

1996: 人工知能学会研究奨励賞

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: リーダー
- ・領域指定型共同研究プロジェクト「会話における創発的参与構造の解明と類型化」: コーディネーター

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究 (B) 「コーパス言語学的手法に基づく会話音声の韻律特徴の体系化」, 16H03421: 研究代表者
- ・科研費基盤研究 (B) 「地域社会の共在的記録に基づくコミュニケーションと記憶の活性化」, 18KT0035: 研究代表者
- ・科研費基盤研究 (A) 「日常場面と特定場面の日本語会話コーパスの構築と言語・相互行為研究の新展開」, 17H00914: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (A) 「手話翻訳システム構築を目指した手話対話における文単位の認定」, 18H03580: 研究分担者
- ・機構間連携・異分野連携研究プロジェクト「知性と認識の情報神経物理学」: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

岡照晃, 伝康晴, 内元清貴, 山田篤, 宇津呂武仁, 松吉俊, 土屋雅穂, 近藤泰弘, 坂野収, 多田知子, 岡田純子, 山元啓史, 萩野綱男, 矢澤真人, 丸山直子, 星野和子, 小磯花絵

『コーパスと辞書 (講座 日本語コーパス 7)』, 朝倉書店, 2019.3.25.

小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉
『『日本語日常会話コーパス』モニター公開版コーパスの設計と特徴 (プロジェクト報告書 3)』, 国立国語研究所「日常会話コーパス」, 2019.3.26.

《論文・ブックチャプター》

Hanae Koiso, Yasuyuki Usuda, Haruka Amatani, Yoshiko Kawabata, and Yasuharu Den

“Design and Preliminary Analysis of the Corpus of Everyday Japanese Conversation”, *Proceedings of LREC2018 Workshop: LB-ILR2018 and MMC2018 Joint Workshop*, pp. 1–5, 2018.5.7.

Hanae Koiso, Yasuharu Den, Yuriko Iseki, Wakako Kashino, Yoshiko Kawabata, Ken'ya Nishikawa, Yayoi Tanaka, and Yasuyuki Usuda

“Construction of the Corpus of Everyday Japanese Conversation: An Interim Report”, *Proceedings of*

Eleventh International Conference on Language Resources and Evaluation, pp. 4259–4264, 2018.5.

小磯花絵, 伝康晴

「『日本語日常会話コーパス』データ公開方針—法的・倫理的な観点からの検討を踏まえて—」, 『国立国語研究所論集』, 15巻, 75–89頁, 2018.7.31, DOI: 10.15084/00001597.

白田泰如, 川端良子, 西川賢哉, 石本祐一, 小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』における転記の基準と作成手法」, 『国立国語研究所論集』, 15巻, 177–193頁, 2018.7.31, DOI: 10.15084/00001602.

《コーパス・データベース類》

柏野和佳子, 西川賢哉, 小磯花絵

「『現日研・職場談話コーパス』中納言版」, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>, 2018.8.20.

小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 山口昌也

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版: HDD版」, <https://pj.ninjal.ac.jp/conversation/cejc-monitor/hdd-index.html>, 2018.12.4.

小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 山口昌也

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版: 中納言版」, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>, 2018.12.4.

【講演・口頭発表】

Hanae Koiso

“Construction of the Corpus of Everyday Japanese Conversation: An Interim Report”, 招待講演, Eleventh International Conference on Language Resources and Evaluation, フェニックス・シーガイア・リゾート, 2018.5.9.

小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』における職場会話」, 『現日研・職場談話コーパス』公開記念シンポジウム, 国立国語研究所, 2018.9.3.

小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 西川賢哉, 伝康晴

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の概要」, 言語資源活用ワークショップ 2018, 国立国語研究所, 2018.9.5.

柏野和佳子, 大村舞, 西川賢哉, 小磯花絵

「『現日研・職場談話コーパス』中納言版公開データの作成」, 言語資源活用ワークショップ 2018, 国立国語研究所, 2018.9.5.

小磯花絵

「日常会話コーパスに見るモダリティの多様性」, コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」, 国立国語研究所, 2018.9.7.

石本祐一, 天谷春香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 小磯花絵
「日常における会話の多様性を考慮した『日本語日常会話コーパス』の構築」, 日本音響学会 2018 年度秋季研究発表会, 大分大学, 2018.9.13.

Takehiko Maruyama and Hanae Koiso

“Diachronic Change of Spoken Japanese in the 20th Century: a corpora-based Study”, 50 ans de linguistique sur corpus oraux: apports à l'étude de la variation, Université d'Orléans (オルレアン・フランス), 2018.11.15.

小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』が話し言葉研究に果たす役割」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館, 2018.12.15.

小磯花絵

「日常会話コーパスに見るモダリティの多様性」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館, 2018.12.16.

小磯花絵, 柏野和佳子

「『日本語日常会話コーパス』の特徴」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館ホール, 2018.12.16.

小磯花絵

「日常生活に見られることばの使い分け」, 国立国語研究所オープンハウス 2018, 国立国語研究所, 2018.12.22.

小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版—話し言葉研究の展開—」, シンポジウム「日常会話コーパス」IV, 国立国語研究所, 2019.3.9.

石本祐一, 小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』から見える日常会話音声の韻律的特徴」, シンポジウム「日常会話コーパス」IV, 国立国語研究所, 2019.3.9.

小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居関友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の設計と特徴」, 言語処理学会第 25 回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.14.

八木豊, 中村壮範, 浅原正幸, 前川喜久雄, 小木曾智信, 小磯花絵, 迫田久美子, 木部暢子

「複数コーパスの包括的検索系」, 言語処理学会第 25 回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.14.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- LREC 2018 Workshop on Language and Body in Real Life(主催: The European Language Resources Association), フェニックス・シーガイア・リゾート, 2018.5.7.
- 『現日研・職場談話コーパス』公開記念シンポジウム: 談話資料の構築における 1990 年代の先駆的な試みから現在の新たな試みへ(主催: 日常会話コーパス), 国立国語研究所, 2018.9.3.
- 平成 30 年度 コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」(主催: 危機言語, 通時コーパス, 日常会話コーパス, 学習者のコミュニケーション, コーパスアノテーション), 国立国語研究所, 2018.9.7.
- 第 13 回 NINJAL フォーラム「日本語の変化を探る」, 一橋講堂, 2018.11.4.
- NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」ワークショップ「コーパスとモダリティ」(主催: 危機言語, 通時コーパス, 日常会話コーパス, 学習者のコミュニケーション, コーパスアノテーション), 国立国語研究所, 2018.12.16.
- 言語研究のためのデジタル研究入門ワークショップ(主催: ひつじ書房, 共催: 日常会話コーパス, 通時コーパス), 国立国語研究所, 2019.2.25.
- シンポジウム「日常会話コーパス」IV(主催: 日常会話コーパス, 創発参与構造), 国立国語研究所, 2019.3.4.
- EIL2019 & LCI-7 Joint International Symposium(主催: 日常会話コーパス, 創発参与構造), 国立国語研究所, 2019.3.11.
- 合宿講習会 手軽にできる会話・韻律・マルチモーダル分析—収録から発表まで—(主催: 社会言語学会事業委員会), 彩香の宿一望, 2019.3.18-20.

【その他の学術的・社会的活動】

- 取材記事: 「国語研ってどんなところ?」, 毎日ことば(毎日新聞 校閲センター), <https://mainichi-kotoba.jp/blog-201902>, 2019.2.2.
- LREC2018 Workshop 'Language and Body in Real Life' Organizing Committee

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

小磯花絵

「音声データ・音声コーパスを扱うために」, 言語研究のためのデジタル研究入門ワークショップ, 国立国語研究所, 2019.2.25.

小磯花絵

「コーパスの概要・データの仕様」, 『日本語日常会話コーパス』モニター公開版 利用説明会, 国立国語研究所, 2019.3.3.

小磯花絵

「会話収録の留意点」, 社会言語科学会事業委員会主催講習会「手軽にできる会話・韻律・マルチモーダル分析—収録から発表まで—」, 彩香の宿一望, 2019.3.18.

小磯花絵

「韻律分析の方法」, 社会言語科学会事業委員会主催講習会「手軽にできる会話・韻律・マルチモーダル分析—収録から発表まで—」, 彩香の宿一望, 2019.3.19.

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授

《修士論文審査委員》

- ・一橋大学大学院: 主査1件 (2019.2), 副査2件 (2019.2)

前川 喜久雄 (まえかわ きくお)

研究系（音声言語研究領域）教授，コーパス開発センター長

【学位】博士（学術）（東京工業大学, 2011）

【学歴】上智大学外国語学部フランス語学科卒業（1980），上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了（1982），上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士後期課程中退（1984）

【職歴】鳥取大学教育学部 助手（1984），同 講師（1987），国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員（1989），同 主任研究官（1992），同 室長（1994），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域 領域長（2001），同 言語資源グループ長（2006），人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 教授，コーパス開発センター長（2009-），同 研究系長（2009-2016），同 副所長（2013-2016），同 研究系（音声言語研究領域）教授（2016），一橋大学 連携教授（2005-2014）

【専門領域】音声学，言語資源

【所属学会】ISCA, IPA, 日本音声学会, 日本言語学会, 日本音響学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】日本音声学会 オープンサイエンス担当理事

【受賞歴】

2012: 日本音声学会優秀論文集「PNLP の音声的形状と言語的機能」, 『音声研究』15 (1)

2012: 国立国語研究所第4回所長賞

2011: 日本音声学会優秀論文集「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」, 『音声研究』14 (2)

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」：メンバー
- ・コーパス基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」：メンバー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究(B)「リアルタイム MRI および WAVE データによる調音音声学の精緻化」17H02339: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

前川喜久雄 (監修)

岡照晃, 伝康晴, 内元清貴, 山田篤, 宇津呂武仁, 松吉俊, 土屋雅稔, 近藤泰弘, 坂野収, 多田知子, 岡田純子, 山元啓史, 萩野綱男, 矢澤真人, 丸山直子, 星野和子, 小磯花絵 (著) 『コーパスと辞書 講座 日本語コーパス 7』, 朝倉書店, 2019.3.25.

《論文・ブックチャプター》

Kikuo Maekawa

“Weakening of Stop Articulation in Japanese Voiced Plosives”, 『音声研究』, 22 (1), pp. 21-34, 2018.4.30, DOI: 10.24467/onseikenkyu.22.1_21.

Kikuo Maekawa

“Phonetic Shape and Linguistic Function of Penultimate Non-Lexical Prominence”, 『音声研究』, 22 (1), pp. 35-51, 2018.4.30, DOI: 10.24467/onseikenkyu.22.1_35.

【講演・口頭発表】

高田智和, 鎌水兼貴, 横山詔一, 前川喜久雄

「鶴岡調査データの再構成」, 日本語学会 2018 年度春季大会, 明治大学, 2018.5.20.

前川喜久雄

「国立国語研究所における言語資源の研究開発」, 招待講演, 中国内蒙大学モンゴル学院での講演, 内蒙古大学 (フフホト市・中国), 2018.7.25.

前川喜久雄

「音声研究の方法について」, 招待講演, 中国内蒙ゴ大学モンゴル学院での講演, 内蒙古大学 (フフホト市・中国), 2018.7.26.

前川喜久雄

「ベイズモデルによる方言音声共通語化過程の分析」, 言語資源活用ワークショップ 2018, 国立国語研究所, 2018.9.4-5.

後藤翼, 萩原裕也, 濱中彩夏, 竹本浩典, 北村達也, 前川喜久雄

「機械学習による rtMRI 動画における発話器官の輪郭抽出方法の検討」, 日本音響学会 2018 年秋季研究発表会, 大分大学, 2018.9.13.

浅井拓也, 菊池英明, 前川喜久雄

「調音運動動画アノテーションシステムの開発」, 日本音響学会 2018 年秋季研究発表会, 大分大学, 2018.9.13.

前川喜久雄

「アクセント句頭の Fo 上昇は条件異音ではない」, 日本音声学会第 32 回全国大会, 沖縄国際大学, 2018.9.15.

浅井拓也, 菊池英明, 前川喜久雄

「調音運動動画アノテーションシステムの開発と応用」, 日本音声学会第 32 回全国大会, 沖縄国際大学, 2018.9.15.

前川喜久雄

「公開された鶴岡調査データの分析」, 招待講演, シンポジウム「経年調査の新たな挑戦—日本語の将来を占うために」, 国立国語研究所, 2018.12.22.

前川喜久雄

「「条件異音」の実証的再検討」, 招待講演, 第 13 回名古屋大学大学院人文学研究科言語学分野公開講演会, 名古屋大学, 2019.1.25.

前川喜久雄

「音韻論の瘦身化: 条件異音の批判的再検討」, 招待講演, 東京外国語大学国際日本研究センター対照日本語部門第 27 回『外国语と日本語との対照言語学的研究』, 東京外国語大学, 2019.3.2.

浅井拓也, 菊池英明, 前川喜久雄

「リアルタイム MRI 動画を利用したパラ言語発話生成時調音運動の動体検出」, 日本音響学会 2019 年春季研究発表会, 電気通信大学, 2019.3.5.

後藤翼, 萩原裕也, 濱中彩夏, 竹本浩典, 北村達也, 能田由紀子, 前川喜久雄

「機械学習による rtMRI 動画における発話器官の輪郭抽出精度の評価」, 日本音響学会 2019 年春季研究発表会, 電気通信大学, 2019.3.5.

能田由紀子, 籠宮隆之, 前川喜久雄

「磁気センサシステムをもちいた計測による座位・仰臥位・腹臥位における舌運動の差異の検討」, 日本音響学会 2019 年春季研究発表会, 電気通信大学, 2019.3.5.

八木豊, 中村壯範, 浅原正幸, 前川喜久雄, 小木曾智信, 小磯花絵, 迫田久美子, 木部暢子

「複数コーパスの包括的検索系」, 言語処理学会第 25 回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・言語資源活用ワークショップ 2018 (主催: コーパス開発センター), 国立国語研究所.

【一般向けの講演・セミナーなど】

前川喜久雄

「韻律とモダリティ」, 平成 30 年度 コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」, 国立国語研究所, 2018.9.7.

前川喜久雄

「リアルタイム MRI 動画で見る日本語の調音運動」, 国語研オープンハウス 2018, 国立国語研究所, 2018.12.22.

【その他の学術的・社会的活動】

- Editorial board member of *Speech Communication* (Elsevier) 2005–.
- Editorial board member of *Language & Linguistics* (John Benjamins) 2016–.
- Editorial board member of *Journal of the International Phonetics Association* (Cambridge Univ. Press) 2017–.
- 中央研究院語言学研究所（台湾）Advisory committee member, 2017–.
- 情報システム研究機構統計数理研究所 運営委員, 2018–.
- 上智大学 非常勤講師

【大学院教育・若手研究者育成】

《連携大学院（クロスアポイントメント）》

- 東京外国語大学大学院国際日本学研究員教授

《博士論文審査委員》

- 大阪府立大学：副査
- オルレアン大学：副査

柏野 和佳子 (かしの わかこ) 研究系 (音声言語研究領域) 准教授

【学位】博士 (学術) (東京工業大学, 2016)

【学歴】東京女子大学文理学部日本文学科卒業 (1991), 東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程単位取得満期退学 (2015)

【職歴】富士通株式会社システムエンジニア (1991–1998), 情報処理振興事業協会 (IPA) 技術センター研究員 (1991–1997), 国立国語研究所言語体系研究部第二研究室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同 言語資源グループ 主任研究員 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (音声言語研究領域) 准教授 (2017)

【専門領域】日本語学

【所属学会】計量国語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 人工知能学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】情報処理学会情報規格調査会 学会試行標準 WG3 小委員会主査, 学会試行標準専門委員会委員, 学会試行標準 WG9 小委員会委員, 日本特許情報機構 産業日本語研究世話人, 言語処理学会編集委員

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究 (C)「学術的文書作成のための文体差のある語の計量的分析」, 17K02800: 研究代表者
- ・科研費基盤研究 (B)「ソーシャルメディアにおける市民意見を活用したシティプロモーション」, 16H02913: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (B)「会話文への発話者情報の付与によるコーパスの拡張」, 15H03212: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

石黒圭, 柏野和佳子

『小学生から身につけたい一生役立つ語彙力の育て方』, KADOKAWA, 2018.10.20.

《論文・ブックチャプター》

Makoto Yamazaki, Yumi Miyazaki, and Wakako Kashino

“Annotation and Quantitative Analysis of Speaker Information in Novel Conversation Sentences in Japanese”, *Proceedings of the 11th edition of the Language Resources and Evaluation Conference (LREC2018)*, pp. 1078–1081, 2018.5.7.

《コーパス・データベース類》

柏野和佳子, 西川賢哉, 小磯花絵, 山口昌也

「『現日研・職場談話コーパス』中納言版」, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>, 2018.8.20.

大村舞, 柏野和佳子

「『名大会話コーパス』語数・語彙表」, 関係者限定公開, 2018.11.30.

大村舞, 柏野和佳子

「『現日研・職場談話コーパス』語数・語彙表」, 関係者限定公開, 2018.11.30.

小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 山口昌也

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版: HDD版」, <https://pj.ninjal.ac.jp/conversation/cejc-monitor/hdd-index.html>, 2018.12.4.

小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 山口昌也

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版: 中納言版」, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>, 2018.12.4.

大村舞, 柏野和佳子

「『日本語日常会話コーパス』語数・語彙・語形表」, 関係者限定公開, 2018.12.27.

《その他の出版物・記事》

柏野和佳子

「コーパスを活用した国語辞典の改訂」, 『全大教新聞』353号, 2018.11.10.

柏野和佳子

「ことばの上手な使い手を目指すためのことばの感性が磨ける本！」, 「ハイブリッド型総合書店 honto」のサイト内「ブックツリー」, https://honto.jp/booktree/detail_00008942.html, 2019.3.28.

【講演・口頭発表】

柏野和佳子

「『現日研・職場談話コーパス』中納言版について」, 『現日研・職場談話コーパス』公開記念シンポジウム, 国立国語研究所, 2018.9.3.

山崎誠, 宮崎由美, 柏野和佳子

「BCCWJ 小説会話文への発話者情報の付与と計量的分析」, 計量国語学会第62回大会, 京都教育大学, 2018.9.29.

柏野和佳子

「コーパスと辞書研究」, 招待講演, 大学院日本語教育研究科 (李在鎬研究室: ゼミ), 早稲田大学, 2018.11.22.

小磯花絵, 柏野和佳子

「『日本語日常会話コーパス』の特徴」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館ホール, 2018.12.16.

山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉

「語誌ポータルの構築」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館ホール, 2018.12.16.

柏野和佳子

「テキストの語りかけ性」, 招待講演, 日本語教育研究科 (原田康也: 応用言語学研究), 早稲田大学, 2019.1.17.

柏野和佳子

「日常会話の自称詞と小説会話の自称詞」, シンポジウム「日常会話コーパス」IV, 国立国語研究所, 2019.3.4.

山崎誠, 相澤正夫, 大西拓一郎, 柏野和佳子, 高田智和, 新野直哉, 間淵洋子, 桂祐成

「語誌データベースの試験公開」, 「通時コーパス」シンポジウム 2019, 国立国語研究所, 2019.3.9.

小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の設計と特徴」, 言語処理学会第25回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.14.

柏野和佳子, 平本智弥, 関洋平

「市民意見収集のためのツイート表現の分析」, 電気通信学会 思考と言語研究会, 早稲田大学, 2019.3.18.

柏野和佳子

「学術的文章作成時に留意すべき「話し言葉的な語」とは」, 招待講演, 第7回 早稲田大学 ライティング・フォーラム, 早稲田大学, 2019.3.22.

柏野和佳子

「言葉の研究と社会とのつながり」, 招待講演, 玉川大学大学院研究科交流会, 玉川大学, 2019.3.29.

【一般向けの講演・セミナーなど】

柏野和佳子

「語彙力がつく! 辞書の活用」, 出前授業, 府中市立府中第二中学校, 2018.5.1-2.

柏野和佳子

「めざせ！ 辞書引きの達人」，出前授業，立川市立立川第三小学校，2018.6.30.

柏野和佳子

「つくってあそんで 辞書カルタ ことば博士になろう」，子どもアカデミー，江戸川区子ども未来館，2018.8.1.

柏野和佳子

「遊んで学べる！ 辞書カルタをつくろう」，夏休み企画「夏のわくわく課外授業 2018」，千代田区立図書館，2018.8.18.

柏野和佳子

「コトバと時代の関係性」，すぎなみ大人塾，セシオン杉並，2018.12.14.

柏野和佳子

「用例分析に基づく国語辞典情報の見直し」，国立国語研究所オープンハウス 2018，国立国語研究所，2018.12.22.

柏野和佳子

「職業発見プログラム」，立川市立立川第二中学校第3学年，国立国語研究所，2019.3.5.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山崎誠，柏野和佳子

「オンライン検索システム「中納言」講習会」，オンライン検索システム「中納言」講習会，国立国語研究所，2018.9.3.

柏野和佳子

「検索システム「中納言」の使い方」，日常会話モニター公開の概要と中納言講習会，2019.3.3.

山口 昌也 (やまぐち まさや) 研究系 (音声言語研究領域) 准教授

【学位】博士 (工学) (東京農工大学, 1998)

【学歴】東京農工大学工学部数理情報工学科卒業 (1992), 東京農工大学大学院工学研究科博士前期課程電子情報工学専攻修了 (1994), 東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程電子情報工学専攻修了 (1998)

【職歴】東京農工大学工学部 助手 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域研究員 (2001), 同 言語資源グループ 研究員 (2006), 同 主任研究員 (2008), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教 (2009), 同 准教授 (2011), 同 研究系 (音声言語研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学

【所属学会】日本教育工学会, 日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会

【受賞歴】

2007: 財団法人博報児童教育振興会第1回博報「ことばと教育」研究助成「優秀賞」

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究 (C) 「ビデオアノテーションを利用した協同型実習活動支援システムに関する研究」, 17K01105: 研究代表者
- ・科研費基盤研究 (B) 「『昭和話し言葉コーパス』の構築による話し言葉の経年変化に関する実証的研究」, 16H03426: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (C) 「日本語教師の内省過程に関する研究—研修における授業データ活用の可能性を探る—」, 17K02862: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Masaya Yamaguchi

“A video annotation system for learners to observe educational activities”, Motoko Ueyama and Irena Srdanović (eds.) *Digital resources for learning Japanese*, pp. 173–190, Bononia University Press, 2018.5.

Masaya Yamaguchi, Masanori Kitamura, and Naomi Yanagida

“Development of a Mobile Observation Support System for Students: FishWatchr Mini”, *Proceedings of the Eleventh International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC 2018)*, 2018.5.

《コーパス・データベース類》

山口昌也, 西川賢哉, 小磯花絵

「全文検索システム『ひまわり』用『名大会話コーパス』パッケージ」, <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?meidai>, 2018.8.22 (データ改善, 修正, 最終更新).

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用『青空文庫』パッケージ」, <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?aozora>, 2018.10.2 (最終更新).

山口昌也

「観察支援ツール FishWatchr (ver.0.9.12–0.9.13)」, <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fw>, 2018.10.31.

山口昌也, 西川賢哉, 小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版 (検索システム部分)」, <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?cejc>, 2018.12.4.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』(ver.1.6.1–1.6.2)」, <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?hmw>

himawari, 2019.2.15.

山口昌也

「観察支援ツール FishWatchr Mini (ver.1.1.2–1.7)」, <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fwm>, 2019.3.27 (最終更新).

【講演・口頭発表】

山口昌也

「『日本語日常会話コーパス』活用環境の構築」, 言語資源活用ワークショップ 2018 予稿集, 国立国語研究所, 2018.9.5.

山口昌也, 大塚裕子

「ビデオアノテーションシステム FishWatchr を用いたディスカッション練習における観察と振り返りの分析」, 日本教育工学会第 34 回全国大会, 東北大学, 2018.9.28.

山口昌也

「『日本語日常会話コーパス』活用環境を用いた検索と閲覧」, シンポジウム「日常会話コーパス」IV, 国立国語研究所, 2019.3.4.

山口昌也, 森篤嗣

「リアルタイムアノテーションによる小学校におけるプレゼンテーション相互評価—小学校におけるプレゼンテーション発表会を例にして—」, 第 43 回社会言語科学会研究大会予稿集, 筑波大学, 2019.3.17.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』講習会」, 第 5 回コーパス利用講習会, 国立国語研究所, 2018.9.3.

山口昌也

「『日常会話コーパス』モニタ版『ひまわり』講習会」, 第 6 回コーパス利用講習会, 国立国語研究所, 2019.3.3.

石黒 圭 (いしぐろ けい) 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 領域代表

【学位】博士 (文学) (早稲田大学, 2008)

【学歴】一橋大学社会学部卒業 (1993), 早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了 (1995), 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導修了 (1999)

【職歴】一橋大学留学生センター 講師 (1999), 同 助教授 (2004), 一橋大学国際教育センター 准教授 (2010), 同 教授 (2013), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 准教授 (2015), 同 教授 (2015), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 領域代表 (2016)

【専門領域】日本語学, 日本語教育学

【所属学会】専門日本語教育学会, 日本語学会, 日本語教育学会, 日本語文法学会, 日本文体論学会, 表現学会, 早稲田日本語学会

【学会等の役員・委員】表現学会 理事, 日本語学会 評議員, 日本語文法学会 評議員, 専門日本語教育学会 編集幹事, 日本語教育学会 社会啓発委員

【受賞歴】

2018: 第15回日本語教育学会学会活動貢献賞

2018: 国立国語研究所第16回所長賞

2009: 第7回日本語教育学会奨励賞

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」: リーダー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究 (C) 「中国人日本語学習者の言語習得過程の実証的研究と教育的資源の提供研究」, 18K00731: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (C) 「中国人日本語学習者のビジネス・コミュニケーションの困難点の解明」, 18K00704: 研究分担者
- ・科研費挑戦的研究 (萌芽) 「日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究」, 17K18503: 研究分担者
- ・科研費挑戦的研究 (萌芽) 「クラウドソーシングを用いたビジネス文書のわかりやすさの言語学的研究」, 17K18504: 研究代表者
- ・科研費基盤研究 (C) 「アカデミック・ライティング技術の習得を目指したピア・レスポンスの実証的研究」, 17K02878: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (C) 「ノートの筆記過程の分析に基づく日本語学習者の講義理解過程の実証的研究」, 17K02879: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (C) 「講義理解における要約力に関する研究」, 16K02825: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (B) 「文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の実証的研究」, 16H03438: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (A) 「読解コーパスの構築による日本語学習者の読解過程の実証的研究」, 15H01884: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

石黒圭, 熊田道子, 筒井千絵, Olga Pokrovska, 山田裕美子

『快速突破日語閱讀技巧 15 講』, 外語教学与研究出版社, 2018.4.1.

石黒圭

『豊かな語彙力を育てる「言葉の感度を高める教育」へのヒント』, ココ出版, 2018.6.9.

石黒圭, 胡方方, 志賀玲子, 田中啓行, 布施悠子, 楊秀娥

『どうすれば協働学習がうまくいくか 失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』, ココ出版, 2018.6.9.

石黒圭

『EZ Japan 教材 06 日語接續詞大全：學會連接前後句，增強寫作和閱讀能力！（附接續詞一覽表）』，EZ 叢書館，2018.10.3.

石黒圭，柏野和佳子

『小学生から身につけたい 一生役立つ語彙力の育て方』，KADOKAWA，2018.10.20.

《論文・ブックチャプター》

石黒圭

「ピア・リーディング授業の概要」，石黒圭（編）『どうすれば協働学習がうまくいくか 失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』，ココ出版，1-13 頁，2018.6.9.

胡方方，石黒圭

「司会役の役割」，石黒圭（編）『どうすれば協働学習がうまくいくか 失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』，ココ出版，127-150 頁，2018.6.9.

石黒圭

「ピア・リーディング授業の考え方」，石黒圭（編）『どうすれば協働学習がうまくいくか 失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』，ココ出版，233-247 頁，2018.6.9.

石黒圭

「聖書の読みの実態—口語訳聖書と新共同訳聖書の比較から—」，『New 聖書翻訳』，4 卷，51-67 頁，2018.7.

布施悠子，石黒圭

「日本語学習者の作文執筆過程における自己修正理由—上級中国人学習者，上級韓国人学習者，日本語母語話者の作文の比較から—」，『国立国語研究所論集』，15 卷，17-42 頁，2018.7.

石黒圭，田中啓行

「日本語学習者の講義理解に見られる話段と中心文—人文科学系講義の理解データの分析から—」，『表現研究』，108 卷，49-58 頁，2018.10.

石黒圭

「専門教員との連携を生かしたアカデミック・ライティング能力育成の試み 法学部新入生を対象にした導入ゼミナールを例に」，村岡貴子，鎌田美千子，仁科喜久子（編）『大学と社会をつなぐライティング教育』，くろしお出版，117-135 頁，2018.11.30.

石黒圭

「文の理解における日本語学習者の多義語の意味把握の方法」，『アジア文化』，35 卷，69-81 頁，2018.12.

石黒圭

「わかりあえるコミュニケーションとは？ —コミュニケーションをめぐる八つの幻想—」，『日本語学』，38 卷 1 号，36-48 頁，2019.1.

《コーパス・データベース類》

石黒圭（班）

「日本語学習者の文章理解過程データベース」（60 名分を新規公開），<http://12-communication.ninjal.ac.jp/> 文章理解研究 /，2019.3.

【講演・口頭発表】

石黒圭

「中国人日本語学習者の文章理解における意味推測のストラテジー—読解指導の改善方法を考える—」，招待講演，第 4 回全国大学日本語専門教育改革及び発展シンポジウム，浙江越秀外国语学院（浙江省・中国），2018.4.21.

石黒圭，布施悠子

「中国人日本語学習者のフィラー習得過程の実態」，招待（パネル），国立国語研究所「学習者のコミュニケーションプロジェクト」シンポジウム「日本語教育は学習者コーパスで変わる—横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴—」，国立国語研究所，2018.4.30.

石黒圭

「ピア・リーディング授業の考え方」, 招待 (パネル), 国立国語研究所「学習者のコミュニケーションプロジェクト」シンポジウム「ピア・リーディングの授業の組み立て方—教師の準備からフィードバックまで—」, 国立国語研究所, 2018.6.9.

石黒圭, 井上雄太, 岩崎拓也, 佐野彩子, 布施悠子

「クラウドソーシングを用いたビジネス発注文書の言語学的分析試論」, 第20回日本テレワーク学会研究発表大会, 千葉商科大学, 2018.7.8.

石黒圭

「執筆プロセスに注目した文章表現研究・教育—日本語話者・中国語話者・韓国語話者の日本語作文修正過程の比較から—」, 招待講演, 立命館大学大学院・言語教育情報研究科・同窓会 第2回講演会, 立命館大学・大阪いばらきキャンパス, 2018.7.28.

石黒圭

「法学部の初年次教育におけるピア・レスポンスの実践と効果」, 招待講演, 成城大学共通教育研究センター公開シンポジウム「初年次教育における論文の書き方指導を考える—日本語学の有効活用は可能か—」, 成城大学, 2018.9.29.

石黒圭, 岩田一成, 蒙ユン, 青木優子, 浅井達哉

「クラウドソーシングを用いたビジネス発注文書の質的分析試論」, 日本語教育学会秋季大会, プラザ ヴェルデ, 2018.11.24.

石黒圭

「中韓日本語学習者に見られる作文執筆の産出過程」, 招待講演, 大連海事大学外国語学院講演会, 大連海事大学 (遼寧省・中国), 2018.11.29.

石黒圭, 胡方方

「JSL環境でのピア・リーディングの方法—日本国内の大学での実践を例に—」, 招待講演, 2018年度日本語教育ミニシンポジウム「協働学習で伸びる！ 日本語読解力」, 大連外国语大学日本語学院 (遼寧省・中国), 2018.11.30.

石黒圭

「わかりやすいビジネス文書の条件」, 招待講演, 第10回産業日本語研究会・シンポジウム, 丸ビルホール, 2019.2.21.

石黒圭, 胡方方

「学術的文章のテーマ選定に与えるグループ・ディスカッションの影響—ピア・レスポンスによるテーマ理解の深まりを巡って—」, 第21回専門日本語教育学会研究討論会, 下関市立大学, 2019.3.4.

石黒圭

「ピア・レスポンスによる文章表現力向上の試み」, 招待講演, 国立遺伝学研究所「研究プレゼンテーション研究会」, 国立遺伝学研究所, 2019.3.18.

石黒圭

「日本語学習者の作文執筆の産出過程—中国語・韓国語話者を対象に—」, 招待講演, 東吳大学日本語文学系講演会, 東吳大学 (台北市・台湾), 2019.3.21.

石黒圭

「中国語を母語とする日本語学習者のフィラーの習得過程」, 招待講演, 国立政治大学日本語文学系講演会, 国立政治大学 (台北市・台湾), 2019.3.22.

【研究調査】

- B-JAS の縦断調査 (北京日本学研究センターとの共同研究) (北京師範大学日本語学科 (北京市・中国)), 2018.4.22–24.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- 日本語教育は学習者コーパスで変わる—横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴— (主催: 学習

者のコミュニケーションプロジェクト), 国立国語研究所, 2018.4.30.

- ・ピア・リーディングの授業の組み立て方—教師の準備からフィードバックまで—(主催: 学習者のコミュニケーションプロジェクト), 国立国語研究所, 2018.6.9.

【一般向けの講演・セミナーなど】

石黒圭

「「ニホンゴ」って何だ?」, すぎなみ大人塾 2018 総合コース第 2 回講座, セシオン杉並, 2018.6.29.

石黒圭, 藤森弘子, 伊集院郁子, 伊東克洋

「キックオフイベント みんな、はじめは学生だった」, 東京外国语大学大学院国際日本学研究院主催「日本語教育専攻学生のための研究セミナー『日本語教育学研究と学習者言語研究のクロスポイント』」, 東京外国语大学・府中キャンパス, 2018.11.16.

石黒圭

「語彙力の鍛え方」, 中京大学文学部 2018 年度書道講演会, 中京大学, 2018.12.8.

石黒圭

「日本語学習者の言語運用の不思議—学習者コーパスから見えてくるもの—」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館, 2018.12.15.

石黒圭

「日本語学習者の作文執筆過程の自己修正」, 国立国語研究所オープンハウス 2018, 国立国語研究所, 2018.12.22.

石黒圭, 田中啓行

「話し言葉と要約について」, 東京都登録要約筆記者の会, 社会福祉法人 東京聴覚障害者福祉事業協会, 2019.2.16.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材記事:「語彙の質も重要だった 語彙力を鍛える 4 大メソッド」, 『日経おとなの OFF 206』, 16–17 頁, 2018.5.7.
- ・取材記事:「“ピンチ”で使う文章がスラスラ書けるうまい「書き方」完全マニュアル」, 『日経 BP ムック 誰でもすぐできて成果も上がる 30 代からのうまい「仕事のやり方」』, 20–31 頁, 2018.5.16.
- ・取材記事:「旦那様・奥様→パートナー 呼びかけ 多様性に配慮 千葉市の方針に賛否」, 朝日新聞(夕刊), 2018.8.1.
- ・取材記事:「認知症の「徘徊」、「ひとり歩き」に言い換え…自治体の動きに賛否両論」, 読売新聞(夕刊), 2018.12.15.
- ・取材記事:「AI 時代だから必要な力 記述力をグンと高める!」, 『Dream Navi』, 2019 年 2 月号, 14–29 頁, 2018.12.18.
- ・取材記事:「言い換えの技術を身につけ、伝える力を高める」, 『清流』, 2019 年 3 月号, 28–29 頁, 2019.2.1.
- ・文化庁文化審議会国語分科会国語課題小委員会委員
- ・東京都教育庁「学びの基盤」プロジェクトチーム委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授 (博士課程 10 名, 修士課程 4 名を主指導として担当)

《大学院非常勤講師》

- ・早稲田大学大学院文学研究科, 早稲田大学大学院日本語教育研究科

《博士論文審査委員》

- ・一橋大学大学院: 主査 (6 件: 2018.7 (3 件), 2018.10 (1 件), 2019.3 (2 件))
- ・一橋大学大学院: 副査 (2 件: 2018.12 (1 件), 2019.3 (1 件))

《若手研究者の受入》

- ・外来研究員: 1 名

宇佐美 まゆみ (うさみ まゆみ) 研究系 (日本語教育研究領域) 教授

【学位】 博士 (教育学 (Ed.D)) (ハーバード大学, 1999)

【学歴】 千葉大学教育学部教育心理学科 (1, 2 年次在籍), 立教大学文学部心理学科に 3 年次編入後卒業 (1981), 慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了 (1984), ハーバード大学教育学部大学院人間発達・心理学科修士課程修了 (1991), ハーバード大学教育学部大学院人間発達・心理学科博士課程単位取得修了 (1992)

【職歴】 財団法人交流協会台北事務所 日本語教育専門家 (1984), コルビー大学現代外国語学部 客員講師 (1987), シカゴ大学東アジア言語・文化学部 専任講師 (1988), 昭和女子大学文学部 専任講師 (1993), 東京外国語大学外国語学部 助教授 (1997), 同 教授 (2002), 東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学講座 教授 (大学院改組に伴う配置換え) (2005), 東京外国語大学総合国際学研究院 教授 (大学院改組に伴う配置換え) (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所研究系 (日本語教育研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】 言語社会心理学, 談話研究, 語用論, 日本語教育学

【所属学会】 社会言語科学会, 日本語教育学会, 日本語用論学会, 日本語学会, 日本心理学会, 日本社会心理学会, ヨーロッパ日本語教師会, 言語処理学会, 大学英語教育学会, 日本語プロフィシェンシー研究学会, 計量国語学会, 大学日本語教員養成課程研究協議会, International Association of Applied Linguistics (IAAL/AILA), International Pragmatics Association (IPrA)

【学会等の役員・委員】 社会言語科学会 理事・発表賞選考委員会委員長, 日本語ジェンダー学会 評議員

【受賞歴】

2018: ファジィシステムシンポジウム 2018 ポスター・デモセッション最優秀発表賞 (「ポライトネス理論に基づく運転支援エージェントの運転者属性と運転状況に応じた言語的振る舞いの設計」, 宮本友樹, 片上大輔, 重光由加, 宇佐美まゆみ, 田中貴紘, 金森等, 藤掛和広, 吉原佑器, 第34回ファジィシステムシンポジウム/FSS2018)

【2018 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」: リーダー
- ・ 新領域創出型共同研究プロジェクト「日本語の間接発話理解: 第一言語, 第二言語, 人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究」: コーディネーター

【2018 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 科研費基盤研究 (A) 「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」, 18H03581: 研究代表者
- ・ 科研費挑戦的研究 (萌芽) 「コミュニケーション能力を高める自然会話教材の高度共有化—共同体の構築に向けて—」, 18K18685: 研究代表者
- ・ 科研費基盤研究 (A) 「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」, 16H01934: 研究分担者
- ・ 科研費基盤研究 (A) 「つかえタイプの非流ちょう性に関する通言語的調査研究」, 15H02605: 研究分担者
- ・ 科研費基盤研究 (B) 「公用語の地域差・時代差に関する社会言語学的総合研究」, 16H03420: 研究分担者
- ・ 科研費基盤研究 (C) 「観光接觸場面のツーリスト・トーク: ツーリズムのためのやさしい日本語の開発と実践」, 18K00718: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

宇佐美まゆみ

「自然会話コーパスの分析とその教材化の意義—NCRB で教える「中途終了型発話」と「共同発話文」を中心に—」, 『ヨーロッパ日本語教育』, 22 号, 279–285 頁, 2018.3.

宮本友樹, 片上大輔, 重光由加, 宇佐美まゆみ, 田中貴紘, 金森等

「ポライトネス・ストラテジーに基づく会話エージェントの言語的な振る舞いの違いが人との関係性構築にもたらす効果～初対面における冗談の心理効果～」, 『知能と情報』, 30巻5号, 753–765頁, 2018.10.15, DOI: 10.3156/jsoft.30.5_753.

宇佐美まゆみ

「総合的会話分析」に基づく研究—『BTSJ 日本語自然会話コーパス』と『自然会話リソースバンク (NCRB)』との連携に触れながら—, 『ヨーロッパ日本語教育』, 23号, 194–205頁, 2019.3.

宇佐美まゆみ

「談話研究と言語教育—1960年代から現在までの流れ—」, 『ヨーロッパ日本語教育』, 23号, 206–221頁, 2019.3.

《コーパス・データベース類》

宇佐美まゆみ

「BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2018年版」, 2018.8.31.

宇佐美まゆみ

「自然会話リソースバンク NCRB」, 関係者限定公開, 2019.3.29.

【講演・口頭発表】

宇佐美まゆみ

「共同構築型自然会話を素材とするWEB教材の必要性とNCRB (Natural Conversation Resource Bank) を用いた教材作成法」, 特別講演, カリフォルニア大学バークレー校 (カリフォルニア・米国), 2018.4.4.

宇佐美まゆみ

「共同構築型自然会話を素材とするWEB教材の必要性とNCRB (Natural Conversation Resource Bank) を用いた教材作成法」, 特別講演, サンフランシスコ州立大学 (サンフランシスコ・米国), 2018.4.5.

宇佐美まゆみ

「共同構築型自然会話を素材とするWEB教材の必要性とNCRB (Natural Conversation Resource Bank) を用いた教材作成法」, 特別講演, コロンビア大学 (コロンビア・米国), 2018.4.10.

宇佐美まゆみ

「なぜ自然会話WEB教材が、学習者の自然なコミュニケーション能力の育成に有効なのか? —共同構築型自然会話リソースバンク (NCRB) による教材作成のために—」, 特別講演, ニューヨーク大学 (ニューヨーク・米国), 2018.4.11.

Mayumi Usami

“Persuasion and comfortableness: From the viewpoint of Discourse Politeness Theory”, The logic of persuasion 2018 Between anthropology and rhetoric, パレルモ大学 (パレルモ・イタリア), 2018.4.20.

宇佐美まゆみ

「ポライトネス理論とAI」, 招待 (パネル), 第3回会話・談話研究シンポジウム (「AIと言語研究 (1) —ポライトネスとAI—」, 国立国語研究所, 2018.6.23.

Mayumi Usami

“How do age and gender factors influence on politeness strategies in Japanese conversation between newly acquainted people?”, the 11th International Conference on Im/Politeness, バレンシア大学 (バレンシア・スペイン), 2018.7.6.

Mayumi Usami and Makoto Yamazaki

“Quantitative Characteristics of the BTSJ Japanese Natural Conversation Corpus (BTSJ-Corpus) ver. 2018: focussing on the differences of the use of polite forms according to sub-groups”, International Quantitative Linguistics Conference (QUALICO 2018), Przystan Kardynalska (ヴロツワフ・ポーランド), 2018.7.6.

宇佐美まゆみ

「自然会話コーパスへの言語社会心理学的アプローチ」, 招待 (パネル), シンポジウム「自然会話分析と言語社会心理学」, 東京外国語大学, 2018.7.14.

宇佐美まゆみ, 山崎誠

「自然会話の分析がなぜ平和のための対話教育につながるのか? —自然会話コーパスの分析から言えること—」, パネル『平和につながる「対話」教育の基礎とは? —自然会話の分析を通して—』, ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会 (VENEZIA ICJLE 2018), ヴェネツィア大学 (ヴェネツィア・イタリア), 2018.8.3.

宇佐美まゆみ

「談話研究と言語教育」, 特別講義『国立国語研究所講義シリーズ 1』, ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会 (VENEZIA ICJLE 2018), ヴェネツィア大学 (ヴェネツィア・イタリア), 2018.8.3.

宇佐美まゆみ

「総合的会話分析による研究—BTSJ 日本語自然会話コーパスを例に—」, 特別講義『国立国語研究所講義シリーズ 2』, ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会 (VENEZIA ICJLE 2018), ヴェネツィア大学 (ヴェネツィア・イタリア), 2018.8.3.

宮本友樹, 片上大輔, 重光由加, 宇佐美まゆみ, 田中貴紘, 金森等, 藤掛和広, 吉原佑器

「ポライトネス理論に基づく運転支援エージェントの運転者属性と運転状況に応じた言語的振る舞いの設計」, 第 34 回ファジイシステムシンポジウム (FSS2018), 名古屋大学, 2018.9.3.

Mayumi Usami

“How Can Language Studies and Language Classrooms Contribute to Casting New Perspectives to Japanese studies?”, 招待講演, International Conference on New Frontiers in Japanese Studies, メルボルン大学 (メルボルン・オーストラリア), 2018.9.17.

宇佐美まゆみ, 山崎誠

「『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2018 年版』の紹介と『BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット』を用いた分析法」, 計量国語学会第 62 回大会, 京都教育大学, 2018.9.29.

宇佐美まゆみ, 山崎誠

「『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版』における一人称・二人称代名詞の使用実態」, 日本語学会 2018 年度秋季大会, 岐阜大学, 2018.10.14.

Tomoki Miyamoto, Daisuke Katagami, Yuka Shigemitsu, Mayumi Usami, Takahiro Tanaka, Hitoshi Kanamori, Yuki Yoshihara, and Kazuhiro Fujikake

“Toward a construction of the politeness theory adaptable to HAI research: On going evaluation of conversational agents considering gender bias”, Next Generation Human-Agent Interaction Workshop 2018 (NGHAI 2018), サウサンプトン大学 (サウサンプトン・イギリス), 2018.12.15.

Mayumi Usami

“Why should we utilize natural conversation corpus to second language education?: From the viewpoint of usage-based pragmatic analysis”, The 2019 Hawaii International Conference on Education, ヒルトン・ハワイアンビレッジ・ワイキキビーチリゾート (ホノルル・米国), 2019.1.6.

宇佐美まゆみ

「自然会話分析とディスコース・ポライトネス理論の展開の可能性」, 招待講演, 2018 年度言語コミュニケーション文化学会 第 2 回フォーラム, 関西学院大学, 2019.2.16.

宇佐美まゆみ

「教材作成支援機能を持つ共同構築型 WEB 教材—NCRB (Natural Conversation Resource Bank) の展開—」, 南アジア日本語教育国際シンポジウム「JLESA'19 at EFLU・南アジアにおける日本語教育: 現状と今後の課題」, The English and Foreign language university Hyderabad (ハイデラバード・イン

ド), 2019.2.25.

宮本友樹, 片上大輔, 田中貴紘, 金森等, 吉原佑器, 藤掛和広, 重光由加, 宇佐美まゆみ
「あなたはどっち派? ユーザ属性に応じて受容性の高いポライトネス方略を選択する運転支援エージェント」, HAI シンポジウム 2018, 専修大学生田キャンパス, 2019.3.8.

宇佐美まゆみ, 片上大輔

「談話研究と言語処理, 人工知能研究の連携に向けて」, 言語処理学会第 25 回年次大会 (NLP2019) (テーマセッション), 名古屋大学東山キャンパス, 2019.3.14.

大塚容子, 宇佐美まゆみ, 伊藤敏

「動画からのうなずきの半自動検出と談話研究への応用」, 言語処理学会第 25 回年次大会 (NLP2019) (テーマセッション), 名古屋大学東山キャンパス, 2019.3.14.

宇佐美まゆみ

「間接発話理解のプロセスの解明がなぜ重要なのか—一本公募研究の趣旨に代えて—」, 招待講演, 「日本語の間接発話理解: 第一言語, 第二言語, 人工知能における習得メカニズムの認知科学的比較研究」研究発表会, 国立国語研究所, 2019.3.30.

【研究調査】

- ・日本語学習者の談話調査 (ハイデラバード (インド)), 2019.2.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・第 3 回会話・談話研究シンポジウム「AI と言語研究 (1) —ポライトネスと AI—」(主催: 国立国語研究所, 共催: 言語社会心理学研究会), 国立国語研究所, 2018.6.23.
- ・シンポジウム「自然会話分析と言語社会心理学」(主催: 国立国語研究所, 共催: 言語社会心理学研究会), 東京外国語大学, 2018.7.14.
- ・パネル企画『平和につながる「対話」教育の基礎とは? —自然会話の分析を通して—』(ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会 VENEZIA ICJLE 2018), 2018.8.3-4.
- ・テーマセッション企画「談話研究と言語処理, 人工知能研究の連携に向けて」(言語処理学会第 25 回年次大会 (NLP2019)), 名古屋大学東山キャンパス, 2019.3.12-15.

【一般向けの講演・セミナーなど】

宇佐美まゆみ

「BTSJ 日本語自然会話コーパスと NCRB (Natural Conversation Resource Bank)」, 平成 30 年度国立国語研究所日本語教師セミナー (海外), 国際交流基金シドニー日本文化センター (シドニー・オーストラリア), 2018.11.1.

宇佐美まゆみ

「BTSJ 日本語自然会話コーパスとは?」, 平成 30 年度国立国語研究所日本語教師セミナー (海外), メルボルン大学 (メルボルン・オーストラリア), 2018.11.5.

宇佐美まゆみ

「NCRB (Natural Conversation Resource Bank) とは?」, 平成 30 年度国立国語研究所日本語教師セミナー (海外), メルボルン大学 (メルボルン・オーストラリア), 2018.11.5.

宇佐美まゆみ, 張洋子, 小川都

「『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の特徴と活用法」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館, 2018.12.16.

宇佐美まゆみ

「会話から人間を探る! 悪態と懲勸無礼、どっちがポライトなの? —BTSJ 自然会話コーパスの分析とその教材化—」, 国立国語研究所オープンハウス 2018, 国立国語研究所, 2018.12.22.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・AGLOS 査読協力
- ・AJE ヨーロッパ日本語教育シンポジウム 第 22 回 査読協力

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

宇佐美まゆみ

「第9回 BTSJ 活用方法講習会（初心者向け）」, 国立国語研究所, 2018.12.14.

宇佐美まゆみ

「第10回 BTSJ 活用方法講習会（既習者向け）」, 国立国語研究所, 2018.12.14.

《大学院非常勤講師》

- ・國學院大學大学院

《若手研究者の受入》

- ・外来研究員: 1名

野田 尚史 (のだ ひさし) 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 研究主幹

【学位】博士 (言語学) (筑波大学, 1999)

【学歴】大阪外国語大学外国語学部イスパニア語学科卒業 (1979), 大阪外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修士課程修了 (1981), 大阪大学文学研究科日本学専攻博士後期課程中退 (1981)

【職歴】大阪外国語大学国語学部 助手 (1981), 筑波大学文芸・言語学系 講師 (1985), 大阪府立大学総合科学部 講師 (1991), 同 助教授 (1993), 同 教授 (1999), 大阪府立大学人間社会学部 教授 (2005), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 教授 (2012), 同 センター長 (2015-2016), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 教授, 研究主幹 (2016)

【専門領域】日本語学, 日本語教育学

【所属学会】日本語学会, 日本語教育学会, 日本言語学会, 日本語文法学会, 社会言語科学会, 言語処理学会, 計量国語学会, 日本語用論学会, 関西言語学会, 専門日本語教育学会, 韓國日本語學會, ヨーロッパ日本語教師会, American Association of Teachers of Japanese

【学会等の役員・委員】日本語学会 評議員, 日本語教育学会 審査・運営協力員, 日本言語学会 常任委員・評議員, 日本語文法学会 評議員, 社会言語科学会 理事・徳川宗賢賞選考委員, 言語系学会連合運営委員, 文化審議会 臨時委員 (国語分科会), 文化庁「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」企画・評価会議 委員, 日本語教育能力検定試験実施委員会 委員, 日本放送協会放送文化研究所放送用語委員会 委員

【受賞歴】

2006: 第4回日本語教育学会奨励賞 (日本語教育学会)

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「とりたて表現」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」: メンバー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究 (A) 「読解コーパスの構築による日本語学習者の読解過程の実証的研究」, 15H01884: 研究代表者
- ・科研費挑戦的研究 (萌芽) 「日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究」, 17K18503: 研究代表者
- ・科研費基盤研究 (A) 「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」, 16H01934: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (B) 「文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の実証的研究」, 16H03438: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (B) 「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心」, 15H03210: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (B) 「自閉症を中心とした発達障害児の音韻体系の言語学・音声学的研究」, 18H00666: 研究分担者
- ・科研費基盤研究 (C) 「日本語学習者の小説読解困難点に関する実証的研究と読解支援教材開発のための研究」, 17K02880: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

野田尚史, 穴井宰子, 中島晶子, 白石実, 村田裕美子

「ヨーロッパの日本語学習者に有益な読解教育」, 『ヨーロッパ日本語教育』, 22号, 218-236頁, 2018.4.

野田尚史, 中北美千子

「英語アルファベットによる日本語音声表記」, 『国立国語研究所論集』, 15号, 135–162頁, 2018.7,
DOI: 10.15084/00001600.

野田尚史

「学習者は現実の日本語をどのように聞きとっているか? —背景知識の不足による聽解の難しさを中心について」, 『BATJ Journal』, 19号, 47–55頁, 2018.9.

野田尚史

「日本語教育はどのように新しい日本語文法研究を創出するか—「聞く」「話す」「読む」「書く」ための文法の開拓—」, 『日本語文法』, 18卷2号, 45–61頁, 2018.9.30.

野田尚史

「日本語のシンタクスと意味」, 日本語学会(編)『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 724–725頁, 2018.10.10.

野田尚史

「文型」, 日本語学会(編)『日本語学大辞典』, 東京堂出版, 807–808頁, 2018.10.10.

野田尚史

「聽解・読解における日本語のバリエーションの難しさ」, 大島弘子(編)『フランス語を母語とする日本語学習者の誤用から考える』, ひつじ書房, 1–19頁, 2018.11.21.

野田尚史

「松浦恵津子著『照応・接続・文の成分間の関係性の諸相—日本語教育における文法指導の現場から—』(笠間書院, 2017年)」(書評論文), 『日本語文法』, 19卷1号, 72–79頁, 2019.3.31.

《コーパス・データベース類》

野田尚史, 任ジェヒ, 賈黎黎, 桑原陽子, 近藤めぐみ, 邵艶紅, 白石実, 中島晶子, 花田敦子, 福田晶子, 藤原未雪, 向井裕樹, 村田裕美子, 守時なぎさ, チョウ・ミンヨン, 王雪竹

「日本語非母語話者の読解コーパス」(データの追加), <https://www2.ninjal.ac.jp/jsl-rikai/dokkai/index.html>, 2019.3.

野田尚史, 桑原陽子, 加藤陽子, 北浦百代, 松岡洋子, 任ジェヒ, 王麗莉, 小西円, 藤井明子, 山口美佳, 山本晃彦, 吉本由美

「日本語を読みたい!」(教材の追加), <http://www.nihongo-tai.com/japanese/yomu/>, 2019.3.

野田尚史, 阪上彩子, 島津浩美, 中山英治, 奥野由紀子, 松崎寛, 太原ゆか, 萩原章子, 久保輝幸, 首藤美香, 鋤野亜弓, 高山弘子, 中尾有岐, 日比伊奈穂, 村田裕美子, 吉川景子

「日本語を聞きたい!」(教材の追加), <http://www.nihongo-tai.com/japanese/kiku/>, 2019.3.

【講演・口頭発表】

野田尚史

「日本語教育における文法の役割」, 招待講演, 大連外国語大学講演会, 大連外国語大学(大連・中国), 2018.5.11.

野田尚史

「日本語コミュニケーション教育に必要な文法」, 招待講演, 北京第二外国語大学講演会, 北京第二外国语大学(北京・中国), 2018.5.15.

野田尚史

「日本語習得のための日本語文法の開拓」, 招待講演, 北京日本学研究センター公開講座, 北京日本学研究センター(北京・中国), 2018.5.17.

野田尚史

「言語によるコミュニケーションの違いと日本語教育」, 招待講演, 北京大学創立120周年記念国際シンポジウム「日本と世界—文明の伝播、交流と発展—」, 北京大学(北京・中国), 2018.6.2.

野田尚史

「従属節研究の課題」, 招待(パネル), 関西言語学会(KLS)第43回大会, 甲南大学, 2018.6.9.

野田尚史

「コミュニケーションのための日本語学習辞書の構想」, 招待講演, 国際シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて—学習者調査から新しい辞書の構想と開発へ—」, 国際交流基金日本語国際センター, 2018.7.31.

野田尚史, 村田裕美子, 中島晶子, 白石実

「ヨーロッパの日本語学習者の読解における推測ストラテジー」, 2018年日本語教育国際研究大会, カ・フォスカリ大学 (ヴェネツィア・イタリア), 2018.8.4.

野田尚史

「日本語教育の実践から出発する日本語文法研究」, 招待講演, 2018年日本語教育とシラバスデザイン研究国際シンポジウム, 吉林大学 (長春・中国), 2018.10.13.

野田尚史

「非漢字系日本語学習者の読解教育」, 招待講演, 西日本短期大学別科日本語研修課程10周年記念講演, 西日本短期大学, 2018.12.1.

野田尚史

「とりたて表現から見たモダリティ」, 招待 (パネル), NINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館ホール, 2018.12.16.

野田尚史

「日本語の主題・焦点と言語類型論」, 招待 (パネル), 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」第3回合同研究発表会 (Prosody and Grammar Festa 3), 国立国語研究所, 2019.2.16.

野田尚史

「日本語のコミュニケーション教育に必要な言語技術」, 招待講演, スイス日本語教師の会春のセミナー, 在スイス日本大使館 (ベルン・スイス), 2019.3.23-24.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」研究発表会 (主催: 共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」), 国立国語研究所, 2018.9.29.
- ・NINJALシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—文法史研究・通時的対照研究を中心に—」 (主催: 共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「とりたて表現」, 共催: 共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」), 国立国語研究所, 2019.1.13.
- ・平成30年度国立国語研究所日本語教師セミナー「看護・介護に必要な日本語の研究と日本語教育」 (主催: 国立国語研究所), 国立国語研究所, 2019.2.9.

【一般向けの講演・セミナーなど】

野田尚史

「さまざまな日本語を分析する」, 日本語教師夏期集中セミナー, 長沼スクール 東京日本語学校, 2018.8.14.

野田尚史

「実生活でいかに日本語を聞き取るか—日本語学習者のためのリスニング教材と活用法—」, 福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座, 八幡西生涯学習総合センター, こくさいひろば, えーるピア久留米, 2018.10.20-22.

野田尚史

「グローバル人材の日本語能力」, Work in Kyushuシンポジウム「グローバル人材の採用・就職に求められる日本語のちから」, こくさいひろば, 2019.1.18.

野田尚史

「看護・介護に必要な多様な日本語能力—特化型の日本語教育を目指して—」, 平成30年度国立国語研

究所日本語教師セミナー「看護・介護に必要な日本語の研究と日本語教育」, 国立国語研究所, 2019.2.9.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

野田尚史

「日本語の文法」, 第24回 NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」, 中央大学校 (ソウル・韓国), 2018.6.30.

野田尚史

「文の基本的な構造」, 国立国語研究所 日本語学講習会, Maharatta Chamber of Commerce, Industries, & Agriculture (プネー・インド), 2018.12.22.

野田尚史

「主題・とりたて」, 国立国語研究所 日本語学講習会, Maharatta Chamber of Commerce, Industries, & Agriculture (プネー・インド), 2018.12.23.

《大学院非常勤講師 (集中講義)》

- ・北京外国语大学大学院 (北京日本学研究センター)
- ・九州大学大学院
- ・大阪府立大学大学院
- ・東北大学大学院

野山 広 (のやま ひろし) 研究系 (日本語教育研究領域) 准教授

【学位】 修士 (文学) (早稲田大学, 1988), 修士 (日本語応用言語学) (モナシュ大学, 1995), 修士 (教育学) (早稲田大学, 1996)

【学歴】 早稲田大学卒業 (1985), 早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了 (1988), 豪州モナシュ大学大学院日本研究科日本語応用言語学専攻修了 (1995), 早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻修士課程修了 (1996), 早稲田大学大学院文学研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程単位取得退学 (2001)

【職歴】 文化庁文化部国語課 専門職員 (日本語教育調査官) (1997), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域 主任研究員 (2004), 同 領域長 (2005), 同 整備普及グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 上級研究員 (2009), 同 准教授 (2010), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 応用言語学, 日本語教育学, 基礎教育保障学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育, 言語政策・計画研究

【所属学会】 日本語教育学会, 基礎教育保障学会, 異文化間教育学会, 移民政策学会, 社会言語科学会, ヨーロッパ日本語教師会

【学会等の役員・委員】 基礎教育保障学会 常任理事・副会長, (公社) 日本語教育学会編集委員会委員, 異文化間教育学会 理事, (一社) 多文化社会専門職機構 代表理事, 日本語プロフェッショナル研究会 監事, 港区国際化推進アドバイザーミーティング 委員長 (座長)

【受賞歴】

2018: 2017年度日本語教育学会学会活動貢献賞

【2018年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」: メンバー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 科研費挑戦的萌芽研究「基礎教育保障学の構築に向けた萌芽研究」, 16K13454: 研究代表者
- ・ 科研費基盤研究 (A) 「海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究」, 16H01934: 研究分担者
- ・ 科研費基盤研究 (C) 「夜間中学校の有用性と存在意義に関する学際的研究」, 17K04860: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

野山広

「官民協働で追求する義務教育完全保障—学会設立と「基礎教育」論」, 『日本の科学者』, 54巻2号, 11-16頁, 2019.2.1.

【講演・口頭発表】

野山広

「定住外国人の日本語使用と言語生活に関する縦断調査の在り方に関する一考察—OPIの枠組みを活用した現場生成型のフィールドワークを事例として—」, 異文化間教育学会 (2018年), 新潟大学, 2018.6.10.

野山広

「CLD児童・生徒の言語環境の整備と平和教育—「何のために日本語を学ぶのか」という観点から (パネル「複言語環境で育つ子どもにとっての日本語の位置付けの多様性と平和教育の重要性—ドイツ、ブラジル、日本の事例報告と家庭内言語政策の実態を踏まえながら」)」, 2018日本語教育国際研究大会, 第22回 AJE ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, カ・フォスカリ大学 (ベネチア・イタリア), 2018.8.3-4.

野山広

「効果的なフィールドワークと注意事項「形成的フィールドワークの充実に向けた試行錯誤—Welfare Linguistics の観点から計画・展開した約 10 年間の縦断調査を振り返りながら—」」, 特別講演, ニューサウスウェールズ大学大学院拡大勉強会 (研究会), 国際交流基金シドニー日本文化センター (シドニー・オーストラリア), 2018.11.16.

【研究調査】

- ・北京師範大学, 北京日本学研究センターとの協働による縦断調査 (中国・北京師範大学), 2018.9.
- ・OPI (Oral Proficiency Interview) の枠組みを活用した, 日本語学習者の会話力, 言語生活等に関する縦断調査のフォローアップ調査等 (秋田県能代市), 2019.3.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・基礎教育保障学会第 3 回研究大会 (主催: 基礎教育保障学会, 共催: 首都大学東京), 首都大学東京, 2018.9.1-2.
- ・第四回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウム (主催: 海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用研究, 共催: 学習者のコミュニケーションの研究), 東京工業大学キャンパス・イノベーション・センター 国際会議室, 2018.12.22.

【一般向けの講演・セミナーなど】

野山広

「多文化共生社会と地域日本語教育」, 日本語ボランティア入門講座, 西東京市・田無庁舎 (会議室), 2018.5.15.

野山広

「地域日本語教育の展開と多文化共生社会」, 日本語ボランティア・スキルアップ講座, 西砂学習館視聴覚室, 2018.8.15.

野山広

「外国人材の活用と日本語コミュニケーション (対話) の重要性—複言語・複文化環境で育った人々が京都に福を運んでくる—」, 京都日本語教育センター京都日本語学校第 51 回秋季講演会, 京都府国際センター特別会議室, 2018.10.20.

野山広

「複言語・複文化家族における対話の重要性と日本語リテラシーの可能性」, 国際交流基金シドニー日本文化センター特別講演, 国際交流基金シドニー日本文化センター, 2018.11.17.

野山広

「多文化共生と言葉: 「やさしい日本語」を使った交流」, 港区, 港勤労福祉会館, 2018.11.21.

野山広

「複言語・複文化家族における親子の対話と家庭内言語政策の重要性」, ドイツ・デュースブルク「でんでん (継承語としての日本語・日本文化教室)」保護者会, 「でんでん」保護者研修室 (デュースブルク・ドイツ), 2018.11.30.

野山広

「複言語・複文化家族における親子の対話とコミュニティの EV の重要性」, 継承日本語教室保護者会 (オランダ), ライデン大学 (ライデン・オランダ), 2018.12.3.

野山広

「複言語・複文化環境における「対話」と地域の力付け (エンパワメント) の重要性」, 第 7 回「みなど国際交流・協力の日」実行委員会, 港区麻布区民センター (ホール), 2019.1.12.

野山広

「多文化共生社会の構築と地域日本語教育の展開」, サポート 21 (NPO 法人) 研修, サポート 21 (目黒), 2019.2.17.

野山広

「地域日本語教育の展開と多文化共生社会」, 野田市国際交流協会, 野田市総合福祉会館会議室, 2019.2.23.

野山広

「「やさしい日本語」と共生社会」, 八王子市役所, 市役所・会議室, 2019.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- 取材記事: 「日本語指導必要な外国人の子ら学校対応追いつかず」, 共同通信全国発信記事, 2018.11.28.

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師》

- 首都大学東京大学院
- 東海大学大学院

福永 由佳 (ふくなが ゆか) 研究系 (日本語教育研究領域) 研究員

【学位】 修士 (日本語教育) (ウィスコンシン大学, 1993)

【学歴】 金沢女子大学文学部英米文学科卒業 (1991), ウィスコンシン大学東アジア語学文学学科修士課程修了 (1993)

【職歴】 国立国語研究所日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員 (2001), 同 日本語教育基盤情報センター学習項目グループ 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 研究員 (2009), 研究系 (日本語教育研究領域) 研究員 (2016)

【専門領域】 日本語教育学, 社会言語学, 多言語使用, 言語政策研究

【所属学会】 日本語教育学会, 社会言語科学会, 日本言語政策学会, 日本質的心理学会, 言語管理研究会

【学会等の役員・委員】 日本質的心理学会研究交流委員, 言語管理研究会接触場面分科会運営委員

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・多様化する接触場面への質的アプローチ (主催: 言語管理研究会「接触場面と言語管理」分科会, 協力: 日本質的心理学会研究交流委員会), 一橋大学, 2019.2.16.

【一般向けの講演・セミナーなど】

福永由佳

「日本に居住する外国人の多言語使用の諸相—在日パキスタン人コミュニティを事例に—」, 国立国語研究所第一回オープンハウス, 国立国語研究所, 2018.12.22.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・査読協力: 学術誌『言語文化教育研究』
- ・査読協力: 「多言語社会と言語問題シンポジウム 2018」
- ・言語管理研究会「接触場面と言語管理」分科会主催・日本質的心理学会研究交流委員会協力「多様化する接触場面への質的アプローチ」における指定討論者, 一橋大学, 2019.2.16.

浅原 正幸 (あさはら まさゆき) コーパス開発センター 准教授

【学位】博士（工学）（奈良先端科学技術大学院大学, 2003）

【学歴】京都大学総合人間学部基礎科学科卒業（1998），奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了（2001），奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了（2003）

【職歴】奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 助手・助教（2004），国立国語研究所コーパス開発センター 特任准教授（2012），同 言語資源研究系 准教授（2014），同 コーパス開発センター 准教授（2016）

【専門領域】自然言語処理

【所属学会】情報処理学会，言語処理学会，言語学会，日本語学会

【学会等の役員・委員】情報処理学会自然言語処理研究会 運営委員（-2019.3）言語処理学会 編集委員（-2018.9）
言語処理学会 第25回年次大会プログラム委員

【受賞歴】

- 2019: 言語処理学会論文誌『自然言語処理』2018年度論文賞：「名詞句の情報の状態と読み時間について」
- 2019: 言語処理学会第25回年次大会 言語資源賞：「クラウドソーシングによる単語親密度の推定」
- 2014: 言語処理学会論文誌『自然言語処理』2013年度論文賞：「Markov Logicによる日本語述語項構造解析」
- 2011: Best paper award of the 7th International Conference on Natural Language Processing and Knowledge Engineering: "Dual Decomposition for Predicate-Argument Structure Analysis"
- 2010: The Best Paper Award of the SMBM2010 (the Fourth International Symposium on Semantic Mining in Biomedicine): "Coreference Based Event-Argument Relation Extraction on Biomedical Text"
- 2008: 言語処理学会第14回年次大会 優秀発表賞：「トーナメントモデルを用いた日本語係り受け解析」
- 2003: 平成15年度情報処理学会 山下記念研究賞：「日本語固有表現抽出における冗長的な形態素解析の利用」

【2018年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」：メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」：メンバー
- ・コーパス基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」：リーダー
- ・情報・システム研究機構：機構間連携・文理融合プロジェクト調査研究（FS）「わかりやすい情報伝達の実現に向けた言語認知機構の解明とその工学的応用」：共同研究員
- ・機構間連携・異分野連携研究プロジェクト「知性と認識の情報神経物理学」：共同研究員
- ・共同研究協定（株式会社ワクスアプライケーションズ）「国語研ウェブコーパスを用いた分散表現データ構築」

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究（C）「修辞機能」と「脱文脈化程度」の観点からのテキスト分析手法確立と自動化の検討」, 15K02535: 研究分担者
- ・科研費基盤研究（A）「日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション」, 17H00917: 研究代表者
- ・科研費挑戦的研究（萌芽）「コーパスからの比喩表現収集とその分析」, 18K18519: 研究代表者
- ・科研費基盤研究（C）「文体分析を目的としたコーパスの文書情報拡張及びその利用」, 18K00634: 研究分担者
- ・科研費新学術領域研究（研究領域提案型）「言語による時間生成」, 18H05521: 研究分担者
- ・博報財団 児童教育実践についての研究助成 第11回継続助成（アドバンストステージ）「現場との協働による児童・生徒作文能力の経年変化に関する発展的研究」: 研究分担者（アドバンストステージから参画）

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Matsumoto Satomi, Masayuki Asahara, and Setsuko Arita

“Japanese clause classification annotation on the ‘Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese’”, *Proceedings of Asian Language Resources 13*, pp. 7–12, 2018.5.

Rui Suzuki, Kanako Komiya, Masayuki Asahara, Minoru Sasaki, and Hiroyuki Shinnou

“All-words Word Sense Disambiguation Using Concept Embeddings”, *Proceedings of the 11th edition of the Language Resources and Evaluation Conference (LREC-2018)*, pp. 1006–1011, 2018.5.

Masayuki Asahara, Hiroshi Kanayama, Takaaki Tanaka, Yusuke Miyao, Sumire Uematsu, Shinsuke Mori, Yuji Matsumoto, Mai Omura, and Yugo Murawaki

“Universal Dependencies Version 2 for Japanese”, *Proceedings of the 11th edition of the Language Resources and Evaluation Conference (LREC-2018)*, pp. 1824–1831, 2018.5.

浅原正幸, 田中弥生

「修辞ユニット分析における脱文脈化指数の妥当性の検証」, 『国立国語研究所論集』, 15号, 1–15頁, 2018.7, DOI: 10.15084/00001593.

浅原正幸

「数理的研究(2016年・2017年における日本語学界の展望)」, 『日本語の研究』, 14卷3号, 2018.7.

Masayuki Asahara, Satoshi Nambu, and Shin-ichiro Sano

“Predicting Japanese Word Order in Double Object Constructions”, *Proceedings of CogACLL 2018*, pp. 36–40, 2018.7.

浅原正幸, 松本裕治

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する文節係り受け・並列構造アノテーション」, 『自然言語処理』, 25卷4号, 331–356頁, 2018.9, DOI: 10.5715/jnlp.25.331.

宮内拓也, 浅原正幸, 中川奈津子, 加藤祥

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』への情報構造アノテーションとその分析」, 『国立国語研究所論集』, 16号, 19–33頁, 2018.10, DOI: 10.15084/00001606.

Hiroshi Kanayama, Na-Rae Han, Masayuki Asahara, Jena D. Hwang, Yusuke Miyao, Jinho D. Choi, and Yuji Matsumoto

“Coordinate Structures in Universal Dependencies for Head-final Languages”, *Proceedings of UDW 18*, pp. 75–84, 2018.11.

Mai Omura and Masayuki Asahara

“UD-Japanese BCCWJ: Universal Dependencies Annotation for the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese”, *Proceedings of UDW 18*, pp. 117–125, 2018.11.

浅原正幸

「名詞句の情報の状態と読み時間について」, 『自然言語処理』, 25卷5号, 527–554頁, 2018.12, DOI: 10.5715/jnlp.25.527.

Masayuki Asahara

“Between Reading Time and Clause Boundaries in Japanese—Wrap-up Effect in a Head-Final Language”, *Proceedings of PACLIC 32*, 2018.12.

Sachi Kato, Masayuki Asahara, and Makoto Yamazaki

“Annotation of ‘Word List by Semantic Principles’ Labels for the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese”, *Proceedings of PACLIC 32*, 2018.12.

浅原正幸, 金山博, 宮尾祐介, 田中貴秋, 大村舞, 村脇有吾, 松本裕治

「Universal Dependencies 日本語コーパス」, 『自然言語処理』, 26卷1号, 3–36頁, 2019.3, DOI: 10.5715/jnlp.26.3.

【講演・口頭発表】

菊地礼, 加藤祥, 浅原正幸

「比喩指標とその類義語句を用いた直喩用例収集の試み」, 日本認知言語学会第 19 回大会, 立命館大学, 2018.8.30–9.1.

田邊絢, 古宮嘉那子, 浅原正幸, 佐々木稔, 新納浩幸

「日本語歴史コーパスの現代語辞書における未知語義判定システム」, 言語資源活用ワークショップ 2018, 国立国語研究所, 2018.9.4–5.

大村舞, 浅原正幸

「UD Japanese-BCCWJ の構築と分析」, 言語資源活用ワークショップ 2018, 国立国語研究所, 2018.9.4–5.

浅原正幸, 南部智史, 佐野真一郎

「日本語の二重目的語構文の基本語順について」, 言語資源活用ワークショップ 2018, 国立国語研究所, 2018.9.4–5.

加藤祥, 櫻井芽衣子, 森山奈々美, 浅原正幸

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』書籍サンプルに対する NDC 記号拡張アノテーションと NDC 形式区分を用いた「隨筆」の文体分析」, 言語資源活用ワークショップ 2018, 国立国語研究所, 2018.9.4–5.

宮城信, 浅原正幸, 今田水穂

「現職教員による児童・生徒作文の評価基準の分析」, 言語資源活用ワークショップ 2018, 国立国語研究所, 2018.9.4–5.

加藤祥, 浅原正幸

「説明文の冒頭が説明対象の認識に及ぼす影響」, 日本認知科学会第 35 回大会, 静岡大学, 2018.9.8–9.

Aya Tanabe, Kanako Komiya, Masayuki Asahara, Minoru Sasaki, and Hiroyuki Shinnou

“Detecting Unknown Word Senses in Contemporary Japanese Dictionary from Corpus of Historical Japanese”, JADH 2018, 一橋講堂, 2018.9.9–11.

Asuko Kondo, Makiro Tanaka, and Masayuki Asahara

“Alignment Table between UniDic and ‘Word List by Semantic Principles’”, JADH 2018, 一橋講堂, 2018.9.9–11.

Masayuki Asahara

“Between Reading Time and Zero Exphora in Japanese”, READ 2018, ドイツ人工知能研究所 (カイザースラウテルン・ドイツ), 2018.10.4–5.

加藤祥, 浅原正幸, 山崎誠

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の新聞・書籍・雑誌データに対する分類語彙表番号付与」, 日本語学会 2018 年度秋季大会, 岐阜大学, 2018.10.13–14.

浅原正幸, 加藤祥, 鈴木泰, 池上尚

「『日本語歴史コーパス』4 作品に対する分類語彙表番号付与とその分析」, 日本語学会 2018 年度秋季大会, 岐阜大学, 2018.10.13–14.

浅原正幸

「単語埋め込みに基づくサプライザルのモデル化」, 日本言語学会第 157 回大会, 京都大学, 2018.11.17–18.

浅原正幸

「名詞句の情報の状態と読み時間について」, 論文賞受賞記念講演, 言語処理学会第 25 回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12–15.

真鍋陽俊, 岡照晃, 海川祥毅, 高岡一馬, 内田佳孝, 浅原正幸

「複数粒度の分類結果に基づく日本語単語分散表現」, 言語処理学会第 25 回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12–15.

田中弥生, 浅原正幸

「従属節意味分類アノテーションに基づく修辞ユニット分析の分類単位認定の検討」, 言語処理学会第

25回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12–15.

荻原亜彩美, 森山奈々美, 浅原正幸, 加藤祥, 山崎誠

「『分類語彙表』に対する反対語情報付与」, 言語処理学会第25回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12–15.
宮内拓也, 浅原正幸

「日本語における名詞句の情報構造と語順の相関について」, 言語処理学会第25回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12–15.

森山奈々美, 荻原亜彩美, 近藤森音, 浅原正幸, 相澤彰子

「BCCWJ-EyeTrack-2: 書籍と教科書の読み時間データ」, 言語処理学会第25回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12–15.

八木豊, 中村壮範, 浅原正幸, 前川喜久雄, 小木曾智信, 小磯花絵, 追田久美子, 木部暢子

「複数コーパスの包括的検索系」, 言語処理学会第25回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12–15.

加藤祥, 田邊絢, 浅原正幸, 古宮嘉那子, 新納浩幸

「多義語の語義分布と語義間の派生関係調査の試み—相の類を中心に」, 言語処理学会第25回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12–15.

浅原正幸

「読み時間と述語項構造・共参照情報について」, 言語処理学会第25回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12–15.

浅原正幸

「テキストの読みやすさについて」, 言語処理学会第25回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12–15.

浅原正幸

「クラウドソーシングによる単語親密度推定」, 言語処理学会第25回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12–15.

松田寛, 大村舞, 浅原正幸

「短単位品詞の用法曖昧性解決と依存関係ラベリングの同時推定」, 言語処理学会第25回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12–15.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・ 言語資源活用ワークショップ2018(主催: コーパス開発センター), 国立国語研究所.
- ・ コーパスとしてのウェブテキスト活用シンポジウム(主催: コーパス開発センター), 国立国語研究所.
- ・ UD Japanese(主催: コーパス開発センター), 京都テルサ, 2018.6.16.

【一般向けの講演・セミナーなど】

浅原正幸

「モダリティアノテーションとその分析」, 平成30年度コーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」, 国立国語研究所, 2018.9.7.

浅原正幸

「モダリティアノテーションとその分析」, NINJALシンポジウム, 東京証券会館, 2018.12.15.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 言語処理学会編集委員, 2014.9–2018.9.
- ・ 情報処理学会自然言語処理研究会運営委員, 2015.4–2019.3.
- ・ 言語処理学会第25回年次大会プログラム委員
- ・ The 11th edition of the Language Resources and Evaluation Conference (LREC 2018), Scientific Committee Member
- ・ The 13th Workshop on Asian Language Resources (ALR13), Program Committee Member
- ・ The 16th Annual Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics: Human Language Technologies (NAACL HLT-2018), Program Committee Member
- ・ The 56th annual meeting of the Association for Computational Linguistics (ACL-2018), Program Committee Member

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

浅原正幸

「中納言講習会」, 中京大学, 2018.6.30.

浅原正幸, 加藤祥

「中納言講習会」, シブニラウンジ, 2018.7.23.

浅原正幸

「梵天講習会」, 国立国語研究所, 2018.9.6.

浅原正幸

「梵天講習会」, 東京学芸大学, 2018.11.13.

浅原正幸

「言語資源に関する講演会」, 東北大大学, 2018.11.16.

浅原正幸

「言語資源に関する講演会」, NTT コミュニケーション研究所, 2018.11.19.

浅原正幸

「梵天講習会」, 国立国語研究所, 2018.12.22.

浅原正幸

「新学術領域「時間生成学」サーバ講習会」, お茶の水女子大学, 2019.3.21.

浅原正幸

「視線計測データ解析講習会」, 国立国語研究所, 2019.3.26-27.

浅原正幸

「中納言包括的検索系講習会」, 国立国語研究所, 2019.3.28.

石本 祐一 (いしもと ゆういち) コーパス開発センター 特任助教

【学位】博士（情報科学）（北陸先端科学技術大学院大学, 2004）

【学歴】宇都宮大学工学部卒業（1997）, 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士前期課程修了（2000）, 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士後期課程修了（2004）

【職歴】東京工科大学メディア学部 助手（2007）, 同 助教（2009）, 人間文化研究機構国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員（2010）, 情報・システム研究機構国立情報学研究所 特任研究員（2010）, 人間文化研究機構国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員（2013）, 同 研究情報資料センター 特任助教（2013）, 同 コーパス開発センター 特任助教（2017）

【専門領域】音声工学, 音響音声学

【所属学会】日本音響学会, 電子情報通信学会

【受賞歴】

2016: Oriental COCOSDA 2016 ITN Best Paper Award

【2018年度に参画した共同研究】

- ・コーパス基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」：メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」：メンバー

【2018年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究（C）「自発会話コーパスを用いた「会話の間合い」に関わる音声・言語特徴の解明」, 18K11514: 研究代表者
- ・科研費基盤研究（A）「日常場面と特定場面の日本語会話コーパスの構築と言語・相互行為研究の新展開」, 17H00914: 研究分担者
- ・科研費基盤研究（C）「音声アシスタントとの円滑な話者交替を実現する音声言語特徴の解明」15K00390: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Satoru Tsuge, Shingo Kuroiwa, Tomoko Ohsuga, and Yuichi Ishimoto

“AWA Long-Term Recorded Speech Corpus and Robust Speaker Recognition Method for Session Variability”, *Proceedings of Oriental COCOSDA 2018*, 2018.5.

Yuichi Ishimoto and Tomoko Ohsuga

“Spontaneous speech resources in Japan”, *Proceedings of the LREC 2018 Special Speech Sessions*, pp. 1–5, 2018.5.9, DOI: 10.15084/00001909.

臼田泰如, 川端良子, 西川賢哉, 石本祐一, 小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』における転記の基準と作成手法」, 『国立国語研究所論集』, 15号, 177–193頁, 2018.7, DOI: 10.15084/00001602.

Yuichi Ishimoto, Takehiro Teraoka, and Mika Enomoto

“A Prediction Model for End-of-Utterance Based on Prosodic Features and Phrase-Dependency in Spontaneous Japanese”, *Proceedings of APSIPA Annual Summit and Conference 2018*, pp. 1782–1786, 2018.11.

【講演・口頭発表】

石本祐一

「方言音声に対するテキスト自動アライメントの試み」, 言語資源活用ワークショップ 2018, 国立国語研究所, 2018.9.5.

Yuichi Ishimoto, Takumi Ikinaga, and Tomokazu Takada

“Construction of NINJAL media resources collection for searching and previewing sound and video data”, Eighth Conference of Japanese Association for Digital Humanities, 一橋講堂, 2018.9.10.

石本祐一, 天谷春香, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 小磯花絵
「日常における会話の多様性を考慮した『日本語日常会話コーパス』の構築」, 日本音響学会 2018 年度秋季研究発表会, 大分大学, 2018.9.13.

石本祐一, 生永匠

「国立国語研究所所蔵映像資料のデジタル化と所蔵映像データベース構築」, 人文科学とコンピュータシンポジウム, 東京大学, 2018.12.1.

石本祐一, 小磯花絵

「『日本語日常会話コーパス』から見える日常会話音声の韻律的特徴」, シンポジウム「日常会話コーパス」IV, 国立国語研究所, 2019.3.4.

石本祐一, 寺岡丈博, 榎本美香

「話者移行適格場予測のための発話内文節位置推定モデルの構築」, 日本音響学会 2019 年度春季研究発表会, 電気通信大学, 2019.3.5.

小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉
「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の設計と特徴」, 言語処理学会第 25 回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.14.

河原英紀, 榎原健一, 森勢将雅, 石本祐一

「偏長楕円体波動関数を包絡とする解析信号によるオーディオ標本化周波数での実時間 fo 候補抽出について」, 2019 年 3 月度音声研究会, アイランド ナガサキ MINATO HOTEL, 2019.3.15.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- LREC 2018 Special Speech Sessions (主催: European Language Resource Association), シーガイアコンベンションセンター, 2018.5.9.
- 言語資源活用ワークショップ 2018 (主催: コーパス開発センター), 国立国語研究所, 2018.9.4-5.

【一般向けの講演・セミナーなど】

石本祐一, 西川賢哉, 前川喜久雄, 秋田祐哉

「コーパス構築における音声処理アプリケーションの活用」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館, 2018.12.16.

石本祐一

「発話未予測に関わる音声・言語特徴」, 国立国語研究所オープンハウス 2018, 国立国語研究所, 2018.12.22.

岡 照晃 (おか てるあき) コーパス開発センター 特任助教

【学位】博士（工学）（奈良先端科学技術大学院大学, 2015）

【学歴】豊橋技術科学大学工学部卒業（2010）, 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了（2012）, 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了（2015）

【職歴】京都大学大学院情報学研究科 特定研究員（2015）, 人間文化研究機構国立国語研究所言語変化研究領域 プロジェクト非常勤研究員（2016）, 同 コーパス開発センター 特任助教（2016）

【専門領域】計算言語学, 自然言語処理

【所属学会】言語処理学会

【受賞歴】

2011: 情報処理学会第 201 回自然言語処理研究会学生奨励賞

2009: 豊橋技術科学大学平成 21 年度後期「卓越した技術科学者養成プログラム」

2009: 豊橋技術科学大学平成 21 年度前期「卓越した技術科学者養成プログラム」

2008: 舞鶴工業高等専門学校学業成績優秀賞

【2018 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・科研費基盤研究（A）「日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション」, 17H00917: 研究分担者
- ・科研費基盤研究（B）「語形成および意味的情報を付加した実践医療用語辞書の構築」, 18H03499: 研究分担者
- ・ワークスアプリケーションズとの産学共同研究「複数粒度の分割結果に基づく日本語単語分散表現」,
<https://www.worksap.co.jp/news/2019/0322/>

【研究業績】

《著書・編書》

岡照晃, 伝康晴, 内元清貴, 山田篤, 宇津呂武仁, 松吉俊, 土屋雅稔, 近藤泰弘, 坂野収, 多田知子, 岡田純子, 山元啓史, 萩野綱男, 矢澤真人, 丸山直子, 星野和子, 小磯花絵

『コーパスと辞書（講座 日本語コーパス 7）』, 朝倉書店, 2019.3.25.

《コーパス・データベース類》

岡照晃

「unidic-cwj-2.3.0」, <https://unidic.ninjal.ac.jp/>, 2018.4.10.

岡照晃

「unidic-csj-2.3.0」, <https://unidic.ninjal.ac.jp/>, 2018.4.10.

真鍋陽俊, 岡照晃

「複数粒度の分割結果に基づく日本語単語分散表現モデル」, <https://www.worksap.co.jp/news/2019/0322/>, 2019.3.22.

【講演・口頭発表】

岡照晃

「『国語研日本語ウェブコーパス』からの新規語彙素獲得の試み」, 言語資源活用ワークショップ 2018, 国立国語研究所, 2018.9.5.

内山清子, 岡照晃, 東条佳奈, 小野正子, 山崎誠, 相良かおる

「実践医療用語の語構成要素抽出の試み」, 言語資源活用ワークショップ 2018, 国立国語研究所, 2018.9.5.

岡照晃

「中の人人が国語研日本語ウェブコーパス (NWJC) “さわって” みた—【中級編】ウェブコーパスを“さわって” みる—」, 招待講演, コーパスとしてのウェブテキスト活用シンポジウム, 国立国語研究所, 2018.9.6.

東条佳奈, 内山清子, 岡照晃, 小野正子, 相良かおる, 山崎誠

「実践医療用語に現れる語構成要素の辞書構築にむけて」, 計量国語学会第 62 回大会, 京都教育大学藤

森キャンパス, 2018.9.29.

岡照晃

「UniDic—短単位辞書データベースと形態素解析—」, NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」, 東京証券会館, 2018.12.16.

真鍋陽俊, 岡照晃, 海川祥毅, 高岡一馬, 内田佳孝, 浅原正幸

「複数粒度の分割結果に基づく日本語単語分散表現」, 言語処理学会第 25 回年次大会, 名古屋大学, 2019.3.12.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・言語資源活用ワークショップ 2018 (主催: コーパス開発センター), 国立国語研究所, 2018.9.4-5.
- ・コーパスとしてのウェブテキスト活用シンポジウム (主催: コーパス開発センター), 国立国語研究所, 2018.9.6.

【一般向けの講演・セミナーなど】

岡照晃

「UniDic—短単位辞書データベースと形態素解析—」, 国立国語研究所オープンハウス 2018, 国立国語研究所, 2018.12.22.

VII

資 料

1 運営会議

運営会議規程

- 委員は 20 名以内、内過半数は所外の学識経験者。
- 所内委員は、副所長、研究系長、センター長、その他所長の氏名する教授又は客員教授若干名。
- 会議は所長の求めに応じ、議長がこれを招集する。
- 委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- 会議の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- 専門的事項について審議を行うための専門委員会（所長候補者選考委員会、人事委員会、名誉教授候補者選考委員会）を置くことができる。
- 議長は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

2018 年度の開催状況

- 第 1 回 [2018 年 7 月 23 日 13:30–15:30 (フクラシア東京ステーション)]
 - 議事概要確認
 - 前回議事概要（案）について
 - 審議事項
 - 人事委員会委員の選出について
 - 准教授（理論・対照研究領域）の公募について
 - 昇任人事について
 - その他
 - 報告事項
 - 平成 29 事業年度に係る業務の実績に関する報告書について
 - 平成 29 年度業務の実績に関する外部評価報告書について
 - 平成 30 年度計画について
 - 平成 30 年度運営費交付金について
 - 平成 31 年度概算要求（案）について
 - その他
 - 国立国語研究所の活動状況について
- 第 2 回 [2018 年 8 月 3 日 (書面審議)]
 - 審議事項
 - 客員教員の採用について
- 第 3 回 [2018 年 10 月 29 日 13:30–15:30 (フクラシア東京ステーション)]
 - 議事概要確認
 - 平成 30 年度国立国語研究所運営会議（第 1 回）議事概要（案）について
 - 平成 30 年度国立国語研究所運営会議（第 2 回）議事概要（案）について
 - 審議事項
 - 准教授（理論・対照研究領域）の選考について
 - 教授（音声言語研究領域）の昇任人事について
 - 教授（コーパス開発センター）の昇任人事について
 - 報告事項
 - 創立記念事業について
 - 公募型研究（共同利用型、新領域創出型）について
 - その他
 - 国立国語研究所の活動状況について

・第4回 [2019年2月1日13:30-15:30(フクラシア東京ステーション)]

・議事概要確認

1. 前回議事概要(案)について

・審議事項

1. 教授又は准教授(研究系)の公募について
2. 採用人事に関する申し合わせについて
3. 名誉教授称号授与者の選考について

・報告事項

1. 教員の人事異動について
2. 平成31年度客員教員について
3. 平成30年度事業年度に係る業務の実績に関する報告書(案)について
4. 平成31年度計画(案)について
5. 平成31年度運営費交付金等について
6. 公募型研究(2019年度開始分)の採択について
7. 国立国語研究所の活動状況について
8. その他

・第5回 [2019年3月22日(書面審議)]

・議事概要確認

1. 前回議事概要(案)について

・審議事項

1. 特任研究員の公募について

運営会議の下に置かれる専門委員会

(1) 所長候補者選考委員会

・所長候補者選考委員会規程

- ・委員会の任務は、被推薦者名簿の作成、適任者名簿の作成、その他所長選考に必要な予備的事項に関するを行う。
- ・委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する研究所内の者及び研究所外の者若干名で組織する(研究所内の委員を過半数とする)。
- ・委員の任期は1年とし再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
- ・委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- ・委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(2) 人事委員会

・人事委員会規程

- ・委員会は研究所の研究教育職員の採用及び昇任人事に係る候補者の選考に関する事項の審議を行う。
- ・委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する、研究所外の者及び研究所内の者若干名で組織する。
- ・委員の任期は1年とし、再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
- ・委員会は委員の過半数の出席で議事を開催する。
- ・委員会の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは委員長の決するところによる。
- ・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

・人事委員会審議状況

- ・2018年7月23日(第1回)、2018年10月10日(第2回)

- 理論・対照研究系准教授として窪田悠介氏を運営会議に推薦

- 音声言語研究領域教授として小磯花絵准教授を運営会議に推薦

- コーパス開発センター教授として浅原正幸准教授を運営会議に推薦

(2018年10月29日開催の運営会議で採用・昇任決定)

- ・2019年2月1日（第3回）
 - 言語変異研究領域または音声言語研究領域研究教育職員の公募を決定

2 評価体制

国立国語研究所では、効率的かつ効果的な自己点検・評価を実施し、その評価結果を適切に業務運営に反映させるため、自己点検・評価委員会を設置している。この自己点検・評価を第三者評価に適切に関連づけるため、外部評価委員会を設置している。外部評価委員会では、2018年度の「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」について研究所がまとめた自己点検・評価に対し、外部評価委員がその専門的立場から検証をおこなった。

（1）自己点検・評価委員会

この委員会では、自己点検・評価の基本的な考え方の作成、自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関するここと、外部評価委員会の評価結果に関することを担当する。2018年度は10回開催した。

（2）外部評価委員会

外部評価委員会規程

- ・委員会は、自己点検・評価の結果に基づく評価に関するここと、研究所の中期計画及び年度計画の評価に関するここと、共同研究プロジェクト等の評価に関するここと、その他評価に関することについて審議する。
- ・委員会は10名以内の委員をもって組織する。委員は研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。
- ・委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は前任者の任期とする。
- ・委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- ・委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。
- ・外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

平成30年度業務の実績に関する評価の実施について

- ・評価の実施の趣旨
 - 年度当初に文部科学省に提出した「大学共同利用機関法人人間文化研究機構平成30年度計画」に記載した計画の実施状況及び第3期中期目標期間における平成28-30年度の進捗状況の中間評価について自己点検評価をおこない、その妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施する。
- ・評価の実施方法
 - 評価は書面審査でおこなう。
 - 研究所が作成した、平成30年度の計画及びその実施状況が記入された「30年度業務の実績報告書」（「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」）の内容を検証する。

平成30年度業務の実績にかかる外部評価委員会開催状況

- ・外部評価委員会ヒアリング [2019年5月14日 14:00-17:10 (国立国語研究所)]

- ヒアリング事項

1. 対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法
2. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究
3. 日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成
4. 通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開
5. 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究
6. 日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明
7. コーパス開発センター

8. 研究情報発信センター
- ・外部評価委員会【平成 30 年度実績評価】(第 1 回) [2019 年 3 月 31 日 (メール審議)]
 - 議事
 1. 機関拠点型基幹研究プロジェクト中間評価について
 2. その他
 - ・外部評価委員会【平成 29 年度実績評価】(第 2 回)
[2019 年 8 月 1 日 14:00–16:00 (TKP 東京駅前カンファレンスセンター)]
 - 議事
 1. 前回議事概要 (案) 確認
 2. 平成 30 年度共同研究プロジェクト評価について
 3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト中間評価について
 4. 平成 30 年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
 5. 平成 30 年度「組織・運営」, 「管理業務」の評価について
 6. その他

(3) 基幹研究プロジェクトの評価

各プロジェクトリーダーが作成した「自己点検報告書」に基づいて、外部評価委員会委員による書面審査をおこなった。

3 所長賞

功績顕著な職員に対し、所長からその功績をたたえ表彰をおこない、研究所の活性化に資することを目的とするもので、学術上の功績および研究支援業務等で優れた功績があったと認められる者を対象とし、原則として年 2 回おこなう。

第 17 回所長賞：2018 年度前期 (2018 年 4 月 1 日–2018 年 9 月 30 日)

- ・若手研究者奨励賞
 - 八木下孝雄 (研究情報発信センタープロジェクト非常勤研究員)
 - 業績：八木下孝雄『近代日本語の形成と欧文直訳的表現』, 勉誠出版, 2018.5.
 - 理由：博士論文 (ないしその改訂版) 等, 単著の出版, またはそれに準ずるもの
 - 青井隼人 (研究系 (言語変異研究領域) 特任助教)
 - 業績：沖縄言語研究センター 2018 年度仲宗根政善記念研究奨励賞 受賞, 2018.7.
 - 理由：学会レベルでの受賞
 - 松井真雪 (研究系 (理論・対照研究領域) 元プロジェクト PD フェロー)
 - 業績：Mayuki Matsui and Alexei Kochetov. “Tongue root positioning for voicing vs. contrastive palatalization: An ultrasound study of Russian word-initial coronal stops” Special issue on the phonetics and phonology of a voicing contrast, Journal of the Phonetic Society of Japan, 22 (2), 2018.8.
 - 理由：日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文

第 18 回所長賞：2018 年度後期 (2018 年 10 月 1 日–2019 年 3 月 31 日)

- ・所長賞
 - 山崎誠 (研究系 (言語変化研究領域) 教授)
 - 業績：藤田保幸・山崎誠 (編)『形式語研究の現在』, 和泉書院, 2018.5.
山崎誠『テキストにおける語彙的結束性の計量的研究』, 和泉書院, 2017.2.
 - 理由：全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版

- 横山詔一 (研究系 (言語変化研究領域) 教授)
 - 業績: 横山詔一ほか(編)『社会言語科学の源流を追う (シリーズ社会言語科学 2)』, ひつじ書房, 2018.9.
 - 理由: 全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版
- 若手研究者奨励賞
 - 松井真雪 (研究系 (理論・対照研究領域) 元プロジェクト PD フェロー)
 - 業績: Mayuki Matsui and Hyun Kyung Hwang. “Perception of tonal clash: Final vs. no accent in interrogative melodies of Tokyo Japanese” In Shin Fukuda, Mary Shin Kim, Mee-Jeong Park, and Haruko Minegishi Cook (eds.), Japanese/Korean Linguistics, 25. Stanford : CSLI Publications. 2019.2.
 - 理由: 評価の高い国際会議録に掲載された論文
 - 片山久留美 (研究系 (言語変化研究領域) プロジェクト非常勤研究員)
 - 業績: 情報処理学会 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2018」ベストポスター賞受賞, 2018.12.
 - 理由: 学会レベルでの受賞
 - 坂井美日 (研究系 (言語変異研究領域) 元プロジェクト PD フェロー)
 - 業績: 第 156 回日本言語学会大会発表賞 受賞, 2018.11.
 - 理由: 学会レベルでの受賞

4 研究教育職員の異動 (2018 年度の異動者)

| | | | | |
|-----------|-----|-------|------|-----|
| 2018.4.1 | 准教授 | 山田真寛 | 採用 | 研究系 |
| 2019.3.31 | 教授 | 相澤正夫 | 定年退職 | 研究系 |
| 2019.3.31 | 助教 | 三井はるみ | 辞職 | 研究系 |

VIII

外部評価報告書

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

平成 30 年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

令和元年 8 月 1 日

はじめに

平成 30 年度の外部評価書をお届けします。平成 30 年度の外部評価に当たっては平成 29 年度の外部評価委員会の提言を受け、ヒアリングを実施しました。ヒアリングでは外部評価委員会委員の質問を受け、国語研の置かれている状況、現在の研究内容をその方法や目標を含めて、理解していただけの機会を得ることができたと思います。

平成 30 年度は、基幹研究プロジェクトを第三期中期計画に基づいて忠実に実行していくのと並行して、29 年度の外部評価書で指摘を受けた何点かの問題点の改善に努めました。例えば、日本語学・言語学のパイオニア的論文を 8 点英語に翻訳しました。これらの論文の英訳に際しては、当該分野を専門とし、英語を母語とする言語学者に依頼しました。30 年度中に完成した英訳論文は 7 点が国語研のリポジトリで公開されています。この作業は 31 年度も継続され、4 点の翻訳が進んでいます。そのほかにもフォーラムや NINJAL シンポジウムの動画を作成して、一般向けに加工し、公開するなど、国語研の活動をより広く知っていただく努力を続けています。平成 30 年度の外部評価書ではこのような点を評価いただき大変好意的な記述となっています。来年度の 4 年目終了時評価に向けて、このような評価をいただけたことは国語研としては大きな力になります。今後も外部評価委員会の客観的評価を踏まえた、国語研の活動の改善に関する提言に対しては真摯に対応していくたいと思います。

外部評価書作成に際し、坂原委員長をはじめとする外部評価委員会の委員の皆さまの労を多としたいと思います。所員一同この評価と提言にこたえるべく誠心誠意、国語研のより一層の発展のために努力を重ねていきたいと存じます。

令和元年 8 月

国立国語研究所長
田窪 行則

目 次

| | |
|--|-----|
| 1. 評価結果報告書 | 1 |
| 1. 平成 30 年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト中間評価・センターの研究活動」 に関する評価結果 | 2 |
| 2. 平成 30 年度「管理業務」に関する評価結果 | 92 |
| 2. 資料 | 99 |
| 1. 国立国語研究所外部評価委員名簿 | 100 |
| 2. 国立国語研究所平成 30 年度業務の実績に関する評価の実施について | 101 |
| 3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧 | 102 |
| 4. 国立国語研究所外部評価委員会規程 | 103 |
| 5. 国立国語研究所外部評価委員会ヒアリング【平成 30 年度実績評価】 | 105 |
| 国立国語研究所外部評価委員会【平成 30 年度実績評価】(第 1 回) | 106 |
| 国立国語研究所外部評価委員会【平成 30 年度実績評価】(第 2 回) | 107 |

1. 評価結果報告書

平成 30 年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

令和元年 5 月 14 日 国立国語研究所外部評価委員会ヒアリング【平成 30 年度実績評価】

令和元年 5 月 31 日 国立国語研究所外部評価委員会【平成 30 年度実績評価】(第 1 回)

令和元年 8 月 1 日 国立国語研究所外部評価委員会【平成 30 年度実績評価】(第 2 回)

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会
委員長 坂原 茂

国立国語研究所平成 30 年度外部評価にあたって

本報告書は、機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」の平成 30 年度分の実績についての外部評価委員会の評価のまとめである。評価対象は、(1) 総合評価(中間評価報告書), (2) 6 つの共同研究プロジェクト(「対照言語学」, 「統語・意味解析コーパス」, 「消滅危機言語・方言」, 「通時コーパス」, 「大規模日常会話コーパス」, 「学習者コミュニケーション」), (3) 2 つのセンター(コーパス開発センター, 研究情報発信センター), (4) 「管理業務」である。

平成 30 年度の総合評価(中間評価報告書)は「順調に進捗している」であり、(1) 研究成果・研究水準, (2) 研究体制, (3) 教育・人材育成, (4) 社会連携・社会貢献, (5) 国際連携・国際発信のいずれにおいても高い評価に値すると判断された。共同プロジェクトの評価は、A(計画を上回って実施している)が 4, B(計画どおりに実施している)が 2 であり、各プロジェクトの積極的研究姿勢と研究の進展が高い評価を受けた。センターの評価は 2 つとも A(計画を上回る成果を上げている)であり、センターの多方面の活動と成果が高く評価された。管理業務については、A(計画を上回って実施)と B(計画通り実施)がそれぞれ 2 で、全体的にきわめて良好な業務運営が行われていると評価された。

今年度の外部評価について特記すべきことは、かねてより要望の高かったヒアリングを実施し、充実した議論をもとに正確で公正な評価ができたことである。ヒアリングは正確な評価にきわめて有効であるので、これ以降も是非とも続けて欲しい試みである。また、今年度はプロジェクト開始より 3 年が経過したことで、基幹研究プロジェクト評価委員会による平成 28 年度～平成 30 年度における進捗状況の中間評価が行われ、「順調に進んでいる」と評価された。

以上のように、外部評価委員会は、平成 30 年度のプロジェクトの進捗状況は全体的に計画をやや上回り、きわめて順調であると判断した。本プロジェクトは、種々のコーパス開発を始めとして、これ以降の日本語研究の指針となる可能性を秘めるきわめて重要なプロジェクトであるので、外部評価委員会としては、プロジェクトに携わる各人がそのことを強く意識しつつ、これ以降もこの順調さを維持して、プロジェクトの完遂に励むことを希望する。

令和元年 8 月
外部評価委員会
委員長 坂原 茂

機関拠点型基幹研究プロジェクト 中間評価報告書

評価に関する総括

《達成状況の評価》

順調に進捗している

(判断理由等)

以下のように、(1) 研究成果・研究水準、(2) 研究体制、(3) 教育・人材育成、(4) 社会連携・社会貢献、(5) 国際連携・国際発信、のいずれにおいても計画通り順調に進んでいる。

【プロジェクト全体の連携活動に関する評価】

(1) 研究成果・研究水準について

30年度までの3年間の研究成果・研究水準はきわめて高い評価に値する。国内での公開研究発表会・講演会・シンポジウムは59件、国際シンポジウムは27件、論文は466件、図書・報告書は64件、発表・講演は1470件と多数に上り、期待以上の研究成果を上げている。コーパス作成についても、統語・意味解析コーパス、通時コーパス、大規模日常会話コーパス、アイヌ語口承文芸コーパス、日本語諸方言コーパスを始めとしてさまざまなコーパスの作成・公開が着実に進展している。それ以外のデータの蓄積にも目を見張らせるものがある。

研究水準は最先端のきわめて高度な研究であり、いずれも学界をリードするものである。研究成果は学界を始めとして、研究誌、新聞、ラジオなどでも取り上げられ、高い評価を受けている。たとえば、Kubozono, H. (ed.) *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants*, (2017年4月, Oxford University Press) は、国際誌 *Phonology* の書評で高い評価を受けた。また、本基幹研究プロジェクトで作成されたコーパスは、すべてこれ以後の研究遂行に大いに役立つことが期待されており、たとえば、日本語歴史コーパスは『日本語の研究』学界展望で、日本語史研究にコーパスが重要な位置を占めることを感じさせる画期的なものであると評価された。『基本動詞ハンドブック』は、「コーパスに基づいた先進的な取り組みとして一見の価値がある」と評価された(『英語教育』(大修館書店))。

(2) 研究体制について

研究は6つのプロジェクト（[対照言語学]、[統語・意味解析コーパス]、[消滅危機言語・方言]「通時コーパス」、「日常会話コーパス」、「学習者のコミュニケーション」）により推進されている。各班は、国内外の研究者を共同研究員として組織し、研究者ネットワークを構築して、それぞれの研究を行っている。3年間の共同研究員数（6プロジェクトの合計）の総数は1253名であり、その内、PD・大学院生は100名、海外機関所属研究者は193名である。共同研究員の総数、PD・大学院生の数、海外機関所属研究者の数は、いずれも年を追う毎に増加している。また、3年間で海外の大学等14機関を含めて合計22の大学・研究機関等と新規の交流協定を結び、共同でデータ公開や研究を行った。

各班の研究の進捗状況を管理するために共同研究プロジェクト推進会議、自己点検・評価委員会を設置し、研究情報の共有化、班同士の連携、合同シンポジウムの企画、プロジェクト全体の自己点検・評価を行った。

各班は、それぞれの研究テーマに沿って研究を推進すると同時に、相互に連携して6回の合同シンポジウムを開催した。30年度は全てのプロジェクトが参加するNINJALシンポジウムを開催し、これをもとにした書籍を31年度に出版する予定である。また、5年目の32年度にも全てのプロジェクトが参加するシンポジウムを予定している。

「対照言語学」班と、「統語・意味論コーパス」では、海外機関所属の研究者を含むアドバイザリーボードを設置し、国際シンポジウムや研究成果の公表にアドバイスを反映させた。他のプロジェクトでは、アドバイザリーボードを設置していないが、国際シンポジウム等に海外の研究者のアドバイスを反映させた。

以上のように、研究推進のための合理的でバランスの取れた研究体制が構築されており、これに關しても高い評価が与えられる。

(3) 教育・人材育成について

大学との連携による教育については、一橋大学大学院で毎年3名が、東京外国語大学大学院で毎年2名が大学院教育を行った。一橋大学大学院では、博士号審査に主査8件、副査10件を担当した。「危機言語・方言」班では、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所LingDy3と協定を結び、特任助教1名を雇用して共同研究を推進した。また、方言調査において島根大学（隠岐島方言調査）、愛知県立大学（木曽川町方言調査）、弘前大学（むつ市方言調査）と連携した。

教材開発については、従来の日本語学教材とは異なる教材の開発を進めた。日本語学教材に関しては、29年度にジャワハルラール・ネルー大学とインターネット大学院e-PG Pathshalaの日本語学講座教材を開発し、30年度にこれを活用して南アジア（インド、スリランカ）・東南アジア諸国（ベトナム、ミャンマー、カンボジア）において日本語教師・研究者を対象とする日本語学講習会を実施した。また、アクティブ・ラーニングに対応した日本語学教材『日本語を分析するレッスン』を29年3月に刊行した。その他、コーパスに基づく教育プログラム、および言語のフィールドワークに関する教育プログラムを開発中で、31年度に刊行する予定である。

若手人材の育成では、博士学位を取得した若手研究者をPDフェローとして雇用、また、若手研究者を非常勤研究員として雇用し、プロジェクト研究をとおして専門的研究指導を行った（3年間合計で138名）。JSPS特別研究員や大学院生を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、国際シンポジウムや研究発表会において発表の経験を積ませた。また、若手研究者に対して、調査や学会発表のための旅費を支援した。方言調査に参加する学生・大学院生を全国公募し、隠岐島方言調査（28年度）、木曽川町方言調査（29年度）、むつ市方言調査（30年度）に参加させ、実践的な指導を行った。

チュートリアル、講習会の開催については、大学院生を主な対象とするチュートリアル・講習会を28年度に4回、29年度に18回（うち海外4回）、30年度に31回（うち海外9回）実施した。29年度からは、海外（台湾、韓国）でも実施している。

社会人の学び直しへの貢献については、日本語教師を対象とするセミナーを28年度・29年度は国内、海外で各1回、30年度は国内で1回、海外で2回行った。30年度は、南アジア（インド、スリランカ）・東南アジア諸国（ベトナム、ミャンマー、カンボジア）で日本語教師・研究者を対象とする日本語学講習会を実施した。

以上のように、大学との連携や教材開発を通して積極的に研究成果の教育的普及を推進し、また若手研究者の育成や社会人の学び直しなどにも多大な貢献をしており、この面についても高い評価が与えられる。

（4）社会連携・社会貢献について

地方自治体との連携では、宮崎県椎葉村、鹿児島県和泊町・知名町と連携協定を締結し、地方自治体と共同で方言語彙集の作成や言語復興活動を実施した。また、27年度から毎年、文化庁、地方自治体、琉球大学等との共催による「危機的な状況にある言語・方言サミット」を開催し、全国の危機言語・方言の保存・復興活動に携わる人たちのネットワークを定着させた。地元、立川とも、立川市歴史民俗資料館との連携による講演、立川市スタンプラリー等をとおして連携事業を実施した。

産学連携では、（株）小学館・（株）ネットアドバンスとの連携による歴史コーパスと「新編日本古典文学全集」本文とのリンク、ワクスアプリケーションズ徳島人工知能NLP研究所との共同による日本語形態素辞書UniDicの整備、IBM・NTT CS研・NII・NAIST・京都大学との連携によるUniversal Dependencies（言語横断的な係り受け構造を設計する世界的試み）への参加等、産業界との連携を積極的に行った。

研究成果の社会発信では、一般向けのNINJALフォーラムや講演会、子ども向けの「ニホンゴ探検」、研究情報誌『国語研 ことばの波止場』、SNS、ツイッター等をとおして、研究成果を分かりやすく社会に発信した。29年度以降はフォーラムや講演会のビデオ録画をウェブで公開している。また、フォーラムや講演会の内容を分かりやすくまとめた啓蒙書や各種コーパスの公開をとおして、研究成果や多様で大量の言語資源を社会へ発信した。

展示を通した研究成果の公開では、「え、ほん？」展（29年度）や可搬型展示ユニットによる言語の展示、それに合わせた大学生・一般市民向けの講演会（30年度）を実施し、展示という新しい手法で言語・方言の研究成果を社会に公開した。

以上のように、社会連携・社会貢献についても、地方自治体、産業界との連携、一般・子供向けの研究成果の発信などさまざまな工夫と努力がなされており、これに関しても高い評価が与えられる。

（5）国際連携・国際発信について

国際連携については、ヨーク大学言語学科（英国）「統語論等における対照研究を主とした研究協力」など、3年間で14件の海外の大学・研究機関等と国際連携協定を締結した（28年度4件、29年度4件、30年度6件）。また、共同研究員として57人（28年度）、63人（29年度）、71人（30年度）の海外の研究者が参画し（表12）、共同研究を行ったほか、海外からの外来研究員を19人（28～30年度新規）受け入れた。

国際発信については、国際シンポジウム・国際学会等を28年度3件、29年度10件、30年度14件企画・開催した。特に、30年度は国際シンポジウム・国際会議を14件開催し、研究成果の国際発信を行った。国際学会等での講演・発表(445件)、海外出版社からの書籍の刊行(12件)も活発に行われている。

ホームページでの英語による発信については、プロジェクトホームページの英語による開設、危機言語データベースの英語での発信、『日本語歴史コーパス』の英文ホームページの作成等により、データの国際発信を行った。また、これまでの画期的な日本語研究の成果を国際的に発信するために、30年度に7件の論文の英語訳を行った。これらは31年度にホームページで公開する予定である。

以上のように、国際連携・国際発信についてもきわめて活発に行われており、ホームページでの英語による発信を含めて高い評価が与えられる。

(6) その他特記事項

特になし。

【31年度以降の研究推進に向けた意見】

研究の推進、コーパス作成・公開、教育・人材育成、社会連携・社会貢献、国際連携・国際発信はいずれに関してもきわめて高い水準で順調に進んでおり、次年度以降も高いレベルの研究継続が期待でき、現在の研究体制は機能的で効率のよいものになっている。したがって、大きな変更は必要ないと考えられる。

各プロジェクト・センターの評価

対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法

プロジェクトリーダー：窪薙 晴夫

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i)世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii)一般言語学・言語類型論の観点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii)日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとは言えない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」視点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」視点である。

本プロジェクトは、この両視点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語（諸方言を含む）を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得（第一言語獲得、第二言語習得）はもとより、言語に関する他の学問分野（心理学、認知科学他）との接点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性（普遍性）と相違点（個別性・多様性）を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

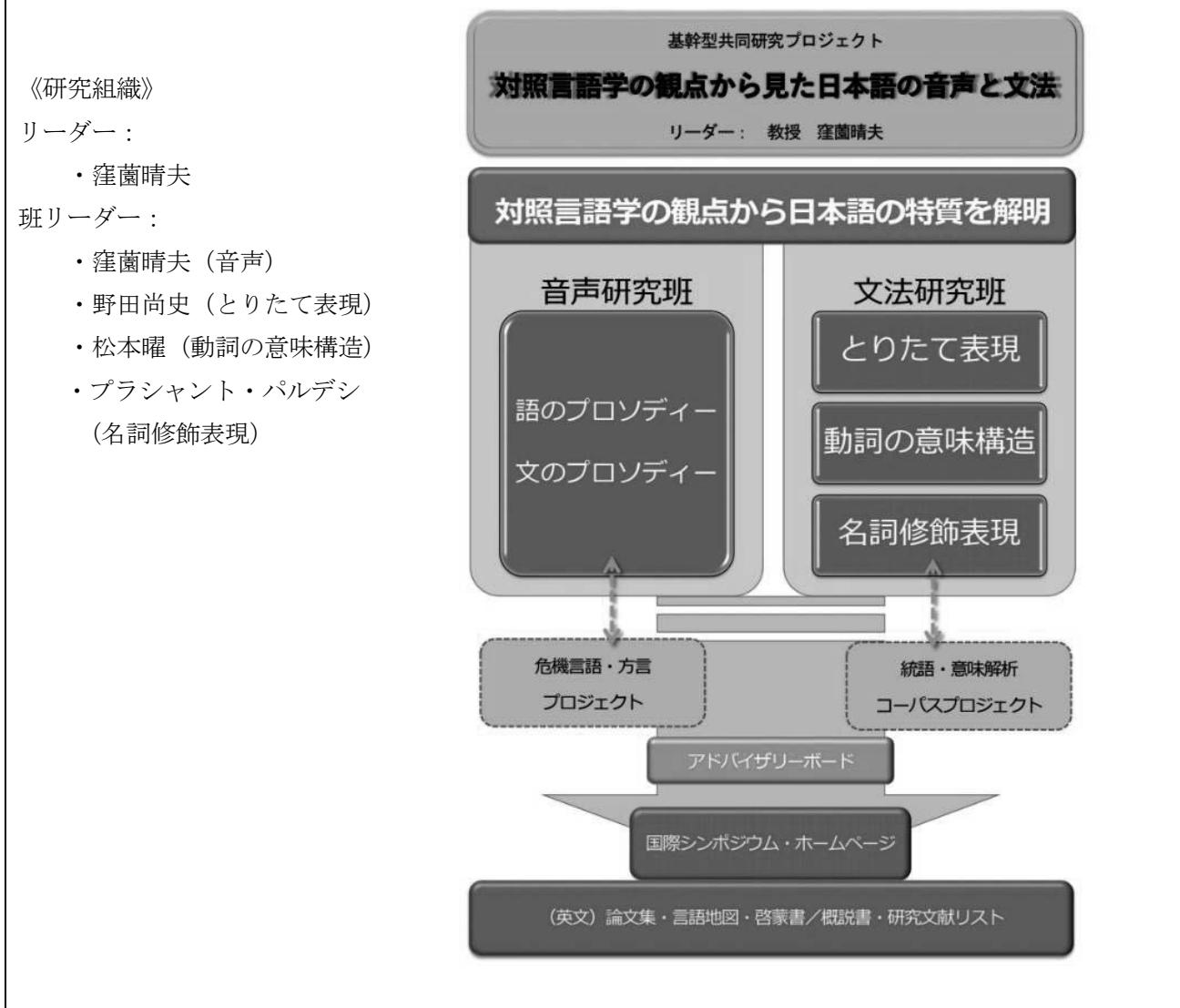
上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班（サブプロジェクト）を組織する。音声研究班は「語のプロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集（英文、和文）の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図（電子媒体）の刊行を目指す。

2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織

音声研究班と文法研究班は研究成果発表会や研究文献リスト作成などの日常的な活動をそれぞれ独自に行う一方で、「対照言語学の観点から日本語の特質を解明する」という共通の目標に沿って国際シンポジウムを定期的に開催し、その成果を英文論文集などの成果刊行物として公刊する。また、日本語や言語類型論に関する国際会議を合同で誘致し、プロジェクト全体で日本語研究と国語研の国際化を推し進める。

| 対照言語学 | 28年度 | 29年度 | 30年度 | 31年度 | 32年度 | 33年度 |
|---------|--------------------------------------|--------------------------------|---------------------------------------|-------------------------------------|-----------------------------|----------------------------------|
| シンポジウム等 | オノマトペ国際シンポジウム, NINJAL フォーラム「オノマトペ」開催 | 「プロソディー」に関する国際ワークシヨップ開催 | 「プロソディー」「移動動詞」「動詞の意味構造」に関する国際シンポジウム開催 | 「プロソディー」に関する国際ワークシヨップ開催, 国際認知言語学会共催 | | NINJAL フォーラム開催, NINJAL チュートリアル開催 |
| 刊行・出版 | | NINJAL フォーラムの成果の刊行, 音声関係の啓蒙書刊行 | 論文集の編集作業 | 「プロソディー」「名詞修飾」「とりたて表現」に関する各研究論文集刊行 | 論文集の編集作業, 「移動表現」に関する研究論文集刊行 | 「動詞の意味構造」「移動動詞」に関する各研究論文集の刊行 |
| データ | | 言語地図の作成 | | | | 公開 |



● 年次計画

平成 28 年度（研究プロジェクトの始動）

- ① 日英語によるプロジェクト HP を開設し、以後、隨時更新する。
- ② 若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会外国人特別研究員 (PD) 2 名に対して研究指導を行う。
- ③ 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について隨時アドバイスを求める。
- ④ 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
- ⑤ NINJAL 国際シンポジウムとして The 24th Japanese Korean Linguistics Conference (JK 24) (10 月 14 ～16 日) とオノマトペ国際シンポジウム (12 月 17～18 日) の 2 つを開催する。またその成果の取りまとめ（論文集の編集）に着手する。
- ⑥ オノマトペをテーマに一般社会向けの NINJAL フォーラムを開催する（平成 29 年 1 月 21 日）。
- ⑦ 第二期中期計画期間に着手した『日本語版連濁事典』、Mouton Handbook (Japanese Contrastive Linguistics の巻), The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants, Tonal Change and Neutralization の編集作業を完了する。
- ⑧ 言語地図の立案を開始する（項目・言語の選択、刊行方法等）。
- ⑨ 大学院生向けのチュートリアル（国内）を開催する。
- ⑩ 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 29 年度（研究プロジェクトの展開）

- ① 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会特別研究員 (PD) 1 名に対して研究指導を行う。
- ② 研究班ごとに研究成果発表会を年数回開催する。
- ③ 「プロソディー」と「名詞修飾」をテーマにそれぞれ国際シンポジウムを開催する。
- ④ 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
- ⑤ Mouton Handbook (Japanese Contrastive Linguistics および Syntax の巻), Tonal Change and Neutralization の編集作業を完了する。
- ⑥ 前年度に開催した NINJAL 国際シンポジウム 2 件と NINJAL フォーラム 1 件の成果を取りまとめ、それぞれ論文集、啓蒙書として編集を行う。
- ⑦ 『移動表現の類型論 II (仮題)』の編集作業を行う。
- ⑧ 音声関係の啓蒙書を執筆する（1 冊目）。
- ⑨ 言語地図の作成を開始する。

平成 30 年度（研究成果の中間とりまとめ）

- ① 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
- ② 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
- ③ 年度末にプロジェクトの合同研究発表会 (Prosody and Grammar Festa 3) を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

- ④ 音声（プロソディー）と文法（移動動詞、動詞の意味構造）に関する国際シンポジウム・ワークショップをそれぞれ開催する。
- ⑤ 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際ワークショップの論文の編集を行い、出版社に入稿する（公刊は1年後）。また「とりたて表現（和文）」「移動表現（和文）」「名詞修飾（和文）」に関する各論文集の編集作業を進める（公刊は1年後の予定）。
- ⑥ 引き続き言語地図の作成用のデータ収集を行う。
- ⑦ 大学院生向けのチュートリアルを国内と海外でそれぞれ開催する。

平成31年度（研究プロジェクトの拡充）

- ① 若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。
- ② 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
- ③ 年度末にプロジェクトの合同研究発表会(Prosody and Grammar Festa 4)を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
- ④ 「プロソディー」に関する国際ワークショップを開催する。また、国際認知言語学会を共催する。
- ⑤ 前年度に開催した「移動動詞」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集（英文）として取りまとめる（公刊は1～2年後）。また「動詞の意味構造（和文）」に関する論文集の編集に着手する。
- ⑥ 「プロソディー（英文）」「とりたて表現（和文）」「名詞修飾（和文）」に関する各研究論文集を刊行する。
- ⑦ 引き続き言語地図の作成を行う。

平成32年度（研究成果のとりまとめ）

- ① 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。
- ② 研究班、研究テーマごとに成果取りまとめのための研究発表会と打合せ会議を年数回開催する。
- ③ 年度末にプロジェクトの合同研究発表会(Prosody and Grammar Festa 5)を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
- ④ 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際ワークショップの成果を英文論文集として取りまとめる（公刊は1～2年後）。また「移動表現（和文）」に関する研究論文集を刊行し、「移動動詞（英文）」「動詞の意味構造（和文）」に関する各論文集の編集作業を完了する。
- ⑤ 言語地図の取りまとめを行う。

平成33年度（研究成果の公刊）

- ① 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。
- ② 一般社会向けのNINJALフォーラム（第2回）を開催する。
- ③ 大学院生向けのチュートリアルを開催する。
- ④ 「移動動詞（英文）」「動詞の意味構造（和文）」の各論文集を刊行する。
- ⑤ 言語地図を公刊（公開）する。

【3年目までの成果物】〔編者〕

- ① Sequential Voicing in Japanese Compounds (John Benjamins). 2016年6月. [バンス]
- ② 赤瀬川 史朗, プラシャント・パルデシ, 今井 新悟 (著)『日本語コーパス活用入門: NINJAL-LWP 実践ガイド』(大修館). 2016年7月. [パルデシ]

- ③ Mouton Handbook of Japanese Contrastive Linguistics (De Gruyter Mouton). 2018年2月 [パルデシ]
- ④ The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants (Oxford University Press). 2017年4月 [窪菌]
- ⑤ Tonal Change and Neutralization (De Gruyter Mouton). 2018年3月. [窪菌]
- ⑥ Japanese Korean Linguistics 24 (CSLI). 2018年 [船越・窪菌]
- ⑦ 『オノマトペの謎』 2017年5月 [窪菌]
- ⑧ 音声関係の啓蒙書『通じない日本語』 2017年12月 [窪菌]

【5年目までの成果物】上記に加え次のものを刊行する。

- ① 『日本語と世界の言語のとりたて表現』 くろしお出版, 2019年 [野田]
- ② プロソディー関係の英文論文集 (The Linguistic Review 特集号) , 2019年 [窪菌]
- ③ 名詞修飾関係の和文論文集, 2019年 [パルデシ]
- ④ 『移動表現の類型論と第二言語習得』 2019年 [松本]
- ⑤ Broader Perspectives on Motion Event Descriptions 2019~2020年 [松本]
- ⑥ 『動詞の意味と百科事典的知識 (仮題) 』 2021年 [松本]
- ⑦ Typology of Motion Event Descriptions 2021年 [松本]

II. 30年度活動概要

30年度予算総額 28,500千円

30年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

対照言語学研究を推進するために, 国内外の研究者 13 人を共同研究員として追加し, 合計 133 人の組織で事業を遂行した。4つの研究班ごとの公開研究発表会を計 11 回 (国内学会でのシンポジウム・ワークショップ 4 回を含む), 4 班合同の発表会(Prosody and Grammar Festa 3)を 1 回, 国際シンポジウム・ワークショップを 3 件開催した。これら 15 の企画において計 129 件の研究発表が行われ (うち学生が筆頭発表者のもの 23 件), 計 795 名 (延べ) の参加者が得られた (うち海外機関研究者 30 人, 大学院生を含む学生 153 人)。

またプロジェクト全体で図書 4 冊, 論文 27 編 (ブックチャプター 9 編含む), 学術発表・講演 94 件 (一般向け除く) を公開・刊行した (いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ)。このうちプロジェクトの所内メンバーは 4 冊の図書 (研究論文集 2 冊, 教材 2 冊), 論文 12 編を刊行し, さらに 5 冊の研究論文集・概説書の編集を行った。

また韓国日本語学会・韓国日語教育学会と連携して NINJAL チュートリアルをソウルで開催したほか, 大学との組織的な連携を深めるために, 神戸大学大学院人文学研究科と学術交流協定を締結した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

通時コーパスプロジェクトと合同で NINJAL シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—文法史研

究・通時的対照研究を中心にー」を開催したほか、国語研主催の NINJAL シンポジウム「データに基づく日本語研究」においてワークショップ「多角的な視点から見た日本語のモダリティ」を企画した。

前年度に続き言語地図の作成に取り組み、29 タイプの名詞修飾表現のアンケート調査に基づき現在 10 言語のデータを提供し、言語地図作成用のデータベースを設計・構築した。また、諸言語の移動動詞に関して 1700 件を超える文献の目録（英文）を作成し公開した。

この他、国際シンポジウム ICPP 2018 を開催するにあたってアドバイザリーボードのメンバーに意見を求め、その意見をテーマと招待講演者の選定に活用した。

3. 教育に関する計画

NINJAL チュートリアル「日本語複合動詞の意味論」を東京・一橋講堂と京都大学で実施し、大学院生を中心に合計 66 人の参加を得た。また韓国日本語学会および韓国日語教育学会と連携して、NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」（30 年 6 月 30 日、7 月 1 日）を韓国の中央大学校で開催し、大学院生 30 人を含む合計 90 人の参加を得た。

若手育成として PD フェローを 2 人雇用し、また学振 PD1 人を外来研究員、海外の大学院生 1 人を特別共同利用研究員としてそれぞれ受け入れ、研究指導を行った。またプロジェクト全体で 6 人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した。

さらに大学院生 6 人、学振 PD3 人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、プロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。また研究発表会や国内／国際シンポジウム・ワークショップ等において延べ 23 人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を与え、若手研究者 13 人に対して発表旅費を支援し、加えて計 1 名の若手研究者に対して方言調査の旅費を援助した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

プロジェクト全体で地域社会と連携した講演を計 8 件、それ以外の講演を 3 件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。このうち所内メンバーは鹿児島県薩摩川内市と連携し、同市の離島・甑島の 1 ヶ所で島民向けに、また島内の 4 中学校で中学生を対象にそれぞれ方言に関する講演を行い、また東京都杉並区、国立市、九州グローバル人材活用促進協議会、鹿児島県女性教員管理職の会、京都市中京歯科医師会等からの依頼を受け、それぞれ日本語に関する講演を行った。

社会人の学び直しとして、ソウルの中央大学校で開催した NINJAL チュートリアルにおいて、60 人の社会人（主に現地日本語教師）に対して「日本語の音声と文法」の講義を行い、また東京と京都の 2 ヶ所で実施した NINJAL チュートリアル「日本語複合動詞の意味論」では受講生のうち 25 人が社会人であった。この他に現役教師を対象とする講演をプロジェクト全体で 21 件（うち所内メンバーが 19 件）行った。

5. グローバル化に関する計画

プロジェクトの所内メンバーが 1 冊の英文研究論文集（特集号）を刊行し、対照研究の成果を海外に向けて発信した（Haruo Kubozono (ed.) Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean, 国際誌 The Linguistic Review Vol. 36, No. 1）。また国内外において合計 11 件のイベント（国内 3 件、海外 8 件）を開催し、合計 684 人の参加を得た。このうち国内では International Workshop on Frame Semantics and FrameNet（慶應義塾大学）、International Conference on Phonetics and Phonology（国語研）、Motion

Event Descriptions across Languages (国語研) の 3 件の国際イベントを開催し、海外では NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」(韓国中央大学校) と計 7 回の「日本語学講習会」(ベトナム、スリランカ、インド、ミャンマー、カンボジアの 5ヶ国) を開催した。また人的交流として海外の研究者 2 人を外来研究員として、大学院生 1 人を特別共同利用研究員として受け入れた。

加えてプロジェクト全体では 40 件、国際会議で研究成果を発表した。このうち所内メンバーは国際会議 The 26th Japanese/Korean Linguistics (UCLA), The 7th International Conference on Phonology and Morphology (ソウル大学), 北京日本語研究センター公開講座, 北京大学創立 120 周年記念国際シンポジウムにおいてそれぞれ招待講演・基調講演を行った。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
|--|-------------|
| (1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画 | |
| 1. 対照言語学研究を推進するために、4 つの研究班（下記）ごとの <u>公開研究発表会を計 7 回、国内学会においてシンポジウム・ワークショップを 4 回、4 班合同の発表会 (Prosody and Grammar Festa 3) を 1 回、国際シンポジウム・ワークショップを 3 回開催した。これら計 15 件の企画において計 129 件の研究発表が行われ（うち学生が筆頭発表者のもの 23 件）、計 795 名（延べ）の参加者が得られた（うち海外機関研究者 30 人、大学院生を含む学生 153 人）。</u> | |
| ① このうち、班ごとの研究発表会および国内学会シンポジウム・ワークショップ計 11 回の内訳は音声研究班が 5 回（平成 30 年 6 月 9 日、9 月 17 日、11 月 18 日、平成 31 年 2 月 28 日、3 月 5 日）、とりたて班が 1 回（平成 30 年 6 月 9 日）、動詞の意味構造班（以下「意味構造班」）が 3 回（平成 30 年 6 月 9 日、9 月 22 日、11 月 18 日）、名詞修飾班が 2 回（平成 30 年 7 月 21 日、11 月 10 日）であった。これらの発表会に合計 478 人の参加が得られた（うち海外機関研究者 4 人、大学院生を含む学生 74 人）。発表数は合計 44 件であった。（国内学会シンポジウム・ワークショップの詳細については下記 2 を参照） | |
| ② プロジェクト全体の統合を図るために、平成 31 年 2 月 16-17 日に、2 つの公募型共同研究プロジェクト（「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」「語用論的推論に関する比較認知神経科学的研究」）も加えた <u>合同の研究発表会 (Prosody and Grammar Festa 3) を開催し、131 人の参加者を得た（うち海外機関研究者 1 人、大学生を含む学生 27 人）</u> 。この合同発表会では「日本語と言語類型論」と題するシンポジウム（発表 6 件）と 9 件の口頭発表により、対照言語学および言語類型論に関する研究成果を報告した。 | |
| ③ 国際シンポジウム等 | |
| • The 5 th International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP 2018) を開催した（国語研、平成 30 年 10 月 26-28 日）。また前日の 10 月 25 日に pre-ICPP colloquium を開催した。参加者は異なりで 119 人（うち海外機関研究者 19 人）、発表件数は 36 件（口頭 14 件、ポスター発表 22 件；う | |

ち海外機関研究者による発表 16 件、学生が筆頭発表者の発表 20 件) であった〔音声研究班〕。

- International Workshop on Frame Semantics and FrameNet を開催した (慶應義塾大学、平成 30 年 5 月 8 日)。参加者は 17 人 (うち海外機関研究者 2 人)、発表件数は 3 件 (うち海外機関研究者による発表 2 件) であった〔意味構造班〕。
- Motion Event Descriptions across Languages を開催した (国語研、平成 31 年 1 月 26-27 日)。参加者は 50 人 (うち海外機関研究者 4 人)、発表件数は 31 件 (口頭 26 件、ポスター発表 5 件; うち海外機関研究者による発表 4 件、学生が筆頭発表者の発表 1 件) であった〔意味構造班〕。

2. 国内学会において下記の 4 つのシンポジウム・ワークショップを企画した。

- ① 関西言語学会第 43 回大会 (平成 30 年 6 月 9-10 日、甲南大学) において、シンポジウム「文構造の核と周辺—従属節のタイプロジー」を企画・開催した。参加者は 155 人であった〔とりたて班〕。
- ② 同上学会においてワークショップ「日英語の移動表現における経路表示の多様性と第二言語習得」を企画・開催した。参加者は 52 人であった〔意味構造班〕。
- ③ 日本言語学会第 157 回大会 (平成 30 年 11 月 17-18 日、京都大学) において「日本語の呼びかけイントネーション」と題するワークショップを企画・開催した。参加者は 49 人であった〔音声研究班〕。
- ④ 同上学会においてワークショップ「移動経路の種類とそのコード化：通言語的ビデオ実験による移動表現の類型論再考」を企画・開催した。参加者は 43 人であった〔意味構造班〕。

3. プロジェクトの所内メンバーが合計 4 冊の書籍 (研究論文集 2 冊、教科書 2 冊) を刊行し、さらに 5 冊の研究論文集・概説書の編集を行った。

- ① 音声研究班は前年度に開催した国際ワークショップの成果の編集を進め、国際誌 *The Linguistic Review* Vol. 36, No. 1 (De Gruyter Mouton 社) の特集号 *Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean* (H. Kubozono ed.) を当初の予定より半年早く刊行した (平成 31 年 2 月刊)。また、くろしお出版より『鹿児島県甑島方言から見る文法の諸相』(窪薙晴夫、木部暢子、高木千恵共編、計 304 頁、平成 31 年 2 月刊) を出版した。さらに言語学の概説書『よくわかる言語学』(ミネルヴァ書房) の編集を進めた (平成 31 年 3 月入稿、平成 31 年 7 月刊行予定)。
- ② とりたて班は論文集『日本語と世界の言語のとりたて表現』(野田尚史編、くろしお出版) の編集を進めた (平成 31 年 3 月入稿、平成 31 年 10 月刊行予定)。
- ③ 意味構造班は、*Broader Perspectives on Motion Event Descriptions* (John Benjamins 社から平成 31 年度出版予定) の編集を行った。また『移動表現の類型論と第二言語習得』(くろしお出版から平成 32 年出版予定) の原稿執筆を進めた。
- ④ 名詞修飾班は対照言語学的視点による日本語学習教材 *Minna no Nihongo prathamik bhag I: bhashantar wa vyakaran* (Marathi edition of 'Minna no Nihongo, Shokyuu I: Translation & Grammatical Notes' by 3A Corporation, Tokyo) と *Minna no Nihongo prathamik bhag II: bhashantar wa vyakaran* (Marathi edition of 'Minna no Nihongo, Shokyuu II: Translation & Grammatical Notes') (Pardeshi et al. eds.) を平成 30 年 12 月にインドの Sachi Prakashan から出版し、また論文集『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』(パルデシ・プラシャント、堀江薰 編、ひつじ書房) の編集を進めた (平成 31 年 10 月入稿、平成 32 年 3 月刊行予定))。

4. プロジェクト全体

プロジェクト共同研究員の研究成果も含め、プロジェクト全体で図書 4 冊と論文 27 編 (ブックチャプ

ター含む)を刊行し,発表・講演を94件行った(いずれもプロジェクトへの謝辞を記したもののみ)。

5. 方言調査

- ・音声研究班ではプロソディーの対照研究を推進するために平成30年6月に宮崎県小林市で,同年8月と平成31年3月に鹿児島県薩摩川内市で,平成30年9月と12月に鹿児島県甑島でそれぞれプロソディー調査を行った。
 - ・名詞修飾班は平成30年12月にインド・プネーで名詞修飾表現に関する調査を行った。
6. 音声研究班が平成29年4月に刊行した *The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants* (Haruo Kubozono ed., Oxford University Press)は,国際誌 *Phonology* (Cambridge University Press)5巻の書評欄 (pp. 523-529)において”The book is excellent… the papers here are of high quality, and most of them could be published in excellent linguistics journals…The underlying theoretical issues at play here make it a worthwhile read for anybody concerned with the structure of, and relationship between, phonetics and phonology” (by Professor Jonah Katz, West Virginia University)と評された。

(2) 研究実施体制等に関する計画

1. 韓国日本語学会および韓国日語教育学会と連携し, NINJAL チュートリアルをソウルで開催した (詳細は「3. 教育に関する計画」(2)-5参照)。また国語研と韓国の両学会との学術交流協定締結に尽力した(平成30年7月に締結)。
2. 神戸大学大学院人文学研究科と対照言語学・理論言語学をテーマにした学術交流協定を締結した(平成31年3月25日)。
3. 対照言語学研究を実施するために, 国内外の研究者13人を共同研究員として追加し,合計133人の組織でプロジェクトの事業を遂行した(うち大学院生6人,海外研究機関に属する研究者16人)。また海外から2人(ともに米国)を,国内から1人の研究者を外来研究員として受け入れ共同研究を行い,1人の大学院生(オランダ)を特別共同利用研究員として受け入れ,研究指導を行った。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
|---|------------|
| (1) 共同利用・共同研究に関する計画 | |
| 1. 言語地図〔名詞修飾班〕 平成30年10月に29タイプの名詞修飾表現のアンケート作業を完了し,12月現在10言語のデータを提供している。平成31年1~3月に <u>言語地図作成用のデータベースを設計し構築した</u> 。 | |
| 2. 文献目録〔意味構造班〕 諸言語の <u>移動動詞</u> に関して1700件を超える文献の目録(英文)を作成し,平成30年12月に公開した。 | |
| 3. 音声研究班が平成28年度に公開した甑島アクセントデータベースは,方言アクセントの研究に使用されており,年間550件のアクセスがあった。 | |
| (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画 | |
| 1. 国語研主催のNINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」(平成30年12月15-16日)においてプロジェクト紹介を行い,また <u>ワークショップ「多角的な視点から見た日本語のモダリティ」</u> を企画し | |

た。

2. とりたて班は通時コーパスプロジェクトと合同でNINJAL シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—文法史研究・通時的対照研究を中心に—」（平成 31 年 1 月 13 日）を開催した。参加者は 98 人（うち海外機関研究者 2 人），発表件数は 7 件（いずれも口頭発表）であった。
3. 音声研究班は国際シンポジウム ICPP 2018（平成 30 年 10 月 26-28 日）の立案に際し，テーマの設定および講演者の選定についてアドバイザリーボードの意見を求め，それを活用した。

3. 教育に関する計画

| | |
|--|------------|
| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
| (1) 大学院等への教育協力に関する計画 | |
| 1. オランダのユトレヒト大学より大学院生（博士課程）1 人を特別共同利用研究員として受け入れ，実験の支援と研究指導を行った。 | |
| (2) 人材育成に関する計画 | |
| 1. 若手研究者を育成するために，PD フェローを 2 人，非常勤研究員を 6 人雇用した。 | |
| 2. 大学院生 6 人，学振 PD3 人を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。 | |
| 3. プロジェクトが企画したイベント（研究発表会，シンポジウム・ワークショップ他）において合計 23 人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を提供した。 | |
| 4. 若手研究者 1 人に対して調査旅費を，13 人に成果発表の旅費を支援した。 | |
| 5. <u>NINJAL チュートリアル「日本語複合動詞の意味論」</u> を東京・一橋講堂（平成 30 年 8 月 9 日）と京都大学（30 年 9 月 18 日）で実施し，大学院生を中心に合計 66 人（8 月 35 人，9 月 31 人）の参加を得た。また韓国日本語学会および韓国日語教育学会と連携し， <u>NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」</u> （平成 30 年 6 月 30 日，7 月 1 日）を韓国の中正大学校で開催し，対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法について窪田と野田が各 4 コマ（90 分 × 4 コマ）の講義を行った。大学院生 30 人を含む合計 90 人の参加を得た。 | |
| 6. 外来研究員として受け入れた富岡諭氏（米国デラウェア大学）に依頼して「Scalar Implicature」と題する講習会を実施した（平成 30 年 7 月 4 日）。大学院生を中心に 41 人の参加者があった。 | |
| 7. Leonard Talmy 氏（ニューヨーク州立大学）を招いて，「標的設定のシステム：直示と照応の統合」と題する特別講義を実施した（平成 31 年 3 月 22-23 日）。大学院生 11 名を含む 37 名の参加者があった。 | |

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

| | |
|---|-------------|
| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
| (1) 産業界や地域社会との連携に関する計画 | |
| 1. プロジェクト全体で地域社会と連携した講演を 8 件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。所内メンバーの主な実績は次のとおりである。 ・鹿児島県薩摩川内市と甑島方言の保存・調査・啓蒙活動について連携を深め，島内の中学校（全 4 校）において「甑島方言の大切さ」と題する講演を行った。また同市の甑島ツーリズム委員会の会合において | |

て「方言とツーリズム」と題する講演を行った〔音声研究班〕。

- ・東京都杉並区（すぎなみ大人塾）と国立市（図書館のつどい）からそれぞれ依頼を受け、日本語のオノマトペと言葉の地域差・世代差について講演を行った〔音声研究班〕。
- ・九州グローバル人材活用促進協議会から依頼を受け、Work in Kyushu シンポジウム「グローバル人材の採用・就職に求められる日本語のちから」において、基調講演「グローバル人材の日本語能力」を行った〔とりたて班〕。

（2）研究成果の社会への普及に関する計画

1. 上記1の社会連携による講演および下記5の現役教師向けの講演とは別に、プロジェクト全体で一般社会人向け講演を3件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。いずれも所内メンバーによる講演である（鹿児島県女性教員管理職研修会（「方言とコミュニケーション」），京都市中京歯科医師会（「日本語のオノマトペ」），大学共同利用機関シンポジウム2018（「日本語の多様性」））〔音声研究班〕。
2. 「ニホンゴ探検2018」（平成30年7月14日）において、「『カップ、それともカップ』 単語の意味について考える」と題して、意味論と言語対照について小学生向けに講義を行った〔意味構造班〕。
3. NINJAL チュートリアル

- ・NINJAL チュートリアル「日本語複合動詞の意味論」を東京と京都で開催した（詳細については「3. 教育に関する計画」（2）-5参照）。66人の参加者のうち、25人が社会人であった〔意味構造班〕。
- ・NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」を韓国・中央大学校で開催した（詳細については「3. 教育に関する計画」（2）-5参照）。90人の参加者のうち、60人が現地の高校・大学の日本語教師であった〔音声研究班、とりたて班〕。

4. 現役教師向け講演会等

上記1～3の講演とは別に、現役教師の学び直しのための講演・講習をプロジェクト全体で21件行った（プロジェクトへの謝辞を記したもののみ）。所内メンバーの主な業績は次のとおりである。

- ・講演「日本語母方言から始める英語教育」（東京言語研究所主催『教師のためのことばワークショップ』，「オノマトペの謎」（名古屋YWCA）〔音声研究班〕。
- ・講演「さまざまな日本語を分析する」（長沼スクール東京日本語学校、日本語教師夏期集中セミナー）〔とりたて班〕。
- ・東南・南アジア5ヶ国計7ヶ所で開催した日本語学講習会では受講者の中に日本語教師が多数含まれていた（詳細については「5. その他：グローバル化（2）-1-⑤」参照）〔名詞修飾班〕。

5. その他の目標を達成するための措置

（1）グローバル化に関する目標を達成するための措置

| | |
|--------|----------------|
| 自己点検評価 | 計画を大きく上回って実施した |
|--------|----------------|

（1）国際的協業に関する計画

1. 海外の研究者2人（ともに米国）を外来研究員として、またオランダの大学院生1人を特別共同利用研究員として受け入れた。

（2）国際的発信に関する計画

1. 下記の11件の国際イベントを開催し（①～③国内で開催、④～⑤は海外で開催），合計684人の参加者

を得た。

- ① ICPP 2018 (International Conference on Phonetics and Phonology) および Pre-ICPP colloquium (国語研) を平成 30 年 10 月 25-28 日に開催した〔音声研究班〕(詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照)。
- ② International Workshop on Frame Semantics and FrameNet を開催した〔意味構造班〕(詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照)。
- ③ Motion Event Descriptions across Languages を開催した(国語研, 平成 31 年 1 月 26-27 日)〔意味構造班〕(詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照)。
- ④ NINJAL チュートリアル「日本語の音声と文法」を韓国中央大学校で開催し, NINJAL チュートリアルの国際展開を図った〔音声研究班, とりたて班〕(詳細については「3. 教育に関する計画」(2)-5 参照)。
- ⑤ 海外の日本語研究者(日本語教師・日本語学習者を含む)向けの NINJAL 日本語学講習会を以下の 5ヶ国, 計 7ヶ所で開催し, 合計 408 名の参加者を得て研究成果の国際発信を図った〔名詞修飾班〕。
 - ・ベトナム: ベトナム国家大学ハノイ校, 日越大学(平成 30 年 8 月 11-12 日, 参加者数: 36 名); ベトナム国家大学 HCM 人文社会科学大学(平成 30 年 8 月 14-15 日, 参加者数: 50 名)。
 - ・スリランカ: 交流協定を締結しているケラニア大学(平成 30 年 9 月 9 日, 参加者数: 76 名); ペラデニア大学(平成 30 年 9 月 11 日, 参加者数: 50 名)。
 - ・インド: 交流協定を締結している TMU 大学日本語学科および現地の日本語機関と共に, Maharatta Chamber of Commerce, Industries and Agriculture(平成 30 年 12 月 22-23 日, 参加者数: 106 名)。
 - ・ミャンマー: セドナ ホテル ヤンゴン(平成 31 年 2 月 23 日, 参加者数: 56 名)。
 - ・カンボジア: プノンペン大学(平成 31 年 3 月 16-17 日, 参加者数: 34 名)。

2. 国際出版

プロジェクトの所内メンバーが 1 冊の英文研究論文集(*The Linguistic Review* 36-1, De Gruyter Mouton 社の特集号 *Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean*)を計画より半年早く刊行し, また対照言語学的視点による日本語学習教材(*Minna no Nihongo prathamik bhag I & II: bhashantar wa vyakarana*)を 2 冊(I&II), インドの Sachi Prakashan から出版した。さらに英文研究論文集(*Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*, John Benjamins)の編集を行った(詳しくは「1. 研究に関する計画」(1)-3 参照)。また同じく所内メンバーが 9 編の論文を海外のジャーナル・論文集に発表した。

3. 国際発表

共同研究員を含めたプロジェクト全体で 40 件, 国際会議で成果発表を行った(プロジェクトへの謝辞を記したもののみ)。所内メンバーの主な業績は次のとおりである。

- ・国際会議 The 26th Japanese/Korean Linguistics (UCLA) と The 7th International Conference on Phonology and Morphology (ソウル大学)においてそれぞれ基調講演を行った〔音声研究班(窪菌)〕。
- ・北京日本学研究センター公開講座と北京大学創立 120 周年記念国際シンポジウムにおいてそれぞれ講演を行った〔とりたて班(野田)〕。

4. 文献目録(英語)の公開

移動動詞に関する文献目録(英文)を公開した(「2. 共同利用・共同研究に関する計画(1)-2」参照)。

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

国内において国際シンポジウムを3回開催したのに加え、海外において日本語学チュートリアル（韓国）を1回、日本語学講習会をベトナム、スリランカ、インド、ミャンマー、カンボジアの5ヶ国で計7回開催した。これらの11の国際企画において計684人の参加者を得た。いずれも計画を大きく上回る成果である。

また前年度に開催した国際ワークショップの成果を国際誌の *The Linguistic Review* (De Gruyter Mouton) の特集号として編集し、当初の計画（H31年夏）より半年早く刊行したのに加え、対照言語学的視点による日本語学習教材2冊 (*Minna no Nihongo prathamik bhag I & II: bhashantar wa vyakarana*) をインドの Sachi Prakashan から出版した。また同じく所内メンバーが9編の論文を海外のジャーナル・論文集に発表した。いずれも計画を大きく上回る成果（もしくは当初の計画になかった成果）である。

6. その他

該当する活動なし。

平成30年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本プロジェクトは、日本語の研究に基づいて一般言語学・言語類型論研究に貢献する「内から外を見る」視点と、一般言語学・言語類型論研究の観点から日本語の分析を考える「外から内を見る」視点の両方を重要視する。その結果、国際的な評価を受ける研究を行うとともに、その研究内容を書籍にまとめている。研究の刊行および啓蒙活動とともに、全体的に、計画を上回る成果を上げていると評価できる。

《各項目別》

1. 研究について

研究発表会や国際シンポジウムの開催も積極的に行なわれており、研究成果の刊行についても順調である。独立で研究発表会を開催するだけでなく、学会の定期大会においてもシンポジウムやワークショップが行われており、より広範囲の参加者を得ることに成功している。研究論文集や概説書などの書籍も続々と出版されており、研究の実施状況は計画を大きく上回っている。方言調査や研究実施体制の整備も順調に行なわれている。

2. 共同利用・共同研究について

言語地図作成のためのデータが収集されたのは計画通りであるが、計画を上回って、実際にデータベースが構築された。移動動詞に関する文献目録も公開され、平成28年度に作成された方言ア

クセントデータベースについても、十分アクセスされ、広く活用されていることが示された。共同利用・共同研究についても、計画を上回って実施されたとみなされる。

3. 教育について

連携大学院以外にも、当研究グループでは、着実に大学院生や若手研究者を受け入れ、積極的に発表の機会を提供し、旅費の補助も行なっている。また、国内外でのチュートリアルや、海外から講師を招いての講習会にも、数多くの参加者を得ている。国内の大学の機能強化に対して、大きな貢献をしていると言えよう。教育に関する実施状況についても、積極的な評価に値する。

4. 社会との連携及び社会貢献について

当初の計画を上回り、地域社会と連携した講演が8件行なわれた。また、一般社会人向け講演や小学生向けの講義、NINJALのチュートリアルも行なわれた。特に注目されるのは、現役教師の学び直しのための講演・講習21件である。いずれも、研究成果の教育的普及に大きく貢献したと考えられる。

5. グローバル化について

海外研究者の受け入れも順調であり、国際イベントも多数開催された。また、海外のジャーナルや英文の研究論文集・国際会議においても、多数の研究が発表された。移動動詞に関する文献目録も英語で公開されている。海外の大学との提携こそ進まなかつたが、海外の大学における講演も多く、グローバル化に関する実施状況は順調であると認められる。

6. その他特記事項

特になし。

統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究

プロジェクトリーダー：プラシャント・パルデシ

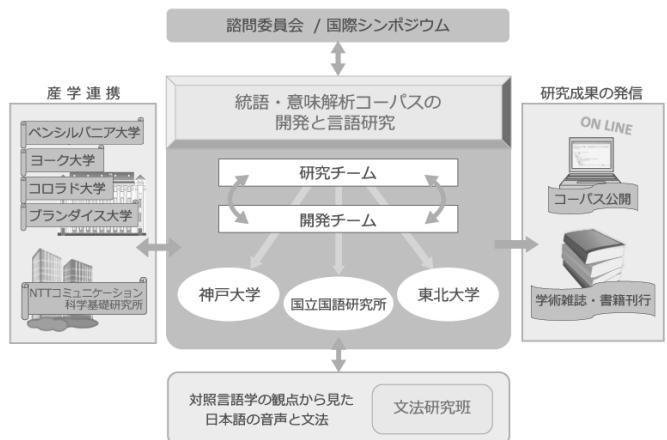
I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

現在世界の主要言語について Penn Treebank 方式の統語解析情報付きコーパス（ツリーバンク）が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報付き日本語構造体コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)・Keyaki Treebank/Kainoki Treebank/Kusunoki Treebank の構築に加えて、述語項構造解析のために必要となる意味役割情報を付与するコーパスの開発も試みる。さらに、このコーパスを利用して日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用推進の一環として、最終年度までに5~6万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持たない人でも簡単に利用できるインターフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、右図に示すように、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのアドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。



2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画

- ・コーパス開発：6年間で5~6万文規模の統語・意味解析コーパスを完成させ、一般公開する。
- ・日本語に堪能でない海外の研究者も本コーパスを利用できるようにローマ字版も提供する。
- ・コーパス使用の利便性を図るために複数の検索ツール（インターフェース）を提供する。

- ・統語・意味解析コーパスに基づく研究を行い、研究成果を国内外に発信する。

● 年次計画

平成 28 年度：研究プロジェクトの始動（1 年目）

- ① プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
- ② 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
- ③ 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
- ④ 研究班と開発班の合同研究会を年数回、国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
- ⑤ 国内外の学会で研究発表を行う。
- ⑥ 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
- ⑦ インターネットを通じてアノテーション作業が円滑に行える環境を海外の研究者と連携しながら構築する。
- ⑧ 海外の大学と研究交流協定を結ぶ。
- ⑨ 日英版のユーザーフレンドリーなインターフェースを構築し、NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスと合わせて公開する（1 万文）。
- ⑩ 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
- ⑪ 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

平成 29 年度：研究プロジェクトの推進（2 年目）

- ① プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
- ② 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
- ③ 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
- ④ 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
- ⑤ 国内外の学会で研究発表を行う。
- ⑥ 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) を企画し、実施する。研究成果の編集を開始する。
- ⑦ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 2 万文のデータを公開する。
- ⑧ 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
- ⑨ 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

平成 30 年度：研究成果の中間とりまとめ（3 年目）

- ① プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
- ② 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。

- ③ 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
 - ④ 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
 - ⑤ 国内外の学会で研究発表を行う。
 - ⑥ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計3万文のデータを公開する。
 - ⑦ 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を2回開催する（内一回はNINJALチュートリアル）。
 - ⑧ アノテーションマニュアル試作版作成・ウェブ公開する。
 - ⑨ インタフェースの開発・改良を続行する。
 - ⑩ 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを経た後に、海外の定評のある研究雑誌 LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY) に提出する。
 - ⑪ 日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) を執筆し、この教材の練習問題を NPCMJ コーパスを利用して解くための仕組みを模索する。
 - ⑫ 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究 (宮田 Susanne 教授との共同研究) を開始する。
 - ⑬ 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究 (宮田 Susanne 教授との共同研究) を開始する。
 - ⑭ 日本語学習者のコミュニケーション (リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ)、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。
 - ⑮ 2013年12月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
 - ⑯ 2016年12月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
- 平成31年度：研究プロジェクトの拡充（4年目）**
- ① プロジェクト HP (日英版) を開設・公開し、随時更新する。
 - ② 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
 - ③ 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
 - ④ 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
 - ⑤ 国内外の学会で研究発表を行う。
 - ⑥ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計4万文のデータを公開する。
 - ⑦ 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催。
 - ⑧ 日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) を刊行し、併せて、この教材の

練習問題をNPCMJ コーパスを利用して解くための仕組みも公開する。

- ⑨ アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
- ⑩ 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究(宮田 Susanne 教授との共同研究)を継続し, CHILDES (Child Language Data Exchange System) と連携してデータを公開する。
- ⑪ 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究(宮田 Susanne 教授との共同研究)を継続する。
- ⑫ インタフェースの開発・改良を続行する。
- ⑬ 岡山大学(竹内研究室)と連携し, 述語構造シソーラス (Predicate–Argument Structure Thesaurus (PT)) で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
- ⑭ 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB–VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集を完了・出版社 (Oxford Univ. Press) に入稿する (刊行時期は出版社の都合によるもの)。
- ⑮ 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を出版社 (John Benjamins) に入稿する。 (刊行時期は出版社の都合によるもの)。
- ⑯ 2017 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果をとりまとめ, プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを完了し, 海外の定評のある研究雑誌 LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY) に提出する。
- ⑰ 日本語学習者のコミュニケーション(リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ), 科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し, 「文型バンク」の開発・公開を進める。

平成 32 年度: 研究成果のとりまとめ (5 年目)

- ① プロジェクト HP (日英版) を開設・公開し, 随時更新する。
- ② 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し, 研究指導を行う。
- ③ 非常勤研究員を数名雇用し, アノテーション作業を行う。
- ④ 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し, 若手研究者にも積極的に参加してもらう。
- ⑤ 国内外の学会で研究発表を行う。
- ⑥ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し, 合計 5 万文のデータを公開する。
- ⑦ 大学院生向けの統語コーパス利用講習会 (チュートリアル) を開催する。
- ⑧ アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
- ⑨ インタフェースの開発・改良を続行する。
- ⑩ 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開 (宮田 Susanne 教授との共同研究)
- ⑪ 述語と機能語に対して詳細な形態論情報の付与されたデータを公開 (宮田 Susanne 教授との共同研究)
- ⑫ 岡山大学(竹内研究室)と連携し, 述語構造シソーラス (Predicate–Argument Structure Thesaurus (PT)) で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。

- ⑬ 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し，「文型バンク」の開発・公開を進める。

平成33年度：研究成果の公開（6年目）

- ① プロジェクトHP（日英版）を開設・公開し，隨時更新する。
- ② 若手研究者の育成の一環としてPDフェローを雇用し，研究指導を行う。
- ③ 非常勤研究員を数名雇用し，アノテーション作業を行う。
- ④ 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し，若手研究者にも積極的に参加してもらう。
- ⑤ 国内外の学会で研究発表を行う。
- ⑥ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し，合計6万文のデータを公開する。
- ⑦ 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催する。
- ⑧ アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
- ⑨ 岡山大学(竹内研究室)と連携し，述語構造シソーラス (Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)) で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
- ⑩ 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）
- ⑪ 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し，「文型バンク」の開発・公開を進める。

【3年までの成果物】

- ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（3万文）を初心者から上級者まで様々な利用が可能な各種検索インターフェースと共に公開。

【5年までの成果物】

- ・海外の定評のある研究雑誌の特集号または論文集：（NINJAL国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing）の研究成果 (LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY))。
- ・NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（5万文）を初心者から上級者まで様々な利用が可能な各種検索インターフェースと共に公開。
- ・日本語の統語論の教育に特化した入門書 Exploring Japanese Syntax (仮題) の刊行
- ・NINJAL国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果(論文集)の刊行 (Oxford Univ. Press)
- ・NINJAL国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果(論文集)の刊行 (John Benjamins)

- ・日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し開発した「文型バンク」（ウェブ版）。

6年間のロードマップ

| 統語コーパス | 28年度 | 29年度 | 30年度 | 31年度 | 32年度 | 33年度 |
|---------------|---|------------------------|--------------------------------------|-----------------------|----------------------------------|-----------------------|
| データ | 統語・意味解析コーパス(NPCMJ)を毎年1万文(計6万文)作成および一般公開 | | | | | |
| シンポジウム等 | 国内外の学会で研究発表 | 国際シンポジウム開催、国内外の学会で研究発表 | 国内外の学会で研究発表 | 国内外の学会で研究発表 | 国内外の学会で研究発表 | 国内外の学会で研究発表 |
| 毎年2回公開研究発表会開催 | | | | | | |
| 講習会等 | 毎年2回統語コーパス利用講習会 | | | | | |
| 刊行・出版 | | | 国際シンポジウムの成果を刊行、アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開 | アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開 | 啓蒙書・普及書を刊行、アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開 | アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開 |

II. 30年度活動概要

30年度予算総額 28,500千円

30年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、プロジェクト共同研究者42人（アドバイザーを含む、うちPDフェロー1名、大学院生4名）の組織でコーパス開発とコーパスに基づく言語研究を遂行した。公開研究発表会を計2回開催し、さらに学会におけるワークショップおよびシンポジウムをそれぞれ1回、企画・開催し、国内外で個別発表も行った。これらの企画において計26件の研究発表が行われた。

また、国外から刊行予定の①NINJAL国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing, ② NINJAL国際シンポジウムの MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES, ③ NINJAL国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の3つの研究成果のとりまとめ、編集作業を行った。さらに、日本語統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax（仮題）の執筆（岸本著）が終了し、この教材の練習問題をNPCMJコーパスを利用して解

くための仕組み（試作版）の構想を固めた（開発は来年度の予定）。

加えて、共同研究者の宮田 Susanne 教授の主導する CHILDES (Child Language Data Exchange System) と連携し、① 日本語を第一言語として獲得する幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究、② CHILDES の仕組みを利用した NPCMJ に対する精密な形態論情報付与に関する研究を開始した。① の具体例として、大久保（1967）のデータにアノテーションを付与し、CHILDES で NINJAL-Okubo データとして公開する準備を進めた（来年度公開予定）。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードと相談しながらアノテーションの質的な拡充を行った。共同利用の推進のために、コーパスの構築の面において、NPCMJ コーパスに新たなデータ 1 万文を追加し、総データ量を 3 万文に増やし、公開した。また、コーパスの利用を推進するために NPCMJ コーパス利用講習会を国内の大学で 3 回開催した（うち 2 回は NINJAL チュートリアル）。これらの講習会に 54 名の参加者（うち大学院生を含む学生 24 人）。さらに、日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ）、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進めた。初級の文型 200 件を格納し、インターフェースとともに公開した。大久保（1967）のデータにアノテーションを付与し、CHILDES で NINJAL-Okubo データとして公開する準備を進めた（来年度公開予定）。

3. 教育に関する計画

PD フェロー一人、および大学院生 4 名を非常勤研究員として雇用し、アノテーション作業や共同研究における発表の機会を提供することによって若手研究者を育成した。また、研究所で雇用されている非常勤研究員の国内外での学会発表の経費を援助した。プロジェクト非常勤研究員 2 名が九州大学（伊都キャンパス）で NPCMJ コーパスに関する集中講義（15 コマ分）を行った。さらに、統語コーパス利用講習会を 3 回開催し、コーパス利用に関するノーカウを提供した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

NPCMJ コーパスをオンラインで公開し、研究に目的を絞らない、幅広い層の人々からの利用促進に努めた。インターフェースの開発だけでなく、オンラインドキュメンテーション、ユーザーズマニュアルを充実させ、コーパスにより容易にアクセスができるようにした。

5. グローバル化に関する計画

国際シンポジウム 3 件 (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing, MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES, Mimetics in Japanese and other language of the world) の研究成果の編集作業を進めた。国際会議において研究成果を 3 件発表した。また、日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) の執筆を完了させ、出版社に入稿した（来年度刊行予定）。加えて、NPCMJ コーパスの漢字仮名交じりデータをローマ字化した形でも公開している。また、検索インターフェースを含めたウェブサイトはすべて日本語と英語の 2 言語で作成され

ている。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

| | |
|--|-------------|
| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
| (1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画 | |
| 1. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、研究発表会を2回開催し、さらに学会におけるワークショップおよびシンポジウムをそれぞれ1回、企画・開催した。 | |
| ● 研究発表会 | |
| ① 第1回研究発表会（平成30年6月22日、岡山大学 津島キャンパス工学部（参加者数8人、うち大学院生を含む学生1人）。 | |
| ② 第2回研究発表会（平成31年1月27日、東北大学（参加者数16人、うち大学院生を含む学生0人）。 | |
| ● 学会におけるワークショップ、シンポジウム | |
| ③ The English Linguistic Society of Japan 11th International Spring Forum, Hokkaido University. 2018年5月13日を企画・実施（発表の詳細は以下3.の⑬～⑯を参照） | |
| ④ 日本英語学会第36回大会シンポジウム「ツリーバンク開発と言語理論」（平成30年11月25日）横浜国立大学（参加者数24人）。 | |
| 2. 検索インターフェースのマニュアル（ユーザーズガイド）の日本語版と英語版を作成し、プロジェクトのホームページで公開した。 | |
| 3. NPCMJ コーパスに基づく研究の成果として、国際学会および国内学会において計21件の発表を行った。また、論文5件を発表した。 | |
| ● 国際学会での成果発表：口頭発表及びポスター発表3件 | |
| ● 国内学会での成果発表：口頭発表18件 | |
| ● 論文刊行：5件 | |
| 4. H29年度に開催した国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを実施した。ほぼすべての論文について加筆・修正が必要との評価があり、2019年3月末までに改訂版を提出することを求めるようになった。LILTへの提出は来年度へ持ち越すこととなる。 | |
| 5. MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集を続行し、来年度中に出版社に提出する予定である。 | |
| 6. 2016年12月に開催したNINJAL国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を編集し、出版社（John Benjamins）に入稿した。 | |
| 7. 日本語統語論の教育に特化したExploring Japanese Syntax（仮題）の執筆が終了し、この教材の練習問題とそれらをNPCMJ コーパスを利用して解くための仕組みの試作版の構想を固めた。開発は来年度に | |

なる。

(2) 研究実施体制等に関する計画

1. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、8名のプロジェクト共同研究員（うちPDフェロー1名、大学院生4名）体制でコーパス開発と共同研究を推進した。
2. 本年は宮田 Susanne 教授を通じて、CHILDES と連携を深めることに専念した。この連携により、NPCMJ コーパスに対する精密な形態論情報付加を行う見通しがたった。また、大久保（1967）による国立国語研究所での研究成果（第一言語習得データ）にアノテーションを付与し、CHILDES で NINJAL-Okubo データとして公開する準備を進めた。
3. 業務委託に基づき、東北大学と連携してアノテーションの研究・アノテーション作業およびデータのローマ字化作業を進めた。同じく、業務委託に基づき、神戸大学と連携して、インターフェースの改良に関する研究を行い、パターンブラウザの試作版を公開した。さらに、上述の日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax（仮題）という教材の練習問題の作成および NPCMJ コーパスで解くための仕組みの試作版の構想を固めた。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
|---|------------|
| (1) 共同利用・共同研究に関する計画 | |
| 1. NPCMJ コーパスに新たなデータ 1 万文を追加し、総データ量を 3 万文に増やした。 | |
| 2. NPCMJ コーパス利用講習会を国内の大学で 3 回開催した（うち 2 回は NINJAL チュートリアル）。 | |
| ① 統語・意味解析コーパス（NPCMJ）講習会（NINJAL チュートリアル），2019 年 1 月 26 日，東北大学川内北キャンパス（参加者数 31 人、うち大学院生を含む学生 14 人） | |
| ② 統語・意味解析コーパス（NPCMJ）講習会（NINJAL チュートリアル），2018 年 10 月 15 日，福岡リファレンス駅東ビル（参加者数 14 人、うち大学院生を含む学生 5 人） | |
| ③ 統語・意味解析コーパス（NPCMJ）講習会，2018 年 6 月 21 日，岡山大学津島キャンパス情報工学科（参加者数 9 人、うち大学院生を含む学生 5 人） | |
| 3. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進めた。初級の文型 200 件を格納し、インターフェースとともに公開した。 | |
| (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画 | |
| 1. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードと相談しながらアノテーションの質的な拡充を行った。詳細は以下の 3 を参照。 | |
| 2. 国語研究所主催の NINJAL シンポウム「データに基づく日本語研究」において発表を行った。 | |
| 3. 新規共同研究として、宮田 Susanne 教授の主導する CHILDES（Child Language Data Exchange System）と連携し、① 日本語を第一言語として獲得する幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究、② CHILDES の仕組みを利用した NPCMJ に対する精密な形態論情報付与に関する研究を開始した。また、③ 大久保（1967）による国立国語研究所での研究成果にアノテーションを付与し、CHILDES | |

でNINJAL-Okuboデータとして公開する準備を進めた。

3. 教育に関する計画

| | |
|--|------------|
| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
| <p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> | |
| <p>(2) 人材育成に関する計画</p> | |
| <p>1. PDフェロ一人、および非常勤研究員を雇用し、アノテーション作業や共同研究を通じて若手研究者を育成した。</p> <p>2. 大学院生4名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、公開研究会において、大院生に発表の機会を提供した。</p> <p>3. 研究所で雇用されている非常勤研究員の国内外での学会発表の経費を援助した。</p> <p>4. 統語・意味解析コーパスの開発とそれに基づく言語研究を推進するために、統語コーパス利用講習会を3回開催した。（詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」（1）2の実施状況を参照）</p> | |

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

| | |
|---|------------|
| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
| <p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> | |
| <p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p> | |
| <p>1. NPCMJコーパスをオンラインで公開し、研究に目的を絞らない、幅広い層の人々からの利用促進に努めた。インターフェースの開発だけでなく、オンラインドキュメンテーション、ユーザーズマニュアルを充実させ、コーパスにより容易にアクセスができるようにした。</p> | |

5. グローバル化に関する計画

| | |
|---|------------|
| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
| <p>(1) 国際的協業に関する計画</p> | |
| <p>1. スロベニア大学の研究者を1名外来研究員として受け入れた。</p> | |
| <p>(2) 国際的発信に関する計画</p> | |
| <p>1. 協定を締結した各大学の研究者と論文集の編集作業を進めた。</p> <p>2. 2017年度に開催した国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果を論集としてとりまとめるための編集作業を進めた。査読結果ではほとんどの論文が加筆・修正が必要と評価され、現在著者による修正が行われている。来年度早々にこの作業を終え、Linguistic Issues in Language Technology (LiLT)に提出する予定である。また、日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) の執筆が完了し、出版社に入稿</p> | |

した。来年度刊行予定。加えて、2013年12月に開催したNINJAL国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGESの研究成果の編集を進め、今年度中の出版社への入稿を目指している。また、2016年12月に開催したNINJAL国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the worldの研究成果を出版社（John Benjamins）に入稿した。（刊行時期は出版社の都合によるもの）。

3. NPCMJコーパスの漢字仮名交じりデータをローマ字化した形でも公開している。また、検索インターフェースを含めたウェブサイトはすべて日本語と英語の2言語で作成されている。
4. 国際会議において研究成果を3件発表した。

6. その他

該当する活動なし。

平成30年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

研究プロジェクト実施の基盤となる日本語の統語・意味コーパス(NPCMJコーパス)の開発は予定通り進展しており、1万文のアノテーション付きデータが追加された。統語情報に加えて意味情報を付するコーパスは世界的にも希少であり、コーパス言語学の展開への貢献が期待できる。コーパスを利用した研究成果としては国内外での学会発表21件、論文刊行5編に加えて、国際シンポジウムの成果をまとめた出版が3件進められている。また、言語学者の利用を想定したコーパス検索インターフェースのマニュアル作成と合わせて、国内学会および国語研究所主催の研究会・ワークショップ・シンポジウムを開催し、NPCMJコーパスを利用した研究の拡大・促進を図っている。コーパスの普及を目的とした講習会/チュートリアルを3回開催するとともに、一般人を対象とした検索インターフェース・利用マニュアルの作成、ローマ字化および英語による検索インターフェース公開による国際的な利用促進も図っている。一方で、自然言語処理分野では大量の言語データと機械学習を利用した研究と応用が急速に進展・普及しており、今後はそれらとの連携の強化が望まれる。全体として、プロジェクトの研究は順調に進展していると判断できる。

《評価項目》

1. 研究について

日本語の統語・意味コーパス(NPCMJコーパス)の開発は予定通り進展しており、着実にアノテーション付きのデータの蓄積が進められている。統語情報に加えて意味情報を付するコーパスは世界的にも希少であり、コーパス言語学の展開への貢献が期待できる。コーパスを利用した研究については、言語学者の利用を想定したコーパス検索インターフェースのマニュアル作成と合わせて、国内学会および国語研究所主催の研究会・ワークショップ・シンポジウムを開催し、NPCMJコーパスを利用した研究の拡大・促進を図っている。研究成果としては国内外での学会発表21件、論文刊行

5編に加えて、国際シンポジウムの成果をまとめた出版が複数進められている。このように、プロジェクトの研究は順調に進展していると判断できる。今後は、自然言語処理分野で中核となっている機械学習コミュニティとの連携の面でも強化を図ることを期待する。

2. 共同利用・共同研究について

NPCMJ コーパスに新たに一万文のデータを追加し、コーパスの拡充を着実に進めている。コーパス利用促進を目的としたNPCMJ コーパス講習会/チュートリアルを国内各地で3回開催し60名程度の参加者を集めている。国語研内部の別プロジェクトと共同で日本語学習者を対象とした文型バンクの開発を行っている。外部研究機関との連携としては、言語発達分野で国際的に広く利用されているCHILDESと連携して共同研究を開始している。コーパス研究の拡大への貢献が見込まれるため今後に期待する。このように、共同利用・共同研究について概ね順調に進展していると判断できる。コーパス研究の進展のために、国語研内の研究活動と合わせてコーパス利用拡大に向けた普及活動の着実な実施を期待する。

3. 教育について

コーパス講習会/チュートリアル開催によって研究プロジェクトの研究成果となるNPCMJ コーパスの利用普及を図っている。PDフェローおよび非常勤研究員を雇用するとともに、大学院生を共同研究員としてプロジェクトに加えており、若手研究者の育成を図っている。

4. 社会との連携及び社会貢献について

NPCMJ コーパスのオンライン公開、ドキュメント、ユーザマニュアルの充実を通じて研究者に限定されない幅広い人々によるコーパス利用の環境整備を行っている。今後は利用促進のための広報に期待する。

5. グローバル化について

外国からの滞在研究員1名を受け入れている。国際シンポジウムの成果をまとめて書籍として出版する活動が三件進行中である。NPCMJ コーパスのローマ字化/英語検索インターフェースが公開されている。グローバル化について着実に進行していると判断する。

6. その他特記事項

特になし。

日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成

プロジェクトリーダー：木部暢子

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトは、日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として、各地の言語・方言の調査を実施し、言語資源の整備・分析を行うとともに、言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献することを目的とする。

近年、世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009年、ユネスコは世界の危機言語リストを発表したが、その中には日本で話されている8つの言語—アイヌ語、与那国語、八重山語、宮古語、沖縄語、国頭語、八丈語—が含まれている。しかし、消滅の危機に瀕しているのはそれだけではない。日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと、また、これらの言語・方言の継承活動を支援することは、言語学上の重要課題であるばかりでなく、日本社会においても重要な課題である。

以上のような状況を踏まえ、本プロジェクトでは、次のことを実施する。(1) 日本の危機言語・方言の語彙集、文法書、談話テキストの作成と言語分析、(2) 音声・映像資料（ドキュメンテーション付き）、「日本語諸方言コーパス」等の言語資源の整備、(3) 地域と連携した講演会・セミナーの開催、(4) 若手育成のためのフィールド調査の手引き書の作成。

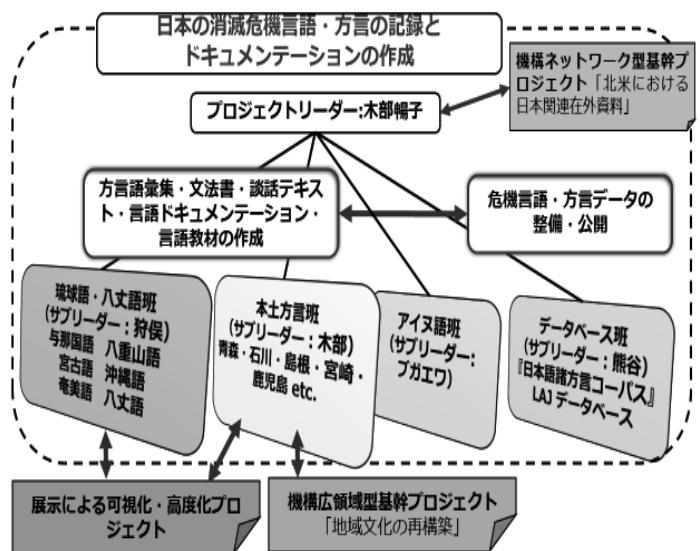
なお、実施にあたっては、機構の広域型基幹プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、ネットワーク型基幹プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」、「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化」と連携する。

2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織

本プロジェクトの実施にあたっては、図のような研究班を組織する。

- ・琉球語・八丈語班、本土方言班は6年間で、琉球24地点、八丈語、本土16地点（東北4地点、関東3地点、中部・関西3地点、中国・四国3地点、九州3地点）の語彙集・文法書・談話テキスト、言語ドキュメンテーション、言語教材を作成する。アイヌ語班はアイヌ語の口承文芸コーパスを作成する。
- ・データベース班は「日本の危機言語・方言の音声データベース」、「アイヌ語口承



文芸コーパス」、「日本語諸方言コーパス」、「『日本言語地図』データベース」の整備・公開を行う。

- ・研究成果として、以下のものを目指す。

書籍：ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects* , *Handbook of the Ainu Language*, 危機言語・方言に関する英文論文集, 『日本語の格』(仮題), 『日本語方言の動詞・形容詞(形態論)』(仮題), 『談話のなかの方言』, 『沖縄県久米島方言調査報告書』, 『島根県隠岐の島方言調査報告書』, 『石川県白峰方言調査報告書』, 『愛知県木曽川方言調査報告書』, 『青森県むつ市方言調査報告書』, 『宮崎県椎葉村方言語彙集』,

コーパス・データベース：『アイヌ語口承文芸コーパス』, 『日本語諸方言コーパス』, 「日本の危機言語・方言の音声データ」, 「『日本言語地図』データベース」,

その他：フィールド調査の手引き書, 各地の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション, 言語教材。

● 年次計画

平成 28~29 年度 (1 ~ 2 年目)

- ① 調査：琉球語, 八丈語, 本土方言の調査を行う。
- ② 研究会：「格と取り立て」, 「指示詞・代名詞」に関する研究会, コーパスに関する合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源：「日本語諸方言コーパス」, 「危機言語・方言音声データ」, 「アイヌ語口承文芸データ」等を拡充・整備し, 公開する。
- ④ 地域との連携：「危機的な状況にある言語・方言サミット」(年1回), 「方言セミナー」(年1回)を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生, PD 等を調査へ参加させる。フィールド調査の手引き書の準備を行う。
- ⑥ 成果：『日本語の格表現』(くろしお出版), 『かたりの中の方言』(勉誠出版)を出版する。『沖縄県久米島方言調査報告書』, 『島根県隠岐の島方言調査報告書』, 『石川県白峰方言調査報告書』を刊行する。ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects*, *Handbook of the Ainu Language* (30年4月刊行予定), 『椎葉村方言語彙集』(31年出版予定)の出版準備を行う。

平成 30 年度 (3 年目)

- ① 調査：琉球語, 八丈語, 本土方言の調査を行う。
- ② 研究会：国際シンポジウム“Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization.”, 「動詞・形容詞」に関する研究発表会を開催する。
- ③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』モニター版を公開する。また, 「危機言語・方言」音声データ, 『アイヌ語口承文芸コーパス』, 「『日本言語地図』データベース」のデータ補充, および首都圏大学生調査の結果分布地図, 属性別集計表の作成。
- ④ 地域との連携：「方言セミナー」, (1回)を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生, PD 等を調査へ参加させる。『フィールド調査の手引き書』の作成を進める。
- ⑥ 成果：ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects*, *Handbook of the Ainu Language* の出版準備を行う。『日本語の格表現』(仮題), 『かたりの中の方言』(勉誠出版)を出版する。各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・言語教材の刊行準備を進める。

平成31～32年度（4～5年目）

- ① 調査：琉球語、八丈語、本土方言、アイヌ語の調査を行う。
- ② 研究会：「方言語彙集」、「文法記述」に関する研究会、コーパス合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』、「危機言語・方言」音声データ、『アイヌ語口承文芸コーパス』、「日本言語地図」データベースのデータ等を整備・公開する。
- ④ 地域との連携：「方言セミナー」（年1回）を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生、PD等の調査への参加。
- ⑥ 成果：『椎葉村方言語彙集』、論文集『方言の指示詞・代名詞』（仮題）を出版する。国際シンポジウムの発表に基づく危機言語・方言の英文論文集を出版する。

平成33年度（6年目）

- ① 調査：次期準備調査を実施する。
- ② 研究会：研究成果報告会、コーパス合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源：「日本語諸方言コーパス」を一般公開、「危機言語・方言音声データ」、「アイヌ語口承文芸コーパス」、「日本言語地図」データベースのデータを補充・公開する。
- ④ 地域との連携：「方言セミナー」（年1回）を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生、PD等の調査への参加。
- ⑥ 成果：各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・言語教材を刊行する。

6年間のロードマップ

| | 28年度 | 29年度 | 30年度 | 31年度 | 32年度 | 33年度 |
|---------|---|-------------------------------------|---------------------------------------|-------------------------|------|------|
| 調査 | | | 琉球語、八丈語、アイヌ語、本土方言調査 | | | |
| データ | | 『諸方言コーパス』データ整備 | モニター版公開 | データ整備 | 本公開 | |
| | | | 方言コーパスを使った方言研究 | | | |
| | | | 危機言語・方言音声データ・アイヌ語口承文芸コーパス等整備・公開 | | | |
| シンポジウム等 | 毎年、研究発表会、危機言語・方言サミット、コーパス合同シンポジウム、方言セミナー開催 | | | | | |
| | | 国際シンポジウム開催 | | | | |
| 刊行・出版 | 『久米島方言調査報告書』 『島根県隠岐の島方言語彙集』、『白峰方言調査報告書』等刊行 | 『愛知県木曽川方言調査報告書』『日本語の格表現』、『かたりの中の方言』 | 『椎葉村方言語彙集』、危機言語・方言の英文論文集、『方言の指示詞・代名詞』 | 各地の語彙集・文法書・談話テキスト・教材の公開 | | |

II. 30年度活動概要

30年度予算総額 28,319千円

30年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

【フィールドワーク】日本の危機言語・方言の記録・保存・公開のために、全国約40地点における「動詞・形容詞」の調査、青森県むつ市方言の合同調査等を実施、また、椎葉村との連携協定に基づく『椎葉村方言語彙集』作成のための調査を実施した。【研究発表会・講演会】5回の公開研究発表会・講演会を開催した（①動詞・形容詞（琉球諸語）、②動詞・形容詞（本土諸方言）、③フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史、④球諸語継承に向けた教育活動の事例報告（日本音声学会ワークショップ）、⑤Sherman WILCOX教授による講演 Sign linguistics）。【国際シンポジウム】8月にNINJAL International Symposium “Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia”とそれに関連するイベントを開催した。また、ハワイ大学との協定に基づく講演会、ワークショップを開催した。【社会的意義】アイヌ語に関する研究が新聞各紙で取り上げられた。また、手話を含む危機言語の継承活動がNHKハートネットTVで取り上げられた。【大学との組織的な連携】東外大AA研LingDy3との協定によりクロスアポイントメントによる特任助教を雇用し、国際シンポジウム、弘前大学との連携授業等を実施した。【研究成果】研究成果として、プロジェクト全体で論文20件（ブックチャプターを含む）、図書・報告書5件、コーパス・データベース等5件、発表・講演85件、一般向け講演・セミナー13件として公開した（プロジェクトの企画によるもの、プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ）を公表した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

【データベース等の構築・公開】「危機言語DB」のページで危機言語・方言のデータを公開した。本年度は基礎語彙のうち宮古本島（砂川、池間西原）、沖縄（伊平屋村田名）のデータを追加公開、自然談話のうち宮古島（本島）、多良間島のデータを追加公開した。また、『日本言語地図』の原データの公開を行う『日本言語地図データベース』のデータを40件追加して公開した。諸方言が横断的に検索できる『日本語諸方言コーパス（COJADS）』については、3年間のデータ整備を経て、47地点24時間の音声データによるモニター版を2019年3月に作成し、公開した。【データベース等を使った研究】上記のCOJADSやデータベースを使った研究発表を5件行なった。また、日本言語資源の包括的検索システムの構築に向けて「通時コーパス」「日常会話コーパス」「学習者コーパス」、「コーパスアノテーション」、科研費基盤研究(A)、(B)と共同でコーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」（9月7日）を開催した。

3. 教育に関する計画

【大学との連携による授業】東京外大AA研と協力して、弘前大学との連携授業「地域文化振興実習」を担当した。内容は、言語調査の意義、調査の方法論、事前準備、データの書き起こし方法の4コマである。受講生のうち4人が青森県むつ市方言調査に参加した。【フィールドワーク支援】弘前大学の学生の他、むつ市方言調査に参加する学生を全国公募し、4人の学生・大学院生を調査に参加させた。また、若手研究者に対して語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材の作成のための調査旅費を援助した。【発表

支援】8月のNINJAL International Symposiumの前日にポスター発表を開催し、公募による若手研究者20人に発表の場を提供した。また、1月12~13日のワークショップ（ハワイ大マノア校）に5人の非常勤研究員を派遣し、国際ワークショップの経験を積ませた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

【地域社会との連携】宮崎県椎葉村との協定に基づき、村と共同で『椎葉村方言語彙集』の作成のための調査を実施した。また、今年度、新たに沖永良部島和泊町・知名町と連携協定を結び、言語復興活動を町と共同で実施することとした。今年度は和泊町国頭村集落の親子16人が言語継承活動の取組を発表するワークショップ「くんじやい しまむにプロジェクト」を2月10日に国語研で開催した。

【一般向け講義・講演会等】文化庁、宮古島市等との共催で「危機的な状況にある言語・方言サミット（宮古島）」（11月24日）を開催した。また、まつえ市民大学と共同で出雲弁に関するシンポジウム「出雲方言の探究と保存継承活動の活発化に向けて」（12月1日）を開催した。【方言の展示】昨年度から「展示による可視化・高度化事業」と共同でモバイル型展示ユニットの作成と展示を行っている。今年度は神奈川大学、弘前大学、羽田空港国際線ターミナル、松江市、富山大学等で展示を行なった。【インターネットを通した発信】ネットを通して危機言語・方言のデータや『日本語諸方言コーパス（COJADS）』、『日本言語地図データベース』のデータを公開した。

5. グローバル化に関する計画

【国際シンポジウム等】8月6~8日に国語研で、琉球・日本・北東アジア地域の危機言語を対象とするシンポジウムNINJAL International Symposium “Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia.”を東京外大AA研、科研費基盤研究(S)と共同で開催した。これに関連して、8月5日に危機言語に関するポスター発表、およびハワイ大学ヒロ校 ŌHARA Yumiko氏による“A brief introduction to the immersion classroom: A case of Hawaiian language”を、8月9~10日にブリティッシュコロンビア大学Mark Turin氏によるドキュメンテーションのワークショップDeveloping Digital Tools for Language Revitalization”を開催した。【協定に基づく講演会】国際連携協定に基づき、8月9日に国語研で、ハワイ大学マノア校 FUKUDA Shin'ichirō氏による協定締結記念講演会を開催した。また、1月にハワイ大学マノア校で危機言語に関するワークショップThe NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Workshop”を開催した。【英文ウェブサイトの整備・充実等】報告書、および危機言語・方言のデータを英訳し、ホームページで発信した。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

| | |
|--|-------------|
| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
| <p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>● フィールドワーク</p> <p>1. 日本の危機言語・方言の語彙集, 文法書, 談話テキストを作成するために, 共同研究者が分担して, 全国約 40 地点において調査を実施した。今年度のテーマは「動詞・形容詞」である。</p> <p>2. 一地点の方言を集中的に調査・記録するため, 青森県むつ市で合同調査を実施した (機構広領域連携型プロジェクト「地域文化の再構築」, 弘前大学と共同実施)。調査日は 8 月 30 ~31 日, 参加者は 27 人 (うち大学院生 4 人, 公募の学生 4 人, 弘前大学学生 4 人)。弘前大学川瀬卓准教授 (日本語学), 歴博小池淳一教授 (民俗学) も調査に参加した。調査項目は指示詞, 動詞活用等の文法項目, 基礎語彙 600 単語とその例文である。報告書は 2019 年度に刊行する予定である。</p> <p>3. 宮崎県椎葉村との協定に基づき, 『椎葉村方言語彙集』作成のための調査を実施した (広領域連携型プロジェクト「地域文化」と共同実施)。今年度は事業の最終年度に当たる。これまでの調査でデータが不足している松尾, 尾手納, 向山日当 (5 月 23~25 日, 参加者 7 人), 鹿野遊 (9 月 29~30 日, 参加者 5 人) で補充調査を行なった。</p> <p>● 公開研究発表会・講演会, 国際シンポジウム</p> <p>4. 全国 40 地点調査に関連して, 「動詞・形容詞」に関する公開研究発表会を 2 回開催した。1 回目は「動詞・形容詞 (琉球諸語)」(6 月 17 日, 国立国語研究所) で, 参加者数 45 人 (うち学生 4 人), 発表件数 6 件, 2 回目は「動詞・形容詞 (本土諸方言)」(3 月 10 日, 国立国語研究所) で, 参加者数 71 人 (うち学生 8 人), 発表件数 6 件であった。2 回目の研究発表会に合わせて, ワークショップ「基礎語彙の収集と処理」(3 月 9 日, 国立国語研究所) を開催した。参加者 26 人であった。</p> <p>5. プロジェクトの成果の海外発信と海外の研究者との連携を進めるために, <u>NINJAL International Symposium</u> “Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization”, ポスター発表, ハワイ語のイマージョンプログラム, 言語ドキュメンテーションのワークショップを開催した。(詳細は 5. (1) グローバル化に関する目標を達成するための措置 (2) 1 を参照)</p> <p>6. 琉球語に関する研究成果を学界に向けて発信するために, 特任助教青井隼人が中心となって第 32 回日本音声学会全国大会ワークショップで「琉球諸語継承に向けた教育活動の事例報告」(9 月 16 日, 沖縄国際大学) を発表した。</p> <p>7. 琉球語の調査研究をもとに<u>日琉祖語を考える公開研究発表会</u>「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」をオープンハウスの一環として開催した (12 月 22~23 日, 国立国語研究所, 科研費基盤研究 (B) と共催)。参加者数 89 人 (うち国外機関所属者数 3 人, 学生数 10 人), 総発表件数 9 件 (うち国外機関所属者発表件数 2 件)。</p> <p>8. 今年度から手話の研究者が本プロジェクトに参加し, <u>手話に関する研究をプロジェクトに取り入れること</u>とした。それに関連して, 12 月 10 日に Sherman WILCOX (アメリカ ニューメキシコ大学教授) による講演会 “Sign linguistics for documentation: From theory to fieldwork” を本プロジェクトの主催で開催した (国立国語研究所多目的室)。</p> | |

● 研究成果の公表

9. 前年度に実施した愛知県木曽川方言合同調査の報告書を3月に刊行した。
10. 椎葉村の補充調査の結果を3月に作成し、椎葉村教育委員会へ提出した。全地域のデータをまとめた『宮崎県椎葉村方言語彙集』の原稿は、椎葉村との協議により、2019年度に作成することとなった。
11. 28年度のシンポジウムをもとにした『日本語の格表現』(くろしお出版)、機構の連携研究の成果をもとにした『かたりの中の方言』(勉誠出版)の編集作業は、「展示による可視化・高度化事業」と『諸方言コーパス』の作成作業のために遅れている。4月に出版社へ原稿を入稿し、2019年度の刊行を目指す。
12. 首都圏大学生調査の結果について、データ更新と集計表を3月にWebサイトで公開した。
13. プロジェクトの研究成果を、共同研究員のものも含めて、論文20件(ブックチャプターを含む)、図書・報告書5件、コーパス・データベース等5件、発表・講演85件、一般向け講演・セミナー13件として公開した(プロジェクトの企画によるもの、プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ)。

● 教材及び教育プログラムの開発

14. 昨年度の愛知県立大学でのフィールドワークの講義、および今年度の弘前大学「地域文化振興実習」の講義(詳細は3教育に関する計画(1)1.参照)をもとに、東外大AA研LingDy3と共同で『フィールドワークの手引き書』の作成を進めている。

● 受賞

15. 東外大AA研特任研究員／国語研特任助教 青井隼人が琉球諸語の音韻・音声に関する研究で2018年度仲宗根改善研究奨励賞を受賞した。(7月7日受賞式)
16. 共同研究員／学振PD(国語研)の坂井美日が日本言語学会2018年春季大会の発表「九州方言における主語標示の使い分けと動作主性」により大会発表賞を受賞した。(11月18日受賞式)

● 新聞、テレビでの紹介

17. 読売新聞「アイヌ語 民話で深く理解」(7月30日)、朝日新聞「孤立した言語 蕎穂は膨大」(10月24日)等、全部で12件の取材記事が掲載された。
18. 危機言語(手話を含む)の復興がNHKハートネットTV「故郷の言葉を守りたい～日本の“消滅危機言語”～」(10月17日、24日)で放映された。木部が解説者として出演し、沖永良部島下平川における山田の復興活動が取り上げられた。

(2) 研究実施体制等に関する計画

● 大学との組織的な連携

1. プロジェクトを推進するために、国内外の研究者72人をプロジェクト共同研究員として組織した。うち大学院生4人、日本学術振興会特別研究員4人、国外機関所属者3人である。
2. 東外大AA研LingDy3との協定に基づき、クロスマーチントメントにより特任助教1人(青井隼人)を雇用し、NINJAL国際シンポジウム、弘前大学との連携授業、音声学会シンポジウム等を実施した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

| | |
|--|------------|
| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
| (1) 共同利用・共同研究に関する計画 | |
| ● データベース等の構築・公開 | |
| 1. 「危機言語 DB」のウェブページを5月にリニューアルし、ページデザインと検索機能を改良した。今年度は、基礎語彙のうち宮古本島（砂川、池間西原）、沖縄（伊平屋村田名）のデータを追加公開、自然談話のうち宮古島（本島）、多良間島のデータを追加公開した。琉球語のデータの整備を優先させたため、島根県出雲方言のデータは来年度、整備することになった。 | |
| 2. 『アイヌ語口承文芸コーパス』のデータの拡充は、アイヌ民族博物館や文化庁のアイヌ語データベース業務のために、予定していた作業者の確保が難しくなり、今年度は実施できなかった。それに代えて、モバイル型展示ユニット「アイヌ語とアイヌの民話」を作成した。 | |
| 3. 『日本言語地図』の原データの公開を行う『日本言語地図データベース』の40項目のデータを3月に追加・公開した。 | |
| 4. 諸方言が横断的に検索できる『日本語諸方言コーパス (COJADS)』については、3年間のデータ整備を経て、47地点24時間の音声データによるモニター版を2019年3月に公開した（登録受け付けは4月下旬から）。 | |
| 5. 共同研究員の小西いづみが本プロジェクトの調査項目を参考にして、「いづこに」のページで「富山県朝日町笛川方言」の音声データを公開した。 | |
| ● データベース等を使った研究成果等 | |
| 6. 宮崎シーガイアで開催されたLREC (The Language Resources and Evaluation Conference, 5月9日) 等COJADSや危機言語データベースを使った研究発表5件行なった。また、COJADSを使った論文を1件公開した。 | |
| 7. コーパス合同シンポジウム「コーパスにみる日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」(9月7日、国語研)、NINJALシンポジウム「データに基づく日本語研究」(12月16日、東京証券会館)のワークショップにおいて、COJADSを使った研究を発表した（詳細は以下の（2）2参照）。 | |
| 8. その他、研究発表会「日本語諸方言コーパスデータを使った方言の分析」を開催した（9月7日、国語研、科研費(A)と共同開催）。参加者31人（うち学生2人）、発表件数4件（うち学生1人）。 | |
| (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画 | |
| ● 共同利用・共同研究を推進するための大学との組織的な連携 | |
| 1. 琉球大学との交流協定に基づき、琉球大学に「沖縄における消滅危機言語・方言の調査・保存に関する研究」を事業委託し、沖縄県伊江島等の言語を記録した。 | |
| ● プロジェクト合同の研究集会 | |
| 2. 日本言語資源の包括的検索システムの構築に向けて、「通時コーパス」「日常会話コーパス」「学習者コーパス」、「コーパスアノテーション」、科研費基盤研究(A)、基盤研究(B)と共同でコーパス合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」を開催した（9月7日、国語研）。 | |

3. 教育に関する計画

| | |
|--|------------|
| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
| (1) 大学院等への教育協力に関する計画 | |
| ● 大学と連携して実施する授業やフィールドワーク | |
| 1. <u>弘前大学との連携授業「地域文化振興実習」</u> を <u>東外大 AA 研</u> と協力して2回4コマ担当した。講義内容は、1回目（5月28日）が品川大輔（東外大）「言語調査の実際」、青井隼人（東京外大特任研究員／国語研特任助教）「言語（音声）学的調査の方法論」、2回目（6月4日）が木部暢子「調査の事前準備について」「東北方言の音韻・音声の特徴とその書き起こし方法について」である。 | |
| 2. 上記の授業と合わせて、 <u>青森県むつ市方言調査</u> を弘前大学と共同で実施し、受講生のうち4人がこれに参加した。 | |
| (2) 人材育成に関する計画 | |
| ● プロジェクト非常勤研究員の雇用 | |
| 1. 若手研究者を育成するために、PD フェロー1人、非常勤研究員を7人雇用した。 | |
| ● 大学院生、学振 PD 等のプロジェクトへの参加 | |
| 2. 大学院生、学振 PD に国際シンポジウムやフィールドワークの機会を提供し、実践をとおして若手研究者の育成を行なった。大学院生、学振 PD の参加状況は以下のとおりである。 | |
| ① NINJAL 国際シンポジウムの前日（8月5日）のポスター発表を公募し、若手研究者20人が発表した。 | |
| ② 1月12～13日のWorkshop（ハワイ大マノア校）で非常勤研究員5人が発表した。 | |
| ③ むつ市方言調査に非常勤研究員4人、 <u>全国公募の学生・大学院生</u> 4人が参加した。なお、公募の学生に対しては、 <u>調査前に事前研修を実施した</u> 。 | |
| 3. 若手研究者に対して、語彙集・文法書・談話テキスト、言語教材の作成のための調査旅費を援助した。 | |

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

| | |
|--|-------------|
| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
| (1) 産業界や地域社会との連携に関する計画 | |
| 1. 平成26年度から、 <u>宮崎県椎葉村と協定を結び</u> 、『椎葉村方言語彙集』の作成を実施している。今年度は事業の最終年度にあたるため、補充調査を行なった。椎葉村との協議により、『宮崎県椎葉村方言語彙集』は、2019年度に刊行することとなった。 | |
| 2. (2) 研究成果の社会への普及に関する計画の「展示による研究成果の発信」へ移動。 | |
| 3. 今年度、新たに <u>沖永良部島の和泊町、知名町と連携協定を結び</u> 、方言復興活動を町と共同で実施することとなった。また、和泊町国頭村集落の親子16人が言語継承活動の取組を発表するワークショップ「 <u>くんじやい しまむにプロジェクト</u> 」を2月10日に国語研で開催した。 | |
| (2) 研究成果の社会への普及に関する計画 | |
| ● 一般向け講義・講演会等 | |
| 1. 危機言語・方言の保存・継承のために、文化庁、宮古島市等との共催で11月24日にマティダ市民劇場（宮古島市文化ホール）で「 <u>危機的な状況にある言語・方言サミット（宮古島）</u> 」（主催：文化庁、沖縄県、宮古島市、宮古島市教育委員会、国立国語研究所、琉球大学、北海道大学アイヌ・先住民研究センター）を | |

開催した。参加者は約400人、発表2件、講演1件、その他6件で、木部が危機的な状況にある言語・方言の現況報告を行い、田窪が基調講演「ことばと生きる、ことばを残す」を行なった。

2. まつえ市民大学センターの会と共同で、12月1日に出雲方言シンポジウム「出雲方言の探究と保存継承活動の活発化に向けて」を開催した（松江市市民活動センター、広域連携PJと共同）。参加者60人（うち学生1人）、木部、友定、平子、小西、野間の4人が発表した。
3. その他、与那国語に関する講座「二日で学ぶ与那国語」（2月17～18日、東洋文庫アカデミア）、「与那国語の動詞・形容詞の活用パラダイム：動詞を使えるようになるために」（11月18日、よなぐにはーげんクラブ）を開催し、東京と与那国で言語復興支援を行った。

● 展示による研究成果の発信

4. 昨年度から「展示による可視化・高度化事業」と共同で、危機言語・方言の保存と継承活動に展示の手法を取り入れている。今年度はモバイル型展示ユニットを4台作成した「日本海のことばと文化」「消滅の危機に瀕した言語・方言」「日本語の歴史と方言」「アイヌ語とアイヌの民話」。また、モバイル型展示ユニットを使った展示を8回開催した。①神奈川大学（5月7～25日、歴博と共同開催）、②弘前大学（5月28～6月15日）、③羽田空港国際線ターミナル（8月24日～9月14日、歴博と共同開催）、④松江市市民活動フェスタ（9月25日、まつえ市民大学センターの会と共同開催）、⑤鹿児島大学・人間文化研究機構協定締結記念シンポジウム（9月29日、鹿児島大学）、⑥大学共同利用機関シンポジウム2018（10月14日、名古屋市科学館）、⑦国語研オープンハウス（12月22日）、⑧富山大学図書館（2月12～19日）。

● インターネット等を通した研究成果の社会への発信

5. 『日本語諸方言コーパス(COJADS)』モニター版を3月に作成した（調整のため公開は4月下旬）。（2. 共同利用・共同研究に関する計画（1）5参照）
6. 「日本の危機言語・方言」のデータ、『日本言語地図データベース』等のデータを増補し、ホームページで公開した。（2. 共同利用・共同研究に関する計画（1）1～4参照）
7. 上記の活動をとおして、地方自治体や文化団体、一般市民に危機言語・方言の記録・保存・復興の啓蒙活動を行なった。

5. グローバル化に関する計画

| | |
|--|-------------|
| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
| (1) 国際的協業に関する計画 | |
| ● 海外の研究者の受入 | |
| 1. 海外の研究者3人が共同研究員として参加し、8月の国際シンポジウムや12月の公開シンポジウムのアドバイザーや発表者をつとめた。また、1人が8月の方言調査に参加した。 | |
| (2) 国際的発信に関する計画 | |
| ● 国際シンポジウムの開催 | |
| 1. プロジェクトの成果の海外発信と海外の研究者との連携を進めるために、以下の国際シンポジウム、ワークショップを開催した。 | |
| ①日本と北東アジアの危機言語と言語復興をテーマとする NINJAL International Symposium “Approaches | |

to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization” を国語研で開催した（8月6～8日、東外大学AA研LingDy3、科研費基盤研究(S)との共催）。参加者数は122人（うち国外機関所属者19人、学生25人）、発表件数は29件（うち国外機関所属者発表件数9件）である。

- ②シンポジウムの前日（8月5日）に若手研究者による公募のポスター発表を開催した。応募のうち20件を採択した（うち国外機関所属者発表件数5件、学生発表件数7件）。（資5.2）
- ③また、シンポジウムの前日（8月5日）にハワイ大学ヒロ校 ŌHARA Yumiko 氏によるハワイ語の復興ワークショップ “A brief introduction to the immersion classroom: A case of Hawaiian language”を開催した。
- ④シンポジウムの次の日（8月9～10日）にブリティッシュ コロンビア大学のMark Turin 氏によるドキュメンテーションのワークショップ “Developing Digital Tools for Language Revitalization: Demystifying Coding, Apps and Web Platforms”を開催した。
2. 前年度に締結したハワイ大学マノア校との連携協定に基づき、以下の講演会、ワークショップを開催した。
- ①8月9日に国語研で、ハワイ大学マノア校 FUKUDA Shin'ichirō 氏による協定締結記念講演会 “Experimental syntactic research at University of Hawai'i at Mānoa: an overview and case studies.”（ハワイ大学マノア校での実験を通した統語研究活動：概観と実例）を開催した。
- ②1月12～13日にハワイ大学マノア校で、“The NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Workshop: Grammatical Descriptions of Endangered and Understudied Languages and Dialects in East Asia and Beyond”を開催した（琉球諸語研との共催）。参加者数は58人、発表は26件（うち国外機関所属者発表件数8人、学生7人）、ポスター発表11件である。
- 英語による研究成果の発信
 - 3. ムートン社 *Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language* の編集作業を進めた。
 - 4. 8月の国際シンポジウムの発表を元にした英語論文集をMouton社から刊行することになり、その準備を進めた。
 - 英文ウェブサイトの整備・充実等
 - 5. 報告書、および危機言語・方言のデータを英訳し、ホームページで発信した。

6. その他

該当する活動なし。

平成30年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

評価項目のいずれにおいても、それぞれ十分な成果をあげており、A評価が妥当であると考えられる。昨年に続き社会貢献、および今年度新たに力を入れた研究の国際発信において、成果が充実

している。研究面において特筆される点は、まず、諸方言の横断的検索が行える『日本語諸方言コーパス(COJADS)』が公開されたことである。47 地点 24 時間の音声データと文字化資料が収載され、中納言の形態素解析タグが付された共通語訳から KWIC 索引の作成（音声付き）が可能になった。次に、語彙集、文法書、談話テキストを作成するための調査が、全国 40 地点で実施されたことである。1980 年代に地域誌の枠組みで行われた各地方言の記述からすでに 40 年近くを経ている。新しい言語研究の方法でとりくむ、現代方言の記述が進められることの意義は大きい。プロジェクトの後半を迎えるにあたり、著述面での成果をさらにあげることが期待される。

《評価項目》

1. 研究について

当初の計画として、研究水準及び研究の成果等に関して 12 項目、また、研究実施体制等に関して 2 項目、合計 14 項目の目標が立てられているが、いずれの項目においてもほぼ計画どおりに実施され、十分な成果をあげている。「動詞・形容詞」を年度のテーマに掲げて行った 40 地点にわたるフィールドワークの展開と、地点別の記述的研究は着実に行われており、シンポジウム等の口頭発表および複数の報告書として WEB 上でも公開されている。方言コーパスの整備公開も予定通り着実に進められている。方言コーパスを使った研究が始まったが、始動直後であるため関係論文数がやや少ない。次年度からは、広く斯界に方言コーパスの利活用を呼びかける方策がほしい。ちなみに、本年度出版予定の報告書『椎葉村方言語彙集』の刊行は次年度となつたが、さらなる補充調査の必要性があるため問題とはならない。前年度刊行予定であった『日本語の格表現』『かたりの中の方言』の編集作業が遅れている事情は十分に理解できるが、次年度には刊行されることが望ましい。

2. 共同利用・共同研究について

データベースの構築・公開及び講習会・講演会の開催について、また、共同利用・共同研究を推進するための大学との組織的な連携、プロジェクト合同の研究集会について、いずれの項目もバランスよく十分な成果をあげている。方言コーパスを使った研究発表は活発に行われたため、今後は、論文化されることが重要になろう。公開後の『日本語諸方言コーパス』を用いた研究論文の産出量を、プロジェクト員、一般利用者ともに増やすためには、当該コーパス構築の目的と設計理念、および活用可能性について、丁寧な説明を施すことが重要となろう。また、共同利用の趣旨からいえば、作成公開されたデータベースが、実際にどの程度閲覧され、どのように利用されているかを把握する意識も重要であろう。

3. 教育について

研究過程及び研究成果の教育的普及は十分に行われ、大学院等への教育協力及び人材育成に関して、成果をあげている。弘前大学および東京外国語大学 AA 研と連携した授業のみならず、方言調査の実施に際して、全国公募を行ったうえで参加者の学生・大学院生に事前研修を行い、諸大学の学生に懇切な教育機会を設けた。また、若手研究者に対しても調査旅費を援助し、語彙集・文法書・談話テキスト・言語教材の作成を経験する研究教育の機会を設けたことも評価される。実践を通じた若手育成の成果は今後長い時間を経て現れることと信じる。公募によるポスター発表を国際シン

ポジウム開催時期と合わせて設けていることにも、実践から研究へと導く、若手研究者育成への好ましい視野のもちかたが知られる。

4. 社会との連携及び社会貢献について

地域社会との連携及び研究成果の社会への普及については、高い成果をあげている。新たな地域連携を行うとともに、これまで継続してきた地域連携活動を丁寧に深めたことも高く評価される。地域連携は一朝一夕には成らず、相互の信頼関係を深めていく過程が重要である。言語研究に不可欠な地域理解を地道に重ねることによって、今後も、さらに質の高い研究と地域への還元が可能になっていくであろう。今期の地域活動には、研究面の活動、地域言語の理解を助ける活動、地域言語の継承を助ける活動の3種類がみられた。これらを、与那国、沖永良部島、宮古島、宮崎県椎葉村、鹿児島市、松江市、富山市、神奈川、羽田空港国際ターミナル、国立国語研究所オープンハウス、弘前市というように、地点を広げて展開した。今後は、各地の記述的研究の深化と並行させて、地域言語に関する3種類の活動を行うべき地点の吟味を行うことで、一層の活動の進展を期待したい。

5. グローバル化について

海外の組織との連携及び研究成果の国際的発信においては精力的に進められ、高い成果をあげている。海外の研究者3名を共同研究員に迎え、危機言語・方言に関する共同研究を推進した。研究成果の国際発信に関しては、国際シンポジウム1件、ワークショップ3件、協定締結記念講演1件を行った。ちなみに、シンポジウムの前日に行った若手研究者を対象とする公募のポスター発表では、採択20件のうち12件が国外機関所属者、学生の発表であったことを例にとっても、こうした活動が国際発信とともに、若手研究者の教育や国際交流の機会としても機能するよう配慮されていることは高く評価される。出版編集についても、予定通り、今後2冊を上梓する準備が進められた。WEBに掲げられた報告書、および危機言語・方言のデータの英訳も進められた。

6. その他特記事項

WEB上に置かれた報告書の英訳が進んでいることと合わせて、中国語、韓国語、ロシア語への翻訳を加える予算措置をとることが望ましい。これにより、消滅危機言語・方言をテーマとした、東アジア圏の研究者交流と共同研究への場を作る足掛かりとしたい。多言語環境をWEB上につくることは、日本語そのものの継承と発信にとっても望ましいことと考える。

通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

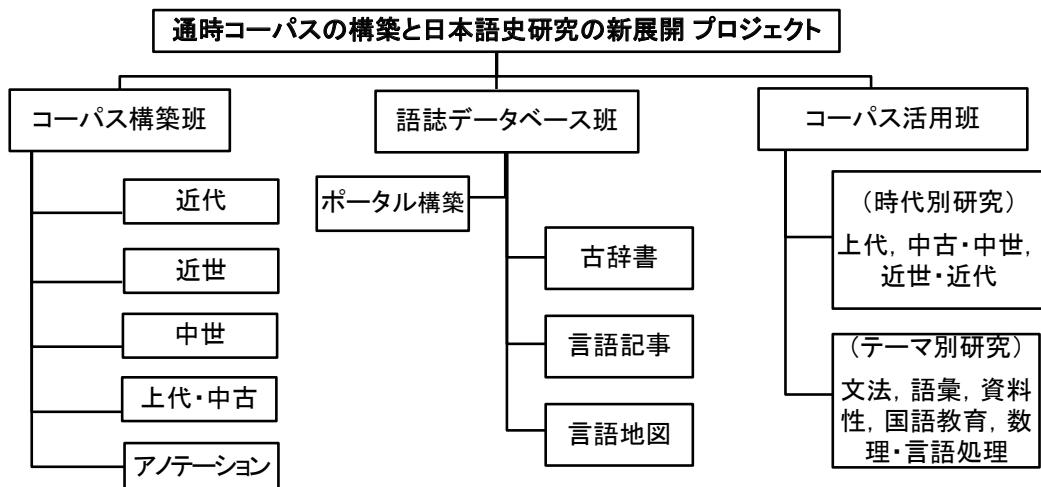
本プロジェクトは、上代（奈良時代）から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入し、従来行えなかった視点からの研究を展開する。

既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済みの「平安時代編」（平安仮名文学作品）、「室町時代編」（狂言）等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌集、中世のキリストン資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・文学作品等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」（代表者・高田智和）と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織



「コーパス構築班」は6年間で奈良時代から明治・大正時代までをカバーする通時コーパスを構築する。上代・中古, 中世, 近世, 近代の時代ごとにグループを置き, プロジェクト非常勤研究員を配置してコーパス開発にあたる。「語誌データベース班」は, コーパスと連携した語誌データベースを開発するために古辞書, 言語記事, 言語地図のグループを置き, 各々専任教員が中心となってデータベースを開発する。またポータル構築のグループを置き, コーパスと語誌データベースの情報を統合した語誌情報ポータルサイトの設計・構築にあたる。「コーパス活用班」は, 時代別に上代, 中古・中世, 近世・近代の研究グループを置き, コーパス構築班と連携しつつ各時代の日本語の研究にあたる。また分野別に, 文法, 語彙, 数理・言語処理の研究グループを置き各分野の研究にあたるほか, 資料性, アノテーションのグループを置き, それぞれコーパスに追加する資料, アノテーションに関する研究を行う。このほか, 人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して表記の研究を行う。コーパス活用班にはコーパス構築班のメンバー, PD・大学院生を含む若手研究者を参加させる。

● 年次計画

※各年, 研究発表会（シンポジウムを含む）・講習会を1回以上開催する。サブコーパスの名称は仮称。

平成28年度（1年目）

- ①「鎌倉時代編II日記・紀行」, 「明治・大正編I雑誌」（太陽・女性雑誌非コアデータ）を公開。
- ②日本語学会でワークショップを開催。

平成29年度（2年目）

- ①「奈良時代編I万葉集」, 「室町時代編IIキリスト教資料」, 「江戸時代編I洒落本」を公開。

平成30年度（3年目）

- ①「江戸時代編II人情本」, 「明治・大正編II教科書」・「和歌集編（八代集）」を公開。
- ②古辞書データベースの試作版を公開。
- ③書き言葉コーパス入門書を出版。

平成31年度（4年目）

- ①「江戸時代編III近松」, 「奈良時代編II宣命」を公開。

平成 32 年度（5 年目）

- ①「明治・大正編Ⅲ文学作品」、「鎌倉時代編Ⅲ軍記」を公開。
- ②語誌情報ポータルサイトの公開。
- ③研究論文集の出版。

平成 33 年度（6 年目）

- ①『日本語歴史コーパス』（奈良時代～明治・大正時代）の拡張完了。
- ②語誌情報ポータルサイトの完成。

● 3 年目までの成果物

コーパス構築班は『日本語歴史コーパス』を拡張し下記のサブコーパスを公開する。

- ①「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」「室町時代編Ⅱキリストン資料」「奈良時代編Ⅰ万葉集」「明治・大正編Ⅰ雑誌」「明治・大正編Ⅱ教科書」、「江戸時代編Ⅰ洒落本」「江戸時代編Ⅱ人情本」，「和歌集編（八代集）」
- ②語誌データベース班は、語誌データベースの一部として古辞書データベースの試行版を公開する。コーパス活用班は、ワークショップ・公開研究会を 2 回以上、国際シンポジウムを 1 回開催し、書籍 1 冊を刊行する。また、プロジェクト全体として一般向けの NINJAL フォーラムを 1 回開催する。

● 5 年目までの成果物

- ①コーパス構築班は、奈良時代から明治・大正時代までの通時的な研究ができるコーパスとして『日本語歴史コーパス』を拡張し公開する。語誌データベース班は、各種語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルサイトを公開する。コーパス活用班は、国際シンポジウムを 1 回開催し、研究論文集を 1 冊以上出版する。

II. 30 年度活動概要

30 年度予算総額 28,500 千円

30 年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

プロジェクトで主催した NINJAL-Oxford 「通時コーパス」国際シンポジウム（9月 8, 9 日）、「通時コーパス」シンポジウム 2019（3月 9 日）のほか、共催を含め計 4 回のシンポジウムを開催した。また、通時コーパス活用班のグループ研究発表会を 5 回、『日本語歴史コーパス』の講習会（チュートリアル）を 3 回開催した。

研究成果を、書籍 1 件、論文・ブックチャプター等 18 件、発表・講演 51 件、コーパス・データベース等 12 件として公開した（プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ）。うち 1 件が学会ベストポスター賞を受賞した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・『日本語歴史コーパス』「明治・大正編Ⅱ教科書」を整備し、10 月に公開した。また、「江戸時代編Ⅱ人

情本」「明治・大正編III 明治初期口語資料」「和歌集編（八代集）」を新規に、また「東洋学芸雑誌」を追加した「明治・大正編 雑誌」を3月に公開した。

- ・語誌データベースの試作版を構築し、3月に公開した。
- ・「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」(ONCOJ) のアップデートを行った。
- ・大英図書館所蔵 天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』の画像データをWeb上で公開し「室町時代編IIキリストン資料」と連携した。

3. 教育に関する計画

- ・PD フェローを1名、非常勤研究員を3名雇用しコーパス構築を進めるとともに、コーパスを活用した研究方法の指導を行った。また、大学院生5名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ学会参加費を補助するなど、若手研究者への支援を行った。このうち、片山久留美プロジェクト非常勤研究員らの研究発表が情報処理学会・人文科学とコンピュータシンポジウムにおいてベストポスター賞を受賞した（重出）。
- ・書籍『新しい古典・言語文化の授業—コーパスを活用した実践と研究—』(朝倉書店) を刊行した（公募型プロジェクトと共同）。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・『日本語歴史コーパス』を拡充し、コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて公開した。新規の申し込みユーザー数は3934、検索件数は約26万であった。
- ・中世文語（説話・隨筆）UniDicについてAI TOKYO LAB社に商用利用を許諾した。
- ・中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会（国語教育活用ワークショップ）を開催した。
- ・駒澤大学の公開講座「日本語の千年 一コーパスで解き明かすことばの生態一」においてプロジェクトメンバーで分担し全8回の下記の市民向け講義を行った。
- ・国立国語研究所主催の第13回 NINJAL フォーラム「日本語の変化を探る」の企画・発表を行った。

5. グローバル化に関する計画

- ・オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同でONCOJのアップデートを行い、共催したNINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウムで研究発表を行った。
- ・北京日本学研究センターにおいて11月20日にNINJALセミナー「国語研究所の言語資源」を開催し多数の参加を得た。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

| | |
|---|-------------|
| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
| (1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画 | |
| 1. プロジェクト研究成果を、書籍1件、論文・ブックチャプター等18件、発表・講演51件、コーパス・データベース等12件として公開した。(原則としてプロジェクトに対する謝辞を含むものに限った) | |
| 2. 古辞書データベース・言語地図データベース・言語記事データベースの整備を行ない、語誌データベースの試作版を構築・公開した。また、『語彙研究文献語別目録』の電子化を行った。 | |
| 3. 共催を含むシンポジウム計4回のほか、通時コーパス活用班のグループ研究発表会を6回開催した(下記参照)。 <ul style="list-style-type: none">30年6月9日 近世・近代グループ・文体・資料性グループ合同研究発表会、明治大学中野キャンパス30年8月21日 近世・近代グループ・中古・中世グループ合同研究会、国語研30年12月23日 通時コーパス 近世・近代グループ研究発表会、明治大学中野キャンパス31年2月2日 第3回 国語教育活用ワークショップ(国語教育グループ※領域指定型プロジェクト「古文教育に資する、コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究」と共催)、埼玉大学31年2月22日 語彙・意味グループ・文体・資料性グループ合同研究発表会、東洋大学31年3月8日 中古・中世グループ研究発表会、国語研 | |
| 4. オックスフォード大学東洋学部と共に30年9月8,9日に国際会議「NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウム」を開催し、87人(うち海外7人、大学院生14人)の参加があった(国語研)。 | |
| 5. プロジェクト全体の研究発表会として31年3月9日に「通時コーパス」シンポジウム2019を開催し、113人(うち大学院生21人)の参加があった。※会話コーパスプロジェクトとの共催 | |
| 6. コーパス関係の所内プロジェクトや科研費プロジェクトと合同で30年9月7日に合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」を国語研で開催した。発表6件、参加者は、83人(うち海外1人、大学院生15人)であった。 | |
| 7. 『日本語歴史コーパス』利用の講習会(チュートリアル)を3回行った。 <ul style="list-style-type: none">30年4月24日、九州大学30年8月22,23日、国語研31年2月2日、埼玉大学 このほか、他のプロジェクトとの共催で2件のシンポジウムを開催した。 <ul style="list-style-type: none">科研費基盤(B)「平安時代漢字字書総合データベースによる研究基盤の確立」(代表者:池田証壽)と合同で30年8月25,26日に国際シンポジウム「古辞書研究の射程」を開催した。発表6件、参加者は59人(うち海外7人、大学院生7人)であった。「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法プロジェクト」(文法研究班「とりたて表現」)と合同で31年1月13日にNINJALシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—文法史研究・通時的対照研究を中心に—」を開催した。発表7件、参加者は98人(うち海外2人、大学院生20人)であった。 このほか、通時コーパス活用班が、日本語学会2018年度春季大会ワークショップ「日本語史研究と | |

コーパス活用－その利点と注意点－」を開催した。

- ・上記の研究成果のうち、共同研究員の研究発表が情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウムにおいてベストポスター賞を受賞した。 [3 (2) 4.=14 ページ参照]

(2) 研究実施体制等に関する計画

1. 『日本語歴史コーパス』を活用した研究を実施するために、国内外の研究者 83 人をプロジェクト共同研究員として組織して研究活動を行った（国内 80 人、海外 4 人）。
2. 『日本語歴史コーパス』の構築を実施するためプロジェクト非常勤研究員 4 名を雇用し、関連するプロジェクト・科研費による 2 名とあわせ、合計 6 名でコーパス構築を行った。
3. 人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施した。
4. 「オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス」のアップデートとこれを活用した研究を推進し、NINJAL-Oxford 国際シンポジウムを開催するなど、英国オックスフォード大学との連携協定のもとで共同研究を推進した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

| | |
|---|----------------|
| 自己点検評価 | 計画を大きく上回って実施した |
| (1) 共同利用・共同研究に関する計画 | |
| 1. 『日本語歴史コーパス』「江戸時代編Ⅱ人情本」を整備し、3月 26 日に公開した。 | |
| 2. 『日本語歴史コーパス』「明治・大正編Ⅱ教科書」を整備し、10月 1 日に公開した。 | |
| 3. 語誌データベースの試作版を構築し、3月 29 日に公開した。 ・語誌データベースのうち「言語地図データベース」の画像データの追加公開を行った。 | |
| 4. 関連する科研費研究との協力により、『日本語歴史コーパス』「明治・大正編Ⅲ 明治初期口語資料」を構築し、3月 26 日に公開した。 また、「東洋学芸雑誌」をコーパスとして整備し、『日本語歴史コーパス』「明治・大正編 雑誌」に追加して 3 月 26 日に公開した。 ・『日本語歴史コーパス』利用した研究業績リストをアップデートして公開した。 | |
| 5. 『日本語歴史コーパス』「和歌集編（八代集）」を整備し、予定を繰り上げて 3 月 26 日に公開した。 また、『日本語歴史コーパス』「奈良時代編Ⅱ宣命」、「江戸時代編Ⅲ近松」、「明治・大正編Ⅳ文学作品」のデータを整備し、平成 31 年度以降に公開するための準備を行った。 | |
| 6. [1 (1) 7.=50 ページ参照]。 | |
| 7. [1 (1) 3.=50 ページ参照]。 | |
| (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画 | |
| 1. [1 (2) 4. 参照]。この共同研究の成果として、「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」(ONCOJ) のアップデートを行った。 | |
| 2. [1 (2) 3. 参照]。『日本語歴史コーパス』「江戸時代編Ⅱ人情本」の整備はこのプロジェクトとの共同で行った。 | |

3. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター (CODH) との共同で、近代語のコーパスの整備と活用に関する研究を実施した。

計画に含まれなかった共同利用関係の大きな成果として、次のものがある。

- ・大英図書館との覚書にもとづき、大英図書館所蔵 天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』の画像データをWeb上で公開した。また、『日本語歴史コーパス』『室町時代編IIキリストン資料』から当該ページ画像にリンクを行った。

なお、他の(2)プロジェクト合同の研究集会として下記の4回を開催した。[1 (1) =50ページ参照、再掲]

- ・科研費基盤 (B) 「平安時代漢字字書総合データベースによる研究基盤の確立」 (代表者: 池田証壽) と合同で国際シンポジウム「古辞書研究の射程」30年8月25, 26日
- ・コーパス関係の所内プロジェクトや科研費プロジェクトと合同で合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティ研究の可能性—」30年9月7日
- ・オックスフォード大学東洋学部と共に「NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウム」30年9月8, 9日・国語研。
- ・「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法プロジェクト」 (文法研究班 「とりたて表現」) と合同でNINJALシンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—文法史研究・通時的対照研究を中心に—」31年1月13日
- ・会話コーパスプロジェクトとの共催で「通時コーパス」シンポジウム2019, 31年3月9日

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

『日本語歴史コーパス』『和歌集編（八代集）』の公開を前倒しで行ったほか、大英図書館との協力にもとづき天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』の画像データを国語研ウェブページ上で公開し、コーパスとの連携を行った。これらの点から全体として計画を大きく上回る成果を得たと考えSと自己評価する。

3. 教育に関する計画

| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
|---|-------------|
| (1) 大学院等への教育協力に関する計画 | |
| 1. イタリア・パヴィア大学より、ファン・シャンシャン氏を特別共同利用研究員として受け入れた。 ・ <u>公募型プロジェクトと共同でコーパスを活用した国語・古典教育に関する書籍『新しい古典・言語文化の授業—コーパスを活用した実践と研究—』(朝倉書店) を刊行した。</u> | |
| (2) 人材育成に関する計画 | |
| 1. PDフェローを1名、非常勤研究員を3名雇用し、コーパス構築を進めるとともに、コーパスを活用した研究方法の指導を行った。 2. 大学院生5名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。 3. コーパス活用班研究会、「通時コーパス」シンポジウム等において、大學生に発表の機会を提供し旅 | |

費、英文校正等の補助を行った。

4. 若手研究者に対して学会発表（国際学会出張）等の経費の援助を行った。

その研究成果のうち、片山久留美プロジェクト非常勤研究員らの研究発表が情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウムにおいてベストポスター賞を受賞した。

5. [1 (1) 7.=50 ページ参照]

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
|--|-------------|
| <p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> | |
| <p>1. (株)小学館・(株)ネットアドバンスと連携して公開した『日本語歴史コーパス』とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクのメンテナンスを行った（SSL 対応）。</p> | |
| <p>2. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）との共同で、八木書店・日本近代文学館と覚書にもとづき、近代文献のOCRに関する研究のためのデータ利用環境を整備した。</p> | |
| <p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p> | |
| <p>1. 『日本語歴史コーパス』を拡充し、<u>コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて公開した。新規の申し込みユーザー数は3934人、検索件数は約26万件であった。</u></p> | |
| <p>2. 歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書整備をコーパス開発センターと協力して行い、インターネット上で無償にて公開した。</p> | |
| <p>このうち、<u>中世文語（説話・隨筆）UniDic</u>についてAI TOKYO LAB社より商用利用申し込みがあり許諾した。</p> | |
| <p>3. <u>中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会（国語教育活用ワークショップ）を開催した</u>（2月2日・埼玉大学）。</p> | |
| <p>・<u>駒澤大学の公開講座「日本語の千年 一コーパスで解き明かすことばの生態一」においてプロジェクトメンバーで分担し全8回の下記の市民向け講義を行った。</u></p> | |
| <p>変体仮名 10月6日、平仮名・片仮名 10月13日、コーパス 10月20日、上代・中古 10月27日、中世・近世 11月10日、近代 11月17日、訓点資料 11月24日、古辞書</p> | |
| <p>・<u>国立国語研究所主催の第13回 NINJAL フォーラム「日本語の変化を探る」（11月4日）の企画・発表を行った。</u></p> | |

5. グローバル化に関する計画

| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
|--|-------------|
| <p>(1) 国際的協業に関する計画</p> | |
| <p>1. オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で「<u>オックスフォードNINJAL 上代日本語コーパス</u>」のアップデートを行い、共催したNINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウムでこれを活用した研究発表を行った。</p> | |
| <p>2. 北京日本学研究センターにおいて11月20日にNINJALセミナー「国語研究所の言語資源」を開催した。</p> | |

北京の13大学より69名（うち大学院生51名）の参加があった。

3. 海外の研究者4人を共同研究員に加え、『日本語歴史コーパス』活用に関する共同研究を推進した。
・ハワイ大学ハミルトン図書館において日系移民の日本語教科書に関する資料調査・写真撮影を行った。

（2）国際的発信に関する計画

1. [1 (1) 4.=50ページ参照]。
2. 国際学会において『日本語歴史コーパス』に関する発表を行った。
3. 『日本語歴史コーパス』の新規公開データについて、英文Webページを作成し情報を発信した。

6. その他

該当する活動なし。

平成30年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

従来の日本語史研究が、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであったことの反省をふまえ、通時コーパスを構築し活用することによって、個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にし、さらにコーパス言語学で培われてきた新しい手法を導入して、従来行えなかった視点からの研究を展開するという、所期の目的に照らして、その根幹たる『日本語歴史コーパス』が、必要な整備も適宜かつ隨時加えながら各時代の諸資料について着々と公開されてきて、それが平成30年度においても、当初の計画を超えるかたちで継続していることは高く評価できる。

また、研究活動、成果の共同利用・共同研究、教育、社会連携・社会貢献、グローバル化の諸側面からみて、大きくとまではいかないものの、相応の計画以上の成果が上がっているところが認められる。

よって、「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」の平成30年度の評価は、「計画を上回って実施している」とした。なお、若干の留意点はあるかと思われる所以、次年度以降に対応頂きたい。

《評価項目》

1. 研究について

研究成果として、書籍1件、論文・ブックチャプター等18件、発表・講演51件、コーパス・データベース等12件が公開されている（プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ）ことは、旺盛な研究活動として評価できる。また、プロジェクト主催によるシンポジウム・研究発表会・講習会も活発に開催され、研究ならびにその発信が着実に行われていることが諒解できる。

また、本プロジェクトの特性として、『日本語歴史コーパス』の整備・公開も研究活動と不即不離の関係にあり、その成果としての、「明治・大正編Ⅱ教科書」の整備・公開、「江戸時代編Ⅱ人情本」「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」「和歌集編（八代集）」の新規追加、さらには、明治10年代雑誌の不足を補うべく「東洋学芸雑誌」を追加した「明治・大正編雑誌」の公開等は、いずれも盛んな研究活動の証左として評価できる。

なお、研究組織のなかで、現状の「語誌データベース班」の位置づけが、名称・構成も含め、若干分かりづらいうに思われる。古辞書や言語記事また言語地図の情報が、『日本語歴史コーパス』とどう関連づけられる見込なのかなどについてもっと説明があつてもよいように思われた。

2. 共同利用・共同研究について

英国オックスフォード大学との連携協定によるオックスフォード・NINJAL 上代語コーパス」のアップデート、人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織との連携による『日本語歴史コーパス』「江戸時代編Ⅱ人情本」の整備、情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）との共同による近代語のコーパスの整備と活用に関する研究等、共同利用・共同研究の実が着実に上がっていると評価できる。また、大英図書館との覚書にもとづき、大英図書館所蔵天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』ならびに「難語句解」の、装丁のレベルから確認しうる精緻なカラー画像データをWeb上で公開し、『日本語歴史コーパス』「室町時代編Ⅱキリストン資料」から当該ページ画像にリンクを行ったことは、計画以上の出来事として特筆に値する。

3. 教育について

若手のPDフェローを1名、非常勤研究員を3名雇用し、コーパス構築を進めるとともに、コーパスを活用した研究方法の指導を行ったこと、大学院生5名を共同研究員としてプロジェクトに参画させたこと、コーパス活用班研究会、「通時コーパス」シンポジウム等において大学院生に発表の機会を提供し旅費、英文校正等の補助を行ったこと、若手研究者に対して学会発表（国際学会出張）等の経費の援助を行ったこと等は、いずれも若手教育への取り組みとして評価できる。また、そのなかから片山久留美プロジェクト非常勤研究員らの研究発表が情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウムにおいてベストポスター賞を受賞したことは、計画以上の出来事として特筆すべきものである。

なお、海外の大学からの共同利用研究員の受け入れも計画通り行われていることが述べられているが、それが、具体的にどう先方機関の機能強化に資しているのかまで言及してほしい（受け入れ実績だけでは、2の「共同利用・共同研究」との差が明確にならない）。

4. 社会との連携及び社会貢献について

（株）小学館・（株）ネットアドバンスと連携して公開した『日本語歴史コーパス』とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクのメンテナンスを行ったこと、情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センターとの共同で、八木書店・日本近代文学館と、覚書に

もとづき近代文献のOCRに関する研究のためのデータ利用環境を整備したこと、『日本語歴史コーパス』を拡充し、コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償公開したこと、歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書整備をコーパス開発センターと協力して行いインターネット上で無償にて公開したこと、各種ワークショップ・市民講座・NINJAL フォーラムを企画・実行したことを鑑みれば、社会との連携及び社会貢献を盛んに行っていることが伺える。

また、書籍『新しい古典・言語文化の授業—コーパスを活用した実践と研究—』(朝倉書店)を刊行したことは、教育という面からの社会貢献と言ってもよいと思われる。

さらに、中世文語(説話・隨筆)UniDicがAI TOKYO LAB社から商用利用申請があつ(て許諾し)たことは、同UniDicの優秀さを証してあまりある。

5. グローバル化について

オックスフォード大学東洋学部日本語研究センターと共同で「オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス」のアップデートを行い、共催したNINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウムでこれを活用した研究発表を行ったこと、北京日本学研究センターにおいて11月20日にNINJALセミナー「国語研究所の言語資源」を開催し、北京の13大学より多数の参加者があったこと、海外の研究者4人を共同研究員に加え、『日本語歴史コーパス』活用に関する共同研究を推進したこと等は、国際的な協業の推進として評価でき、国際会議「NINJAL-Oxford 通時コーパス国際シンポジウム」を開催し、プロジェクトの研究成果を発信したこと、国際学会において『日本語歴史コーパス』に関する発表を行ったこと、『日本語歴史コーパス』の新規公開データについて、英文Webページを作成し情報を発信したこと等は、国際的な発信として評価できる。

なお、「グローバル化」というときには、発信内容がどれほど評価・受容されたかが問題となるかと思われる所以、どういった反響があったのかについてもコメントがほしい。

6. その他特記事項

特になし。

大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究

プロジェクトリーダー：小磯 花絵

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それにに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのために、（1）多様な日常場面の会話 200 時間を収めた大規模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班、及び、構築したコーパスを用いて、（2）語彙・文法・音声などに着目してレジスター的多様性を研究するレジスター班、（3）会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班、（4）語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の四つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では、日常の会話行動に関する調査にもとづき、自宅・職場・店舗・屋外での家族・友人・同僚・店員との会話など、多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり、世界的に見ても新しい試みである。また、従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話してもらうのではなく、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより、日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し、文字化した上で、形態論情報や統語情報、談話情報などのアノテーションを施し、一般に公開する。これにより、話し言葉に関する高度なコーパスベースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく、日本語教育や辞書編纂、音声情報処理、ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また、後世の人々が 21 世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では、現代の日常会話に加え、講演などの独話、発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、1950 年代以降の話し言葉など、多様なデータを対象に、高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み、その経年変化の実態を、実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして、昔の話し言葉のデータや BCCWJ の小説などの会話文、国会会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは、日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって、話し言葉コーパスの共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織

本プロジェクトの実施にあたって図に示す 4 つの班を組織して研究を推進する。

【コーパス構築班】

多様な場面の日常会話を収めた『日本語日常会話コーパス』を構築し、次の通り公開する。

平成 30 年度：50 時間の会話の映像・音声・転記・短単位データをモニター公開（31, 32 年度も継続して公開）
平成 33 年度：200 時間分の会話の映像・音声・転記・短単位データに加え、コアデータ 20 時間には人手で各種アノテーション（長単位・文節・発話単位・係り受け・対話行為など）を付与して本公開

【3つの研究班】

各班の研究に必要となるコーパス・データベース・アノテーションを随時整備し、各班のテーマの研究を推進する。

構築したコーパス・データベースについては以下の通り公開する。

平成 28 年度 :『名大会話コーパス』中納言版・

ひまわり版を一般公開（レジスター班）

平成 29 年度 :『国会会議録』ひまわり版を一般公開（経年変化班）

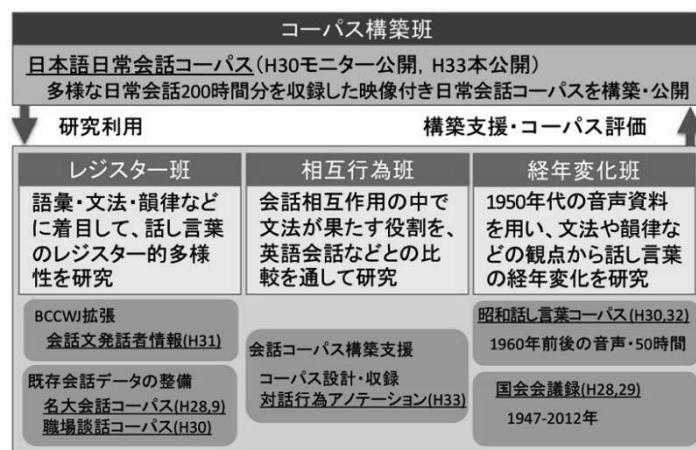
平成 30 年度 :『現日研・職場談話コーパス』中納言版を一般公開

平成 30 年度 :『昭和話し言葉コーパス』独話 25 時間ひまわり版をモニター公開（経年変化班）

平成 31 年度 : BCCWJ 中納言版 会話文発話者情報の拡張（レジスター班）

平成 32 年度 :『昭和話し言葉コーパス』50 時間ひまわり版を本公開（経年変化班）

各班の研究成果をとりまとめて論文集を編纂し、平成 33 年度末までに 1 冊以上刊行する。



● 年次計画

| | | |
|-------|-----------|--|
| 28 年度 | 会話コーパス整備 | 会話収録・データ整備の開始 アノテーション仕様策定・自動付与システム整備 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成開始 [国会会議検索システム] 構築・公開 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション仕様策定・付与開始 [名大会話コーパス] 形態論情報付与 研究 |
| | その他のデータ整備 | 班ごとに研究会合を持ち研究を始動 シンポジウム 1 回, 班合同研究発表会 1 回開催 コーパス講習会 2 回開催 『名大会話コーパス』一般公開 (形態論情報付きテキスト検索版) |
| | 成果発表 | |
| | 若手育成 | |
| | 成果物公開 | |
| | | |
| 29 年度 | 会話コーパス整備 | 会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正開始 プロジェクト内部のデータ公開 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成継続 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション継続 |
| | その他のデータ整備 | 既存データを中心とする予備研究を推進 シンポジウム 1 回, 班合同公開研究発表会 1 回開催 コーパス講習会 2 回開催 |
| | 研究 | |
| | 成果発表 | |
| | 若手育成 | |
| | | |

| | | |
|------|----------|--|
| 30年度 | 会話コーパス整備 | 会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 [昭和話し言葉コーパス] アノテーション開始, モニター公開準備 [BCCWJ 発話者情報] 検索システム整備開始 |
| | 他のデータ整備 | 既存データにプロジェクト整備データを加えて研究を展開 |
| | 研究 | シンポジウム・ワークショップ 3回開催 |
| | 成果発表 | フォーラム（日本語の変化を探る）1回開催 |
| | 若手育成 | コーパス講習会 2回開催 |
| | 成果物公開 | <u>『日本語日常会話コーパス』50時間モニター公開</u> <u>『昭和話し言葉コーパス』25時間モニター公開（うち許諾が取れたもの）</u> <u>『現日研・職場談話コーパス』一般公開</u> |
| 31年度 | 会話コーパス整備 | 会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 [昭和話し言葉コーパス] アノテーション継続 既存データにモニター公開データを加えて研究を開始・コーパス評価 |
| | 他のデータ整備 | シンポジウム 3回開催 |
| | 研究 | コーパス講習会 2回開催 |
| | 成果発表 | <u>『BCCWJ 発話者情報』一般公開（中納言版）</u> |
| | 若手育成 | <u>『日本語日常会話コーパス』50時間モニター公開（継続）</u> |
| | 成果物公開 | <u>『昭和話し言葉コーパス』モニター公開（継続）</u> |
| 32年度 | 会話コーパス整備 | 会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 既存データにモニター公開データを加えて研究を推進・コーパス評価 |
| | 研究 | シンポジウム 2回開催 |
| | 成果発表 | コーパス講習会 2回開催 |
| | 若手育成 | <u>『昭和話し言葉コーパス』本公開</u> |
| | 成果物公開 | <u>『日本語日常会話コーパス』50時間モニター公開（継続）</u> |
| | | |
| 33年度 | 会話コーパス整備 | 公開準備（データ統合・検証, 個人情報処理など） |
| | 研究 | 研究成果のとりまとめ |
| | 成果発表 | シンポジウム 1回開催 |
| | 成果物公開 | <u>『日本語日常会話コーパス』本公開</u> 論文集の刊行 1冊以上 |

II. 30年度活動概要

30年度予算総額 28,500千円

30年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

- ・構築中の『日本語日常会話コーパス』を昨年度, 本プロジェクトおよび領域指定型プロジェクト「創発

- 「参与」のメンバーに限定公開し、各班で整備を進めた他のコーパスと合わせて研究を推進した。その成果報告としてシンポジウム「日常会話コーパス」IVを31年3月4日に国語研講堂で開催した。
- ・『日本語日常会話コーパス』の成果を国際的に発信し国内外の研究者との連携を深めるために、言語資源に関する国際会議 LREC にて国際ワークショップ「Language and Body in Real Life」を30年5月7日に開催した。Multimodal Corpora2018 と共同開催することで日常会話のマルチモーダル分析についての議論も深めた。
 - ・話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウム「EIL2019 & LCI-7 Joint International Symposium」を創発参与プロジェクトと合同で31年3月11日に国語研講堂で開催した。Keevallik 氏による招待講演も行い、相互行為における言語と身体の関係について議論を深めた。
 - ・『日本語日常会話コーパス』モニター公開版を対象にデータの仕様や特徴を報告書としてとりまとめ、ホームページで公開した。
 - ・以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、論文8件、報告書1冊、発表・講演62件、データベース等6件（うち3件はプロジェクト内限定）として公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・構築中の『日本語日常会話コーパス』のうち50時間の会話を対象に、30年12月4日にモニター公開を開始した。本コーパスは映像・音声データを含め多角的に分析できる世界でも類を見ないコーパスであり、言語学や日本語学に留まらず、日本語教育や国語教育、社会学、認知科学、情報工学、人工知能、産業界など、幅広い分野の研究者からの利用申請があった。
- ・1950年代から1970年代にかけて国立国語研究所で録音された音声資料『昭和話し言葉コーパス』のうち、当時の所員による講演を中心とする17時間の独話を対象に、30年3月29日にモニター公開を開始した。
- ・『女性のことば・男性のことば-職場編-』（ひつじ書房）のデータをコーパスとして再整備し、出版社の許諾を得た上で、『現日研・職場談話コーパス』としてオンライン検索システム「中納言」にて2018年8月20日に一般公開した。
- ・コーパス関係のプロジェクトや科研と合同で、30年9月7日に合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション—モダリティー」を国語研で開催し、プロジェクト間の連携を深めた。
- ・「通時コーパス」プロジェクトが31年3月9日に開催した「通時コーパス」シンポジウム2019において本プロジェクトは共催として関わり、共同でテーマセッション『歴史的音源資料と日本語研究』を企画して連携を深めた。

3. 教育に関する計画

- ・コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象に、第5回コーパス利用講習会（検索システム「ひまわり」「中納言」の2コース）を2018年9月3日に、第6回コーパス利用講習会（検索システム「ひまわり」）を2018年3月3日に開催した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのホームページで公開した。
- ・プロジェクトの共同研究員が、お茶の水女子大学の演習において、『日本語日常会話コーパス』プロジェクト内限定公開データを用いて日常生活の話し言葉を対象とする演習を実施した。コーパス構築班は、

全文検索システムの提供やデータの活用方法のアドバイスなどの支援を行った

- ・共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日本語日常会話コーパス』を提供し、コーパスを活用した研究を支援することによって、博士論文1本（千葉大学）、修士論文2本（アルバータ大学・早稲田大学）、卒業論文3本（お茶の水女子大学）の成果に結びついた。
- ・共同研究員として大学院生5名をプロジェクトに参画させ、コーパスに基づく定量的分析方法を教授するなど大学院生の研究を支援した。また大学院生を含む若手の非常勤研究員を対象に、会話データを優先的に研究利用できるようにすると同時に、データベース設計やSQL、Rを用いた統計分析など、コーパスの活用方法について実践的に学ぶ勉強会を開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・プロジェクトで整備・公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『名大会話コーパス』、『現日研究・職場談話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に公開し、合計で7233件の新規利用申請があった。
- ・「通時コーパス」プロジェクトと共同で、日本語の変化をテーマとする一般向けのフォーラム「日本語の変化を探る」を30年11月4日に一橋講堂で開催した。

5. グローバル化に関する計画

- ・『日常会話コーパス』の成果を国際的に発信し国内外の研究者との連携を深めるために、言語資源に関する国際会議LRECにて国際ワークショップ‘Language and Body in Real Life’を開催した。
- ・話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウム‘EIL2019 & LCI-7 Joint International Symposium’を創発参与プロジェクトと合同で31年3月11日に国語研講堂で開催した。Keevallik氏による招待講演も行い、会話相互行為における言語と身体の関係について議論を深めた。
- ・海外在住の研究者1名をプロジェクト共同研究員として加え、『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションを通して、コーパスについて評価してもらった。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
|--|------------|
| (1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画 | |
| [公開研究発表会・講演会、国際シンポジウム] | |
| 1. 構築中の『日本語日常会話コーパス』を昨年度、本プロジェクトおよび領域指定型プロジェクト「創発参与」のメンバーに限定公開し、各班で整備を進めた他のコーパスと合わせて研究を推進した。その成果報告として、 <u>シンポジウム「日常会話コーパス」IV</u> を「創発参与」プロジェクトと合同で31年3月4日に国語研講堂で開催した。口頭発表5件、ポスター発表22件、デモンストレーション1件、参加者 | |

は 155 名（うち学生 18 名）であった。

2. 話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウム「EIL2019 & LCI-7 Joint International Symposium」を、創発参与プロジェクトと合同で 31 年 3 月 11 日に国語研講堂で開催した。Kelevallik 氏による招待講演も行い、会話相互行為における言語と身体の関係について議論を深めた。参加者は 46 名（うち学生 7 名）であった。
3. 『日本語日常会話コーパス』の成果を国際的に発信し国内外の研究者との連携を深めるために、言語資源に関する国際会議 LREC で国際ワークショップ「Language and Body in Real Life」を 30 年 5 月 7 日に開催した。Multimodal Corpora2018 と共同開催することで日常会話のマルチモーダル分析についての議論も深めた。プロジェクトからはリーダーの小磯を含め 5 名が発表した。参加者は 35 名（海外機関所属者 20 名、学生 3 名）であった。
4. 『現日研・職場談話コーパス』中納言版の一般公開に合わせ、同コーパス公開記念シンポジウムを 30 年 9 月 3 日に国語研講堂で開催した。構築中の『日本語日常会話コーパス』で拡充予定の職場会話の収録法や設計などについて、職場データの構築者らと議論した。参加者は 64 名（海外機関所属者 1 名、学生 17 名）であった。
5. 30 年 9 月 7 日にコーパス合同シンポジウムを開催した（詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照）。
6. 話し言葉の経年変化研究について議論を深めるために、招待講演者 2 名を迎える、公開研究会を平成 30 年 11 月 24 日に国語研多目的室で開催した。参加者は 20 名（学生 1 名）であった。

[フィールド調査]

7. 調査協力者 7 名を対象とする会話の収録調査を実施し、個人密着法による収録調査（合計 40 名、合計約 590 時間、コーパス格納データ 180 時間相当）を終えた。職場会話など不足する場面を検討し、平成 31 年度の調査計画（残り 20 時間分）を立てた。

[研究成果の公表]

8. 構築中の『日本語日常会話コーパス』『昭和話し言葉コーパス』の一部をモニター公開、『現日研・職場談話コーパス』中納言版を一般公開した（詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照）。
9. 『日本語日常会話コーパス』モニター公開版を対象にデータの仕様や特徴を報告書としてとりまとめ、ホームページで公開した。
10. 以上の研究成果は、論文 8 件、報告書 1 冊、発表・講演 62 件、データベース等 6 件（うち 3 件はプロジェクト内限定）として公開した。
11. 『日本語日常会話コーパス』は、多様な日常会話を、映像まで含め収録・公開するというものであり、世界的に見ても新しい取り組みである。コーパスの設計や法的・倫理的対応方針などについて国際会議 LREC でも注目された。

（2）研究実施体制等に関する計画

1. コーパスに基づく話し言葉研究を推進するために、国内外の研究者 45 名をプロジェクト共同研究員として組織した。今年度は、日本語学（音声・語彙・文法・談話）、自然言語処理、音声工学の分野の研究者の拡充を図った。
2. プロジェクトの共同研究員が、お茶の水女子大学の現代日本語学演習において、『日本語日常会話コーパス』プロジェクト内限定公開データを用いて日常生活の話し言葉を対象とする演習を実施した。コー

パス構築班は、全文検索システム・テスト版の提供やコーパス活用方法のアドバイスなどの支援を行つた。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

| | |
|--|----------------|
| 自己点検評価 | 計画を大きく上回って実施した |
| (1) 共同利用・共同研究に関する計画 | |
| [データベース等の構築・公開] | |
| 1. <u>『日本語日常会話コーパス』</u> のうち50時間の会話を対象に、30年12月4日にモニター公開を開始した。形態論情報での検索が可能なオンライン検索システム「中納言」での公開（検索システムはコーパス開発センターと共同で開発）と、映像音声データを含むハードディスクでの公開（HDD版）の2つを採用した。中納言版（完全無償）については1221件の新規契約が、HDD版（実費負担）については170件の新規契約申請があった。 | |
| 2. 『日本語日常会話コーパス』についてはこのほか、本公開の準備として、データ収録・転記・アノテーション作業を進めた。アノテーションとしては、これまで進めてきた短単位・談話行為（ISO24617-2日本語拡張版）に加え、長単位・文節に着手した。また係り受け・述語項構造については、コーパス開発センターと共同で方針を検討した。 | |
| 3. 1950年代から1970年代にかけて国立国語研究所で録音された音声資料『昭和話し言葉コーパス』のうち、当時の所員による講演などを中心とする17時間の独話を対象に、30年3月29日にモニター公開を開始した。また会話25時間の整備を継続し、本公開の準備を進めた。 | |
| 4. BCCWJにおける会話文（2557ファイル分）に対する発話者情報（話者名・性別・年代）の付与作業を終え、プロジェクトメンバーに限定して31年3月25日に公開した。また31年度の一般公開に向け、コーパス開発センターと共同で検索システム「中納言」での公開方法について検討した。 | |
| 5. 『女性のことば・男性のことば-職場編-』（ひつじ書房）のデータをコーパスとして再整備し、出版社の許諾を得た上で、『現日研・職場談話コーパス』としてオンライン検索システム「中納言」にて2018年8月20日に一般公開した（検索システムはコーパス開発センターと共同で開発）。280件の新規契約があった。 | |
| [データベース等に関する講習会] | |
| 6. プロジェクトで整備公開したコーパスを対象とする講習会として、第5回コーパス利用講習会（検索システム「ひまわり」「中納言」の2コース）を2018年9月3日に、第6回コーパス利用講習会（検索システム「ひまわり」）を2018年3月3日に開催した、それぞれ30名、24名が参加した。また講習会で用いた資料をプロジェクトのホームページで公開した。 | |
| 7. 『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の利用講習会を3月3日に開催し、24名が参加した。 | |
| [データベース等を使った研究成果] | |
| 8. プロジェクトで整備した上記コーパスを用いた研究発表を以下の通り実施した（研究成果の一部を抜粋）。[1] LREC2018: 6件、[2] Symposium 'Annotation of speech corpora': 1件、[3] 職場談話コーパス公開記念シンポジウム: 4件、[4] 言語資源活用ワークショップ 8件、[6] NINJALシンポジウム: 3件、[5] シンポジウム「日常会話コーパス」IV: 29件、ほか音響学会・計量国語学会・文法学会・言 | |

語処理学会などで発表。

9. 30年12月に公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版は、日常生活における言葉の特徴や言語行動を、映像・音声データを含め多角的に分析できる世界でも類を見ないコーパスであり、言語学や日本語学に留まらず、日本語教育や国語教育、社会学、認知科学、情報工学、人工知能、産業界など、幅広い分野の研究者からの利用申請があった。
10. 既公開の『名大会話コーパス』は、会話研究・日本語教育研究において広く利用されており、今年度、「中納言」版は3578件の新規契約が、ひまわりパッケージ版は254件の新規利用があった。平成28年4月のプロジェクト開始時点では、「中納言」で検索可能な日本語母語話者の会話コーパスは存在しなかつたが、今年度公開した『職場談話コーパス』や『日本語日常会話コーパス』モニター版とあわせ、コーパスに基づく会話研究の基盤が整備された。

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

1. プロジェクト間の連携を深め、コーパス構築・コーパス研究の可能性を広げるために、「方言コーパス」、「通時コーパス」、「学習者コーパス」、「コーパスアノテーション」など、コーパス構築に関する複数のプロジェクトと合同でシンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション-モダリティ-」を30年9月7日に国語研講堂で開催した。参加者は83名（うち学生15名、国外機関所属者1名）であった。「通時コーパス」プロジェクトが31年3月9日に開催した「通時コーパスシンポジウム2019」において、本プロジェクトは共催として関わり、共同でテーマセッション『歴史的音源資料と日本語研究』を企画してプロジェクト間の連携を深めた。

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由

平成28年度の計画段階では、『日本語日常会話コーパス』の音声・映像データのモニター公開は平成31年度に予定していたが（「平成28年度実施計画・年次計画（ロードマップ）」参照）、関連分野の研究者からの公開への強い要望を受け、平成28～30年度において予定を上回るペースでコーパス構築を進めた結果、1年前倒しで音声・映像データを含めて公開することができた。

3. 教育に関する計画

| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
|---|------------|
| (1) 大学院等への教育協力に関する計画 | |
| (2) 人材育成に関する計画 | |
| [プロジェクト非常勤研究員の雇用] | |
| 1. 若手研究者を育成するために、非常勤研究員（PD フェロー）を1名、プロジェクト非常勤研究員を5名雇用した。 | |
| [大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加等・発表機会の提供・研究費の支援] | |
| 2. 共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日本語日常会話コーパス』を提供し、コーパスを活用した研究を支援することによって、博士論文1本（千葉大学）、修士論文2本（アルバータ大学・早稲田大 | |

学), 卒業論文3本(お茶の水女子大学)の成果に結びついた。

3. 大学院生5名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ, 会話データを優先的に研究利用できるようになると同時に, データベース設計やSQL、Rによる統計分析などコーパスの活用方法について実践的に学ぶ勉強会を開催することによって, 若手研究者の研究活動を支援した。
4. 若手の非常勤研究員および大学院生の共同研究員6名に対し, シンポジウム「日常会話コーパス」IV(31年3月4日)で発表の機会を提供した。
5. 若手の非常勤研究員1名に対し, 国際会議での発表の経費を援助した。

[講習会]

6. 若手研究者を主対象に, コーパス利用に関する講習会を9月3日と3月3日に開催した。(参加者数など詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照)
7. 学生などの初学者を対象に, コーパスなどのデジタル言語資源の研究活用方法を学ぶ「言語研究のためのデジタル研究入門ワークショップ」に共催として関わり, 話し言葉コーパスの活用に関わる方法論について講義した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

| | |
|--|------------|
| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
| <p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <p>特になし。</p> | |
| <p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p> <p>[一般向け講義・講演会等]</p> | |
| <ol style="list-style-type: none">1. 「通時コーパス」プロジェクトと共に, 日本語の変化をテーマとする<u>一般向けのフォーラム「日本語の変化を探る」</u>を30年11月4日に一橋講堂で開催した。本プロジェクトで構築中の『昭和話し言葉コーパス』などを活用し, 話し言葉の変化をテーマに講演した。参加者は357名であった。 | |
| <p>[インターネット等を通した研究成果の社会への発信]</p> <ol style="list-style-type: none">2. プロジェクトで整備・公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版, 『名大会話コーパス』, 『現日研・職場談話コーパス』, 『国会会議録』を, インターネットを通して一般に発信し, 合計で7233件の新規利用申請があった。(詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画」を参照)。3. コーパス利用講習会の資料をプロジェクトのホームページを通じて一般に発信した。 | |

5. グローバル化に関する計画

| | |
|---|------------|
| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
| <p>(1) 国際的協業に関する計画</p> <p>[海外の研究者の受入]</p> | |
| <ol style="list-style-type: none">1. 海外在住の研究者1名をプロジェクト共同研究員として加え, 日常会話コーパスを用いたデータセッションを通して, コーパスについて評価してもらった。 | |
| <p>(2) 国際的発信に関する計画</p> | |

[国際シンポジウムの開催]

1. 『日本語日常会話コーパス』の成果を国際的に発信し国内外の研究者との連携を深めるために、言語資源に関する国際会議 LREC にて国際ワークショップを開催した（詳細は「1. 研究に関する計画」を参照）。
2. 話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウム「EIL2019 & LCI-7 Joint International Symposium」を開催し、会話相互行為における言語と身体の関係について議論を深めた（詳細は「1. 研究に関する計画」を参照）。

6. その他

該当する活動なし。

平成30年度の評価

《評価結果》

計画どおり実施している

研究については、コーパスの開発と公開を予定通り進め、国内向けおよび国際的な学術集会をそれぞれ複数開催して成果発信や研究交流に務めている。特に『日本語日常会話コーパス』は世界的にも新規性が高い内容であり、一般の人々がデータの収録や承諾書の収集をすることによって自然な日常会話を収録するという方法に関しても注目に値する。

共同利用・共同研究については、『日本語日常会話コーパス』と『昭和話し言葉コーパス』を各々部分的にモニター公開し、BCCWJ 会話文発話者情報の一般公開の準備を進め、『現日研・職場談話コーパス』を一般公開した。また、これらを含むコーパスの利用に関する講習会や、コーパス構築に関わる他のプロジェクトと合同の研究集会を開催した。

教育については、若手研究者の雇用と学生のプロジェクトへの参画、彼らへの発表の機会の提供、チュートリアル等の開催、コーパスの提供などを引き続き計画通り行なっている。

社会との連携及び社会貢献については、日本語の変化に関する一般向けのフォーラムを開催し、本プロジェクトの知見に基づいて講演した。『日本語日常会話コーパス』等のコーパスやコーパス利用講習会の資料をホームページで一般公開している。

グローバル化については、海外在住の研究者によるコーパスの評価、『日本語日常会話コーパス』に係る成果発信と研究連携のために国際ワークショップおよび話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウムを開いた。

以上すべての項目にわたってプロジェクトが計画通り実施されていると考えられる。今後のコーパスの開発・改良のため、特に利用者の多いコーパスに関してその利用状況を調査し利用者のニーズや評価を分析してみると良いのではないか。

報告書の中で1~5に関する記述が重複していてややわかりにくい。もちろんコーパスやデータベースにはいろいろな側面があるが、たとえば研究に関してはデータの種類や集め方やアノテーシ

ヨンの内容に重点を置き、共同利用・共同研究に関しては公開や講習会に重点を置いて記述するなど、1~5の区別をわかりやすく書いていただけないと有難い。

《評価項目》

1. 研究について

コーパスの開発を予定通り進め、コーパス3件とデータベース3件を公開するとともに、国内シンポジウム3回、国内研究会1回、国際シンポジウムと国際ワークショップ各1回を開催して、開発したコーパスを用いた研究成果の発信や関連テーマに関する研究交流に務めている。報告書のWeb公開や、論文、書籍、学会発表等でも研究成果を積極的に発信している。

特に『日本語日常会話コーパス』は映像も含む日常会話のデータであるという点で世界的にも新しく、コーパスの設計や法的・倫理的対応方針も注目されており、また利用希望も多く寄せられている。報告書の中では明示的に触れられていないが、研究者が現場に介在せず一般の人々がデータの収録や承諾書の収集をすることによって自然な日常会話を収録するという方法も良好に実践されている。

2. 共同利用・共同研究について

『日本語日常会話コーパス』を「中納言」およびハードディスクによって部分的にモニター公開し、多くの新規利用者を得た。また、『昭和話し言葉コーパス』の一部のモニター公開を開始した。BCCWJへのアノテーションをプロジェクト内で限定公開し、次年度の一般公開に向けて準備を進めている。『女性のことば・男性のことば 職場編』のデータを『現日研・職場談話コーパス』として再整備し、「中納言」で一般公開した。これらを含むコーパスの利用に関して3回の講習会を開催し、その資料をWebで公開した。

並行して、コーパス構築・コーパス研究の可能性を広げるため、コーパス構築に関わる他の複数のプロジェクトと合同のシンポジウムを開催した。また、「通時コーパスシンポジウム2019」を「通時コーパス」プロジェクトと共に開催して連携を深めた。

3. 教育について

ポスドクを含む若手研究員の雇用や国際会議での発表費用の援助などの経済的支援、『日本語日常会話コーパス』等のデータの活用法を実践的に学べる場や研究発表の機会を多く提供している。また、初学者がデジタル言語資源の研究利用について学ぶためのワークショップを共催し、話し言葉コーパスの活用法について講義するなど、計画通り若手研究者の育成に務めていると言える。

4. 社会との連携及び社会貢献について

「通時コーパス」プロジェクトと共同で日本語の変化に関する一般向けのフォーラムを開催し、本プロジェクトで構築中のコーパスなどの知見に基づいて講演した。『日本語日常会話コーパス』モニター版、『名大会話コーパス』、『現日研・職場談話コーパス』、『国会会議録』をインターネットにより一般に公開し、多くの新規利用申請を受けた。他にも、コーパス利用講習会の資料もホー

ムページで一般公開するなど、広く社会に向けて研究成果を発信していると認められる。産業界や地域社会との連携の可能性もあるかも知れない。

5. グローバル化について

海外在住の研究者をプロジェクト共同研究員としてコーパスを評価してもらっている。国際学術集会としては、『日本語日常会話コーパス』に係る成果発信と研究連携のために国際ワークショップを開催し、また話し言葉の相互行為に焦点を当てた国際シンポジウムを開いた。

6. その他特記事項

特になし。

日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明

プロジェクトリーダー：石黒 圭

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。

本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとにして学習者の会話能力を解明する。この研究は、自然な日常会話をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとにして異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視することに特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織

| 学習者のコミュニケーション | 28年度 | 29年度 | 30年度 | 31年度 | 32年度 | 33年度 |
|----------------------------------|--|---------------------------------|--|---------------------------------------|---|---------------------------------------|
| 日本語使用班 自然会話コーパス (宇佐美班) | 294会話を公開 | 333会話を所内先行公開 | 30年:13会話(26人分), 31年:22会話(44人分) 32年:23会話(46人分), 33年:22会話(44人分) | データ拡充 | 本格公開 400会話 (800人分) | |
| 日本語学習者 コーパス (野山班・石黒班) | 「多言語母語の日本語学習者 横断コーパス(I-JAS)」データ公開 第1次(28年)225名分 第2次(29年)225名分 | 「I-JAS」 データ公開 第3次 210名分 | 「I-JAS」データ 公開(完了) 第4次 215名分 第5次 175名分 | 「I-JAS」 既公開データの確認・修正 コーパスの維持・運用 | 「B-JAS」データ収集 | 「B-JAS」データ公開 |
| 日本語理解班 読解・聴解コーパス (野田班・石黒班) | 「日本語非母語話 者の読解コーパス」 「聴解コーパス」 「日本語学習者の 文章理解過程デー タベース」 | データ公開 45件 | データ公開 (30年度:40件, 31年度:20件, 32年度:10件) | データ公開 (31年度:20件, 32年度:30件) | データ公開 | 本格公開 |
| リソース開発班 基本動詞辞典 (パルデシ班) | | | 毎年 15 見出しをウェブ公開 | | | |
| ウェブ版教材の 開発(野田班) | | 教材公開 (読解・聴解 計 28 件) | 毎年、5 件(読解、聴解の合計)の教材を公開 | | 本格公開 | |
| 国際シンポジウム等 | | INJAL 国際シ ンポジウム(IC PLJ)開催 | | | 国際シンポジ ウム開催 | |
| 日本語使用班 (宇佐美班) | 講習会を年 3 回以上開催 シンポジウムを年 2 回開催 | | 毎年、講習会を 2 回、シンポジウムを 2 回開催 | | | |
| 日本語使用班 (野山班・石黒班) | | | ワークショップを年 1 回以上開催 | | | |
| 日本語理解班 (野田班・石黒班) | NINJAL チュート リアル開催 | | 毎年、シンポジウムを開催 | | | |
| 基本動詞辞典 (パルデシ班) | | | 毎年 1 回公開研究発表会を開催 | | | |
| 刊行・出版 | | 学習者の作文 能力に関する 論文集刊行 | 学習者の会話能力 に関する論文集、 読解活動に関する 教師指導書刊行 | 学習者の読解過 程、基本動 詞辞典に関す る論文集刊行 | 学習者の読解過 程に関する論文 集、読解教材開 発に関する研究 書刊行 | 学習者の日本 語習得過程、聴 解過程に関する 論文集刊行 |

平成 28 年度

- ①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築に着手する。
- ②多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築に着手する。
- ③日本語学習者の読解コーパスの構築に着手する。
- ④オンライン日本語基本動詞辞典の作成に着手する。
- ⑤ウェブ版読解教材の開発に着手する。

平成 29 年度

- ①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ②多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ③日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ④オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、その一部を試験公開する。
- ⑤ウェブ版読解教材の開発を継続する。ウェブ版聴解教材の開発に着手する。
- ⑥NINJAL 国際シンポジウム (ICPLJ) を開催する。

平成 30 年度

- ①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ②多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ③日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ④オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ⑤ウェブ版読解教材の開発を継続し、サンプルを試験公開する。ウェブ版聴解教材の開発を継続する。
- ⑥学習者の会話能力に関する論文集を刊行する。
- ⑦学習者の読解活動に関する教師指導書を刊行する。

平成 31 年度

- ①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ②多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ③日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ④オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ⑤ウェブ版読解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。ウェブ版聴解教材のサンプルを試験公開する。
- ⑥学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。

平成 32 年度

- ①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ②多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ③日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ④オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ⑤ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ⑥学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。
- ⑦読解教材開発に関する研究書を刊行する。
- ⑧日本語学習者のコミュニケーションに関する国際シンポジウムを開催する。

平成 33 年度

- ①母語話者と学習者の自然会話コーパスを本格公開する。
- ②多言語を母語とする日本語学習者コーパスを本格公開する。
- ③日本語学習者の読解コーパスを本格公開する。
- ④オンライン日本語基本動詞辞典を本格公開する。
- ⑤ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材を本格公開する。
- ⑥学習者の日本語習得過程に関する論文集を刊行する。
- ⑦学習者の聴解過程に関する論文集を刊行する。

II. 30 年度活動概要

30 年度予算総額 28,500 千円

30 年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

プロジェクトを推進するために、国内外の日本語教育研究者 149 名で 3 つのサブプロジェクトによる共同研究体制を組織した。また、プロジェクトの所内メンバーが 4 冊の研究論文集の編集を行い、1 冊の研究論文集を刊行した。

- ・日本語学習者の読解活動を分析した論文集『どうすれば協働学習がうまくいくか 失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』(石黒圭編、ココ出版)を刊行した(2018 年 6 月刊行)。
- ・プロジェクトの共同研究員の研究成果も含め、プロジェクト全体で論文 21 件(ブックチャプター含む)、図書 1 冊、データベース 7 件、学術発表・学術講演 72 件、一般向け講演・セミナー 12 件、講習・チュートリアル 13 件を公開・刊行した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

日本語使用班は、2 件のコーパス構築を前年度から継続して行い、6 件の講習会と 4 件のシンポジウムを行った。

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスである『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声)所内先行リリース版(2017 年度)』にさらに整備、修正を行い、『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声)2018 年版』333 会話(延べ 666 人のデータ)を一般公開した。また、シンポジウムを 2 件、BTSJ の活用方法講習会を 3 回(参加者合計 77 名、うち国外機関所属者 6 名、学生 33 名)行った。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスである『I-JAS (International corpus of Japanese As a Second language) 多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の構築を前年度から継続して行い、2018 年 5 月 21 日に、第三次公開として 210 名分の発話データを公開した。また、2018 年 4 月 30 日にシンポジウム「日本語教育は学習者コーパスで変わる—横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴—」を開催し(参加者 138 名、うち国外機関所属者 6 名、学生 51 名)、I-JAS と B-JAS のデータを用いた講演と研究発表を行った。さらに、2018 年 12 月 22 日、「第四回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウム—第二言語習得における語彙の役割—」を開催し、シンポジウムには 110 名の

参加者（うち、国外機関所属者 5 名、学生 33 名）を得た。ワークショップ（講習会）はこの回を含め、計 3 回行った。

- ・連携協定を結んでいる北京日本語学研究センターと共同で、日本語習得過程に関するデータ収集を春と秋に行った（国内 1 回、海外 2 回）。

日本語理解班は、2 件のコーパス構築を前年度から継続して行った。

- ・日本語学習者の読解コーパスとして、『日本語非母語話者の読解コーパス』と『日本語学習者の文章理解過程データベース』を前年度から継続して構築した。構築のためのデータ収集を行うとともに、前者は 30 件のコーパスデータ、後者は 60 名分のコーパスデータを公開した。

リソース開発班では、3 件の辞典・教材の作成を継続し、データの追加公開を行った。また、シンポジウム 1 件を開催、論文集 1 冊の編集を進めた。

- ・オンライン日本語基本動詞ハンドブックの作成を継続し、2019 年 3 月に 15 見出しを追加する予定。また、2018 年 12 月に 17 見出しの音声コンテンツ、27 見出しにミニアニメコンテンツを追加した。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、「ホテル検索サイト」シリーズ 5 レッスン、「旅行のパンフレット」シリーズ 1 レッスン、「通商白書」シリーズ 3 レッスン、「人的資源関連の研究論文」シリーズ 4 レッスンの教材合計 13 レッスンの教材を公開した。
- ・ウェブ版聴解教材の開発を継続した。

連携協定を結んでいる北京日本語学研究センター・国際交流基金日本語国際センターともさらに共同研究を進めた。上述の、北京日本語学研究センターと共同調査によるデータ収集、および合同シンポジウムの開催のみならず、下記のような進展も見られた。

- ・北京日本語学研究センター・国際交流基金日本語国際センターと共催で 2018 年 7 月 31 日に国際シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて—学習者調査から新しい辞書の構想と開発へ—」を開催した。
- ・国際交流基金日本語国際センターと協力し、論文集『コミュニケーションのための日本語聴解教材の作成』（野田尚史・中尾有岐編、ひつじ書房）の編集を進めた。

3. 教育に関する計画

- ・PD フェローを 2 名雇用し、日本語教育研究に関する研究指導を行った。さらに、大学院生 11 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。
- ・12 名の大学院生をコーパスの構築作業に参加させ、コーパスを用いた研究の指導を行った。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

外国人にとってわかりやすい日本語という視点を取り入れたビジネス日本語のプロジェクトを、企業関係者を中心とした日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力のもと、2 件の学会発表を行った。

また、日本語教師セミナーを国内 1 回、国外 2 回の計 3 回開催した。国内では、「看護・介護に必要な日本語の研究と日本語教育」を国立国語研究所で行い、129 名（うち国外機関所属者 3 名、学生 12 名）が参加した。国外では、「自然会話コーパスを活用した日本語教育」を 2 回オーストラリアで行い、計 58 名（うち国外機関所属者 23 名、学生 5 名）が参加した。

その他、2018 年 6 月 9 日にシンポジウム「ピア・リーディング授業の考え方」（国立国語研究所）を開

催し、参加者は 161 名（国外機関所属者 7 名、学生 41 名）を得た。さらに、日本語教師や大学教員を主な対象とした講演を 3 件行った。

5. グローバル化に関する計画

海外在住の研究者 44 名を共同研究員として加え、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を実施した。また、連携協定を結んでいる北京日本学研究センターとは、共同で日本語学習者の日本語習得過程に関するデータ収集を行い、2 件のシンポジウムを開催し（詳細は、「2. 共同利用・共同研究に関する計画」参照）、オンライン日本語基本動詞ハンドブックおよび日本語文型バンクについては、海外 5 カ所でそれぞれデモ発表を行った。プロジェクトに関わる国際会議は合計で、学術発表・学術講演が 33 件、一般向け講演・セミナーが 3 件、講習・チュートリアルが 7 件であった。

6. その他

『みんなの日本語 初級 I, II 翻訳・文法解説』のマラーティ一語版を 2018 年 12 月 22 日に Sachi Prakashan 出版からインド・プネーで刊行した。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

| | |
|---|-------------|
| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
| (1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画 | |
| 1. 下記の論文集の編集を進めた。 ・ <u>野山広編『地域に定住する外国人の日本語会話習得と言語生活（仮題）』（ココ出版）</u> （2019 年 7 月入稿、2020 年 1 月刊行予定） | |
| 2. 下記の教師指導論文集の編集を進め、刊行した。 <u>『どうすれば協働学習がうまくいくか 失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』（石黒圭編、ココ出版）</u> （2018 年 6 月刊行）。 | |
| 3. オンライン日本語基本動詞ハンドブックに関しては、本年度は公開研究会を開催せず、プロジェクトの成果を論集としてまとめることにした。 ・ <u>プラシャント・パルデシ、糸山洋介、砂川有里子、今井新悟、今村泰也 編『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』（開拓社）</u> の編集作業を開始した（2019 年 11 月刊行予定） | |
| 4. その他、下記の論文集の刊行準備を進めた。 ・ <u>野田尚史・迫田久美子編『学習者コーパスと日本語教育研究』（くろしお出版）</u> （入稿終了、2019 年 5 月刊行予定） ・ <u>野田尚史編『日本語学習者の読解過程』（ココ出版）</u> （2019 年 5 月入稿、2019 年 11 月刊行予定）。 | |
| 5. プロジェクト共同研究員の研究成果も含め、プロジェクト全体で論文 21 件（ブックチャプター含む）、図書 1 冊、データベース 7 件、学術発表・学術講演 72 件、一般向け講演・セミナー 12 件、講習・チュートリアル 13 件をそれぞれ公開・刊行した。 | |

(2) 研究実施体制等に関する計画

- プロジェクトを推進するために、国内外の日本語教育研究者 149 名で 3 つのサブプロジェクトによる共同研究体制を組織した。
- 本プロジェクトの研究遂行のために、PD フェローを 2 名、プロジェクト非常勤研究員を 12 名、技術補佐員を 7 名雇用した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
|---|-------------|
| <p>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none">下記のデータの一般公開、追加、および講習会、シンポジウムを行った。<ul style="list-style-type: none">『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）所内先行リリース版（2017 年度）』にさらに整備、修正を行い、『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018 年版』333 会話（延べ 666 人のデータ）として 2018 年 8 月 31 日に一般公開した。『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018 年版』に新たに 13 会話（26 人分）の追加データを作成した（公開は 2019 年度）。「BTSJ 活用方法講習会」を 3 回（2018 年 7 月 14 日、東京外国語大学、2018 年 12 月 8 日（2 回実施）、国立国語研究所）行った。参加者は、7 月 14 日が 47 名（うち、国外機関所属者 3 名、学生 20 名）、12 月 8 日の初級者向け・既修者向けの 2 回が計 30 名（うち、国外機関所属者 3 名、学生 13 名）であった。2018 年 6 月 23 日に「第 3 回会話・談話研究シンポジウム『AI と言語研究（1）－ポライトネスと AI－』」（国立国語研究所）（担当：宇佐美まゆみ）を開催し、参加者は 57 名（国外機関所属者 4 名、学生 20 名）であった。2018 年 7 月 14 日にシンポジウム「自然会話分析と言語社会心理学」（東京外国語大学）（担当：宇佐美まゆみ）を開催し、参加者は 47 名（国外機関所属者 3 名、学生 20 名）であった。下記のデータの公開に加え、2 件のシンポジウムを開催した。<ul style="list-style-type: none">平成 30 年度は、多言語を母語とする日本語学習者コーパス（I-JAS）の構築の 3 年目に着手し、三次公開（2018 年 5 月 21 日）を行った。今回は、日本語学習者 210 名分（中国語母語話者 50 名、ベトナム語母語話者 35 名、ハンガリー語母語話者 35 名、スペイン語母語話者 35 名、ロシア語母語話者 35 名、国内教室環境学習者 10 名、国内自然環境学習者 10 名）のデータを公開した。2018 年 4 月 30 日に、シンポジウム「日本語教育は学習者コーパスで変わる－横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴－」（国立国語研究所）を開催した。第一部は「多言語を母語とする日本語学習者コーパス（I-JAS）」のデータを用いた基調講演 1 件と B-JAS の紹介、第二部は B-JAS のデータを用いた研究発表 3 件を行った。参加者は 138 名（うち国外機関所属者 6 名、学生 51 名）であった。2018 年 12 月 22 日に、「第四回学習者コーパス・ワークショップ&シンポジウム－第二言語習得における語彙の役割－」（東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター）を行った。シンポジウムの参加者は 110 名（うち、国外機関所属者 5 名、学生 33 名）であった。 | |

・I-JAS ワークショップは、計 3 回（2018 年 10 月 12 日横浜国立大学で 1 回、2018 年 12 月 23 日上記「第四回学習者コーパス・ワークショップ」で 2 回）実施した。参加者は、10 月 12 日が 17 名（うち、学生 16 名）、12 月 23 日の初心者向け・既修者向けの 2 回が計 48 名（うち、国外機関所属者 2 名、学生 17 名）であった。

3. 下記のデータの公開を行った。

- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、著作権使用の許諾を得られなかったものを除き、「日本語非母語話者の読解コーパス」 30 件を公開した。
- ・「日本語学習者の文章理解過程データベース」 の構築を継続し、60 名分のコーパスデータを公開した。

4. オンライン日本語基本動詞ハンドブックの作成を継続し、2019 年 3 月に 15 見出しを追加公開した。また、30 年 12 月に 17 見出しの音声コンテンツ、27 見出しにミニアニメコンテンツを追加した。

5. ウェブ版読解教材の開発を継続し、「ホテル検索サイト」シリーズ 5 レッスン、「旅行のパンフレット」シリーズ 1 レッスン、「通商白書」シリーズ 3 レッスン、「人的資源関連の研究論文」シリーズ 4 レッスンの教材合計 13 レッスンの教材を公開した。ウェブ版聴解教材の開発も継続した。

（2）共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

1. 連携協定を結んでいる北京日本語学研究センターと共同で春と秋にデータの収集を行ったほか、研究成果を発表する合同シンポジウムを開催した。

- ・2018 年 4 月 23 日に北京師範大学において（中国帰国者対象、担当：石黒圭）、2018 年 4 月 28 日～29 日に国立国語研究所において（日本留学者対象、担当：布施悠子、田中啓行）、2018 年 9 月 8 日、9 日に北京師範大学において（担当：野山広、布施悠子）、それぞれ「北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）」のデータ収集を行った。
- ・2018 年 4 月 30 日に、I-JAS と B-JAS のデータを用いたシンポジウム「日本語教育は学習者コーパスで変わる—横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴—」（国立国語研究所）を北京日本語学研究センターと合同で開催した。詳細は、本欄の項目（1）の 2. を参照。

2. 連携協定を結んでいる国際交流基金日本語国際センターと論文集刊行の準備を進め、また、共催でシンポジウムを開催した。

- ・野田尚史と国際交流基金日本語国際センターの中尾有岐との共編で論文集『コミュニケーションのための日本語聴解教材の作成』（ひつじ書房）の編集を進めた。
- ・連携協定を結んでいる北京日本学研究センター・国際交流基金日本語国際センターと共催で 2018 年 7 月 31 日に国際シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて—学習者調査から新しい辞書の構想と開発へ—」（国際交流基金日本語国際センター）（企画者：野田尚史）を開催した。参加者は 113 名（うち国外機関所属者 19 名、学生 34 名）であった。

3. 教育に関する計画

| | |
|--|------------|
| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
| <h3>（1）大学院等への教育協力に関する計画</h3> | |
| 1. 12 名の大学院生をコーパスの構築作業に参加させ、コーパスを用いた研究の指導を行った。 | |

(2) 人材育成に関する計画

1. プロジェクト常勤研究員 (PD フェロー) を 2 名雇用し、日本語教育研究に関する研究指導を行った。
2. 大学院生 11 名を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
|--|-------------|
| (1) 産業界や地域社会との連携に関する計画 | |
| 1. 日本テレワーク学会 Job Casting 部会との協力のもと、富士通研究所のメンバーと学会におけるパネル発表 2 件を行った。 | |
| (2) 研究成果の社会への普及に関する計画 | |
| 1. 日本語教師等を対象とする研修会を国外で 2 回、国内で 1 回開催した。 <ul style="list-style-type: none">・2018 年 11 月 1 日に<u>日本語教師セミナー「自然会話コーパスを活用した日本語教育」(国際交流基金シドニー日本文化センター)</u> (担当: 宇佐美まゆみ) を行い、38 名 (うち国外機関所属者 3 名、学生 2 名) が参加した。・2018 年 11 月 5 日に<u>日本語教師セミナー「自然会話コーパスを活用した日本語教育」(メルボルン大学)</u> (担当: 宇佐美まゆみ) を行い、20 名 (うち国外機関所属者 20 名、学生 3 名) が参加した。・2019 年 2 月 9 日に<u>日本語教師セミナー「看護・介護に必要な日本語の研究と日本語教育」(国立国語研究所)</u> (担当: 野田尚史) を行い、129 名 (うち国外機関所属者 3 名、学生 12 名) が参加した。 | |
| 2. 2018 年 6 月 9 日に日本語教師を主な対象とした <u>シンポジウム「ピア・リーディング授業の組み立て方」(国立国語研究所)</u> を開催し、参加者は 161 名 (国外機関所属者 7 名、学生 41 名) であった (担当: 石黒圭)。 | |
| 3. 2018 年 9 月 29 日に日本語教師を主な対象とした <u>研究発表会「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(国立国語研究所)</u> を開催し、参加者は 45 名 (国外機関所属者 3 名、学生 4 名) であった (担当: 野田尚史)。 | |

5. グローバル化に関する計画

| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
|--|-------------|
| (1) 国際的協業に関する計画 | |
| 1. 海外在住の研究者 44 名を共同研究員として加え、日本語学習者のコミュニケーションに関する研究を実施した。 | |
| 2. 北京日本語学研究センターと共同で春と秋にデータの収集を行ったほか、研究成果を発表するシンポジウムを共同で 2 件開催した。 <ul style="list-style-type: none">・<u>「北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS)」</u> のためのデータ収集を行った。詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画 (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画」参照。・2018 年 4 月 30 日に、北京日本学研究センターと合同で<u>シンポジウム「日本語教育は学習者コーパスで変わる—横断コーパス・縦断コーパスそれぞれの特徴—」(国立国語研究所)</u> を開催した。詳細 | |

は「2. 共同利用・共同研究に関する計画 (1) 共同利用・共同研究に関する計画」参照。

・2018年7月31日に、北京日本学研究センターと共に国際シンポジウム「コミュニケーションのための日本語学習辞書を求めて—学習者調査から新しい辞書の構想と開発へ—」を開催した。詳細は「2. 共同利用・共同研究に関する計画 (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画」参照。

(2) 国際的発信に関する計画

1. オンライン日本語基本動詞ハンドブックおよび日本語文型バンクについて、2018年12月25日にインドのチェンナイで、2019年3月5日に台湾の台北で、2019年3月15日にカンボジアのプノンペンで、2019年3月22日にボスニア・ヘルツェゴビナのサラエボで、2019年3月26日にセルビアのベオグラードで、それぞれデモ発表を行った。
2. プロジェクトに関わる国際会議は合計で、学術発表・学術講演が33件、一般向け講演・セミナーが3件、講習・チュートリアルが7件であった。

6. その他

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクトおよび科研課題番号18H03575(準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発)と連携し、日本語文型バンクの開発・補充を続行した。今後追加予定の中・上級の文型の整理・分類・意味記述、用例作成の準備作業を進める(担当: プラシャント・パルデシ)。

平成30年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることであり、3つのサブプロジェクトすなわち、①母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を軸とした「日本語学習者の日本語使用の解明」、②読解や聴解の過程を可視化することを軸とした「日本語学習者の日本語理解の解明」、③大規模コーパスを利用した音声付きオンライン辞典の作成と②の結果に基づいたウェブ版教材サンプルを作成する「日本語学習のためのリソース開発」で構成されている。2018年度は上記プロジェクトの3年目に当たる。

以下にみるように、いずれの評価項目においても十分な成果をあげており、「A評価」が妥当であると考えられる。とりわけ活動実績の量的側面・連携体制構築の側面・社会的国際的連携の側面において充実した成果がみられる。他方、学習者教育や指導者育成教育などに関わる側面においては具体的な関わり方(院生や若手研究者をプロジェクトに参画させ指導するというあり方以上・以外の多様なあり方)の工夫も含めてさらなる工夫が期待される。

《評価項目》

1. 研究について

(1) 研究水準及び研究の成果に関しては、2冊の論集の刊行準備、1件の研究発表会の開催が計画されていたが、計画を上回る5冊の論集の刊行ないしはその準備が進められており、また、論文21件、図書1冊、データベース7件、学術発表・学術講演72件、一般向け講演・セミナー12件、広州・チュートリアル13件の公開・刊行が行われており、十二分な成果が上げられている。ただ、2018年度開催予定だったオンライン日本語基本動詞ハンドブックに関する公開研究発表会が開催されず当該内容に関わる論集の刊行準備に代替されたが、オンラインハンドブックであることを踏まえれば、できればワークショップ形式なども含めた公開の発表会等を開催することが望ましいのではないか。(2) 研究実施体制等に関しては、2項目が計画されていたが、いずれにおいても計画を上回る規模の人員を組織化しており十分な成果をあげている。

2. 共同利用・共同研究について

(1) 共同利用・共同研究に関しては、公開の機会を5件にまとめて計画していたが、十二分な成果をあげている。特に上記①に関わる「自然会話コーパス」と「学習者コーパス」(様々な言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパス)の構築に関わって、追加データの公開や講習会やシンポジウムの開催など成果を計画以上に蓄積しており、また②に関わる「読解コーパス」の構築作業、③に関わるハンドブック作成・教材開発に関しても継続して研究を進め成果の追加公開が続いている、十分に評価できる。(2) 実施体制等に関しては、内外の研究機関との共同研究の継続が計画されていたが、データ収集の継続に加えてシンポジウムの合同開催も行われ、充実した活動が行われた。

3. 教育について

(1) 大学院等への教育協力に関しては2件の計画があった。研究所としての評価方法の変更に伴って1件のみの実施報告に止まっているが、その1件に関しては計画どおりの院生指導が行われた。(2) 人材育成に関しては2件の計画があったが、共に計画を上回る人員の指導・育成を行っており計画どおりの成果を挙げていると考えらえる。ただ、実際の指導・育成の内容については、プロジェクトへの「雇用・参加・研究指導」以上の具体的な内容とその教育的効果や成果がはっきりせず、報告書の記述に改善を求める。日本語教育学に関わる学術的・教育実践的研究の深化については、日本国内のみならず海外の大学院生や若手研究者等の人材育成も喫緊の課題であり、その社会的要請に対してどのような具体的な応答が可能かについても、プロジェクトの視野に含めて良いのではないかと考える。

4. 社会との連携及び社会貢献について

(1) 産業界・地域社会との連携及び(2) 社会への普及に関しては、日本語教師セミナー・シンポジウム・研究発表会が計画を上回る回数と規模で開催され、連携・普及の側面において十二分の成果をあげている。ただ、日本語教育や多文化共生に関わる社会状況の流動化は、内外を問わず、関連事業への参入企業・業種の多様化を伴っており、本プロジェクトによって構築されているコー

パステーダの利活用の可能性を積極的に発信していくことも必要ではないか。教材開発・研修（コンサルタント）・人材派遣事業関連の機関・企業などとの連携や本プロジェクトの研究成果の普及に関して一層の工夫を期待したい。

5. グローバル化について

(1)国際的協業については2項目、(2)国際的発信については1項目が計画されていたが、計画以上の事業を実施しており、十分な成果をあげている。特に連携協定を結んでいる北京外国语研究センターとの共同作業によるデータ収集やシンポジウムの共同開催などの協業は、密度が高いと評価できる。また、南アジア国際共同ネットワーク構築の一環として、オンライン日本語基本動詞ハンドブック及び日本語文型バンクについてのデモ発表の機会を、日本語教育学に関わる学術研究や日本語教育の実践・普及に関して発展途上の主要地域であるカンボジアのプノンペン、ボスニア・ヘルツェゴビナのサラエボ、セルビアのベオグラードで開催したことはグローバル化の観点から高く評価できる。多くの地域での開催も期待したい。プロジェクトに関わる国際会議も、学術発表・学術講演33件、一般向け講演・セミナー3件、講習・チュートリアル7件、計43件が開催され、充実した実績を蓄積しており、高く評価できる。

6. その他特記事項

特になし。

コーパス開発センター
センター長：前川 喜久雄

I. 30年度活動概要

30年度予算総額 69,432 (58,432+11,000) 千円

30年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

所内の専任職員・研究員でジャーナル論文5+1件、国語研論集3件、国際会議発表15件。
言語資源活用ワークショップ2018を開催。「少納言」「中納言」「梵天」などの検索系の維持管理を実施。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

UniDic(形態素)・Universal Dependencies(係り受け)・分類語彙表(意味)に関する研究を共同研究者と推進。

「中納言」講義用アカウントの枠組を構築。

3. 教育に関する計画

「Praat」「中納言」「梵天」講習会を実施。所内若手研究者向けにオフィスアワーを設定。
言語資源活用ワークショップ2018に学生を対象とした優秀発表賞を設定。
茨城大学の修士学生1名をインターンシップとして受け入れ。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

ワークスアプリケーションズ徳島人工知能NLP研究所と共同研究を開始。
日本語語彙の分散表現データのモデルを公開。中京大学において開催された国語科の教員免許講習への協力。

5. グローバル化に関する計画

Academia Sinicaとの共同研究を推進。LREC-2018にてSpecial Sessionを実施。CoNLL-2018 Shared Taskに係り受けのデータを提供。

6. その他

所内のコーパス開発プロジェクトの支援を実施。

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

| | |
|--|-------------|
| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
| <p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>1. 所内の専任職員・研究員で査読付きジャーナル論文 5 件, 国語研論集 3 件, 国際会議発表 15 件, 解説論文 (日本語の研究 1 件) の業績。</p> <p>業績の内訳は【項番 2. (1) 1.】【項番 2. (1) 2.】など。</p> <p>言語処理学会第 25 回年次大会にて言語資源賞を受賞。また言語処理学会論文誌「自然言語処理」2018 年度優秀論文賞を受賞。</p> <p>2019 年度にもジャーナル論文 5 件, 国際会議発表 3 件予定。</p> <p>上の業績とは別に音声学会の国際発信事業の一環として, 過去の Best Paper 2 編が英訳され学会誌『音声研究』に掲載された。</p> <p>2. 「言語資源活用ワークショップ 2018」を 9/4, 5 に開催。</p> <p>3. 「コーパスとしてのウェブテキスト活用シンポジウム」9/6 に開催。</p> <p>4. 3 の 3 日間の参加者数</p> <p>延べ 385 人, 異なり 223 人</p> <p>昨年度までの発表論文集 (2016 年 48 件, 2017 件 37 件) 機関リポジトリにより公開。今年度分も機関リポジトリに公開予定 (64 件)。</p> <p>● 分類語彙表 (意味) に関する言語資源の整備を行い, 国際会議も含めた場で発表・公開を行った 【項番 2. (1) 1. に関する事項】</p> <p>● Universal Dependencies (係り受け) に関する言語資源の整備を行い, 通言語的なアノテーション基準策定に参画し, 並列構造について提言を行った。</p> <p>【項番 2. (1) 2. に関する事項】</p> <p>【項番 5. (1) 2. に関する事項】</p> <p>(2) 研究実施体制等に関する計画</p> <p>1. UniDic (形態素) については, ワークスアプリケーションズと共同研究協定を行いながら, 関連する言語資源の整備を進めている。日本語の Universal Dependencies (係り受け) データを日本 IBM・NTT CS 研・NII・NAIST・京都大学と産学連携の枠組で整備・公開した。分類語彙表 (意味) については茨城大学とともに言語資源整備を進めている。音声アライメントについては京都大学の技術支援を受けている。また, 今年度はじめて茨城大学からインターンシップの学生 (大学側で単位認定) を 1 名受け入れた。</p> <p>2. 「少納言」「中納言」「梵天」の維持管理を行った。</p> <p>『日本語歴史コーパス』については言語変化研究領域と, 『名大会話コーパス』『現日研・職場談話コーパス』『日本語日常会話コーパス』については音声言語研究領域と, 『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』については, 日本語教育研究領域と, 『日本語諸方言コーパス』については言語変異研究領域と共同で, オンライン検索システム「中納言」にて公開している。</p> <p>「梵天」についてはビデオ教材を整備するとともに, 3 回講習会を実施した (参加者 44 名, 学生 19 名, 国外 2 名)。</p> | |

2. 共同利用・共同研究に関する計画

| 自己点検評価 | 計画どおり実施した |
|--|-----------|
| (1) 共同利用・共同研究に関する計画 | |
| 1. Universal Dependencies に関する論文を共同研究員とともに執筆 「Universal Dependencies 日本語コーパス」 浅原・金山・宮尾・田中・大村・村脇・松本 (自然言語処理 2019年3月号) 【項番1. (1) 1. の一部】 Universal Dependencies に関する国際会議発表を共同研究員とともに 3 件発表 (LREC-2018 1 件, Workshop on Universal Dependencies 2 件) 分類語彙表に関する国際会議発表を共同研究員とともに 4 件行った (LREC-2018 1 件, JADH-2018 2 件, PACLIC 32 1 件) 【項番1. (1) 1. の一部】。 | |
| 2. CoNLL-2018 Shared Task に日本語データを提供した。 3. 6/16 に Universal Dependencies に関する公開研究会を実施 (参加者 26 名)。 ・日本の言語資源整備に関するガラパゴス化 (日本国内で孤立した最適化) が進まないように通言語的なアノテーション研究の動向を調査しながら、日本語特有の問題について積極的に対外発表を行った。同じ主辞後置言語の韓国語の研究者とともに Universal Dependencies における東アジア言語で共通する問題について対外的に提言を行った。【項番1. (1) 1. の一部】 ・分類語彙表を中心とした言語資源として、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」「日本語歴史コーパス」に対するアノテーション・UniDic-分類語彙表番号対応表に関する発表を国際会議も含めて行った。【項番1. (1) 1. の一部】 | |
| (2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画 | |
| 「中納言」の「講義用アカウント」の発行の枠組を構築した。中京大学・東京学芸大学で試験的に利用した。 | |

3. 教育に関する計画

| 自己点検評価 | 計画をどおり実施した |
|--|------------|
| (1) 大学院等への教育協力に関する計画 | |
| 1. 中京大学・東京学芸大学において中納言講習会・梵天講習会を実施した。 | |
| (2) 人材育成に関する計画 | |
| 1. プロジェクト非常勤研究員を 5 名雇用 (内、大学院在学中 1 名・大学院休学中 1 名)。1 名が今年度中に学位取得予定。 2. 大学院生 5 名が共同研究員として参加。 3. 言語資源活用ワークショップ 2018 における若手向け優秀発表賞を授与。 4. 所内の若手研究者の研究支援のために、研究相談の場として、オフィスアワーを設定 (利用 17 件)。 5. 茨城大学の修士学生 1 名をインターンシップとして受け入れ (茨城大学で単位認定)。 | |

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

| | |
|---|-----------|
| 自己点検評価 | 計画どおり実施した |
| (1) 産業界や地域社会との連携に関する計画 | |
| 1. UniDic (形態素) に関しては後述するワークスアプリケーションズとの協業で言語資源の整備を進めている。 Universal Dependencies (係り受け) については、日本 IBM・NTT CS 研・NII・NAIST・京都大学と产学連携の枠組で言語資源の整備を進めている。 分類語彙表 (意味) については、茨城大学とともに言語資源の整備を進めている。 音声アラインメントについては京都大学からの技術提供を受けている。 | |
| 2. Google 社からの申し入れのあった共同研究については進捗なし (年度内に Google 社と BCCWJ の利用契約予定) | |
| 3. ワークスアプリケーションズ徳島人工知能 NLP 研究所との共同研究を 10 月に開始。「複数粒度の分割結果に基づく日本語単語分散表現」モデルをオープンデータとして無償公開 (2019 年 3 月)。 ・ Microsoft の検索ツール Bing に UniDic-cwj version 2.2.0 を提供 | |
| (2) 研究成果の社会への普及に関する計画 | |
| 1. UniDic の語彙素を 6355 語彙素追加 (2019 年 3 月 31 日現在) UniDic-分類語彙表番号対応表を公開し、可能な語義を枚挙する解析器を公開。 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語歴史コーパス』に対する分類語彙表アノテーションデータを公開。 分類語彙表に対する反対語情報付与・単語親密度情報付与・岩波国語辞典語義との対応表の整備を進めしており、2019 年中に公開予定。 | |
| 2. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』契約申込数 33 件 『日本語話し言葉コーパス』契約申込数 54 件 (2019 年 3 月 31 日現在) | |
| 3. コーパス頒布用の契約書発行システムの整備を進め 9 月より運用開始。 | |
| 4. 日本語語彙の分散表現データ (word2vec のモデル) を公開 (公開後 137 名に配布)。 高エネ研との機構間連携プロジェクトにより Poincare embedding (双曲空間への単語埋め込み) の技術を検討。 大阪大・お茶の水女子大とともに BERT のモデル構築の検討を開始。 | |
| 5. 「梵天」の講習会ビデオを拡充した。現在 10 本のビデオを公開中。 | |
| 6. 中京大学において、国語科の教員免許講習への協力を行った。 | |

5. その他の目標を達成するための措置

| | |
|---|------------|
| 自己点検評価 | 計画どおりに実施した |
| (1) 国際的協業に関する計画 | |
| 1. Academia Sinica との共同研究を進めた。 5月に国内で打ち合わせ 10月に前川・浅原が訪問（所長裁量経費による） | |
| 2. 国際的な係り受けツリー・バンクプロジェクト Universal Dependencies に参画しており、世界2位の規模の言語資源を公開。 | |
| (2) 国際的発信に関する計画 | |
| 1. LREC-2018 で Special Session 実施（2018年5月）【項番1. (1) の一部】 2. コーパス開発センター専任職員・研究員で15件の国際会議発表を行った。【項番1. (1) 再掲】 3. パージング（係り受け解析）の世界的な評価型ワークショップ CoNLL-2018 Shared Task にデータを提供した。【項番2. (1) 再掲】 4. 第11回国際計量学会 IQLA（2020年開催）を招致し、国語研での開催が確定した。 | |

6. その他

| | |
|--|-------------|
| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
| 1. 所内のコーパス開発プロジェクト支援のために、所内全体で利用可能なジャパンナレッジを10件購入した。次年度以降、研究図書室と共同で購入する。 2. 所内のコーパス開発プロジェクト支援のために、形態論情報データベースの保守管理を行った。 | |

平成30年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

(総括)

研究面ではジャーナル論文発表、国際会議発表を多数行い、学会優秀論文賞受賞など高い研究成果をあげている。また、形態素、係り受け、意味、音声アラインメントの各分野において、大学、公的研究機関、企業との連携体制の下で言語資源の整備を着実に進めているばかりでなく、コーパス普及を目的とした検索ツールの公開・維持管理、教材作成、講習会実施を積極的に進めている。国際会議への関与も積極的であり、特別セッションの企画実施、評価データ提供など国語研のプレゼンス向上に貢献している。コーパス開発研究センターの活動は計画を上回って実施していると判断される。

《各項目別》

1. 研究について

ジャーナル論文5件をはじめとする研究発表を行い、学会優秀論文賞を受賞するなど高い研究成果をあげている。言語資源活用促進を目的としたワークショップ。シンポジウムを開催してコーパスの利用拡大を図っている。形態素、係り受け、意味、音声アラインメントの各分野において、大学、公的研究機関、企業との連携体制の下で言語資源の整備を着実に進めるとともに、コーパス検索ツールの公開・維持管理と普及のためのビデオ教材制作、講習会実施を行っている。このように研究活動では高い成果を生んでいると評価する。

2. 共同利用・共同研究について

共同研究については共同研究員としてプロジェクトに参画している大学院生と共同の研究が中心となっている。また、通言語的なコーパスアノテーションを意識した韓国語研究者との共同研究を実施しているが、これはコーパス研究の国際化を見据えた優れた取り組みである。中京大学・東京学芸大学においてコーパス検索ツール「中納言」のための講義用アカウントの試験的発行を行っているが、これもコーパス普及のために期待される取り組みである。

3. 教育について

非常勤研究員の雇用、大学院生の共同研究員としてのプロジェクト参加、インターン受け入れなどの方法で若手研究者の育成を図っている。

4. 社会との連携及び社会貢献について

形態素、係り受け、意味、音声アラインメントの各分野において、大学、公的研究機関、企業との連携体制の下で言語資源の整備を着実に進めている。Microsoft社へのUniDicの提供、ワークスアプリケーションズと共同の日本語単語分散表現モデルの開発を公開など、外部機関との積極的な連携関係の下に新しいデータの開発と、国語研内で開発された言語資源の公開・活用が有効に進められている。

5. グローバル化について

国外研究機関との共同研究推進が進行している。言語資源に関する代表的な国際会議LRECにおいて特別セッションを企画実施、国際会議での積極的な発表、国際ワークショップへの評価データ提供などを通じて多様で充実した国際的活動を展開しており、高く評価できる。

6. その他特記事項

特になし。

研究情報発信センター
センター長：石黒 圭

I. 30年度活動概要

30年度予算総額 34,400千円

30年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

所蔵資料の配信システムや公開コンテンツについて研究発表を7件行い、所蔵データベースの解説を専門書籍に掲載した。また、所蔵する音声・映像資料をめぐり、所内の複数のプロジェクトと連携し、共同利用体制を強化した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

所管するデータベース類について、コンテンツの再配置を行い、合理化に寄与した。「日本語研究・日本語教育文献データベース」への新規データの追加、研究資料室収蔵の音源・映像のデジタル化及びデータベース化、「研究資料室収蔵資料データベース」の充実を、当初の予定を上回るペースで積極的に推進した。また、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」について、国語研刊行物のデータ整備・登録を進め、オープンアクセス方針並びに実施要領を全所的な合意の下、作成した。国立国会図書館の「ジャパンサーチ」試験版において、国語研所蔵のデータベースを公開した。さらに、情報・システム機構に対し、研究資料室が所蔵・公開する社会調査データセットの情報を提供し、その利活用を一層図れる環境を整えた。

3. 教育に関する計画

センターの研究発信業務強化のため、プロジェクト非常勤研究員2名を雇用し、その育成に務めた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

『国立国語研究所論集』を2回、オンラインと冊子体の両形態で発行するとともに、円滑な発行を維持できるよう、編集体制の見直しを行った。

5. グローバル化に関する計画

特になし。

6. その他

ネットワーク・サーバ運用保守業務及びサポートデスク業務、及び仮想基盤の保守切れに伴う仮想基盤機器のリプレイス及び仮想サーバの移行を適切に実施した。

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

| | |
|--|-------------|
| 自己点検評価 | 計画を上回って実施した |
| (1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画 | |
| 1. 所蔵資料の配信システムのみならず、社会調査のデータセット等公開コンテンツについて研究発表を7件行った。 | |
| 2. 「鶴岡調査データベース ver. 2.0 解説（改訂版）」が『社会言語科学の源流を追う』（2018年9月18日、ひつじ書房）に全文収録された。 | |
| (2) 研究実施体制等に関する計画 | |
| 1. 研究情報発信センターが所蔵する音声・映像資料を活用する日常会話コーパス、危機言語プロジェクトと連携し、共同研究体制を強化した。 | |

2. 共同利用・共同研究に関する計画

| | |
|---|----------------|
| 自己点検評価 | 計画を大きく上回って実施した |
| (1) 共同利用・共同研究に関する計画 | |
| 1. 所管するデータベース類20点について、アクセス及び管理を容易にするためにコンテンツの再配置（サーバ移行）を行った。これに伴い、合理化のため3サーバを廃止した。また、セキュリティ向上のため、所管する4サーバに対して、SSL対応とソフトウェアのバージョンアップを実施した。 | |
| 2. 新規データを4回追加（約3,500件）した。総件数は25万2千件。外国語雑誌オンライン・ジャーナルの追加を継続し、Web上で公開されている韓国学会誌掲載論文についてもデータ追加を行った。論文本文PDFへのリンク情報の付与・点検については、今までの大学学術機関リポジトリ掲載論文に加え、学会誌掲載論文（約2,000件）について新規リンク付けを行った。総リンク件数は2万4千件。『国語年鑑』遡及分図書については、1961年版～1989年版までの29冊（約19,000件）のデータ追加を行った。また日本語学会秋季大会でブース発表を行い、利用者からの希望により、論文集等の図書に掲載された論文のデータ追加のための準備を開始した。 | |
| 3. 研究資料室収蔵の音源・映像について、2,087点のデジタル化を進めた（オープンリール録音190点、DATテープ900点、カセットテープ509点、ミニデジタルビデオテープ273点、8ミリビデオテープ149点、ユーマチック66点）。また、所内専用試視聴システム「研究資料室所蔵音源データベース」「研究資料室所蔵映像データベース」の増補収録を行った（音声5,307点、映像296点）。利便性向上のため、「研究資料室所蔵音源データベース」「研究資料室所蔵映像データベース」を統合した新所内専用試視聴システムの開発を行った。「室所蔵映像データベース」を統合した新所内専用試視聴システムの開発を行った。 | |
| 4. 研究資料室収蔵資料の各目録の整備を進め、2018年7月20日に「中央資料庫映画台本所蔵リスト」を公開した。また、「研究資料室収蔵資料データベース」に新規公開資料群5点を加えるなど、資料群概要記述の充実を図った。 | |
| 5. 「国立国語研究所学術情報リポジトリ」について、 <ul style="list-style-type: none">・ オープンアクセス方針策定に向け、研究情報発信センター運営委員会リポジトリ推進部会を設けて | |

| |
|---|
| <p>検討を行い、執行部・専任研究職員への説明を経て、方針を策定するとともに実施要領を作成した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語研刊行物について、本文 PDF およびメタデータの整備を進め、リポジトリに登録し、DOI ガイドラインに沿って DOI を付与した（計 621 件：「日本語科学」260 件、「日本語教育論集」61 件、「国立国語研究所国語辞典編集資料」12 件、「ことばの研究」90 件、等）。 <ol style="list-style-type: none"> 6. 「日本語観国際センサス」の回答データセットを 2018 年 9 月 19 日に公開した。 7. 「「国語力観」に関する全国調査」の回答データセットを 2018 年 11 月 28 日に公開した。 8. 国立国会図書館による国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」試験版において、国語研所蔵の次の四つのデータベースを、2019 年 2 月 27 日に公開した。 <ul style="list-style-type: none"> ・『方言文法全国地図』地図画像 ・『日本言語地図』地図画像 ・米国議会図書館本源氏物語翻字本文 ・国立国語研究所学術情報リポジトリ <p>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 情報・システム機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターが開発を進めている「人間・社会データ・コンプライアンス管理プラットホーム」での言語調査データ活用に向けて、研究資料室が所蔵・公開する社会調査データセットの情報を提供した。 |
|---|

| |
|--|
| <p>「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由</p> <p>S と自己評価した根拠は次のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①海外の日本語関係の文献、特に韓国学会誌掲載論文を追加し、研究者コミュニティの要望の強かった論文集等の図書にある論文データに着手できたことで、「日本語研究・日本語教育文献データベース」(Web) における CiNii にはない国語研の独自性をさらに強化することができたため。 ②オープンアクセス方針および実施要領について、当初は着手を予定していたものの、研究情報発信センター運営委員会を中心に、執行部・専任研究職員の集まる会議体での計 5 回の検討を経て、全所的な理解を得つつ方針ならびに実施要領を作成することができたため。 ③研究資料室が収蔵する資料の公開を進め、予定にない「日本語観国際センサス」「「国語力観」に関する全国調査」の回答データセットを公開したため。 ④国立国会図書館による国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」試験版において、『方言文法全国地図』『日本言語地図』など、国語研所蔵の四つのデータベースを公開し、大学・研究所等の共同利用により広く供することができたため。 ⑤情報・システム機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターに対し、研究資料室が所蔵・公開する社会調査データセットの情報を提供することで、その利活用を一層図れる環境が整ったため。 |
|--|

3. 教育に関する計画

| | |
|--|-------------|
| 自己点検評価 | 計画がないので記載なし |
| <p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <p>(2) 人材育成に関する計画</p> <p>1. 社会調査のデータセット公開のため、プロジェクト非常勤研究員1名を雇用し、「日本語研究・日本語教育文献データベース」の登録範囲拡張のため、プロジェクト非常勤研究員1名を雇用し、その育成に務めた。</p> | |

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

| | |
|--|-----------|
| 自己点検評価 | 計画どおり実施した |
| <p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p> <p>1. 『国立国語研究所論集』第15号（2018年7月）と第16号（2018年10月）をオンラインと冊子体の両形態で発行した。また、円滑な発行を維持すべく、投稿申込制を廃止し、投稿締切の回数を増やすことにより、原稿の多寡に影響を受けにくい体制とした。</p> | |

5. その他の目標を達成するための措置

| | |
|---|-------------|
| 自己点検評価 | 計画がないので記載なし |
| <p>(1) 国際的協業に関する計画</p> <p>(2) 国際的発信に関する計画</p> | |

6. その他

| |
|--|
| ネットワーク・サーバの運用保守及びサポートデスク業務を、年間を通じて実施した。また、仮想基盤リプレイスにおいても、当初計画の通り2018年8月に設置・移行を完了し、新システムを稼動させた。 |
|--|

平成30年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

(総括)

センター主管の研究としては特筆すべき成果は見当たらないが、データベースサーバの見直し、データベースへの新規データ追加、音源・映像データのデジタル化/データベース化などを通じて研究データベースの着実な拡充と安定した運用を図るとともに、所蔵資料の各種目録の整備を行い、学術情報リポジトリのオープンアクセス化の検討を通じて研究資料情報公開体制の強化に務めている。また「方言文法全国地図」「日本言語地図」の地図画像公開などを通じて大学・研究機関の共同利用に資するデータ公開を積極的に実施している。研究情報の整理、追加、公開に関して着実に活動を進め、計画を上回って実施していると判断できる。今後は研究情報発信に加えて利用度把握を行い、情報発信方針策定に活用することを期待する。

《各項目別》

1. 研究について

研究所所蔵資料の配信システムおよび公開コンテンツに関する研究発表を7件行っている。鶴岡調査データベースの解説がひつじ書房刊行の書籍に収録されている。これらは解説的性格であり研究成果の質としてはやや物足りなく感じる。センター所蔵の音声・映像資料を活用する研究所内の研究プロジェクトとの連携体制を強化している。

2. 共同利用・共同研究について

所管するデータベースコンテンツの再配置、日本語研究・日本語教育文献データベースをはじめとする各種データベースへの新規データ追加、音源・映像データのデジタル化/データベース化などを通じて研究データベースの着実な拡充を図っている。研究資料室所蔵資料の各種目録の整備、学術情報リポジトリのオープンアクセス化の検討を通じて研究資料情報公開体制の強化に務めている。また、「日本語観国際センサス」「国語力観」の回答データセット公開、「方言文法全国地図」「日本言語地図」の地図画像公開などを通じて大学・研究機関の共同利用に資するデータ公開を実施している。研究情報の整理、追加、公開に関して着実に活動を進め、充実した研究情報発信を実現している。さらに発信情報の利用度把握を進めることを期待する。

3. 教育について

非常勤研究員2名を雇用し、データの公開および拡充に当たるとともに育成を行っている。

4. 社会との連携及び社会貢献について

特になし。

5. グローバル化について

特になし。

6. その他特記事項

特になし。

平成 30 年度「管理業務」に関する評価シート

業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置

【計画】

外部有識者の参加を得て、運営会議及び各種委員会を開催するとともに、機関の組織運営に研究者コミュニティ等の意見を積極的に取り入れる。

【実績】

- ・運営会議において、外部委員から研究所の研究活動の広報について意見等をいただき、以下のとおり見直しを図った。
- ・ホームページの見やすさの向上させるため、更新情報やイベント情報、関連行事、その他国語研の研究活動に関する情報を SNS (ツイッター) で発信することにより、認知率やホームページ訪問数が向上した。
- ・その他、研究教育職員の選考について審議した。

2. 教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置

【計画】

機関拠点型基幹研究プロジェクトの共同研究プロジェクトを研究系とセンターにより推進し、国際学術機関等の連携及び国際協力の推進を国際連携室において図る。また、研究事業の進捗状況に関する情報をIR推進室において管理する。

【実績】

- ・共同研究プロジェクトを推進するために、コーパス開発センター運営委員会、研究情報発信センター運営委員会に加え、新たに情報基盤運用委員会を設置し、プロジェクトが共同で利用するサーバの導入等、言語資源の構築と発信のためのインフラを安定的に運用する体制を整えた。また、コーパス開発センターでは研究系と協力して、コーパス・言語資源に関わるプロジェクト内外の成果を発表できる場として「言語資源活用ワークショップ 2018」を開催した。
- ・国際連携室において、国際連携協定締結の手続きを示したフローを作成し、30 年度に 5 件の連携協定を締結した。
- ・IR 推進室に専任専門職員 1 名を配置し、情報収集のフォーマットを整備し、随時情報収集を行うとともに、これらの情報を将来計画委員会を始めとする諸委員会の検討に反映させ、組織・運営の改善と強化に役立てた。

3. 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置

【計画】

機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施

【実績】

- ・西東京地区国立大学法人等主催研修への参加

西東京地区国立大学法人等共同開催の職員研修 3 件に職員を参加させた。①西東京地区国立大学法人等初任職員研修 (H30. 5. 30～6. 1, 参加者 3 名) ②平成 30 年度文部科学省西東京地区生涯生活設計セミナー (H30. 9. 20, 参加者 2 名) ③西東京地区国立大学法人等中堅職員研修 (H30. 10. 15～

10. 17, 参加者 2 名)

- ・本研究所が、西東京地区国立大学法人等共同開催研修の実施・運営機関となったため、研修内容の企画・立案を行い本研究所で研修を開催した。今年度は、「働き方改革関連法」が成立したことにより、各法人の役員、部課長及び人事労務担当者を対象として、時間外労働規制、同一労働同一賃金などをテーマに、法改正内容や実務対応策等について社労士を講師として研修を実施した。(開催日: H30. 11. 28 開催、参加機関: 15 機関、参加者(全体): 42 名)
- ・人間文化研究機構本部主催研修への参加

人間文化研究機構本部主催による以下の研修へ職員を参加させた。
①人間文化研究機構ワークライフバランス研修 (H30. 7. 30 開催、参加者 5 名)
②平成 30 年度人間文化研究機構事務系職員の人事被評定者研修 (H31. 3. 11 開催、参加者 4 名)
③平成 30 年度ハラスメント防止研修 ※人間文化研究機構と自然科学研究機構の共催 (H31. 2. 4, H31. 2. 12 の 2 回開催、参加者: 42 名)

自己点検評価

計画どおり実施した

《評価結果》

計画どおりに実施している

組織運営の改善に関しては、運営会議を開催し、外部委員からの意見を受け、ホームページの見やすさの向上に努め、ホームページ訪問者数の増加などの効果を上げたことは評価できる。教育研究組織の見なおしに関しては、共同研究プロジェクト推進会議で基幹研究プロジェクトの進捗状況などを確認し、プロジェクト間の意思の疎通を図ったことは評価できる。また、国際連携についても海外研究機関と共同研究実施し、新たに海外学術交流協定を締結したことは評価してよい。事務等の効率化・合理化に関しては、西東京地区国立大学法人等主催研修への参加、研修内容の企画・立案、さらに本研究所で研修を開催したことは評価に値する。また、人間文化研究機構本部主催研修への参加を通じてワークライフバランスの改善、ハラスメント防止に務めたことも評価できる。

財務内容の改善に関する目標を達成するためによるべき措置

1. 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置

【計画】

常勤研究者の科研費への研究代表者もしくは研究分担者としての参加率を毎年度 80% 以上にするため、競争的資金の申請に向けた説明会や研究計画書の作成支援等を実施する。

【実績】

- ・平成 30 年度に配分された科研費(新規及び継続課題)に研究代表者又は研究分担者として、常勤研究者 33 名のうち 31 名が参加した(参加率 93.9%)。
- ・近隣の研究機関と合同で科研費説明会(9 月 28 日)を開催した。
- ・外部資金についての公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに、全研究者宛てに電子メールで周知した。特に、科研費については、常勤・非常勤を問わず全研究者を参加対象とした科研費申請準備会議を開催(10 月 17, 18 日)し、申請者が他分野を含む研究者と研究計画・方法について意見交換を行い、若手研究者の育成にも配慮しつつ科研費申請を奨励・支援した(平成 31 年度)

分申請 40 件)。

- ・『日本語話し言葉コーパス』『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び『日本語日常会話コーパス(モニター版)』の有償頒布を行い、総額 13,258 千円となる収入を得た。

2. 経費の抑制に関する目標を達成するための措置

【計画】

- (1) 一般管理費の分析を行い、分析結果を基に教職員に対しコスト意識の啓発を図るとともに、契約方法の見直し等を実施する。

【実績】

- ・研究所内の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに、電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他、4 階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し、昨年度に引き続き省エネを図った。
- ・昨年に引き続き複数年契約を実施している契約に関して、仕様の見直しにより、「施設常駐管理・空調設備保守点検・消防設備等点検・清掃環境衛生」の各業務委託契約について経費を削減した。
- ・昨年に引き続き複写機に関しては、賃貸借契約と保守契約の一本化、複数年契約の締結により経費を削減した。
- ・従来 1 つの会議において実施していたペーパーレス会議を 3 つに拡大し消耗品の節約と労務の軽減に努めた。

【計画】

- (2) 業務の外部委託等を促進させるとともに、職員の人事費や外部委託の状況を分析し、経費の抑制策を検討する。

【実績】

- ・7,8 月の 2 ヶ月間、管理部職員を対象に「ゆう活(夏の生活スタイル変革)」を実施。実施者に対して定時時刻で帰宅するよう促す他、会議の設定時間や一定の時間以降に仕事の発注を行わないよう全職員へ働きかけるなどして超過勤務の抑制を図り、職員のワークライフバランスに努めた。
- ・毎週、水曜日に定時退勤日の所内放送及びメールでの周知で意識啓発を促し、超過勤務の削減を図った。
- ・施設管理業務及びネットワーク管理業務について、専門業者に外部委託を行い、引続き管理業務の効率を図った。
- ・フレックスタイム制度の所内導入について、ワーキンググループを設置し、検討を行うとともに、職員の勤怠管理の適正化及び事務の効率化を図るため、勤怠管理システムの導入に向けて情報収集を行った。

| | |
|--------|-----------|
| 自己点検評価 | 計画どおり実施した |
|--------|-----------|

《評価結果》

計画を上回って実施している

外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関しては、科研費への常勤研究者の参加率が 93.9% に達し、初期の目標を上回ったこと、また当研究所作成コーパスの有償頒布で総額 13,258

千円となる収入を得たことは大いに評価してよい。経費の抑制に関しては、研究所内のさまざまな場所に電力節減・夏期の軽装励行のポスターを掲示しコスト意識・省エネ意識の徹底を図り、さまざまな業務契約・機器の保守契約の見なおし、ペーパーレス会議の推進などで経費削減に取り組んだことは評価できる。また、施設管理業務及びネットワーク管理業務で専門業者に外部委託を行い、管理業務の効率化を進め、7、8月の2ヶ月間、管理部職員に定時時刻で帰宅を促し超過勤務の抑制を図り、フレックスタイム制度の所内導入について情報収集を行い、検討し、全体的な業務合理化を進め、経費削減に取り組んだことは評価できる。

自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためのべき措置

1. 評価の充実に関する目標を達成するための措置

【計画】

自己点検・評価等を実施し、組織運営の改善に活用する。

【実績】

- ・所内に自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関する目的とした自己点検・評価委員会（委員6人）と研究所が実施する共同研究プロジェクトの推進及び連携・調整を図ることを目的とした共同研究プロジェクト推進会議と連携して開催し、PDCAサイクルを管理している。
- ・自己点検及び評価の検証を行うための所外の専門家8名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。

2. 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置

【計画】

国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書など評価に係る情報等を、ウェブサイト等に掲載し、広く社会に公開する。

【実績】

- ・国立国語研究所では、月2回メールマガジンを配信した他、ポータルサイト「ことばの研究館」を開設し、動画を含めた各種情報の発信を行った。さらに、大学の機能強化に努めるべくサイトの英文化を進めるとともに、研究資料室で保管されている過去の研究資料のデジタル化・データベース化、研究図書室の「日本語史研究資料」のウェブによる発信を進めた。また、一般向けの研究情報誌「ことばの波止場」を年2（30年9月、31年3月）に刊行した。
- ・研究成果を広く一般市民に発信するために、第13回NINJALフォーラム「日本語の変化を探る」（30年11月4日、一橋講堂）を開催した。参加者は357人であった。また、研究所創立70周年・移管10周年記念事業の一環として、オープンハウス2018を開催した（30年12月22日）。ポスター発表38件、シンポジウム2件を行い、参加者は150人（うち小中高生4人、大学・大学院生30人、一般116人）であった。その他、駒澤大学の公開講座「日本語の千年—コーパスで解き明かすことばの生態—」においてプロジェクトメンバーが全8回の市民向け講義を行った。小・中学生を対象とする催しとして「ニホンゴ探検」（30年7月14日）とNINJALジュニアプログラム（出前授業型プログラム）を開催した。「ニホンゴ探検」の参加者は357人で、毎年増加している。
- ・中学生～高校生を対象とする催しとして職業発見プログラムを7件、小学生を対象としたジュニア

プログラムを2件開催した。

- ・大学生から一般市民までを対象とする「読んで楽しめる研究情報誌」として『国立国語研究所ことばの波止場』を年2回刊行した。内容はvol. 4が「特集：言語資源の整備と研究成果発信」(30年9月発行), vol. 5が「特集：研究プロジェクト紹介①言語変異と言語変化」(31年3月発行)である
- ・一般市民に研究活動や研究内容をわかりやすく発信するためのポータルサイトを開設し、「ことば研究館」「ことばの疑問」等44件の記事を掲載した。
- ・機構の「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」により、モバイル型展示ユニットを使った展示を8回開催した(神奈川大学(5月7~25日,歴博と共同),弘前大学(5月28~6月15日),羽田空港国際線ターミナル(8月24日~9月~14日,歴博と共同),まつえ市民活動フェスタ(9月25日),鹿児島大学・人間文化研究機構協定締結記念シンポジウム(9月29日,鹿児島大学),大学共同利用機関シンポジウム2018(10月14日,名古屋市科学館),国語研オープンハウス(12月22日),富山大学(2月12~19日))。弘前大学,松江市,富山大学では展示にあわせて講義・講演を行った。
- ・放送大学の新チャンネル開設記念企画として国立国語研究所の特集番組2本を共同で制作し,放送大学で放映された。また,動画は放送大学の教育用コンテンツとして利用されている。

| | |
|--------|-----------|
| 自己点検評価 | 計画どおり実施した |
|--------|-----------|

《評価結果》

計画を上回って実施している

評価の充実に関しては、所内に自己点検・評価委員会に設置し、自己点検・評価の実施し、さらに所外の専門家8名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施したことは評価できる。情報公開や情報発信等の推進に関しては、月2回のメールマガジンの配信、ポータルサイト「ことばの研究館」の開設、サイトの英文化の推進、研究資料室で保管されている過去の研究資料のデジタル化・データベース化、一般向けの研究情報誌「ことばの波止場」の刊行、一般市民を対象としたNINJALフォーラム「日本語の変化を探る」の開催、研究所創立70周年・移管10周年記念事業の一環としてのオープンハウス2018の開催、さらに小・中学生を対象とする催しとして「ニホンゴ探検」、放送大学との国立国語研究所の特集番組2本を共同制作・放映など、さまざまな情報発信の企画が行われたことは高い評価に値する。

その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置を達成するための措置

1. 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置

【計画】

施設整備・既存施設の維持管理及び省エネルギー対策を実施する。

【実績】

- ・定期的な施設・設備の点検結果及び日常的な研究所内外の施設点検等(木の剪定、通路の補修等)により、計画的な維持管理を行い、職員及び利用者の適切な予防安全に努めた。

- ・研究所内の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに、電力節減、夏期の軽装勧行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他、4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し、昨年度に引き続き省エネを図った。
- ・研究所施設を関連学会等外部団体に貸出し収益の改善を図ると共に既存施設の活用を促した。

2. 安全管理に関する目標を達成するための措置

【計画】

危機管理に関するマニュアルに基づく訓練や研修等を実施する。

【実績】

- ・防災訓練を今年度から立川消防署の指導の下、研究所内で防災訓練を実施し、所内での避難訓練・安否確認を行う他、消火活動訓練、応急救護訓練を実施した。（平成30年11月12日）
- ・災害時、職員一人一人が安全確保を図るための手順や、具体的な対応について参考となるよう、留意事項をとりまとめた携帯型の防災ポケットマニュアルを作成、配布した。（平成31年3月）

3. 法令遵守等に関する目標を達成するための措置

【計画】

公的研究費の適正な使用に関する研修会等及び研究倫理教育等を実施し、受講者の理解度チェック及び受講状況の管理監督を行う。また、情報セキュリティに関する研修を実施する。

【実績】

- ・情報セキュリティ研修（DVD、e-learning研修）を実施（平成30年8月22日～平成31年1月8日）。
- ・「人を対象とする研究に関する研究倫理審査」を24件実施した。
- ・30.9.14に4機構合同個人情報保護研修に個人情報保護責任者に7名を参加させることにより、個人情報保護に関する意識高揚を図った。
- ・本部主催の研修に対象者を参加させるとともに、主にCSIRT構成員を自然科学研究機構情報セキュリティ研修（8月27日）、国立大学法人等CSIRT研修（9月13,14日）、国立大学法人等情報セキュリティ監査担当者研修（11月19日）に参加させた。
- ・日本学術振興会が提供している研究倫理eラーニングコース[eL CoRE]を新規採用の研究者33名に受講させるとともに、採用時オリエンテーションを実施した。また、人間文化研究機構平成30年度コンプライアンス教育研修会及び研究倫理教育研修会（11月26日）に参加させた。

| | |
|--------|-----------|
| 自己点検評価 | 計画どおり実施した |
|--------|-----------|

《評価結果》

計画どおりに実施している

施設設備の整備・活用等に関しては、施設・設備の点検が計画的に行われ、職員・利用者の適切な予防安全が計られ、電力節減など省エネに勤めるとともに、研究所施設を外部団体に貸出し収益の改善を図るなど施設の活用に務めたことは評価できる。安全管理に関しては、立川消防署の指導のもと防災訓練を実施し、また災害時に職員の安全確保を図るための携帯型の防災ポケットマニュ

アルを作成、配布したことは評価できる。法令遵守等に関しては、公的研究費の適正使用に関する研修や研究倫理教育等を実施し、情報セキュリティに関する研修を行ったことは評価できる。

【総合評価】

業務運営の改善及び効率化、財務内容の改善、自己点検・評価及び当該状況に係わる情報の提供、その他業務運営のすべての項目に渡って、管理業務はほぼ計画通りか、計画を上回る結果を上げている。全体的にきわめて良好な業務運営が行われていると評価できる。

2. 資 料

国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 坂原 茂 東京大学名誉教授
専門： フランス語学，認知言語学
- 小野 正弘 明治大学教授
専門： 国語学・日本語史
- 上山 あゆみ 九州大学教授
専門： 生成文法・日本語統語論
- 沖 裕子 信州大学教授
専門： 談話，方言，日本語教育
- 片桐 恭弘 公立はこだて未来大学学長
専門： 情報科学，社会言語学
- 砂川 裕一 国際交流基金日本語国際センター所長
専門： 哲学，比較文化基礎論，言語文化教育論，日本語日本事情教育論
- 橋田 浩一 東京大学教授
専門： 自然言語処理
- 森山 卓郎 早稲田大学教授
専門： 日本語学，日本語文法

任期：平成 30 年 10 月 1 日～令和 2 年 9 月 30 日（2 年）

◎委員長 ○副委員長

国立国語研究所平成30年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、共同研究プロジェクト及び機関拠点型基幹研究プロジェクトにおける研究計画の実施状況について、プロジェクトの代表者が行った自己点検評価及び実績報告書の妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査で行った。研究所が作成した、平成30年度の計画及びその実施状況が記入された「30年度業務の実績報告書」（「プロジェクト・センターの研究活動」、「管理業務」）の内容を検証した。

「プロジェクトの研究活動に関する評価」の点検項目及び観点は次の通りである。

| 点検項目 | 観 点 |
|------------------------|--|
| 研究成果 (研究) (共同利用) | 研究業績の量的側面 ・どれだけ論文等のアウトプットがあるか |
| 研究水準 (研究) (共同利用) | 研究業績の質的側面 ・どれほど学術的意義や社会的意義があるか |
| 研究体制 (研究) (共同利用) | 研究推進にあたっての制度的側面 ・どれだけ大学と組織的に連携し、大学の機能強化に貢献しているか |
| 教育 | 研究過程及び研究成果の教育的普及 ・どれほど大学等の機能強化に貢献しているか |
| 人材育成 | 若手研究者の育成、及び社会人の学び直し ・どれだけ受け入れて取り組んでいるか |
| 社会連携 | 自治体・産業界との連携など社会との協業 ・どれほど社会と連携しているか |
| 社会貢献 | 研究成果の社会への普及 ・どれほど社会に向けて発信しているか |
| 国際連携 | 研究体制における国際的協業 ・どれだけ海外の組織と連携しているか |
| 国際発信 | 研究過程及び研究成果の国際的発信 ・どれだけ国際的に発信しているか |
| その他特記事項 | |

機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧

| 研究系 | プロジェクト名 | プロジェクト略称 | リーダー |
|-----------|-------------------------------|---------------|-------------|
| 理論・対照研究領域 | 対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法 | 対照言語学 | 窪薙 晴夫 |
| 理論・対照研究領域 | 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究 | 統語コーパス | プラシャント・パルデシ |
| 言語変異研究領域 | 日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成 | 危機言語・方言 | 木部 暢子 |
| 言語変化研究領域 | 通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開 | 通時コーパス | 小木曾 智信 |
| 音声言語研究領域 | 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究 | 日常会話コーパス | 小磯 花絵 |
| 日本語教育研究領域 | 日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明 | 学習者のコミュニケーション | 石黒 圭 |

国立国語研究所外部評価委員会規程

平成21年10月 1日

国語研規程第7号

改正 平成28年 4月 1日

(趣旨)

第1条 この規程は、国立国語研究所組織規程（国語研規程第1号）第15条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(任務)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、10名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

(任期)

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第6条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第7条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求める、意見を聴取することができる。

(外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は、管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

令和元年度国立国語研究所外部評価委員会ヒアリング

日 時： 令和元年5月14日（火） 14:00～17:10

場 所： 国立国語研究所1階大会議室

ヒアリング事項：

1. 対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法
2. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究
3. 日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成
4. 通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開
5. 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究
6. 日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明
7. コーパス開発センター
8. 研究情報発信センター

資 料：

1. 共同研究プロジェクト 自己点検報告書（対照言語学：平成30年度）
2. 共同研究プロジェクト 自己点検報告書（統語コーパス：平成30年度）
3. 共同研究プロジェクト 自己点検報告書（危機言語・方言：平成30年度）
4. 共同研究プロジェクト 自己点検報告書（通時コーパス：平成30年度）
5. 共同研究プロジェクト 自己点検報告書（日常会話コーパス：平成30年度）
6. 共同研究プロジェクト 自己点検報告書（学習者のコミュニケーション：平成30年度）
7. 自己点検報告書（コーパス開発センター：平成30年度）
8. 自己点検報告書（研究情報発信センター：平成30年度）

国立国語研究所外部評価委員会【平成30年度実績評価】(第1回)

日 時： 令和元年5月31日（木）メール審議

議 事：

1. 機関拠点型基幹研究プロジェクト中間評価について
2. その他

資 料：

1. 機関拠点型基幹研究プロジェクト中間評価報告書（案）
2. 機関拠点型基幹研究プロジェクト中間実績報告書

国立国語研究所外部評価委員会【平成 30 年度実績評価】(第 2 回)

日 時： 令和元年 8 月 1 日 (木) 14:00～16:00

場 所： TKP 東京駅前セントラルカンファレンスセンター 11 階「カンファレンスルーム 11C」

議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 平成 30 年度共同研究プロジェクト評価について
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト中間評価について
4. 平成 30 年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
5. 平成 30 年度「組織・運営」、「管理業務」の評価について
6. その他

資 料：

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿（平成 31 年 4 月 1 日現在）
2. 国立国語研究所外部評価委員会規程
- 3-1. 前回議事概要（案）（平成 30 年 6 月 29 日）
- 3-2. 前回議事概要（案）（令和元年 5 月 31 日）
4. 国立国語研究所プロジェクト別 平成 30 年度評価担当
- 5-1～5-6. 平成 30 年度共同研究プロジェクト自己点検報告書
平成 30 年度共同研究プロジェクト評価シート
6. 機関拠点型基幹研究プロジェクト中間評価報告書
- 7-1～7-2. 平成 30 年度国立国語研究所 2 センターに関する実績報告書
平成 30 年度国立国語研究所 2 センターに関する評価結果
8. 平成 30 年度「組織・運営」、「管理業務」に関する評価結果
9. 平成 30 年度業務の実績に関する外部評価報告書の構成について
10. 4 年目終了時評価作業スケジュール

国立国語研究所 年報 2018 年度

2020 年 3 月 18 日 発行

編集・発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

TEL: 0570-08-8595 FAX: 042-540-4333

<https://www.ninjal.ac.jp/>

